

処女はお姉さまに恋してる—陰に輝く星—

揺れる天秤

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

これは、エルダー照星のそばで輝きを放つ、照星足りえぬ——しかし、強さを持った者達の物語。

処女はお姉さまに恋してる——トリンクルスターズ3つのきら星——を原作に置いたオリジナルキャラを含む物語になります。

## 目次

第0話	一つの終わりは新たな始まり	1
第1話	結城密	4
第2話	ダメピンク問題	10
第3話	雨水刹那	15
第4話	朝の喧騒	20
第5話	一組	25
第6話	体育	30
第7話	噂話とは広がるもの	36
第8話	照星（エルダースター）前哨戦	41
第9話	照星（エルダースター）選挙に向けて	49
第10話	照星（エルダーズ）就任	54
第11話	照星と奉仕会	60
第12話	イタズラ好きな二人	68
第13話	怪談の正体	73
第14話	水泳の授業	79
第15話	知りたがり	85
第16話	お互いのこと	89
第17話	セラー新報	95
第18話	密の認識、周りの認識	101
第19話	決断	107
第20話	水泳対決	113
第21話	千歳の写真収集	119
第22話	一学期を終えて	126
第23話	夏休みに入って…	132

第24話	旅行〜一日目①	138
第25話	旅行〜一日目②	144
第26話	旅行〜一日目③	150
第27話	旅行〜二日目	157
第28話	刹那の心情 茉理の想い	164
第29話	ひざ枕	170
第30話	通った気持ち、バレていた心	177
第31話	不養生	184
第32話	千歳の昔話	190
第33話	夏休み最後のイベント	196
第34話	二学期	201
第35話	入寮	207
第36話	トラブル続出	213
第37話	頼み事	219
第38話	料理教室	225
第39話	諏訪ちさと	230
第40話	一時入寮	236
第41話	引き継ぎ	242
第42話	忙しき奉仕会	248
第43話	取り巻く話題	253
第44話	若葉の葛藤	258
第45話	対立の煽り	263
第46話	女帝の『姫』	269
第47話	勉強会	274
第48話	紅鷲祭の演物(だしもの)	279

第49話	疑念	284
第50話	現実味のない真実	289
第51話	メール	295
第52話	新しく始めるために。	300
第53話	天形の切り札（ジョーカー）	307
第54話	雅ヶ崎迎賓館	313
第55話	薄氷千歳	320
第56話	そういう話	325
第57話	鏡子と千歳	331
第58話	動く事態	337
第59話	波乱の予感	343

## 第0話 一つの終わりは新たな始まり

卒業式。

ここ、聖セラール女学院では『照星』<sup>エルダー</sup>という三人の最上級生徒が今も多く生徒達に囲まれて見送られようとしている。

それを雨水<sup>あまみせつな</sup>刹那は少し離れた桜の木に背中を預けて眺めていた。

時間にして二時間ほどだろうか。生徒達の波は引き、照星達の周りから生徒がいなくなったところで刹那は近づいていく。

「照星の方々、ご卒業、おめでとうございます」

「あら？まさか女帝が私達の卒業を見送ってくださいるとは…」

「敵対こそすれ、私は貴女方を尊敬してはおります。自分が来年、その位置に居ないことも理解しておりますゆえ」

「ふふっ。そうね。女帝を照星に推す生徒は居ないでしょう。ですが、私達から貴女に一つずつ、頼みたいことができました」

「私に、ですか？」

「ええ。貴女にしかできないことです」

頬笑む三人に刹那は背筋が伸びるのを感じた。自分よりも小さいはずの照星三人に、しかし刹那は大きな影響を持った三人に敬意を払うために背筋を伸ばした。

「貴女は常に照星を試す立場となりなさい。私達に対してそうであったように。前年の照星にそうであったように。まっすぐに愚直に進む貴女の意味を次代の照星達にぶつけなさい」

「はい。薔薇の宮」

「貴女の意見は正鵠を射つが如く鋭い。ゆえに、齒向かうことを常としなさい。貴女が私達を強く成長させたように、次代の照星達にも貴女の強さを教えてさしあげて」

「はい。百合の宮」

「照星は常に正しいわけではないわ。私達もこの学院においては一人の生徒であることに変わりないことを自覚させ続けなさい。そして、照星が間違う時はその言葉と行動を持って諫めなさい」

「はい。鈴蘭の宮」

三人の照星からの言葉を受けながら刹那は自分が気づくともなく涙が溢れていた。

在学中、彼女達とは幾度対峙したかわからない。時には間違いを正してさえくれた彼女達。ここ卒業にいたって、気持ちの揺れなかった自身を恨みもした。

だが、こうして言葉を賜って、自分はようやく理解できた。

——私は、彼女達照星を本当に敬っていたのだと…

凜とした立ち方をするこちらの背中や肩を叩いて照星の三人は歩いていく。

三人の姿が見えなくなるまで、刹那は三人の背中を見送っていた。

☆

三人が見えなくなってから、刹那はそこでようやく涙を拭いた。いつまでも泣いているわけにはいかない。自分は三人に頼まれたのだから。

『いやあ、照星と女帝の別れは素晴らしいものだね』

「——千歳、か」

桜並木から現れたのは薄氷千歳<sup>うすらいちとせ</sup>。カメラをひらひらと揺らしながら歩いてくると刹那の隣に並ぶ。

「照星達の想いを受けて、貴女はどうするのですか？」

「決まっている。私は『女帝』だ。今も、これからも変わらずに。彼女達に言われるまでもない。私は、齒向かう人間なのだから」

「そうですね。しかし、このスクープは載せられないな。卒業された照星に迷惑をかけるのは間違いでしょうし」

「私は行く。次代の照星が誰になるのか。それは決まっているようなものだ。彼女達と向かうべく、私は——」

桜並木を歩いていく刹那の背中を千歳はカメラを構えて1枚写真を撮る。

「——さて、来年度はどうなることなのやら…」

楽しそうに、愉快そうに歩き始めた千歳は、最後に桜並木を振り返

る。

「ありがとうございます、エルダー・スターズ照星達。私達は、来年度を行くとしま  
す」

桜並木が散り始めるころ、新しい日々は始まる…。



## 第1話 結城密

『聖セラール女学院』

明治八年に創設された由緒ある女学院。

米国から来日された宣教師によって私塾として開設された。

風早家の祖にあたる人物がこの理念に賛同し、持っていた土地を提供して現在の場所に移転、のち学制改革に及んで中高大学の一貫校となる。

基督教的なシステムを取り入れた教育様式が現在まで連綿と受け継がれてきている、いわゆる『お嬢様学校』であり、受け入れる生徒の質は変遷しているもののその基本的なスタイルは変わっていない。慈愛と奉仕をモットーとし、年間行事にはボランティア活動や基督教礼拝など、宗教色も色濃いが日本的な礼節・情操教育も行われている。

生徒の自主性を尊重のため、校内には生徒による自治組織が存在している。

これにより、生徒自治がある程度効果を上げており、大幅な校則違反をする者はあまりいない。

が、世相の変化がもたらす生徒の質の変容が近年ではやや問題になってきている。



― 刹那 side ―

新学期も滞りなく始まり、入学式も終わって平穏な日常へと戻りつつある。そんな中、刹那は本日、転入生が来るという話をキミア館の寮監から聞きつけたことで急遽、買い物に出かけていた。

「まったく。そういったことは早めに教えてほしいものです」

「すみません。まさか知らないとは思いませんでした」

刹那の隣に歩くのは迫水すみれ。本年度の奉仕会の会長であり、キミア館寮監でもある。

「でも、わざわざ歓迎用にケーキなど買わなくても…」

「こういう口実があれば美味しいものが食べられるでしょう？急に買ってきたら何事かと思うでしょうし」

「それは…まあ、そうですが…」

「まあ、私が食べたいだけですのお気になさらず。すみれさん達は私の生み出すおこぼれを楽しく享受なさい」

「はい。ありがとうございます、刹那お姉さま」

「ところで、すみれさんはなぜ私の買い物についてきたのですか？」

「えっ？ああ。私は自分の買い物がありましたのでついでの思いま  
すから」

「言えば買ってきましたのに…」

「さすがにお姉さまを使い走りにするのは…」

「頼れる時は頼りなさい。私のような異端の姉でも貴女方の姉なので  
すから」

「はい。次からは頼るようにします」

「そうしなさい」

刹那はすみれの頭を撫でる。すみれは少し驚いたように刹那を見  
上げるが、すぐに撫でられたままになった。

「あの、お姉さま。少し、恥ずかしいです」

「ん？ああ、すみません。どうにもあやめさんやすみれさんの頭の高  
さは私には撫でやすい高さにあるもので、つい」

「い、いえ…。嫌ではないのですよ。ですが、さすがに外では…」

「ええ。自重するようにしましょう」

二人はそれぞれに買い物を終えると帰宅の途についた。



—密side—

密は疲れていた。いや、さすがに女装して女学院に転入した初日か  
らケロツとしていたらそれはそれで隣にいる今回の同僚となる茨鏡  
子にどんな毒を吐かれるのかわからないわけではないのだが…。

「大丈夫ですか密さん。やつれ気味に見えますが」  
「そう、ですね。けっこう、疲れるものですよ？」

「これで疲れていては明日から大変そうだと思いますが…」

二人が向かっていたのはキミリア館学生寮。学院で現存している寮で、今日から約一年の間、密にとっては家になる。

「さて、密さん。キミリア館に入るにあたって私から一つ助言しておきます」

「助言、ですか？」

「はい。キミリア館には現在のところ、私を含めて七名の寮生がいます。基本的に皆さん優しい方ばかりですから生活の中で大きな不都合というものが早々に起きる可能性は低い、と私は思っています」

「はあ。それなら問題ないのでは？」

「ええ。ですが、そのうちの一人——雨水刹那さんには気をつけてほしいのです」

「雨水、刹那…」

鏡子さんが気をつけるように言うとなるならそれなりに危険人物なのかと密は考える。

「あの人は嫌に勘が鋭いのです。それに、過去二年間の間に照星達と幾度とやり合ってきた人でもあるので…」

「照星達？」

どこかで聞いたことのある言葉に密は首を傾げる。

「まあ、その辺りのことは入寮してからでも聞けるから安心を。とにかく、刹那さんには気をつけるようお願いします」

「わかりました」

未だ会わぬ相手を警戒しろと言われても『わかりました』以外にどう答えよう？と思う密だった。

鏡子についていく形で寮に入ると、奥から一人の生徒が近づいてきた。

「あら、鏡の君。そちらの方は？」

「あやめさん。こちらは本日から入寮される結城密さんです」

「結城密といいます。本日からよろしくお願いいたします」

「あら。ゞ丁寧にもどうぞわ。私は迫水あやめといいます。ちようどすみちゃんが食堂の方にはいますからご案内致しますわ」

「それでは、私は一度部屋に鞆を置いてきます」

階段を上がっていった鏡子を見送って密はあやめに続いて食堂に入る。

「すみちゃん。本日入寮の方がお見えになってますわ」

「ありがとうございます。あやちゃん。はじめまして。キミリア館寮監を務めさせていただいている迫水すみれといいます」

「結城密です。本日からよろしくお願いいたします」

「はい、密お姉さま。まずは、そうですね。寮の規則について説明いたします。そちらのソファにお座りください」

促されてソファに座るとあやめが二人の前に紅茶の入ったカップを置いた。

「ありがとうございます、あやちゃん」

「いいえ。それではあやめはキッチンで何かしている刹那お姉さまの方に行きますわ」

お盆を持ってキッチンへとあやめが消える。

「それでは、簡単に寮則をご説明いたします」

「よろしくお願いたします」

そうして、すみれからキミリア館の寮則についての説明が始まった。密は合間で気になることを質問し、すみれはそれに対しても説明を返す。

「これくらい、でしよるか」

「ありがとうございます、すみれさん。それにしても、寮則というわりには門限などもかなり緩いように思いますね」

『締め付け過ぎてもよくないってことなんだと思うよ』

新しく声が聞こえて密が振り返る。そこにはすみれ達より少し背が低い少女――服に『人生ひだりうちわ』と書かれた――が立っていた。

「はじめまして。私は畑中美海<sup>あたし</sup>。美しい海って書いて美海って読むから」

「結城密といます。えっと、新入生の方？」

「ああ、うん。言われるとは思ってたけど…。こんなだけど同級生なんだわ」

「あつ。も、申し訳ありません」

「いや、いいよ。初対面だとほぼ必ず間違われるから」

『すみれさん、アレはダメだね』

再び聞こえてきた声に振り返るとキッチンから高身長的女性が頭をかきながら歩いてきていた。

「刹那お姉さま。ダメ、ですか？」

「私もさすがに食材の使い方がわからなさすぎる。適当に作ってしまいうぐらいなら店屋物にした方がはるかに無難——おや、新しい寮生かい？」

「あつ、はい。結城密といます」

「よろしくね、密さん。私は雨水刹那。貴女と同じ三年だよ」

「よろしくお願ひいたします。それで、何がダメなのでしょう？」

「ん？ああ、実は今日は寮母さんが出掛けからまだ帰ってこれてなくてね。自炊をしようにも今日は偶然にも海外献立の日で私でも未知の食材が多い。他の子の力をかりたとしても、まともな料理は出せそうになくて…」

「あの、その食材を見せてもらうことはできますか？」

「ああ、いいよ」

刹那に連れられてキッチンに入ると冷蔵庫を開ける。確かに密もあまり見たことのない食材が多い。

「一般的な家庭料理くらいなら私でもできるのだけど。さすがに海外仕様となるとね…」

「ふむ…」

密が吟味するように食材を取り出してはほんの少しだけちぎっては食べたりする。しばらくそうしていたが…

「私で良ければ作りましょうか？」

密の言葉に驚いたのはその場にいた全員だ。

「いいのかい？実のところ、寮でまともに自炊できるのは私くらいし

「かないから手伝えることも少ないのだけど」

「まあ、なんとかなると思います」

「そうかい。じゃあ、お願いいたします、密さん。手伝えることはいくらでも手伝うから指示をもらえる？」

「はい。わかりました」

こうして、密主体の元で晩御飯の調理が開始された。

## 第2話 ダメピンク問題

夕食開始予定時間の夜7時前。リビングの食卓には色とりどりの料理が並んでいた。

「なんとというか…。自分がまだまだ未熟者だったと教えられた気分ですわね」

「そんな、大げさですよ刹那さん」

「いやいや。食材を見て、少し食べただけでここまでいろいろな料理にアレンジできるのは一種の才能だよ。でもまあ、これで土日の食卓は今までよりまともな食卓になりそうだね」

「それは、どういう？」

密の作った料理が並べ終わり、皆が席に着いたところで食事の前のあいさつをすみれが行う。皆がそれぞれに食器を持ち、料理に口をつける。

(なにこれ、めっちゃうまい——!!!!!!)

密を除く全員の思考が一致した瞬間だった。

密は一人、料理を口に運んで小さく頷いている。

「うん、ちゃんとおいしくできていますね」

「密さん。さっきの続きだけど、寮生で今までまともな自炊をしたことのあるのは私だけだったの。でも、私自身、土日は出かけることも多かったものだから」

「えっと、他の方々は——」

思わず見回した密の視線から全員が目をそらす。鏡子も例外ではなかった。

「まあ、そういうわけでき。土日は基本的にコンビニ弁当で済ましていることがほとんどだったんだ」

美海の補足に密は驚いたように口を開けていた。

「驚き、でした。寮の人ってある程度は料理ができるものとはかり…」

「密さん。私達をなめてもらっては困るのです」

「き、鏡子お姉さま。威張れることではないと思うのですが…」

「そういえば、まだ自己紹介してなかったですね。美海お姉さまの妹

の成神月子なるかみつきこといます。今日からよろしくお願いします！」

「あの、伊澄花いすみはなつていいです。鏡子お姉さまの妹です」

「花さんは可愛いのでたとえ密さんであつてもあげませんからね」

「いや、意味がわかりません、鏡子さん」

月子はすでに料理を食べているせいかわらけてるし、花は恐縮しきりで小さくなつていて……こうしてみるとなかなかバラエティに飛んだ寮であることである。

(そういえば鏡子さん。寮生になるのはいろいろとプラスが多いからだ、とか言つてましたが…)

確かにいま居る七名だけでもだいぶ濃い。この中なら自分も目立たないかも…?

「そういう意味で言つてませんから」

「鏡子さん？地の文にある私の思考にツツコミ入れるのはやめてください」

「そういえば、密さんの妹は誰が担当するんです？月子は美海さんでいっぱいいっぱいだろうし、すみれさんは奉仕会のことがあるから難しいでしょう？」

「そうなる。私か花さんですわね。手っ取り早くじゃんけんで決めちゃいましょう！」

「ふえっ!?それはさすがに密お姉さまに失礼なのは?!」

「じゃあ、勝った方が妹で。——じゃんけん」

「はわわっ！」

急に始まつたじゃんけんの勝利者は、花だった。

しかし勝った方が縮こまつていてどちらが勝者なのか端からではわからない有り様だ。

「すみません、密お姉さま。花が勝つてしまいました」

「花ちゃん…」

「花さん。勝った人がそうして落ち込む方が密さんに失礼です。胸を張れとまでは言いませんがせめてしよげるのは止めなさい」

「刹那さん…」

花の様子を窺める刹那は目を細めて睨み付けているに近い。だが、



雰囲気はキツイ感じではなく、小さな子を叱るような印象だ。

「刹那お姉さま…。は、はい。そうですね。すみませんでした、密お姉さま」

「いえ、気にしなくていいのよ花ちゃん」

「どうでもいいですが、花さんをいじめていいのは姉の特権です。いくら刹那さんといえど許しません」

「おや、花さんのお姉さまは怖いことだね」

「あの、花もいじめてほしくないのですが…」

賑やかな食事なんていつ以来だろうか。そんな風景を密は食事を再開しながら見守っていた。

「密さん。その慈愛に満ちた笑顔で見るのはやめるのです」

「えっと、そんな顔してましたか？」

☆

食事も終わったところで、密は自分の部屋を見ていないことに気がついた。鏡子の案内で部屋の前まで来ると…

「それでは密お姉さま。こちらが部屋の鍵になります」

すみれから鍵を渡されて扉を開ける。

——開かれた先に見えた部屋は、一面のピンク色…：桃色空間だった。

「…えっ、あつ、…な、はあ——？」

密は開いた口から魂が抜けるような感覚に襲われていた。自分はここに住むのかと。今日から、一年も…？

壁紙は薄い桃色。タンスもピンクで統一されていて極めつけは部屋に鎮座している天蓋付きのベッドだろう。

——ちなみにこの天蓋付きベッドもピンク色。

魂の抜けた密は入口で立ち尽くしているのを鏡子はため息をつく。その様子にすみれは…

「あ、あの…。どうかなさいましたか、密お姉さま？」

「ああいえ。密さんは昔からこういう部屋に住んでみたいということ

を言ってしまったので感動していると思うのです」

「なるほど。そういうことですか」

ほっと息をつくすみれの様子にとりあえず凌いだと感じた鏡子は  
…

「とりあえず密さんの方は私がなんとかしておくので、すみれさんは戻っても大丈夫なのです」

「そうですか。では、あとはお願ひします鏡子お姉さま」

階段を降りていくすみれの姿が見えなくなったところで、とりあえず放心している密の頬を数度張る。

「ほら、フリーズしてないでさっさと起きるのです。そしてまずは部屋に入るのです」

「——ハッ、鏡子…:さん？」

「気がついたようですね。では、まずは部屋に入るので」

押し込まれるように部屋に入ると、密は近くにあったイスに腰掛け、鏡子はベッドに座る。

「落ち着きましたか？」

「落ち着いた、といえますか…:」

なぜか部屋を見ただけで学院内を歩いた時以上に疲れた密は女性用の声を止める。

「今日からここに住むんですよね、…:その、一年間も？」

密としては嘘であつてほしい現実だ。

「そうですね。しかし確か、内装は結城補佐官が指示を出していたはずですけど…:」

(大輔さん…:!!)

ここにはいない自分を引き取ってくれた相手に思わず心の中で怒りを覚えずにはいられなかった。

そんな密から視線を外して部屋を見渡す鏡子。そして、一言。

「典型的なダメピンク問題の部屋になってますね」

「うう…:, 今日から一年、ここで過ごさないといけないですよね…:」

「まあ、ものは考えようです、密さん。こんな部屋に男性が住むとは考えにくいと思いませんか？」

「鏡子さん…。そう、です、ね…」

「まあ、私としては全力全開でお断りな部屋ですが…」

「駄目じゃないですか——!!」

——もう、嫌だあ…

護衛任務の本格開始前にすでに心折れそうな密だった。

### 第3話 雨水刹那

— 刹那 side —

自身の部屋に帰ってきた刹那は机に向かうとスマホを取り出して電話をかける。

コール音は続き、十数回を越えたところで相手が出た。

『すまない。出るのが遅くなってしまった』

「いいえ。忙しい時間なのは知っていましたが、今ぐらいしか時間が取れませんでしたので」

『そうか。そう言ってくれるとこちらとしても気が休まるよ、刹那』

「まあ、休めてばかりもいられませんから。さっそく本題に入ります  
がよろしいですか、父上？」

『ああ。報告を頼む』

『父上』と呼んだ相手は電話口にも関わらずこちらに適度な緊張感  
を与えてくれる。

「どうやら尽星グループが何かしら動いてはいるようです。とは言  
うものの、鏡子さんは去年から居ましたし、密さんがパートナーだとし  
ても…」

『ふむ。何か大がかりなことをしでかそうという感じではなさそうか  
い？』

「はい。どちらかと言えば、織女さんの護衛強化といった感じですね」  
電話口がしばらく無言になる。しかし、それも数秒のこと。

『そうか。となれば、うちの商売が関わることはなさそうだね。すま  
ないな。学院生活を満喫していただろうにいきなりこんなスパイジ  
みたことさせて』

「べつに問題はなかったですけど…。偶然にも密さんは寮に入ってく  
ださりましたし」

『手間がかからなかったのなら僥倖だよ。では、もし何か問題があっ  
たりしたら連絡してくれ』

「はい。ところで、夏や年末はどうなりそうですか？」

『そうだな…。年末はまだわからないが夏は仕事が詰まっ  
ていて動け

なきそうさ。母さんの方も似たり寄りたりだろうね』

「わかりました。夏は変わらず、ですね」

『すまないな。家族の団らんが年末年始ぐらいしかなくて…』

「気にしていませんよ。そもそも、私が寮に入らなければよかったのですし」

『それはいけないよ。刹那が電車通学なんて』

「それは、どういう意味でしょうか？」

『方が一にでも刹那から『痴漢にあった』なんて聞いた日には犯人を市中引回しにして火炙りにしても許せそうにないからだよ』

我が父上ながらこういうことにはやたらと過保護なのはどうかならないものか。そもそも話――

「仕事仕込みの私に痴漢しようものならその場で叩き潰しかねませんが…」

『たとえそうだとしても親としては許容できることではないのだよ』

そう言われてしまうと刹那としては返す言葉がない。せいぜいそういうものだと納得するしかない。

『では、そろそろ仕事に戻らなきゃならないから切るよ。たまには母さんの方にも電話してあげてくれ』

「わざわざ個別に電話せずとも傍にいますのでは？」

おそらくだが、母上は父上の隣でこの電話をスピーカーモードにでもして一緒に聞くぐらいはしていそうさ。

『いや、今日は本当に居なくてね。私だけ刹那と電話していたとわかったらむくれるんだよ』

「子どもですか、あの人は…」

まあ、そもそも自分が寮に入ることも母上の方が渋っていたくらいだ。確かに父上とだけ電話していたとなると羨ましがって最終的にはむくれるか自分からこちらに電話してくるだろう。

もしそうになったらこちらの時間を考慮してくれるかもわからない。

「わかりました。また折を見て母上にも連絡するようにします」

『よろしく頼むよ。じゃあ、失礼』

電話が切れる。軽く息をついて時計を見るともう11時を過ぎよ

うかという時間だった。

(そういえば、お風呂ぐらいは入らないと…)

面倒な気はするが入らないわけにもいかない。入浴セットを持って浴場へと向かう。

☆

浴場に着いて億劫そうに刹那は服を脱ぐ。ふと、すりガラスの向こうに人影が見える。

(珍しい…、と言いたいけど月子か美海さん辺りかな)

二人はネットゲームなどやっているかと平気で徹夜をする。だから、こういうギリギリの時間に入っていることも珍しいことではなかった。

(まあ、たまには他の人とも入りたいし…)

扉を開けるとそこにいたのは――

★

―密side―

夜半遅く。浴場の湯が冷める前に鏡子と入りに来て、鏡子からは女体に慣れる必要があると二人で入っていたが、不意に真っ赤になった鏡子は飛び出してしまった。

(悪いことをしましたね…)

自分の言葉で恥ずかしい思いをさせてしまったようで。とはいえ、せつかく一人になれたのだしもう少しゆっくりと入ることにして密は寛いでいた。

そこへ、浴場の扉が開く音が響く。鏡子が帰ってきたのかと視線をやって密は固まった。

「…おや?入っていたのは密さんか」

「せつ、せつな、さん?!」

扉を閉めて歩いてきたのは一糸まとわぬ刹那だった。

身長があるためかその細身の身体はモデルのようであり、しかし適度に筋肉もついているようでアスリートのようにも見えた。

ただ、当然ながらタオルで身体を隠したりしていないものだから見えていてはいけないものもいろいろと丸見えだった。

「密さん、大丈夫かい？顔真っ赤だけど」

「えっ、ええ…。大丈夫、ですよ？」

ゆっくりと視線をそらした密に刹那は気にすることなく身体を洗いに洗い場へと移動した。

すぐにあがるべきだったが、こうなると密としても上がりづらくなってしまった。

「密さんはこういう大衆浴場みたいなお風呂はあまり経験がないのかしら？」

「そ、そう…ですね。あまり、そういうところには行きませんから」

「なるほど。だから、恥ずかしそうなんですね。——とはいっても私の貧相な身体を見て顔を赤らめるようなものですか？」

「ひ、貧相なつて…。その、モデルみたいには見えなかつたんです」「ああ。開けっ広げ過ぎましたかね？私としては自分の身体が見られることをあまりどうこう思わないものでしたから」

「そ、そうなんですか。その、恥ずかしいとは思いませんか？」

「あまり、思いませんね。私、昔からその辺りは無頓着でしたし」

身体を洗い終わったのか、密の隣に刹那が入ったことで密はいよいよ動けない。

顔を真っ赤に染めて、刹那の身体を見ないように視線をそらす。

「まあ、お風呂で寛げないのはよろしくないでしょうしね」

そう言っつて刹那は目を閉じる。

「見られるのが恥ずかしいということでもあるのでしよう？今なら私は目を閉じておきますから上がってはいかががでしよう？」

「あっ、ありがとうございます」

密は刹那の様子を見ながらも浴場の扉を開けて脱出した。そこでようやく密は息をつく。

「なんとというか…今日はずっと寝よう」

ネグリジエにも諦めて着ると密は部屋へと帰ってきた。部屋を見る度にげんなりするが、ベッドに寝転んでみるとふかふかで寝やすそうではある。

「これは……先が思いやられる1日だった気がする……」

ベッドに潜り込み、目を閉じるとすぐに眠気がきた。思いとは裏腹に今夜はよく眠れそうだった。



――刹那 side――

浴場から戻つてくるとベッドに寝転ぶ。

先ほど一緒にいた密の様子を思い出すと笑いが止まらなかった。

「なんというか、不思議な人だね……結城密さんは」

彼女が転校してきた理由は調べたから知っている。それでも、今日一日の様子を見るかぎりでは護衛というよりは純粹に学生生活を楽しみに来たようにしか見えない。

あと、夕食はとても美味しかった。自炊はよくしていたとはいえ、あれほどの料理技術は刹那は身につかなかった。

「まあ、それもそうか。私自身、誰かのために料理を作ったりはしていない。ここに通っているのも学生生活を謳歌したいからって日本に帰ってきたためなんだし……」

昔から一緒だった同僚達と比べても仕方のないこと。

明日から、どんな日々が待っているのか。寝る前にも関わらず今から楽しみで仕方がない刹那だった。



## 第4話 朝の喧騒

—密side—

——不思議とすんなり目が覚めた。

「…まだ、アラームが鳴る前、か」

思っていたよりも気分が高ぶっているのか。予定していた時間よりも早く目が覚めたようだ。

「もう一度寝直すほどの時間でもないし、起きよう」

そもそも、朝の準備に時間がかかると思っていたから早めに起きようとしていたのだし、予定通り動き出そう。

浴場併設の洗面台で顔を洗い、部屋へと戻ると女性としての身だしなみ——メイクを始める。と言っても男性だとバレないようにする程度のもので予想していたよりは早く終わった。

「それでも6時半ぐらいか。慣れるまでは早起きを心がけないと…」  
慣れたくはないのだが…。慣れないとバレてしまうリスクが上がるわけで…。

「はあ、ままならないなあ…」

こんなことで今日からの任務に支障なく活動できるのだろうか。と、今から不安が込み上げてくる。——と、突然扉がノックされる。

「(えっと…僕は女の子、女の子…) はい、今開けます」

鍵を開けると入ってきたのは鏡子だった。

「密さん、朝の準備の手伝いにきたのですが…もう用意を終えていたんですね」

「ええ。妙に早く目が覚めてしまった」

「まあ、初日から登校時間を気にしながらになるよりは全然いいことなのです」

そこまで言って、鏡子は不意に視線を足下に落とす。視線が密に向き直ると頭を下げた。

「密さん、昨日は申し訳なかったのです」

「ええつと、何に對してのことでしょうか？」

「昨日のお風呂に関して、です。私から提案しておきながら密さんを

置き去りにしてしまつて…」

「鏡子さん…」

密は少し考える。

「鏡子さん。食堂にでも行きませんか？」

二人は連れだつて食堂へと来ると密はキッチンへと行き、紅茶を二人分入れて戻る。

「どうぞ」

「いただきます」

紅茶を飲んで一息。

「私はね、鏡子さん。昨日のようなことは仕方ないって思います。だから、あまり気にしなくてもよろしいですよ」

「…そのためだけに紅茶を？」

「そうですね。鏡子さんとはわだかまりなくいききたいですから」

「…べつにあれだけのことで密さんをほつたらかしたりはしないのです」

「はい。ありがとうございます」

頬を赤く染めた鏡子が紅茶に口をつけているのを密は微笑みながら眺める。

そこへ、薄手のTシャツに半パンという出で立ちの刹那が首にかけてタオルで汗を拭きながら入ってきた。

「おや。二人も朝は早い方だったのかな？」

「刹那さん、おはようございます。何かしてましたんですか？」

「おはよう密さん。ええ、日課のランニングをね。朝から動く朝御飯が旨くていいよ。今度は密さんもどうかな？」

「えっと、遠慮しておきます。慣れるまでは朝は大変ですから」

「そう？じゃあ、私はシャワーを浴びて着替えてくるよ」

「はい」

出ていく背中を眺めながら密は紅茶を飲む。そこへ入れ替わるようにあやめが入ってきた。

「あら、おはようございますわ、お姉さま方」

「おはようございます、あやめさん」

「密お姉さまも朝は早いんですのね。それとも、花ちゃんが起こしに行きましたの?」

「花さんがこんなに朝早く起きるとお思いですか?」

鏡子の返しにあやめは口元を押さええて笑っている。それはないと  
思っていたのだろう。

「そうですわね。いつもなら早くても遅刻ギリギリに起きてくるぐらいですし」

「でしたら、せっかくですから起こしに行きましょうか」

「私はここにいますから行ってきてください」

小さなため息をついて密が食堂から出ていった。



— 刹那 side —

シャワーを浴びて、自室で制服に着替えてから食堂に向かうと鏡子とあやめ、すみれの三人がそれぞれに紅茶を飲んでいた。

「刹那お姉さま、おはようございます。朝のランニングをしてこられたのですか?」

「すみれさん、おはよう。ええ。日課のランニングですもの」

「刹那お姉さまは相変わらず朝から元気ですわよね。いったい何時に起きていらっしやるのやら…」

「あやめさんもおはよう。そうね……だいたい5時半〜6時ぐらいかしら? 30分は走りたいもの」

「朝から元気なことなのです…」

「そう言う鏡子さんも今日は早かったように思いますが…。ランニングしている時にいつもよりは早い時間に電気が付きましたね?」

「あれは……密さんが初日から遅刻したりしないために起こしてやろうという気遣いなのです。他に他意など無いのです」

「そうですか」

照れくさそうに紅茶を飲む鏡子に刹那は楽しそうに笑いながらキッチンへと入る。

緑茶を入れた湯呑みを持って食堂へと戻って飲んでみると、ほどなくして悲鳴が聞こえてきた。

「…今の悲鳴は…：花さん？」

「花さんなら先ほど密お姉さまが起こしに行きましたのよ」

「それで悲鳴があがるというのはどうなんでしょうか？」

「おおかた恥ずかしい寝相でも密さんに見られたのでしよう。…：つまり、密さんについていっていれば花さんの恥ずかしい寝相が見れていた…？」

「残念でしたわね、鏡子お姉さま…？」

「くっ…。こうなったら密さんが何を見たのか聞き出すのです」

「いや、やめてあげなさい。悲鳴があがるようなあられもなかったというところでしよう？」

悲鳴が聞こえてから数分後。妙にぐったりした密を美海と月子が欠伸を伴いながら連れてきた。

「なんかさ、花ちゃんの部屋の前でへたり込んでたから連れてきた」

「密お姉さま、お気を確かに…」

「え、ええ。だ、大丈夫、ですよ、月子ちゃん…？」

「受け答えがすでにダメな感じに見えるわよ、密さん？」

「というより、何があったんですか？」

さすがに2階から食堂まで届く悲鳴ともなるとけっこうな声量である。

「えっと…、花ちゃんのためにも黙秘します」

「つまり、花さんが下りてきたら根掘り葉掘り聞けばいいんですね」

「鏡子お姉さま、鬼ですわね」

「さすがに花さんの羞恥心が限界突破しそうですしやめてあげた方がよさそうね」

遅れてくること10分。花が食堂に下りてきた頃には朝食の準備は終わっていた。

「お、おはよう、ございます…！」

「おはようございます、花さん。席にお着きなさい。朝食です」

「はい…」

「では——父よ。貴方の慈しみに感謝して、この糧を頂きます。どうかこれを祝福し、我らの心と身体の支えとして下さい」

「アーメン」

朝食が開始されると花の悲鳴について突つつく者、食事を優先する者と分かれていた。

しばらくの間——特に鏡子が粘るが、花の悲鳴の理由は明かされることはなかった。

「花さんもなかなか口が固いですね？」

「密お姉さまも話そうとしませんものね」

「さすがに花ちゃんの名誉にも関わってきますから」

「はううくく…」

真つ赤になる花を密がやんわりと押して歩いている。それを刹那はすみれと一緒に後ろから見守る形で歩く。

「なんだか、密さんは皆さんが呼ぶ通り『お母さん』という感じがしつくりきますね」

「はい。本当に…」

端から見ると二人もそう見えるのだが、二人が気づくことはなかった。

## 第5話 一組

密は一度、職員室へと寄る必要があるため、鏡子と刹那は先に教室へと歩いていった。

「密さんは自己紹介、大丈夫でしょうか？」

「どうでしょうか。意外とそつなくこなすとは思いますが…」

「…鏡子さんから見た密さんの人物像ってどんな感じですか？」

「——っ。なんですか、藪から棒に…？」

「いえ、二人は遠縁と聞きましたので。印象とかはどうなっているのか気になったものですから」

「私から見た密さんの印象、ですか——」

どう答えるべきかと悩む鏡子に刹那は微笑みを隠すことはない。

「一言で現すなら、不思議な人、でしょうか」

「…なるほど。そうなりますか」

「逆に聞きますが、刹那さんから見た密さんの印象とは…？」

「そうですね。まだ一日と少ししかいませんからなんとも答えにくくはありますが——あえて言うのであれば『隙の無い、鋭利な刃物のよう。それでいて凧のような落ち着きを持つ』人、と言ったところでしょうか」

「また、えらく具体的な印象ですね」

「ああ。あと、けっこうな恥ずかしがり屋…でしょうかね。昨日、期せずしてお風呂が一緒になりましたが終始顔を真っ赤にしてこちらを見ようともせずに——っつて、どうしました、鏡子さん？」

「——い、いえ…。なんでも、ないのですよ？」

鏡子としては昨日の自分が逃げ出した後で密にとつては一大ハプニングが起きていたことを今更ながらに教えられて、なんとなくではあるが朝の密の対応に合点がいった。

「さて、密さんはクラスの自己紹介をどのような感じにするのか。今から考えるだけでワクワクします」

「なんだかんだと刹那さんもたいがい黒いですね」

「いいじゃないですか。それに私は、女帝ですから」

楽しそうに笑う刹那を見ながら、鏡子はこの後に続くだろう護衛という学院生活に『苦勞』という言葉が付きまとう気がしてならなかった。

朝のホームルームに担任である十条紫苑先生が密を連れて教室へと入ってきた。刹那から見ると密は緊張しているのか、鋭い雰囲気をもとつていて寮で見えていたような優しい感じが欠片も感じられない。(緊張しているというよりは群れに馴染めない動物、といった風でしようか…)

紫苑先生の言葉で席に着いた密を周囲の生徒はおっかなびつくりといった様子で遠巻きに見るような雰囲気である。

(これは、早々になんとかかするべきでしようね)

クラスのためにも。自分のためにも。

一限目の授業が終わり、普通なら転入生である密の周りにはクラスメイトが集まるところだが、ホームルームの雰囲気そのままの密に誰も近づこうとしない。

「——密さん」

「あつ、エンプレス女帝…」

そんな中を刹那は密に近づく。周囲の生徒は不安そうにこちらを見るばかり。

密はというといきなり机の前に立った刹那を見上げて首を傾げている。

「えっと、刹那さん？」

「密さん——」

刹那が腰を落とし、密と視線の高さを同じにする。

そして——伸ばした両手で密の両頬をつまんで引っ張る。引っ張って潰してこねくり回す。

やっている刹那はうつすらと笑っているがやられている密としてはたまったものではない。

「は、は、…は、はを…」

「ふふふ」

端から見ると刹那が何やらヤバい人間に見えていることだろうか。

顔を横に勢いよく振って密は刹那の凶行から逃れる。

「ふむ。けっこう餅肌だね、密さん」

「き、急になんなんですか!？」

つねられて赤くなつた頬をさすりながら密は目の前の凶行犯を睨み付ける。

密のそんな様子など気にした風もなく刹那は自分の頬を指で押さえながら――

「だって密さん。貴女、寮にいた時と違って凄いい形相しているのだもの。クラスの子達が話しかけずに遠巻きにしているのが証拠よ?」

「…えっと」

そこでようやく密はクラス内を見渡す。二人の成り行きを遠巻きに見るクラスメイト達。

「寮ではとても素敵な笑顔を見せてくれていたじゃない。なのに、教室に來た途端に眉間にシワを寄せた、鋭利で厳しい顔していたら他の子達が困ってしまうわ」

「あつ…」

密の表情から険しさが抜けた。ポカンとした表情からすぐに肩をすくめて苦笑した。

「申し訳ありませんでした。何分、転校というものは初めてでしたから」

「――うん。寮で見たことのある密さんに戻りましたね」

「ありがとうございます、刹那さん」

「お気になさらずに。ここからが大変ですから、貴女は」

刹那が立ちあがり、周囲のクラスメイトに優しい微笑みで頷くと、刹那が離れていくとすぐに他のクラスメイト達が密を囲んでしまった。

その様子をしばらく見ていた刹那は、静かに教室から出ていく。扉を挟んで聞こえ始めた喧騒を聞きながら刹那は歩いていく。





昼休み。刹那は購買で買ったパンとパックジュースを手に中庭に  
来ていた。

パンをかじり、ジュースを飲みながら時折聞こえてくる鳥の鳴き声  
の中で食事を進めていると、そこへ一人の女生徒が歩いてきた。

「あつ、またここでお昼してるんだ〜?」

「貴女は日なたぼっこですか、茉理?」

「うくん、そのつもりだったけどお話相手がいるみたいだし、何かお話  
しよ〜?」

「…ええ、構いませんよ。ああ、食事は先に終えて構いませんか?」

「うん。待ってるから」

刹那の向かい側に仲邑茉理なかむらまつりがニコニコ顔で座ると、刹那の食事を眺  
める。

「…どうしました?」

「ううん。刹那さんってよく中庭のここでパンかじってるけど他の人  
とかと食べてるところあんまり見ないなあ、って」

「ああ。まあ、仕方のないことでもあるのですよ。私の二つ名が原因  
になっていきます」

『女帝』だよな? かつこいいいよね〜」

「そうですか? 茉理にも綺麗な名がついているではありませんか。  
ねえ、『提琴の君』?」ヴァイオラ

そう呼ばれた茉理は急に赤くなってワタワタと手を顔の前で振る。  
「や、やめてよく。その呼び方慣れてないんだからさ〜」

「ふふつ。知っていますとも。私のことを女帝と呼ばない貴女らしい  
といえますか…」

食べ終わったパンの袋とジュースのパックを袋に入れて袋の口を  
縛る。

「それで、日なたぼっこをしに来た茉理は私とお話することに決めた  
ということですが、何を話したいのですか?」

「えへへ〜。実は、転校生のことを聞きたいな〜って思ったの」

「密さんのことですか?」

「うん。そう」

「今からでも教室にでも行けば会えますし話せますよ?」

「私は、刹那さんから見た『密さん』って人のことを聞いてみたいの」「それは、印象を知りたいとかそういうことですか?」

「ううんとね。今から教室に行ってもきつとたくさんの生徒が密さん?…:を囲んでると思うんだ」

確かに休み時間をごごとく囲まれていた密と鏡子の様子から昼休みも大して変わらない光景が見られることだろう。

「だったら、最初は知ってる人から聞くのもいいかな?って。刹那さんなら公平な目で見てると思うから」

「公平な…:と言いますが、私は基本的に他人と接する際に自分を曲げることがないだけですよ?」

「そうだね。だから、刹那さんに聞きたいなく」

ここで断るのは簡単なことのように、しかし別の話題を彼女と話していれば、再び密のことがどこかのタイミングで上がってくるだろう。

「はあ…:。わかりました。ただし、私の印象だということを忘れないでくださいよ?」

「やったく。じゃあ、よろしくね刹那さん」

「…:まったく。茉理にはかありませんね…:」

そうして、楽しそうに話を聞く茉理を見ながら刹那も楽しそうに笑っていた。

## 第6話 体育

次の日。

刹那は密と鏡子、花と一緒に学園へ向かうための坂を上っていた。「昨日は大変だったそうですね、密さん。なんでも『姫』の友人に選ばれたとか」

「もう刹那さんでも知っているんですか…」

昨日の昼休み。刹那が茉理と話している頃。

密の方は食堂で昼食を取って教室へと帰る道すがら、『姫』こと風早織女かざはやおりひめに「友誼を結んでほしい」という訴えがあり、それを受理したという風の噂があった。

「ええ。まあ、私は放課後に千歳から聞いたのですが」

諸事情で密を探していたのだが見つからず、仕方なく学院の情報通でもある新聞部の副部長——薄氷千歳うすらいちとせに話を聞きにいったところ知ることとなった。

「千歳曰く『密さんの情報が欲しい。なんでもいいからもらえないか？』と現れるなり言いましたので本人に直接取材しろと言っておきました」

「ええと、その千歳さんというのはどのような方なのでしょうか？」

「新聞部の副部長なのです。またの名を『忍者』とも呼ばれます」

「に、忍者…?」

何故そんな二つ名がつくのか、密には理解の外である。

「あつ、知ってますよ。なんでも『潜り込めないとこほはない』と豪語する新聞部のエースとも呼ばれている方で、今の新聞部の部長さんからも一目おかれているとか」

しかも、今年から入学したはずの花がすでに知っているほどの有名な人であるらしい。

「そのうち、挨拶に行くと思いますから。まあ、千歳は新聞部部长と違って載せるべき情報は選ぶ人ですし」

「は、はあ…?」

「大丈夫なのです。織女さんとの友誼を密さんが結んでしまった時点

でこのことは予測していました。フォローは任せるのです」

「はい。お願いします…」

影からの護衛任務だったはずがどんどんと火中の栗へと変わっていく。

「ところで密さん。私から一つ質問があります」

「…？なんででしょうか？」

「運動は得意ですか？」

「運動、ですか。まあ、不慣れということはありませんけど…。どれほどできるかと聞かれるとなんとも言えませんね」

密は男のためにこの場にいるメンバーよりも肉体的には筋力等は圧倒的に上だろう。しかし、刹那はそんなことはわからない。

「ふむ。であれば、今日は少しは楽しめそうかなあ」

「えっと、どういう意味でしょうか…？」

急に機嫌の良くなった刹那に密は驚いた。そんな密の袖を鏡子が引く。

「密さん。今日の授業は頭に入っていますか？」

「えっと、はい」

「刹那さんはたぶん、体育を楽しみにしているのだと思うのです。その、彼女は少々…普通とは違うので…」

普通とは違うことなど二日の間に嫌というほど思い知っている。学院内での『雨水刹那』の名前はそれほどまでに有名だった。

「私ごときが刹那さんのお相手をできるかはわかりませんよ？」

「それは、やってみてからのお楽しみ——ととっておくことにしましょうか」



—密side—

そうして、体育の時間が迫ってきているのだが…

「着替えのことが頭から抜けていましたね、密さん？」

「ええ。本当にお手数おかけします、鏡子さん」

二人は更衣室から少し離れた場所で他の生徒が居なくなるまで待っている。ちなみに、鏡子はすでに着替えは終えている。

「さすがに密さんにいきなり着替え中の女性徒の中へ突撃させるわけにもいきません。そんなこととして鼻血でも噴かれたら言い訳できません」

「出ません…」

「本当ですか？今も実は『興奮してます』とかカミングアウトしたりしませんか？——全力で蔑んでみせますよ？」

「ありません。ところで、今日の授業なんですけどどうしたらいいですか？」

「どうしたらいい、というのは？」

「えっと、刹那さんのことです」

なぜか今日の体育に関してすごく楽しみにされている。どうも話から察するに今までの体育の授業では全力を出せていなかった様子ではあるのだが…

「正直な話をすれば手を抜いた方がいいでしょう。ですが、おそらくそれをすれば彼女の逆鱗に触れかねませんからオススメできませんね。ですから、全力でお相手してあげた方がいいでしょう——その後はどうなるか見当もつきませんが…」

おそらく周囲に騒がれるという意味で見当がつかないということをおも理解できる。

しかし、刹那を怒らせることが得策ではないというのはわずか二日、この学院に通った密ですらなんとなく理解できるだけの情報は手元にある。つまり——

(全力でお相手するしかなさそうですね…)

鏡子の偵察後、人が居なくなつた更衣室に入つて着替える——実は一人居たので密には少々心臓に悪かつたのは別の話。

授業が始まるギリギリに密は体育館へと駆け込んできた。その表情が赤いのは走っただけではない。

「遅かったですね。何かありましたか？」

「あの…、鏡子さん。一人、着替えていたんですが…」

「おや、誰でしょうか？」

「えつと…」

体育館を見渡すと先ほど見かけた女性徒は今しがた入ってきたところだった。

「今来た方です」

「ああ、提琴ヴァイオラの君ですか。彼女のことは失念しました」

「ヴァイオラの君？」

「彼女は元有名なヴァイオリン奏者だそうです。何らかのご病気で引退したとかでこの学院に来た、と記憶しています」

「あの、鏡子さん。ヴァイオラとヴァイオリンでは別の楽器ですよ？」

「名付けた人はそこまで考えていないのでしょう。それに、ヴァイオリンの君よりもヴァイオラの君の方が呼びやすいとかそういうことなのでは」

「はあ…」

言われてみればその通りなのだろうが、二つ名とはそんな安易に決まってしまうものなのだろうか。

「はい。じゃあ授業を始めるよ。まずは五人チームを作って」

授業が始まるとチームが作られる。どうやらバスケットが始まるようなのだが…

「一戦目から刹那さんが相手ですか」

「よろしく願います、密さん」

こちらといえば密、鏡子とクラスメイトの細井千枝理ほそいちえりさん、棚倉円たなくらまじかさん、あとは…密は思い出せなかった。

「い、いきなり女帝とですか…」

「やはり他の生徒には女帝として通っているんですね」

「密さんは女帝のこと、名前で呼んでいるんですね」

「ええ。本人たつての希望で…」

「なるほど。女帝らしいといえますでしょうか…」

先生の合図でゲーム開始のために密と刹那が向かい合うように立つ。

「その実力、ここで測らせていただきますよう——」

「——お手柔らかにお願いします」

先生の笛の合図とともにボールが高々と放られる。同時に跳んだ以上、普通なら背丈の高い刹那の方に分があるはずだが——  
(ムツ…?)

ボールを弾いたのは密だった。受け取ったのは鏡子。着地した密にすぐにパスを通すと3点ラインからのシュートを決める。

「——ふむ。少し…いや、さすがに私が手を抜きすぎていた、か…」  
チームメイトからボールを受け取っている刹那を密と鏡子は見ながら——

「なんといいいますか、完全な様子見という感じでしたね」

「ええ。少し気合いを入れすぎたでしょうか？」

「いえ、たぶんここからです。まずは私からいきましよう」

ドリブルで近づいてくる刹那に対して鏡子はディフェンスに入る。

「鏡子さんがやる気を見せているのは珍しいですね」

「ええ。少しはやる気を見せてみるのもいいかと思いましたが」

「——今日は、言葉通りの『全力』をお見せするべきなようです」  
ドリブルを繰り返していた刹那の上半身がわずかに動いた。

(——捉えました)

鏡子はボールを奪うべく手を伸ばした——はずの場所にはすでに刹那はいない。

(なっ——?)

振り返った先にはすでに密と対峙する刹那がいた。しかし、その対峙すら一瞬のこと。ポカンとした表情をした密を置き去りにした刹那が Dank シュートを決めていた。

「これは、予想外過ぎる展開かもしれませんね…」

ボールを受け取っている密の瞳に火が入る。気を抜いていた。とはいえ反応すらさせてもらえなかった密としてはここで引き下がるのは負けた気がする。

「——いい顔になった。では、全力でやり合おうか」

そこからは密と刹那の戦いへと発展した。周りの生徒は二人にパスを通すと二人の戦いを眺める以外にやる事が失われる。

取っては取られを繰り返す二人はすでに周囲の様子など視界に入っていないのだろう。わずか10分足らずの攻防だというのに二人だけが汗をかき、周りの生徒は二人に惜しみない拍手を送るしかなかった。



## 第7話 噂話とは広がるもの

— 刹那 side —

体育での攻防から数日。

学院内では密と刹那、織女の話題で持ち切りだった。

昼休みの現在、刹那は新聞部の部長たる島崎真紗絵しまぎまぎえと副部長の薄氷千歳、一年の野木若葉のぎわかばが同席して食事を取っている。

「いやー、今年は最初っから話題沸騰な感じでいいねー。できるだけ早くウチとしても新報出さないとね。というわけで、刹那さん、お話しは？」

「相変わらずですね真紗絵さん。わざわざ後輩まで連れて」

「そりゃ、次期部長予定の二人だからね。『女帝』と名高い刹那さんのインタビューは経験しとくと将来的にいいんじゃないかと思ったのよ」

「そうですか。私に関わるようなことなら答えますが…」

「じゃあ、転校生の結城密さんのことを——」

「私に関わることって言いましたよね?」

「じゃあ、この前の体育で密さんと凄い試合をしたというのは本当ですか?」

「ええ、そうですね。どんな噂が広がっているかまでは知りませんが」  
当の密にいたっては織女に次の中間考査において戦ってほしいだとか宣戦布告されたりしているので噂どころか周囲の盛り上がりはうなぎ登りである。

メモを繰る千歳はとあるページで手を止めた。

「こっちで掴んでる噂といたら『姫と友誼を結んだ』『姫に中間考査で宣戦布告された』『女帝と結城密はライバル?』『姫は女帝のことを気にしている』とかだね」

「密さんとライバルかはわかりませんが最後の一つには興味がありませんね。織女さんが私を気にしている?」

何か彼女の興味を引くようなことをしでかしただろうか? 質問に對して答えたのは若葉だった。

「主に三年の間で広まり始めている噂で、姫の興味を引く密お姉さまと仲のいい様子を何度かお見かけしていたのだとか」

「ああ、なるほど」

確かにここ数日はなにかと密の近くにはいたし、鏡子の代わりに頼られることが幾度かあった。

どうやらその場面のいくつかを見られていたということだろう。

「まあ、姫が友誼を結んだ相手のそばに基本的にいるのが鏡の君と女帝というんだから姫としても気になってるってところじゃないかな」  
「今まで自分の二つ名にあまり興味を持つことはありませんでしたが、こういう時には役に立つものですね」

今年に入ってから妙に二つ名が関わってきているように感じる。もつとも、今までがそうでなかったと言われれば違うとも思うのだが…。

こちらの反応に対して真紗絵は肩をすくめる。

『女帝』の二つ名を付けたのは昨年度の照星達エルダースターズですから。立ち塞がる壁だったのは去年の照星達と刹那さんとのやり取りからも覚えがめでたいでしょうか」

「そうは言いますが…」

刹那自身、別に去年の照星達と対立していたのは最終的な刹那の答えとしては『価値観の違い』だったと思っっている。

普通の人とはだいぶ違った人生を歩んだ刹那としてはこの学院は暖かい場所であるが、刺激の少ない場所であった。

むろん、それが悪いとは思っていなかった。だが、自分の上に立つ者達がぬるま湯に浸かっている事態にどこかしらで苛つきがあったのだと今なら思える。

「まあ、最終的には解りあえた方々でしたね、昨年度の照星達とは」  
「あれは記事にしやすかったから助かったよ。ところで『あのこと』はいつなら記事にしているのですかね?」

「ううん? 千歳さん、何の話です?」

「今は部長には話せません。何分、刹那お姉さまにだけ関わる話ではありませんので」

「そうですね。私としては中間考査の後にしていただけだと助かります。このことは本年の照星達にも関わる重大事でしょうから」

軽々に話されては困る話もあるということだ。特に真紗絵部長は面白ければ裏が取れていない情報でも簡単に新報に載せて広げてしまう。後々に問題になることも少なくはない。

「情報つてのはみんなで共有しないとね」

「裏の取れていない曖昧な情報は推測、悪く取れば臆測というのですよ。そのようなことで学院の風紀を乱せば大きなしっぺ返しを受けることになりますよ」

「そんなことが怖くて新聞部部長は務まらないよ！」

いっそ清々しいほどに笑う真紗絵に刹那はため息をつくしかない。

「忠告はしましたから。痛い目を見た時には私を頼ることは許しませんからね」

「大丈夫大丈夫。『女帝』に無理を言うことはありませんよ」

「どうでしょうね…」

刹那は昼食を食べながら、ため息をつくしかなかった。



昼食後、特に何をするでもなく刹那は中庭で一息ついていた。

「あれ〜。また刹那さんがいる」

「茉理ですか。今日も中庭で昼食ですか？」

「ううん。今日は散歩中。でも、今からは刹那さんの話し相手」

中庭のベンチに刹那と並ぶように茉理が座る。

「今日はどんなお話をしたいのですか？」

「えへへ…。実は、ちよつとばかりお願いがあります」

「茉理から私にお願い、ですか…？」

珍しいこともあったものだ、と刹那は思う。茉理とは学院の一年の頃からの気安い話し相手ではあるが、お願い事というのは数えるほどにしかない。

元々、刹那はあまり頼まれ事がされにくいこともあるのだが、茉理

自身もあまり刹那に頼るような場面は少なかった。

「まあ、茉理からのお願い事というのも珍しいことではありますが、とりあえず話してみてください。中身如何によつてはお手伝いいたしましょう」

「わーい。ありがとうね、刹那さん」

「お礼はいいですから。まずはお願い事を言ってくださいますか？」

「うん。実は、ね。今度の中間考査に向けて勉強を教えてほしいんだ」

刹那は茉理の方を見ながら首を傾げた。

確かに刹那の成績は良い方だ。二年次までの成績は上の中程度。たまに上位五十名の中に名前が載ることもあったが、その程度だ。

「えっと、ね。今は大丈夫でも卒業までこのままだと卒業できなくなるかもなあ…って」

「こんな風に言うのもおかしいですが、茉理、成績は悪い方ではないですよね？」

少なくとも下位の順位表にはいないはず。となれば、必然的に中程度の成績は維持しているはずだ。

「でもさ。成績は少しでも高い方がいいじゃない？」

「それはそうですが…。いきなりなのが私には疑問なのです」

そもそも前回会った時には成績を気にしている様子はなかった。なら、何かしらの理由があるのだ。——とはいえ、こういう風に頼られることは今までなかった。

「仕方ありませんね。まあ、私に勉強を教えてほしいだなんて言うてる女性徒は茉理ぐらいでしょうし…。いいでしょう。私のような者でよければ」

「わーい。ありがとう、刹那さん」

ばんざーい、と全身で喜びを表現する茉理に刹那はくすりと笑う。

「しかし、他人に教えるとなると——手を抜くわけにもいかなくなりませぬ。まあ、ちようどいいと思っておきませうか」

「えっ?」

茉理としては聞き捨てならないことを聞いた気がした。

「刹那さん。今までの試験って手を抜いていたの？」

「うん？——ええ。そこそこの成績を維持できればそれでいいと考えていましたし、全力を出して勉強するというのもあまり考えたことはありませんでしたね。奉仕会に参加するのも好ましくありませんでしたし」

いろいろと理由を並べるが刹那としては最後の一年、一切の手加減をすることなく全力でいってみるのもいいと思えていた。

そう意識を切り換えられたのは——先日の体育での密との対戦だろうか。

「というわけで、茉理。今日の放課後は寮に来てください。私の部屋でみっちり教えてさしあげましょう」

「あ、あはは、あはははは…」

刹那のすごく優しそうな笑顔に茉理は背中が凍りつくような雰囲気を感じたが、もはや断るといふ選択肢は存在していないことも同時に悟るしかなかった。

——今日この日から試験最終日まで、茉理にとっては地獄とも生ぬるい勉強尽くしの日々が続いた。

## 第8話 照星（エルダースター）前哨戦

試験期間中、刹那は毎日のように茉理を寮に招いては勉強を教え、夜にすみれに請われる時を除いては自身の勉学に励んでいた。

途中、密をからかったり図書館で読書を行ったりと息抜きこそ入ってはいたが、刹那にとっては今までにないほどに試験に集中していた。

そして——試験結果の日を迎えた。

「茉理、気が抜けていますが大丈夫ですか？」

「あはは……。ここまで本気で勉強したの初めてかも……」

半分魂の抜けている茉理を引き連れて刹那は成績表の貼り出しを見に来ていた。

しかし、そこに集まっている人垣は何やらざわついていた。

「まさか、このような結果が……」

「前評判から密お姉さまはわかりますが、まさか女帝まで……」

「あつ、皆さま……」

人々が刹那を見るとモーゼのように道を開ける。それを後ろからついてきていた茉理は——

「相変わらずだね」

「本当に……。このような学院生活を送るようになるとは私自身思っただけじゃないかったです……」

「図らずも試験結果の張り出された前まで問題なく来れた刹那と茉理は貼り紙を見る。」

「あら。茉理、貴女上位50人にランクインしてますね」

「えっ！本当に?!」

「さて、私の名前は——」

いち早く見つけた茉理の名前を本人に教えて刹那は自分の名前を探す。しかし、探すまでもなかった。

「——なるほど。全力を出してみましたますがまさかこのような結果を生み出すことになるとは……。私の実力というものも捨てたものではないですね」

「あつ、刹那さん」

「おや、密さんと織女さんも来ましたか」

「ご機嫌よう、刹那さん」

現れたのは密と織女。二人は張り出された結果を見上げる。

『一学期 中間学力考査』

『成績優秀者発表』

『第三学年』

首席 雨水 刹那

同首席 結城 密

三位 風早 織女

四位 正樹 美玲衣

五位 畑中 美海

六位 高山 香澄

七位 茨 鏡子

首席は二名。名簿順だから刹那がトップに名を残して同じく首席として密の名前があつた。織女は——三位。

周囲の生徒は言葉を発しない。密と織女が試験で勝負をしていたのは知られている。しかし、それにまさか、刹那までが食い込んでいたことが場を混乱させたともいえる。

刹那の今までの成績はせいぜいが中の上々の中。よほど高くても四十位前後。だが、目の前の結果は今までを否定するには十分過ぎる結果だった。

「これは、完敗——ですわね」

「織女さん……」

「それに、まさか女帝たる刹那さんにまで負けているとは思いませんでしたわ」

「…そうですか」

確かに、織女にとっては晴天の霹靂だっただろう。争っていた密に

負けるならまだしも、今まで争ってさえいなかった相手にも負かされていたのだから。

そんな中でも織女は笑顔だった——けれど、それは違うのだとわかる。

一瞬だけ見せた苦しそうな眼差し。刹那が気づいたぐらいだから密も気づいているだろう。

「…ね、織女さん」

「何でしょう」

「何処か、二人きりになれる場所…ご存知ないですか？」

密が織女にだけ聞こえる声量でささやく。それでも聞こえていた刹那は密と目が合うと軽く肩をすくめた。

二人が並んで歩いていくのを見送って、刹那は改めて試験結果を見る——と、刹那には見慣れた女性徒が試験結果を見て苦しそうな眼差しをしていた。

「ご機嫌よう、美玲衣さん」

「あつ…ご機嫌よう、刹那さん」

そこにいたのは四位の正樹美玲衣。

刹那にとっては茉理同様に自身を『女帝』とは呼ばない稀有な友人。

「美玲衣さん、少しお話できますか？」

「…ええ。構いませんよ」

「では、茉理。私はここで失礼します」

「はい」

茉理と別れて、刹那は美玲衣とともに中庭へと来た。

「どうでした、試験結果を見た感想としては…」

「そうですね。まったくの予想外でした。織女さんのこともそうですが、刹那さん。貴女は今までの試験では手を抜いていたのですか？」

「ええ。ほどよい成績であればそれでよかったです。ですが、何と言えよいのでしょうか。密さんと体育の時に全力でお相手をしていただいた折に、自分は今まで皆様に失礼なことをしていたのではないかと思います」

「全力を出してみせた、と…」



「ええ。結果は見ての通りでした。それでも密さんには並ばれてしまいました。さすがは進学校に通われていただけはある方です」

「…すごいですね。これで、刹那さんは照<sup>エルダースター</sup>星になるわけですか」

「ああ。その心配はありませんね。私は照星の器ではありませんし」「ええ…？」

「数日中にわかりますよ。ただ、おそらくは今年一年は美玲衣さんとも長くお世話になるでしょうから、と思ひまして」

刹那の言葉に美玲衣は混乱していることだろう。だが、それも数日のことだ。数日中には新聞部が『あのこと』を新報に上げることだろうと。



中間考査から時間は過ぎて6月。

学院内では中間考査の試験結果を受けて照星選挙の話題が沸騰していた。しかし、その機先を制するかのようにその記事は公表された。

『女帝、先代照<sup>エルダースター</sup>星達に抜擢されたこと』

「学院内では知らぬ者はいないだろう」女帝―雨水刹那』は卒業式の折に先代照星達に次代の照星達に立ちはだかる壁となり、自分達を成長させたように彼等の成長を促す者として居てやってほしいと頼まれていたことが発覚した。

本人にも我が新聞部は確認を取ったが否定されることはなく、またその場面を見ていた生徒もおり、信憑性は高いものと判断。これを掲載するに至った。」

新報のぶちまけた情報には多くの生徒が驚愕し、また先代照星達が女帝を認めていたことを知るには十分過ぎる記事だった。

偶然にもこの記事を一人で見ていた織女は一組へと歩いていく。

「ご機嫌よう。刹那さんはいらっしやいますか？」

「おや、織女さん。今日は私に御用事ですか？」

「ええ。少し二人で話せればと思ひまして。今は、大丈夫でしょうか

？」

「ええ。構いませんよ。では、密さん。私は少し失礼いたします」

一組は先日の間考査において首席が二人、片や転校生、片や『女帝』だったことがクラスでの話題をさらっていった。

当然ながら話は学院における照星についての話題へと移り、

エルダースターズ

照星のことを知らなかった密への説明の場へと変わっていたのだ。

織女に連れられて刹那が来たのは屋上。ここでなら早々人が来ることはないという織女の配慮だろう。

「それで、お話とはなんでしようか」

「今朝、セラール新報を拝見いたしました。あそこに書かれていることは事実なのですか？」

「…ええ。多少なりとも誇張された表現が使われたりはしていましたが、大筋では間違っていないです」

現場には千歳がいたため目撃した生徒は新聞部の人間で、私にわざわざ質問に来る必要性はなかったので新聞にある『否定はされなかった』というのは誇張だ。

まあ、刹那自身としては記事してもらいたかった内容でもあるし、実際には記事の内容のことは千歳以外にも数名は知っている話なのだ。そのうちの一人は――

「なるほど。織女さんが記事の内容を知らないということは美海さんは貴女にこのお話をされてはいなかった、ということですか」

「えっ？美海さんは知っていたんですか？」

「ええ。昨年の成績順でいえば美海さんは奉仕会会長もやっていたことですし、順当な照星候補でしたし。立場としては鈴蘭の宮に近いところに私は立つのだろうと考えていましたから、その筆頭候補には話をしておくべきかと思ひまして、ね」

その流れで本年度の奉仕会会長のすみれも知っているが、さすがに妹に隠し事というのも刹那としてはどうだろうと思っていたので気にしていない。

「ですが、それなら刹那さんは照星を辞退する気であるということ

すか?」

「そもそも、昨年・一昨年と照星達と刃を交えていた私が照星にふさわしいかを考えたときに、ほとんどの生徒は私を候補から除外すると思いますよ」

「それは——…っ」

織女には二の句が継げなかった。刹那の説明には明解な不備はなく、ただ事実を伝えてきている。

「それに、照星というのはある側面から見れば単なる栄誉でしかありません。もちろん、この学院の奉仕会の上——学生達の最終意思決定機関の側面があることは認めましょう。しかし、それを差し引いても私には魅力はありませんし、私は基本的に権威にケンカを売りたい人間なので…」

事実、二年間の間で照星達にさんざん絡んでいった生徒は刹那一人だけ。そう考えれば刹那がこの学院においては異端児だとわかるはずなのに…。

(どうして織女さんはこうも絡んでくるのか…?)

「栄誉であるとわかってはいてもそれを享受する気はない、ということですが。では、刹那さんにとってこの『照星』とは何だとお考えなのでしょうか?」

『照星』とは何か、ですか。私見でよろしいのであれば、成られた方にとっては栄誉であり、周囲の者にとっては憧れである。それ以上のものはないと考えていますよ」

「であれば、貴女が照星になることも問題ないのでは?」

「ふむ…。織女さん、貴女はなぜそう私に照星という立場を推すのでしょうか?」

「えっ?」

「私には魅力がないと答えたものをなお、貴女が私に推す理由です。貴女なりに理由がおありなのでしょう?」

「それは——」

織女が口ごもったことで刹那も考える。なぜここまで織女は自分に『照星』を推すのか。

先ほどから答えているとおり、自分には魅力がないのだ。照星になることに。しかし、織女は私がそこにいることを望んでいるように思えてしまう。

(もしや、織女さんは——)

一つの仮説が浮かんだ。しかし、それはあまりにも独善的で——

「織女さん。まさかと思いますが私が密さんと同じように貴女を動かしたから推したりしてませんか?」

「え、ええと……」

明らかに狼狽した様子の織女に刹那はため息をつくしかなかった。

「織女さん。貴女が負けず嫌いな気質なのはわかりました。しかし、ただそれだけでここまで突っかかられても困ります」

「わ、私は……そういうつもりではなくて……」

「なんとなく言いたいことはわかりますよ。しかし、ならばなおのこと、私は照星を辞退せざるをえません」

「な、なぜです?」

どうやら織女には本当にわからないのだろう。

——故に、刹那は気持ちをし、意思を『女帝』たる自身に切り替わる。

「私は『女帝』。『照星』を試し続ける壁たる一人の生徒として今代の照星達に立ち塞がる者。先代照星達との約定を護るためにも、私はこの立場から逃げるつもりはない」

「——っ!」

そこにあるのは『誇り』を持って立つ『女帝』たる生徒。強き意思を貫く者。

「風早織女。貴女が照星足り得るといふなら、私は貴女を試し続けよう。それが——私が『女帝』たる務めである!」

気圧されたように固まった織女を置いて刹那は屋上から去る。



—織女 side—

屋上の扉が閉まるのを見届けて、織女はその場に座り込んでしまっ

た。

「はあ…。まさか、あれほど怒るとは思っていませんでした…」

触れただけで斬られるような鋭利で苛烈な怒気。

(自分の我が儘を通そうとしてしまいました…)

今年から自分は我が儘になるのだと決めたとはいえ、それを他者に強要してしまった。それも無意識に…

「怒られて当然ですね…」

立ち上がる。スカートの埃を払うと屋上の扉に手をかける。

「刹那さん。私は、貴女にも『勝ちたく』なってしまうました」

気持ちは切り替えられた。もう、あのような我が儘は止めておこうと、織女は自身に誓う。

## 第9話 照星（エルダースター）選挙に向けて

―すみれ side―

奉仕会室。そこは照星がいずれ集まる部屋であり、照星の決まっていない間は奉仕会会長が預かっている部屋でもある。

書類仕事に勤しむすみれはノックをして入ってきたあやめが紅茶のカップを机に置いたところで一息ついた。

「ありがとう、あやちゃん」

「いえいえ。会長もこれからは忙しくなると思いますから少し息をつかせようと思っただけですわ」

「そう…」

紅茶に口をつけて、すみれは小さなため息をつく。

「すみちゃんとしては今年の照星はどうなると思います？」

「そうね。すんなり決まるようなものでもないと思っていたのだけれど…」

密の転入で流れは少し変わったともいえる。首席の成績を修め、容姿端麗、性格も問題ない。間違いなく照星候補筆頭である。

「密お姉さまと『姫』、あとは美玲衣お姉さまの三人が候補筆頭でしょうか？」

「すみちゃん、刹那お姉さまは？」

「あやちゃんもセラー新報は見たのでしょうか。刹那お姉さまは照星候補に挙げられても真つ先に辞退するわ」

そのことは新学期が始まる前に刹那本人から直接聞かされていた。さらに、ちよつとした頼み事もされている。

このまま照星選挙の方が進めば、刹那の頼み事はすみれとしては飛びついてもいいようなことでもある。

「刹那お姉さまが照星になるのもそれはそれでいい方だと思いますわよ？」

「刹那お姉さまがそれを望むとは思えないわ。あの人は善くも悪くも芯が通ってる方だもの。新報にあった通りなら、必ず辞退されるでしょう」

「そうなるよ、密お姉さまと『姫』、美玲衣お姉さまの三人で決まりでしょうね」

「密お姉さまが照星の緩衝材になると嬉しいのだけれど…」

「そうはならないとすみれは感じている。なにせ、壁となる刹那がいるのだから。」

「今年も楽しそうですわね」

「平穏には終わらないでしょうね…」

今年も心静かに学院生活が終わることはないだろうと、小さなため息をつくしかないすみれだった。

★

—密 side—

今日も1日が平和に終わり、密は自室のベッドのうえでブーツとしていた。

ただブーツとしていたわけではない。考えなくてはならないことは多すぎて処理能力が限界に来ている。

まず、風早織女の護衛の件。これはもはや友人として付き合っていると決めた以上どうすることもできない。流されるのは良くないとはわかってはいるが他に手段もないので諦めている。

喫緊の課題は『照星候補』に挙がっていること。クラスメート達から説明を受けたことからわかるが、要は学院における学生の最終意思決定者みたいなものであるということ。そして、学院生徒達の憧れの存在になるということ。

別に最終意思決定者になってしまうことは諦めている。問題は、学院生徒の憧れの存在になる、という点。

そもそもにおいて自分は『男』なのだ。それが何の罰ゲームのごとく女生徒の憧れとして立たねばならないのか。

一応、鏡子には文句を言ったが『密さんが織女さんを勉学で倒すことを決めた時点でこの事態は確定していたようなものですから』と

あつさりとした答えが返ってきた。

引き返せない場所に自分で踏み込んでいたのは理解できたが、実際問題として選ばれた場合の不測の事態はどれだけあるのかわかったものではない。

とはいえ、自分がどうにかできる地点はすでに通り過ぎているようだ…。

「とりあえず、お風呂に入ってください…」

このまま部屋で悩み続けても答えは出ないどころか思考の沼に沈みかねない。気持ちを切り替えるためにもお風呂でも入ろうと浴室へと向かう。

——まあ、思考の沼にはすでに沈みかけてはいたのだろう。脱衣場の確認をしつかりしていなかったことからそれがよくわかる。

「おや、密さんも今からお風呂かい？」

密が浴室の扉を開けた先にいたのは全裸の刹那。タオルで身体を隠すことすらしていない。

思わず見惚れて固まった密に刹那は笑顔を返す。

「まあ、そこでボーツとしても仕方ないだろう。お風呂に来たのならせつかなのだし一緒に入りましょう」

「えっ、あ…はい、そうですね」

湯船に浸かる刹那の隣に密も入る。刹那は他人から身体を見られることに何も思わないようで、チラチラと密が見るのにも気にした様子もなくリラックスしている。

「——それで、密さんは何か悩み事ですか？」

「——っ。なぜ、わかりますか？」

「別に理由があるわけでもありませんよ。ただ、転入数ヶ月の密さんが照星候補になれば困惑するのでは、と思ひましてね」

「はい、そうです。刹那さん。刹那さんから見て『照星』とは何でしょうか？」

クラスメートに照星について教えられていた時に度々刹那のことが話題にあがった。曰く、学院において刹那は照星の『敵』のような存在だと。



「私から見た照星のことか。今日は妙に同じようなことを聞かれますね」

「えっ?」

「いえ、こちらの話です。そうですね、私から見た照星というのは――」

答えようとした刹那が固まる。どうしたのだろうかと顔をのぞきこむと悩んでいる様子で、まるでどう伝えるべきかを迷っているようにも見える。

「――これから照星になられるかもしれない密さんにはなんとも言いがたくはありますが、本年度の照星に関していえば、私とともに成長してほしい人達であってほしいところでしょうか?」

「刹那さんとともに、ですか?」

「ええ。新報にも書かれてはいたと思いますが、私は照星の壁として向かい合う役目を先代照星達から頼まれました。しかし、私自身も未熟者であるのは事実。であれば、照星のためにも私のためにも、私は彼等の前に立ち塞がる者とするのが望ましいということですよ」

「それは私のような人でも?」

「密さんがどうしてそこまで自身を下に見ているのかまではよくわかりませんが…。密さんであれば一緒に成長したいと思います」

刹那は湯船から上がり、身体を洗うために座る。

「密さんがどうしても照星にはなりたくはない、と思っておられるのなら私は何もいえません。しかし、少しでも悩んでいるのならやってみてもよろしいのではないのでしょうか?」

「刹那さん…」

密は振り返ることなく自身の身体を見下ろす。

「少しは考えはまとまりましたか?」

「…ええ。ありがとうございます、刹那さん」

「いいえ。お気になさらず。さて、私はこのままあがりますから密さんはごゆっくりどうぞ」

鳥の行水のごとく、手早く身体を洗ったのか刹那は浴室から出ていく。それを見ながら密は天井を見上げる。

「私は、どうするべきなのでしょうか…」  
のぼせないように気をつけて密は浴室から出ていった。

## 第10話 照星（エルダーズ）就任

——数日後。

曇天の空を見上げながら密はため息をつく。今日、いよいよ照星候補の投票がある。

この投票をもって本年度の照星三名が決まり、卒業までその任を全うすることとなる。

「密さん。ここまでできたのならもう成り行きに任せた方が楽だと思いますよ」

「鏡子さん…。そうなんですか。そうなんですかね…?」

成り行きに任せた場合、自分は確実に照星になる気がする。けど、自分は『男』なわけで…。

「密さん。気にし過ぎるのもよくないと思いますよ。そもそも、照星は他薦なんですから絶対に選ばれるとは限りません」

「鏡子さん。それ、本音で話してます?」

「・・・」

「目をそらさないください」

目をそらしてごまかそうとする鏡子に密は憂鬱な気分のままに学園の道を歩いていく。

教室に到着するとクラスメイト達はすでに盛り上がっている。幾人も『密に投票する』と言って自身の席へと戻っていき、授業が始まる前から密は気疲れで机に突っ伏する羽目になった。

そして、授業終了後のホームルームで担任である十条紫苑からそれぞれの生徒に投票用紙が配られる。

「投票はあくまでも自分の決めた相手を書いてください。組織票にはならないように——と言っても、まあ無理そんな感じもありますけど」

密を見て笑う紫苑に密としては苦笑いしか返せない。そして、密も投票しなければいけないのだが…。

（自分に投票するなんて論外。かといって鏡子さんとかに嫌がらせで投票してバレたりしたら何されるやらわからない…）

密は無難な答えに落ち着くしかなかった。

ふと、刹那の方を見ると珍しく腕を組んで悩んでいる。悩むほどのものだろうかと思うが、悩むということは自分以外に投票しようとしてくれているということだろうか。

「一人分減った程度ではどうにもならないと思います」

「わかっています。というか、人の考え事を読まないでください」

書き始めた刹那を眺めながら密は小さなため息をもらすしかなかった。

講堂に集まった全生徒。ここで先ほど集計された投票を元に三人の照星が選ばれる。

「先生方が発表をするんですね」

「あまり前例は無いので一概には言えないのですが、集計を手伝った生徒が照星に選ばれたことが過去にはあったという理由から、照星候補者が壇上にそろうまでは先生方が司会を務めるようになったようです。まあ奉仕社会役員が照星候補者を壇上に呼びつけるのも失礼だという配慮もあるようですが」

「なるほど」

壇上には十条紫苑と高宮睦月の二人が立っている。紫苑の手には一枚の紙があり、そこに今年度の照星候補者の名前が書かれているのだろう。

「それでは、開票結果を発表します」

「投票総数六二八票、うち有効数六二五票でした。これより、上位三名の名前を読み上げますから、呼ばれた人は舞台上に上がってきてください」

生徒が一樣に息をのみ、講堂は張り詰めた緊張で満たされる。

紫苑が視線を一度紙に落とし、前を向いて名前を読み上げる。

「ではまず——三年四組、風早織女さん」

最初によばれたのは織女。胸を張り、優雅に壇上へと上がっている。

「次に——三年一組、結城密さん」

呼ばれたことで講堂に万雷の拍手が響く。立ち上がり、逃げ出した

くなる気持ちを抑えつけて壇上へと上がる。

「最後に——三年五組、正樹美玲衣さん」

最後は美玲衣。周囲が声援を送り、それに応えてから壇上へとやってくる。

「以上になります。では奉仕会長、後はお願ひします」

「ありがとうございます。先生方」

ここで、マイクを奉仕会長であるすみれへと渡されると、先生方は壇上から下りていく。あくまでも、呼び出すのが仕事ということだろう。

「それでは、新しい照星エルダースの皆様……」

「待つてください、奉仕会長」

密は静かに声をあげる。

「どうかなさいましたか」

「私は——照星を辞退させて頂きたいと思ひます」



——刹那 side ——

「私は——照星を辞退させて頂きたいと思ひます」

密の言葉を聞いて、すみれがいくつか質問をしている。それを遠間に聞きながら、刹那は深く頷いていた。

（密さん。やはり貴女のここ数日の悩み事はコレ、でしたか。確かに今、貴女が答えているように貴女は学院に来たばかり。システムとしての意義や伝統といったものには疎い存在でしょう。——ですが……）

「そんなことはありません！」

密の言葉に待ったをかけたのは織女。強く、まっすぐな言葉は彼女の——否、変わりつつある彼女の意思をしっかりと反映している。

（やはり、貴女も変わってきている。きつと、今の密さんの立ち位置は前年度の照星にとっては私がいるべき場所だった。ああ、やはり私は貴女を照星から外すわけにはいかなくなりました）

刹那は心に決めた。『結城密』はきつとこれからも何かを変えていく。本人の資質かはわからない。

だが、きつと彼女なら——私とも渡り合い、私だけでは見れない未来へとたどり着けるかもしれない。

(おこがましい考えではありませんが——)

静かに席を立ち、刹那は三人と視線を合わせやすい壇の前へと歩いていく。

「お引き受けなさい、結城密」

「刹那、さん…」

三者三様にこちらへと向き直る。

「密さん。『照星』とは皆で選び、皆が望んだからこそそこにいる。貴女自身のことを全てわかつている者などこの場にはおそろくないのでしよう。それでもなお、貴女でいいのだと、貴女がいいのだと皆は票を投じたのです」

「——あ」

密の視線が刹那から後ろに居並ぶ生徒達へと変わる。

「貴女は外部から来たから辞退するという。しかし、今はもう貴女もこの学院の一人の生徒。異邦人であると思ひ悩み、我々のためにと辞退を申し出て下さった。だからこそ私は貴女を照星に推しましょう」

「——」  
密からは返ってくる言葉はない。それでも、その瞳が、生徒達から離れることはない。

「貴女はこれからもそうありなさい。そうあるかぎり、私は貴女の理解者となるべく立ちはだかろう。貴女の隣に立つべく努力しよう。私も『女帝』などと言われるが一人の生徒。そして、貴女の変わらぬ友人であろう」

そこで刹那は壇上から生徒達へと向き直る。

「皆よ、結果を曲げてまで密さん以外の誰かを尊び、敬うことをよしとしますか？ 貴女方は、それを許してしまいますか？——そうではない。そうでしょう、皆様！」

——次の瞬間、万雷の拍手とともに多くの生徒達から声があが

る。

「刹那お姉さまの仰る通りです!」

「私たちは、密お姉さまを支持致しますわ!」

「どうか、私達を導く照星として——」

「お願いいたします…!」

刹那が肩越しに振り返る。

「密さん。これほどまでに望まれている。それでもまだ、辞退されま  
すか?」

「刹那さん…」

密は左右に並ぶ織女、美玲衣の顔を見る。二人は何を言うでもなく  
ただ、頷いた。

さざ波のような拍手の海、密を認めて響く、皆の声。

——それでも、苦しそうな表情は変わらない。

(気持ちは、意思是、固いということでしょうか…)

刹那は持ち得る知恵と考えを使いきってしまった。皆の力を借り  
るということも選んだ。それでも変えられないのなら——

「…どんな貴女でも、いいのです」



—織女 side—

刹那さんとみなさんの声に、それでも密さんは悩む気持ちを換えら  
れていない。だからこそ、自分は気持ちを抑えられなかった。

「私は、自分が完全ではないと——そう痛感している貴女とこそ、一緒  
にやっていきたいのです!」

だって、私は教えられたから。自分も、完全ではないと。間違っ  
てきたことも、自分はまだまだ未熟者であると。だから——

「お願い、できませんか…?」

そこで、ようやく密さんは一度目を閉じた。再び目を開けて、講堂  
の生徒達を見回して——

「——わかりました」

その瞳には何かの覚悟が宿った気がした。それがなんなのかは私にはわからない。でも――

「お受けします」

密さんの言葉を皮切りに再び万雷の拍手が講堂を包む。

「おめでとうございます――！」

多くの生徒から祝福の声が聞こえてくる。

「貴女は、私の友人なのです――勝ち逃げは、許さないので……！」

「はい。申し訳ありません」

ふと、視界の端に見えたのは刹那さんの優しそうな笑顔。その人は他の生徒達から背を向けるように講堂から出ていく。

（ありがとうございます、刹那さん……）

――こうして、三人の照星は決められた。

――この先に、如何なる物語があらうとも。

――それが星の導きによるものか、それを知る者は誰もいない。

――それは、彼女達の物語なのだから。



## 第11話 照星と奉仕会

—密side—

週も改まって七月。照星<sup>エルダレス</sup>としての初会合ということで、放課後に象牙の塔——図書館棟の最上階へと集まっていた。

「ようこそ、新照星の皆さま方。改めまして、お世話をさせていただきます紅鸚奉仕会会長、二年の迫水すみれです。本年一年、どうぞよろしくお願いいたします」

「さて、投票の票数の如何に関わらず、照星の位階は一学期中間考査の成績順と決まっております。この慣例に従い——呼ばせていただきます」

『薔薇の宮、結城密』

『百合の宮、風早織女』

『鈴蘭の宮、正樹美玲衣』

「また、三人の照星には序列がございますが、お三方は同格でいらつしやいます。これはベツレヘムの星に導かれた三人の博士に準えたことによります」

そこへ、一人の生徒が部屋へと入ってきた。その生徒が説明を引き継ぐ。

「ただし、その役割には異なるものがあります」

白板に説明を引き継いだ生徒が書き記していく。

『薔薇の宮 博士メルキオルに倣い王権を担う。仲裁、三名の間で議論に決着が付かなかった時の最終決定権を担う』

『百合の宮 博士バルタザルに倣い神性を担う。総ての可能性を吟味頂き、まずは肯定を、かなうのであれば救いの手を』

『鈴蘭の宮 博士カスパーに倣い受難を担う。総ての課題に対し、理性的な疑義を与えて論理的な展開を与える』

白板に記された説明をその生徒が改めて話す。三人が頷いたのを見て、生徒はすみれへと視線を移す。

「ではこちらへ——象牙の塔をご案内させていただきます」

すみれを先頭に図書館棟の三階へと案内する。

「——こちらが生徒会室、通称『象牙の間』といわれるお部屋です」

「これは——また随分と時代がかった装飾ですね」

織女が周囲の家具類を見渡している。

「昔、元々生徒会室のあった建物が小火騒ぎで取り壊しになった時に、当時は建設中だった図書館棟の三階へと移転が決定して、火災を逃れた家具類を総て運び込んだのだと聞いています」

「この象牙の間ですが、鍵の管理は皆さまに任せられており、利用内容の如何は問われません」

「それは構いませんが——」

織女の視線がその生徒へと移る。美玲衣も見ているし密もい加減気にしないようにするのは無理だ。

「えっと、どうして刹那さんがすみれさんの説明の補足役をしているのか質問しても構いませんか？」

「そうですね。その前に三人には管理して頂く鍵をお渡しいたします」

刹那は豪華な平箱を棚から取り出すと、それを密達に向けて開く。

中には鍵が入っており、ご丁寧に、金、銀、銅、で作られたプレートが付いている。

それを見た三人が分かりやすく表情を変えた。

「鍵自体はまあけっこうですが…色分けされているのは少し品がないでしょうか」

織女の言葉にすみれが説明する。

「それについては、卒業なさった照星のどなたかがなさったことと思いますので、必要があれば変えて頂いて結構です。説明することでもないとは思いますが、オリンピックのメダルを模して序列が示されています。どの鍵を誰が使うかは皆さままでお決めください」

それに密はチラリと刹那に視線を移す。無表情を貫いている刹那に、密はふと疑問がよぎる。

（序列があつて同格であるのが私達、と説明されましたね…。となると——）

「なるほど。迂闊なルールの変更を施すと、後の世代にバカにされて

しまうということですね」

「確かに、この飾りが良い例証というべきでしょう、しかし——」

密としてはこれを刹那が取り出してきたのが気になる。これだけのことならすみれで事足りるのではないか…。

「つまり『伝統を尊ぶ』のか、『ルールに囚われない』のかを自分たちで決めろ、ということですね。最初から決断をしろということね」  
「基本方針——ということですか。どうですか、密さん」

二人がこちらへと向いた。

「…いずれにせよ、大元になっている原則を利用しましょうか」

一度は固辞した身でいきなりリーダーシップを振るうのもおかしな話だ。ならば、照星にある原則を利用するまで。

「原則…？」

「討論です。私達は話し合うための三人だそうですから」

話し合えばいい。まずは三人の互いの性質を見てみればいいのだ。

「鈴蘭の宮は課題に際し、必ず疑義を提示する役を担う、でしたね」

「そうですね。私はお二人のやることなすことに反対すればいい——  
そう思うと楽な仕事かしら、と思っていましたか…」

「命題は『色分けされた鍵に意義はあるか』といったところでしょうか。否定側は美玲衣さんをお願いするとして——肯定は」

「私が承ります。百合の宮は神性を——つまり理性を司るそうですね  
ら」

「お願いします。では、始めましょうか——」



—刹那 side —

『色分けされた鍵について』討論を始めた密達から離れて、刹那とすみれは状況を眺めていた。

「まあ、この三人なら間違うこともないでしょう」

『伝統に囚われない』ことが正しい、ですか。しかし、刹那お姉さま。だからといって本当にお手伝いに来られずとも良かったのですが…」

「密さんを説得した際に立ちはだかるとも、共に努力するとも応えた私が怠けるのも違うでしょう。それに、私自身、今年の照星にはとても興味が持っています」

「興味、ですか？」

「はい。伝統に疎いからと固辞した『薔薇の宮』。去年までとは別人のように変わっていく『百合の宮』。二人を見て自身も変わろうとある『鈴蘭の宮』。去年・一昨年とは違う、良き照星になるだろうことは目に見えて明らか。そこへ、昨年の照星達から見守るよう仰せつかっている立場を利用したくなるのも、わかるでしょう？」

「楽しそうに笑う刹那にすみれは少し困ったように、討論を続ける三人へと視線を移す。」

「今年は、波乱の一年となりそうですね」

「諦めなさい。私が精力的に動く決めて以上、波乱なのは当然です」

「お姉さまには、自重を覚えていただきたいものですね」

「私が自重、ですか。あり得ませんね」

「二年間、照星に噛みつき続けてきた自分が今さら自重するだなんてあり得ない。」

「そうこうしているうちに三人の話し合いが終わったようだ。結論としては『伝統には囚われない』ということ。」

「それにすみれが過去の照星による試験だったことを説明。本来の役割のアクセサリーを付け直して三人へと渡す。」

「まあ、予想通りですね」

「刹那さんは知っていましたよね？」

「密から小さな文句が出るが、刹那は小さく肩を竦めて返す。」

「では宮さま方。改めまして、私も奉仕会は皆さまを歓迎致します」  
「すみれのあいさつの後、他の奉仕会メンバーが紅茶を入れてそれぞれが自己紹介を行う。」

『副会長 高城本深夕』  
たきもとみゆ

『会計 堀川香苗』  
ほりかわかなえ

『書記 迫水あやめ』  
さこみずあやめ

「それで、刹那さんはどういう立場の方なのですか？」

「密さんは随分と私を気にされますね」

「ええ。見たところ奉仕会の役員という感じではありませんし、かといつてこの部屋へ入室するための鍵は持ち合わせているようで。先ほどの説明に倣うのであれば、この部屋へ入室できるのは奉仕会の役員と照星三人のはず」

「よく覚えていらつしやいますね。感心いたします」

「刹那お姉さまのことなのですが、お姉さまは先代の照星方から鍵を複製して頂いているようで…。基本的には私がお預かりさせて頂いています」

すみれがポケットから取り出したのは先ほど三人に配られたものと同一の鍵。ただし、アクセサリーとして付いているのはなぜかランプのジョーカーが描かれている。

「またオドロオドロしいアクセサリーがついていますね…」

「先代のイタズラのようで。お姉さまは気に入っているとかで替えていないそうです」

「私がジョーカーなのは事実でしょう。去年の目安箱のトップ投書人で奉仕会庶務についていましたから」

「…そうなのですか？」

説明に疑義を挟むのは織女。

「はい。お姉さまは先代の奉仕会庶務です」

「まあ、基本的に何でも屋といった感じでしたし、会長が美海さんでしたから好き勝手やっていましたよ」

「美海さんが先代の奉仕会会長だったんですか。——で、刹那さんの立ち位置はなんでしょうか？」

「ごだわりますね、密さんは。まあ、相談役みたいなものですよ」

苦笑して答える刹那に密は笑顔を浮かべる。それに、密としては美海が学院の事情に精通していることの原因がわかった。それよりも

「すみません。目安箱、というのは？」

質問にはすみれが答えた。

「正確には投書箱ですが…。普段は象牙の塔の入り口前に設置されています。これは奉仕会への様々なリクエストの他に、照星の皆さまへの相談ごとなども受け付けています」

「昨日はこんな感じのものが入っていましたー」

そういつて、あやめが持ってきたのは数枚のレポート用紙と封書。

織女や美玲衣、密はそれぞれに手にとって中身を確認する。

『幽霊が出ます』…？まあ、そろそろ怪談が盛んになる時期ではありますが」

「こちらは友人との交友についての心配事の相談のようですね」

「一部は無記名のようですが」

密の質問に答えるのは深夕。

『忌憚なく意見や要望を募る』というのが前提となっていますので、記名の是非は問うていないのです」

「また、制限も設けられていませんのでこういった信憑性の疑わしい投書や個人的な相談ごともち込まれます」

深夕の説明に香苗が補足する。

「それで、その…こういったものも調査しなくてはなりませんの？」

なにやら美玲衣は少々顔が青い。それには気づかず香苗が答える。

「一応、お言いつけ頂ければ執行部の方人員を割いて調査致しますが…」

「こういった荒唐無稽の案件については無記名の場合とはとりあげられなくとも已む無し——というのが通例でしょうか。先代は刹那お姉さまのおかげで随分と苦労させられておりましたが」

刹那の投書は基本的に記名。よって、刹那への確認に来ては調査させられていたのだ、先代の照星達は。

その話に三人の視線が刹那に向く。しかし、刹那は柔らかい笑みを浮かべながら――

「そう心配することはありませんよ。今年はかき回さなくても何かと起きるでしょうから」

密の転入からわずか2ヶ月たらずでかなりの話題は起きていた。今さら自分が先陣切つても意味がないのは刹那自身がよく理解して

いる。すみれが軽く咳払いを入れる。

「あと、説明が前後しましたが照星の皆さまは各自一名ずつ補佐役を置くことができます。これは投票に関係なく、皆さまの友人関係からお選び頂いて構いません」

「何をする役目なのですか？」

「一応は、名目上は照星の補佐、欠席時の議決権代理などを担うとはされていますが——実質上はこの部屋への入場権のようなものと考えて頂ければ」

「なるほど。友人だからといって、おいそれとこの部屋を訪ねるのは難しいでしょうね」

「登録は後日、ご友人に相談の上で一緒に連れください」

後は——と考えていたすみれに深夕が先んじて説明を始める。

「基本的な業務は私ども奉仕会執行部にお任せ頂きます。また、執行部の活動に疑義がおりの場合はいつでもお声かけを。活動内容は総て、隠すことなく宮さま方に開示いたします。

宮さま方には月曜、そして木曜の放課後についてだけはこちらへ駐在して頂ければと思います。緊急の判断を要するものがない限りは、執行部からの呼集がかかることはないとお考え頂いて構いません」

「なるほど。それなら照星とは——と言いたいところですが、先ほどの投書の話に戻るわけですね」

投書には友人関係の相談ごとなども入っているのであれば、執行部が動くわけにもいかない。

「そうですね。相談ごとには明確な正解がありませんし、なによりこれは照星としての私たちからの答を期待されている」

「正に『生徒たちを照らす星』としての仕事が求められている——ということですか。いささか気の重い話ですね」

「確かに…：自分の悩みですら、簡単には解決のできない身としては」

三者三様に照星への感想が漏れる。

「それでもすがりたい、という対象が照星。選ばれた密さん達が気に病む必要はありません」

「そうですね。前向きに考えるようにしないとやっていけませんね」

刹那の言葉に密は小さくため息をついた。

「本日はこれで説明の方は終わりたいと思います。もし、漏れているところがあれば、それはまた後日改めてということまで」

「わかりました。お手数をおかけしましたね、執行部の皆さん——これから一年間、よろしくお願いいたしますわ」

「こちらこそ、よろしくお願いいたします」

織女の言葉に役員達が席を立ち、それぞれに頭を下げる。

「刹那さんも、よろしくお願いいたしますね」

「ええ。お互いに良き一年間にいたしましょう」

刹那にだけ織女が改めて声をかける。それに刹那は令嬢のようにスカートをつまんで優雅なお辞儀を返した。



## 第12話 イタズラ好きな二人

—密side—

外はすっかり夕暮れに染まって、校舎がその大きな影を校庭に落としている。

「そうですね」

夕暮れを見ていてふと、さっきの投書のことを思い出した。その様子に織女が首を傾げる。

「どうかしたのですか、密さん」

「いえ。そろそろ先ほど読んだ幽霊の出る時間帯かと思ひまして…。今から見に行けば何かわかるかしらと」

場所は部室棟の音楽室という話だったし、そんなに遠くはない。今から行ってもそんなに遅くはならないだろう。

「えっ…?」

密の言葉を聞いて、織女と美玲衣は驚いたように密を見る。

「い、行くの…ですか」

「今から…ですか?」

「え?ええ。そうすれば、懸案もひとつ片付いてちよほど良いかなと思ったのですが…」

「ふむ。面白そうですね。密さん、私もついていきますがいいですか?」

刹那は楽しそうに笑っている。

「ええ。構いませんよ」

「そ、そうですね。私は、もう遅いですから帰らせて頂きますわ」

織女の声は少し上擦っているような感じだが、密はそんなことに気づかない。

「あ、はい。刹那さんも手伝ってくださいるようですし、一緒に帰れなくて申し訳ありません」

「いえ、そんな…ではあの、お任せしますね」

「ええ。大丈夫です。ご機嫌よう、織女さん」

「はい…では、ご機嫌よう」

織女は申し訳なさそうに帰っていった。密は首を傾げている。話が聞こえていたのか、帰り支度をしていたすみれが近づいてきた。

「薔薇の宮さま自ら出向かれるのですか？ご指示頂ければ私どもで調査致しますが」

「いえ、これは私が…だって、すみれさんだって馬鹿馬鹿しいとは思って、どうでしょう？」

「それは…まあ、はい。そうですね」

少し頬を赤くして答えるすみれ。

「美玲衣さんもよければどうでしょう？薔薇の宮一人と私では口裏合わせできたりと悪巧みできてしまいますが」

「またそういう…。——わかりました。私も行きましょう」

「美玲衣さん。別に二人もいれば大丈夫ですよ」

密の返事に美玲衣は小さく首を左右に振る。

「いいえ。さすがに刹那さんと密さんが不正を行うとは思いませんが、私も特に急ぎの用事などはありませんし…。まあ、もし本当に不正をされても困りますので」

「美玲衣さん…」

そう言う美玲衣の頬はほんのりと紅い。疑ってはいないが、疑っていることにした方が美玲衣としてはありがたいからそうしたい、といった感じだ。

「わかりました。それでは美玲衣さんも同行のほう、お願いいたします」

「はい、はい。そういうことでしたらあやめも一緒に行きたいですわ！」

「ふむ。奉仕会から役員一名がついてきていただけるのもありがたいでしょう。すみれ会長、あやめをお借りしても？」

「本人が行きたいと言っていますからお願いたします。刹那お姉さまもいますからハメを外したりはしないでしょ？」

「わかりました、監督役を務めましょう。よろしいですね、薔薇の宮」「刹那さん。密、でけっこうですよ」

「ふふっ。では、行きましようか」

そうして四人は象牙の間から出ると部室棟へと移動する。

「そういうえば、音楽室は鍵はかかっていますでしょうか？」

「それもそうでした。では、あやめが職員室より借りてまいりますわ！」

元気な返事とともにあやめが廊下を走り出す、が――

「あやめさん、廊下は走らずにお願いしますね？」

「――つとと。わ、わかっておりますわ……」

急ブレーキをかけて止まったあやめが静かに急ぎ足で歩いていく。その背中を眺めて、刹那は小さく息をついた。

「まったく……。淑やかさとはあやめは無縁なのででしょうか……」

「それにしても刹那さん。ずいぶんとお腹から響く声が出ましたね」

「そう、ですかね？」

「ええ。思わず背筋が冷えました……」

肩を竦める密に腕を組んでやや腰の引けている美玲衣。別段、驚かせるつもりは刹那にはなかったのだが、声が底冷えしていたようだ。

「まあ、怒っているつもりはありません。怒りを乗せる方法を知っているだけですから」

これくらいなら練習すれば誰にでもできること。必要だったから身につけたスキルでしかない。

「女性の声で男性に勝つにはいろいろと必要なスキルでもあるのですよ。痴漢などはこの声で圧すればそれだけで制圧できる時もあります」

「なかなか過激な発言ですね」

「あら。密さんや美玲衣さんなら痴漢にあつてしまうのでは？」

「無いことはないですが……」

「私はノーコメントで……」

密としてはコメントしがたい。ただ、確かにこの姿で公共の機関を使えば痴漢にあうかもしれない。

「まあ、こういった技術は使う機会を持たないかぎりは覚えるようなものでもありませんし」

「つまり、刹那さんにはそういう技術を学ぶ機会があったということですか？」

「ええ。お話はできませんが」

しばらくするとあやめも戻ってきた。音楽室へと向かって歩いていく最中、だんだんと日が暮れてきた。

「ふむ。逢魔が時とはよく言いますが、こうなってくると怪談物が映えますね」

「刹那さんは怪談物は…」

「気にしない人間です。むしろ、好んで他人に語る人間です」

「怪談物といえば、学校とかですとよく七不思議という怪談話が有名ですが、あれはなぜなんでしょうか？」

あやめの言葉に刹那と密の視線が一瞬、交錯する。小さく笑う二人。

「そうですね…。諸説ありますが一番よく語られるのは学校を建設するにあたっては広大な土地が必要になる、ということが要因になりまですね」

「えっと、広大な土地が必要なのは当然ですが、なぜそれが要因になるのですか？」

「明治に入る頃にあった廃仏棄釈のことですよ、刹那さん」

「ええ、密さん。まあ、あとは広大な土地をサクツと手に入れる簡単な方法としては元墓地の土地は比較的安価で手に入るという背景が関係したりしていますね」

「簡単にまとめると廃仏棄釈によって寺院等が取り潰されたり墓地が埋め立てられた土地はその由来から他の平野部などと比べると安価で手に入る土地だったのです」

「当然ながらそんな土地に学校を建てようというのですから地鎮祭なども行われていないことなども重なって、晴れてそういう土地に出来上がった学校はそういった不可思議なことが蔓延する場所になってしまった——というのがですね——」

「——っ、きやああああ…！」

楽しそうに笑って話す刹那と密の話の聞いていた美玲衣が悲鳴を

あげて座りこんでしまった。

座りこんで、耳を手で塞いで背中を震わせている。

「あの、美玲衣お姉さまは怖い話が苦手、なのですか？」

「う、ううううう……！」

「く、くくっ、くくく……！」

あやめに凶星をつかれたからか、うめき声を漏らしながら震える美玲衣と、それを見てお腹を抱えて笑う刹那。

「刹那さん。わかってて話を合わせましたよね？」

「くくく……。いや、申し訳ありません。しかし、密さんも平然と乗ってきましたよね」

「ええ、まあ。面白そうでしたから」

「お二人とも、意地の悪い笑みが浮かんでいますわね……」

「ふふっ。申し訳ありませんでした、美玲衣さん」

縮こまって震える美玲衣に密が手を差し伸べる。若干涙目の美玲衣はおずおずと密の手を握ると立ち上がる。

ようやく笑いの波が落ち着いたのか、笑いすぎで目尻に涙をためた刹那が近づいてきた。

「いや、申し訳なかったです。怪談話云々と言った時に美玲衣さんの顔が強張って見えたから、密さんに話を合わせていただきました」

「……意地が悪いですよ、二人とも……」

「申し訳ありませんでした」

二人が謝って、三人は顔を見合わせて小さく笑った。

その様子をあやめは楽しそうに笑って見ていた。

## 第13話 怪談の正体

音楽室に到着する少し手前から、それは響いてきていた。

「これは、楽器の音でしょうか？」

「——ですね。誰かが使っているのでしょうか？」

「で、ですが、音楽室の電気は消えているようですけど…」

「か、鍵もここにありませんよ…？」

「あの、二人とも。両腕にしがみつかれると歩きづらいのですが…」

音楽室の方向から何かの楽器の音が響いている。怖がりの美玲衣とここまで来てまさか投稿通りに聞こえてきている事態に腰が引けたあやめの二人が密の腕をそれぞれにしがみついている。

怖いのはわからなくはないが歩きづらくて困る。

「しかし、確かに音楽室の灯りは消えていますね。なのに聞こえてくる楽器の音。怪談話もあながち嘘ではなかったということでしょうか？」

念のために扉を動かそうと試みるが、やはりというか鍵がかかっている。

「とりあえず、開けてみますか？」

「そうですね。これで誰もいなければめでたく怪談話の完成なわけですし」

「せ、刹那さんはどうしてそんなに楽しそうなんですか…？」

「私は不可思議なことが大好きな人間ですから。幽霊がいるのなら会ってみたいですし、UMAが存在するなら是非とも捕獲してみたいという人間ですので」

楽しそうに笑ってあやめから鍵を借りる。鍵を開けて音楽室に入ると、音も止まる。しかし、暗闇の中に誰かいる。

「密さん、電気をお願いします」

「はい」

電気をつけるとそこには——

「あれえ、どうしたの、刹那さん、密さん」

「おや、茉理。なぜ貴女がここに…」

「茉理さん？」

灯りのついた音楽室に佇んでいたのはヴァイオリンを構えた茉理だった。

「いやあ、そんな話になってたんだねえ」

茉理から説明された内容としてはすごく単純なことだった。どうやら音楽室の担当教師もグルで、放課後のこの第二音楽室を茉理のりハビリ用に貸していたらしい。

しかし、勝手に使っているのも事実なのでできるだけ人には見つからないように電気を消して演奏していたらしい。

「当然、こういった時期になれば話題としてあがるようになりますね。『放課後に聞こえてくる音楽室からの謎の音』という怪談話に……」

「あはは……。ごめんね、そこまでは考えてなかったよ」

「しかし、そうであるなら教師も奉仕会に連絡ぐらいはしておくべきなのでは？」

「さすがにそれはちよつと……。吹奏楽部などからは『練習時間をもつと確保したい』という要望も出ていますの。この状況で茉理お姉さまの練習時間を容認しては他の部活の方々に怒られてしまいますわ」

現在はコーラス部と吹奏楽部が時間を分けけしながらお互いに気兼ねしつつ使っている。ここに部活に所属していない茉理がりハビリのために練習時間が欲しいといつても、許可は下りない。

だからといって無許可で行われるのも問題ではある。

「さて、密さん。どういたしましょうか？」

「そうですね……。今のまま、茉理さんに音楽室を使っていたかくわけにも参りませんし……」

一人、黙考していた美玲衣はあやめへと目を向ける。

「あやめさん、いくつか確認したいことがあります」

「は、はい。なんですか、美玲衣お姉さま」

「象牙の間は防音に優れているとの説明がありました。具体的な例とかありますか？」

「そう、ですね。何代か前の照星の方で象牙の間で演奏会を開いたりしていたというのは聞いたことがありますから、それなりの防音性は

あると思います」

「なるほど。であれば——」

美玲衣は茉理の方へと向く。

「茉理さん。貴女に一つ、提案があります」

「私に？」

「はい。照星には一人、補佐役を選ぶことができます。そこで、茉理さんに私の補佐役となってもらい、ヴァイオリンの練習は象牙の間で行ってもらおう、というのはどうでしょうか？」

「えっと、補佐役って、なに？」

「茉理、私から説明しましょう」

刹那が茉理に照星に関することを簡単に説明する。

「へえー。じゃあ、密さんと美玲衣さんは照星で、照星には補佐役が一人付けられて、補佐役はその象牙の間？って部屋に入れるからそこで練習したらいいってこと？」

「ええ。そうなります」

「だけどー、その補佐役って私でも大丈夫かなあ…？私、美玲衣さんと会ったの、今が初めてだと思っただけど…」

「私は構いません。茉理さんが気にしないというなら、補佐役をお願いしたいと思います」

「うーん、でもなあ〜」

「茉理としては何か不都合があるのですか？」

「そうじゃないよ。そうじゃないんだけど…」

ウンウン唸って悩む茉理に、刹那はなんとなく悩む理由がわかった気がした。

「…友人でもない赤の他人の自分を補佐役に置いてまで象牙の間を使わせたい理由が美玲衣の方には無いから、悩んでいる感じですかね？」

「——っ！そう。そうなんだよっ！」

茉理は刹那の説明にウンウンと頭を縦に振っている。その様子に美玲衣は少し考えて——

「そうですね…。理由は、いくつかありますがどうやらこの場におい



ては私と茉理さんは知り合いではないようですから、これから親しくなるためにも近くに置いてみたい、友達になりたいというのはいかがでしょうか？」

「とも、だちに…?」

「嫌、ですか?」

「ううん!全然、嫌じゃないよ!」

「はい。では、今日から友達ということだ」

「うん!よろしくね、美玲衣さん」

美玲衣の手を楽しそうに掴んで振る茉理に刹那と密は優しい笑みを浮かべていた。

そんな二人に気づいたのか、美玲衣は頬を薄く朱に染めて睨む。

「なんですか、その顔は」

「いえいえ。微笑ましい光景だな、と思ひまして」

「そうですね。美玲衣さんは優しい人ですから」

「…いいですよ、もう…」

拗ねた様子で二人から視線を外した美玲衣に、刹那と密は忍び笑う。



—刹那 side—

「それでは、私は二人を駅前まで送ってきます」

幽霊騒動にも決着が着いたということとで時間も遅くなりつつあり、刹那は美玲衣と茉理を駅まで送り届けるべく、街を歩いていた。

「しかし、茉理もおかしな騒動を起こすものですね」

「まさかそんな噂になっているなんて思わなかったんだよ」

「少し考えてみればわかることでしょう。放課後、開いていない暗い音楽室から毎日のようにヴァイオリンの音が響いてくるなど、ホラー以外の何物だと言うのですか」

「それはまあ、そうなんだけどさ…」

「しかし、刹那さんは茉理さんとはずいぶんと仲がよろしいようです

けど…」

「私と茉理は、少々特殊な存在といえますからね」

刹那が話すのは茉理のヴァイオリンの腕前と刹那がこの学院に来てから起こしたことの数々。

『提琴の君』として入学当初から有名人だった茉理は比較的人の少ないところを好むようになったようで。私はいえ、入学当初から様々な逸話がつくほどの立ち回りをしていたためか、周りの方々には怖れられていたようですから…周りにはあまり人が寄りつかなかったのですよ」

「ああ、なるほど…」

有名人として嫌がった茉理と逸話を築き続ける刹那。

偶然にも二人の中で利害が一致したのだ。

「刹那さんの近くにいると人は集まってこないから、人避け代わりによく隣にいてもらってたの」

「代わりにとってはなんです、茉理には私の話し相手になっていただいています。まあ、そうなるのは必然的に友好は深まるものですよ」

奇妙な出会いはすぐに友好へと変わり、長く付き合う内にお互い遠慮がなくなった。

「気がついてみれば三年近くも楽しい親友という感じになりました」

「刹那さんという話題に事欠かないからね」

二人の様子に美玲衣は理解する。この二人は根本ではおそらく、似た者同士なのだ。

「でも、美玲衣さんも良かったの？私みたいなのをその、照星としての補佐役に…」

「ええ。私にもいろいろとありますから」

「取り巻き連中では薔薇の宮や百合の宮との衝突は必至。集まる度に諫めるのは諫める側も面倒になりますものね」

「刹那さん…。気がついていたんですか…？」

「ええ、薄々は。まあ、美玲衣は優しいですから茉理の練習場所を確保してあげたいというのも本音だとはわかっていますが」

「…かないませんね、刹那さんには…」

両手をあげて敗北宣言する美玲衣に茉理は嬉しそうに微笑んでい  
る。

「しかし、これで茉理の演奏は象牙の間に連れていけば聴き放題です  
か。嬉しい誤算もあったものです」

「あの、刹那さん。私の演奏、綺麗じゃないよ？」

「知っていますよ。知っていて言っています。茉理の演奏は好きなん  
ですよ、私」

茉理はその病気の関係でまともな演奏は出来ない。でも、刹那にそ  
んな些細なことは関係ない。

「友人の演奏は何度聴いても良いものなのですから」

「そう言われると、私も気になってきますね。茉理さん、今度演奏お願  
いしますね」

「もう、美玲衣さんまで悪のりしてきたよ」

アハハ…と楽しそうに笑う三人は駅に着くまでいろいろな話  
に花を咲かせていた。

## 第14話 水泳の授業

—密side—

茉理による幽霊騒動から日も過ぎて、気温は上がり夏の様相へと移り変わる中で、その問題は静かに近づいてきていた。

寮での夕食も終わり、皆思い思いの場所で寛ぐ中——

「そういうえば、密さん。もうすぐ水泳が始まる頃になりましたが、水着は持っているの?」

「えっ…? ええ、と…」

密の目が鏡子へと向き、驚いた顔を見て。今更ながらに問題が発覚したことを実感した。

密の部屋の中、頭を抱える密と苦笑いをしている鏡子が向かい合っていた。

「いや、水泳の授業のことをすっかり忘れていました。最近は照星選挙やら補佐役の話やらで忙しくしていたので…」

「どうするんですか…?」

まさか出ると言われるのだろうか、と。密としては内心穏やかではない。

「まあ、順当に考えるのであれば授業を休むことが一番ですね」

「やっぱり、そうですね」

「ですが、問題は『何を理由に休む』のか、ということでしょうか?」

「えっと、風邪を引いた…では?」

「教師には通そうと思えばそれでもいけますが、刹那さんを説得できる自信はおありですか?」

「…」

確かに教師はなんとかなくても刹那という存在がいたことを密は失念していた。彼女はさすがに話を合わせてはくれないだろう。

「…何かありますか、鏡子さん」

「…——り」

「はい…?」

小さな声で言われたのでうまく聞こえなかった。

「えっと、鏡子さん。なんと言いました？」

「生理、でしようか。生理なら女性が水泳を休む理由としては妥当なところでしようし」

「あの…、鏡子さん。そうは言いますが生理って確か月ごとのものでは？私、2ヶ月間、そんな素振り見せたことなかったんですが…」

そもそも『生理』については密も一応知識としてはわかっている。しかし、実際にそんな理由で休めるのか。

「さすがに一回目の時はプールサイドまでは行かないといけません。しかし、そこまで来てから生理が始まったことにしてしまえば問題ありません。そもそも、生理は基本的には1ヶ月ごとと言われていますが、様々な要因で簡単にずれてしまうものなのです」

「はあ、なるほど…」

「とりあえず、最初の一回目だけは水着を着てもらわなければならない。なんとか、それを切り抜けてしまえば、後はどうとでもなるはずですよ」

それでも、密としては水着を着たいとは思えなかった。気が滅入ってくるようで、当日までは考えないようにするべきだろうか…。



——数日後。

昼休みも終わって、密は更衣室から少し離れた場所でクラスメイト達の着替えが終わるのを待っていた。

(なんとか着替えて、プールサイドまでは行く。そこで下腹部を押さえて調子を崩したふりをして今日のところは見学。あとで生理が始まったことを教師に伝えて——)

頭の中でこのあとの段取りを反復する。

(…うまくいけばいいんですけど)

そして、鏡子から更衣室に人が居なくなったことを知らせるメールが入る。密は急いで着替えを始めた。

☆

——刹那 side ——

刹那は走っていた。昼休みに入り、作ってきた弁当を取り出そうとして、そこで鞆に入っていないければいけないものが見当たらないことに気がついた。

(しまった……。水着を寮に忘れてきている——！)

まだ昼休みは始まったばかり。昼休み明けの授業が水泳なので、今から急いで食事を済ませて寮に走れば着替える時間を確保できる。

今日は軽食系にしていた弁当を急いでたらいらげ、刹那は寮へと駆けていった。

——時々、腕時計に視線を移しては刹那は更衣室目指して走っていた。

(くっ……。急いで着替えても時間はギリギリでしょうか……。とはいっても、ここまで頑張ったのですからなんとしても間に合ってみせなくては——！)

更衣室に到着すると勢いよく扉を開ける。中に入って、他に誰かいることを確認——

「——えっ……？」

そこにいたのは、密だった。ただし、本来は『無い』はずのものが刹那の目には見えている。

「……」

「……」

お互いに何も言い出せない。静かに過ぎる時間の中で、刹那はとりあえず近くのロッカーまで行って着替える。

それをただ呆然と見ていた密の前で刹那はロッカーの扉を閉める。

「密さん。今日の夜、お話があります。夕食後、部屋にきてください」  
ただそれだけを告げて刹那は更衣室を後にした。

☆

—密side—

着替え終わってプールサイドまで来た密。それを見つけたクラスメイト達が集まってきて口々に何か言っている。

しかし、密にはすでにそれを聞き分けられるほどの余裕はなく、その様子に円がいち早く気がついた。

「あの、密さん。大丈夫ですか…」

「えっと、…何がでしょうか？」

円が気がついたことで他のクラスメイト達も密の様子に気がついたのだろう。

「だって密さん。血の気が失せてて真っ青通り越して土気色ですよ」

「あの、今日の水泳は辞退した方がいいと思います」

「密さん、無理はなさらない方が…」

集まってきたクラスメイト達が不安そうにしている。その様子に遠巻きに見ていた鏡子も近づいてきた。

「密さん。私から見ても今の貴女がプールに入るのは危険だと思います。というか、本当に大丈夫ですか？」

ここまで言われてしまっただけでも無理はできない。そもそもプールサイドまで来て、あとは生理ということにして見学する予定だったのだから。

——というより、今の自分はそれほど酷い顔をしているのだろうか。

クラスメイトの一人が教師に密の様子を伝えたのか見に来ていた。

「すごい顔色してるわね…。密さん、体調が優れないようなら今日は休みなさい。無理をして溺れでもすれば大変よ」

「…わかりました。休みます」

「そうしなさい。——はい、他の子は準備運動を始めるわよ！」

プールサイドへと下がっていくと制服姿で座っている茉理が見えた。その茉理も眉を八の字にしてこちらを見ている。

「密さん、大丈夫？無理はしない方がいいよ」

「ありがとうございます。あの、私…そんなに酷い顔をしていますか…？」

「うーん…。少なくともプールに入っている人の血色じゃないと思うよ」

茉理に言われるぐらいなのだから相当に酷い顔をしているようだ。

二人並んでプールを眺めていると一際大きな歓声が響く。視線を上げるとそれはいた。

一人だけ別格がいる。他の生徒を置いてきぼりに刹那は様々な泳法でスポーツ選手かと思えるほどに泳いでいる。

「凄いねえ、刹那さん」

「ええ、本当に」

「あの人はこの学院の異端児だからね。にしても、密お姉さまの泳いでいる写真を撮りにきたのにお休みかあ…」

二人以外は休みは居ないはず。二人が視線をやや上に向けた先には何故か天井からスリング降下している千歳がいた。

「えっと、何をしているんですか…千歳さん？」

「うん？刹那お姉さまや密お姉さまの隠し撮り写真はけっこう良い値段で取引されてるみたいだから小金稼ぎに泳いでいる写真でも撮ろうかと思ひまして」

「はあ…。それでなぜ、スリング降下で空中に宙吊り状態で？」

「いくら私の影が薄いといっても生徒の固まっているところから入ってきたらバレてしまいます。ですから、絶対に目線の行かないところから降りてきました」

「授業は？」

「静かに抜けた私に気づける教師がいればいいんですが。とはいっても、密お姉さまや茉理お姉さまに気づかれたままでは他の方々にも気づかれるのも時間の問題ですね。そろそろお暇いたします」

スルスルと天井へと上がっていき千歳の姿は見えなくなつた。

「なんといえはいいいんでしょうか。二つ名は通りのいい名前がついているとは聞いていますがあそこまで『忍者』という二つ名がぴったりの方も珍しいんでしょうね」

「そうだねえ。密さん、一応伝える？」

「…止めておきましょう。先ほどの千歳さんの話を聞くかぎり、今回



が初めてという感じではなさそうです」

「何度もやっているのなら教室から脱け出していることは気づかれています。であれば、見たといっても信用してもらえるかは五分といったところだ。」

二人は見なかつたことにして水泳の見学へと意識を戻した。

## 第15話 知りたがり

—鏡子 side—

放課後。授業も滞りなく終わり、密さんの様子は水泳の授業の時から回復する様子もなく、すぐに寮へと帰っていった。

（何かあったのでしょうか…。少なくとも昼休みまでは問題なさそうに思いましたが…）

それともああなるほどに女性物の水着を着ることが嫌だったのでしょうか。

（制服を着ている時点で今更な気がしますが…）

その感性までは鏡子としてもわからない。きっと密さんの中では何か違うのだろう。

「しかし、そうなるとうとうしまししょうか。今日は密さんを連れて買い物でも行ければ、と考えていたのですが…」

「おやおや。鏡の君が一人とは珍しいですね」

「——っ！」

不意に聞こえた声に周囲を見渡す。しかし、姿はない。

「こちらです。気がつかないものですね」

再び聞こえた声の方を向く。何故か窓枠に腰かけた千歳がいた。

「…いつからそこにいましたか？」

「実は密お姉さまが帰っていく頃にはすでに座っていました。皆さん、人のこと無視し過ぎですよ」

肩を竦める後輩に鏡子は半眼で見つめていた。

——薄氷千歳<sup>うすらいちとせ</sup>。彼女のことは鏡子自身もよく知っている生徒ではある。

『新聞部の良心』『存在しない生徒』『見えざる少女』——いくつもの呼び名を持っていて、中でも自分に『鏡の君』なんていう二つ名がついているように彼女もそのあり方から『忍者』などと呼ばれている。

どこにでも現れる彼女を見つけられる生徒は噂を聞くかぎりは新聞部の部長と刹那さんぐらいだという話だ。

（この子はよくわからないところが多いんですね。『薄氷』という家

系も特に何かあるような家系ではありませんでしたし)

あえて挙げるなら風早とは違う分野で発展している一族といったくらいのものだろうか。

「それで、私に用があるということですが…」

「うーん。正確には密お姉さまにも関係しているのですけれど…。まあ、今日は鏡子お姉さまだけでいいでしょう」

(私と密さんについて…?)

「単刀直入にお伺いいたします。御二人は風早グループ次期総帥たる風早織女の護衛のために学院に潜入している、いわゆるエージェンटना人達で間違いないですか」

「…何のことですか?」

ほんの一瞬、鏡子自身答えに詰まった。一般に漏れるような情報ではなく、また鏡子と密を名指しできるほどの情報をどうやって手に入れたのか。

「ふむ。では、高宮睦月先生はどうかでしょうか。あの方、なかなか溶け込むのは上手いですが男性ですよね」

(バレている…?)

千歳は常に断定した話し方だ。疑問ではなく、もはや到達した情報を本人達に確認しに来ているといった様子。

「ほう。なかなか面白い話をしているな」

「——っ」

二人が教室の扉へと視線を向けた。そこには高宮睦月その人が立っていた。

「積もる話があるようだが、とりあえず場所を移してはもらえないか?ここだといろいろとまずくてね」

「…ええ。構いませんよ。私は確認できればどこでもかまわないので」

睦月先生を先頭に教室から出ると普段から使われている準備室の方へと入る。イスに座る千歳に背を向けてお茶を入れる睦月は落ち着いていた。

「緑茶でいいかい?」

「ええ。ありがとうございます」

鏡子は睦月と並ぶように座る。

「さて。君はどこまで知っているんだい？」

「鏡子お姉さまと密お姉さまがボディガードで睦月先生はそのバックアップ。学院は風早グループがこつそりと後片付けができるように整えている、ぐらいでしょうか」

千歳の語る話は密さんのことを除けばほぼ全てだった。だからこそわからない。

なぜ、この相手はこれほどまでに詳しいのか。

お茶を飲んでいた睦月は肩を竦めるしかなかった。

「驚いたよ。ほとんど全てを看破している生徒がいるなんてね。ついでに聞いておきたいことだけだ。私が『男』だとバレた理由は？」

「日常生活における本人の中にある通常動作とのズレが見えていたから、と言っておきましょうか」

「は？」

「どういうことですか？」

千歳の説明としては――

高宮睦月の普段の生活における所作と教師としての所作にわずかなズレがあり、これを修正するために本人にも無意識に近い無理な動作が見えていたから、だそうだ。

説明をうけても意味がわからなかった。

「そうですか。でしたら、刹那お姉さまをよく観察するとよくわかりますよ。あの人は常に全ての動作を管理していますから、並の人間にはできていないことができる方です」

「ふむ。まあ、その辺りのことは気にしないことにしよう。それで、君はこのことを知ってどうするつもりだい？」

千歳はここに入った時から変わらず落ち着いていた。

「特には。私は昔から知りたがりの性で調査しただけであって、知りえた情報は使い道など決めていません。今回のことをセラーズ新聞に掲載したところでゴシップ記事にしかありませんし」

「ただ知りたいだけで風早グループを調べたってことですか？」

「ええ。真実にたどり着けたとわかればそれ以上は何もありません」  
こちらの前で一つのメモ帳のページをむしっていく。どうやら今回知りえた情報はそこに載っているようだ。

「そうか。秘密を共有してくれる、ということでもいいのかな？」

「そうですね。睦月先生としてもその方が安心できますか？」

「そうだね。とはいえ、監視はさせてもらう。悪く思わないでくれ」  
「いいですよ。できるものなら」

不敵に笑う千歳に睦月はただ笑って返した。

準備室から出ると、千歳の隣を鏡子は歩いていった。

「しかし、本当にどうやって調べたのですか？」

「そう難しいことでもないでしょう。おそらくですけど、刹那お姉さまも皆さんのことは知っていると思いますよ。あれでも『天形SP』の一人娘ですから」

それは鏡子も知っている。世界最高峰のシークレットサービスとして名を馳せている『天形SP』の跡取り娘こと天形刹那。

この学院では何故か『雨水刹那』という偽名を使っているようではあるが、業界によつては畏怖すらされているところの跡取りともなれば周りが萎縮しかねないという配慮だと鏡子は思っている。

「あと、ウチは別に普通の大企業ですから私のことを調べても特に何も出ませんよ。知りたがりなのは私くらいです」

「それはそれは。それですが、今後はつけるかぎりは私が貴女の監視につきます。迂闊なことをされて織女さんにバレては本末転倒ですから」

「かまいませんけど、鏡子お姉さまが大変では？」

「…あきらめました、いろいろと。そういうわけですからできるものなら私の近くにいてくださるとありがたいのですが…」

「それは…、難しいですね。学年も違いますし、新聞部の仕事もありますから」

「はあ…。なんでこう、余計な仕事次々と増えるのでしょうか」

「現場の仕事なんてそんなものですよ」

したり顔で言う元凶の頬はつねっておきました。

## 第16話 お互いのこと

—刹那side—

寮に帰ってから自室で気持ちを落ち着かせるように黙々と読書を続けていた。

すみれが夕食だと呼びにきて、リビングへと下りて、夕食を取る間も誰と話すでもなく、黙々と食べ進める。

それからまた自室で読書の続き。正直なところ、内容は頭には入っていない。

「どれだけ時間が過ぎたのか、控えめなノックが部屋に響いた。

「入って構いませんよ」

本を閉じる。開いた扉からは幾分か落ち着いたのか血の気が戻った密が入ってきた。静かに立ち上がると、近くに置いていたイスに座るようすすめ、部屋に置いてあるティーポットの準備を始める。

「お茶ができ、それを渡して自身もイスに座る。」

「——さて、それでは説明を願いますようか、密さん」

「…はい」

そうして、私は私が見たものについての説明を受けた。時間にして一時間ほどだろうか。

説明を終え、お茶を飲んで一息ついた密は——

「以上が、僕がここに通うことになった経緯です」

『結城密』という男性の真実を語り終えた。

「——なるほど。ですが、そうであるならなおのことわかりませんね。なぜ、貴方が必要なのか。正直なところ、鏡子だけでも十分な気はしますが」

「その辺りのことは…すみません。僕自身、こうなるなんて思っていなかったもので…」

「なるほど」

ボディーガードの一人として結城密を派遣した。しかも丁寧に女装までさせて。

しかし、肝心のものが聞けていない気はしないでもないが、現風早

総帥本人でもなければわからないこともある。これ以上の詳しい話は聞けそうにはないだろう。

——まあ、女装云々の話でいえば私としては二人目だから気にするだけ無駄な気もするが…。

「さて。私が取れる道はいくつかあるのですが」  
「・・・」

意味深に指を複数本立ててみるも密はただ俯いている。様子としては死刑宣告を待つ被告人に近い。

「まず、私としては密さんをお願いします」  
「——えっ?」

こちらの言葉がさすがに不思議だったのか、上がった顔は呆けたように口が開いている。

「それでも私は貴方を照星に推した経緯もあります。今更貴方が『男性』だっただけでその地位から追い出すわけにもいきません」

「いや。それは、どうなんですか?」

「また、貴方を断罪する場合、風早織女さんに貴方のことがバレますが私とて必要以上に断罪されてほしいとは思っていません。バレた場合、確実に追い打ちが入るでしょうし」

再び俯いてしまった密に、刹那は少し思う。

確かに知った当初は身体の芯が冷えるほどの怒りを抱いたものではあるが、時間を開けて『密という人物像』を改めて見直した時に感じたのは、怒りを抱いた理由とはまるで違うものだった。

では、なぜあれほどに怒りを抱いたのか。そこに意識を向けてみると、自分はひどく子どもじみた気持ちを抱いていたことに気が付いた。

「私はね、密さん。貴方を断罪しないと決めている理由として、貴女がこの学院を良くする一因になると考えているから、とも思っています」

「僕が、ですか…」

「こういう言い方をすると貴方が傷つくとは思いますが、春先から約3ヶ月…誰も貴方を男性だと疑いませんでした。もちろん、私もそう

です」

『アレ』を見たから男だとわかったわけで。刹那自身『アレ』を見なければ未だに密を女性として扱っていただろうことはよく理解している。

そして、この返事に前にいる密がひどく落ち込んでいる。

「あの、僕はそんなに男には見えませんか…」

「どちらかといえばしつかりと必要なことをすれば女性にしか見えな  
いというべきでしょうね。実際、化粧とかもしてはいるのでし  
ょう？」

「してまずけど…」

「まあ、そうですね。極端な例になります。私達は貴方のような男性  
に女性として負けていることになります。そんなの、悔しいじゃない  
ですか」

「そのために、ここにいろ、と？」

「ええ。あとは、身体能力的に私と対等に立てる人は少ないので、そ  
ういふ方面でも密さんに居なくなつては困ると思つてはいます」

実際にここまで身体を鍛え上げている女性などアスリート選  
手でもなければないぐらいには刹那も鍛えている。

そんな刹那相手では並の高校生男子ではついてこれない。ボ  
ディーガードとして鍛えている密だからこそ、とも言えるのだ。

「そういういろいろな要因があるので私としては今すぐに密さんをど  
うこうする気持ちはありません」

「そう、ですか」

安心できたのか、密から力の抜けたため息が漏れる。今日一日は  
気がではなかったのだと容易に想像がつく。

ふと時計を見上げると夜も更けてきていた。

「さて、それでは密さん」

「——っ？はい」

「お風呂に行きましようか」





刹那が湯船につかる隣で、密は顔が真っ赤になりながらも入っていた。

「あの、刹那さん。私は『男性』なんですが…?」

「ええ、わかっています。しかし、お風呂も入らずに寝るのは『淑女』としては如何なものかと」

「そうじゃなくてですね…。恥ずかしくないんですか」

「なにをいませら。何度、湯を共に入っていると思っっているのですか?」

「そ、それは——」

「なんだかんだと密との話は基本的にここ、湯船ですることがほとんどだったのだ。今さら密が『男性』だからといって刹那が恥ずかしが理由がわからない。」

「いや、その理屈はおかしくないですか」

「おかしくありませんよ。それに、私は半陰陽の関係で他の人とは少々歪んでいるので余計に気になりません」

「半陰陽?」

「おや。ご存知ありませんでした?」

頷く密に、刹那は説明する。

——『半陰陽』とは。

生まれながらに染色体——特に雌雄を決める染色体に異常が生じることによって性別があやふやな状態の子が生まれることがある。

「——私は性別としては『女性』ですし、ちゃんと子宮などの女性の器官も有しています。しかし、ホルモンバランスは著しく異常な数値を示しており、骨格・筋肉等は男性に極めて近く、しかし成長度合いは女性に寄っているなどの弊害を生んでいて結果として『成人男性クラスの出力を有した肉体を持った女性』というアスリート選手顔負けの身体が手に入りました」

また、このホルモンバランスの異常によって胸は大きくならなかったのは刹那としては少し悲しいところなのは内緒だ。

「なんといいですか…。すごい人だったんですね」

「まあ、半陰陽は出生率としては生まれ落ちる可能性は他の異常よりは格段に高いと言われています。むろん、生まれてから性別に関して悩む方々がいることは知っていますが、幸いにも私は『女性らしさ』の方が少し高かったので悩む必要はありませんでしたが」

胸は大きくならなかったが。大事なことだから二回言う。

そんな刹那の視線は密の胸元に注がれていた。

「だから、その胸が羨ましく思っていました」

「えっと…。任務が終わってから貸しました」

「いえ。今は偽乳だとわかった以上は羨ましい気持ちは落ち着きました。まあ、そんな複雑怪奇な身体をしている関係で私は並の人間よりは性欲とやらは抑制されているようなのです」

「直球ですね」

「密さんには隠すようなものではなさそうなので」

二人してゆったりとつかる。

「刹那さん」

「なんででしょうか」

「今後は力添えしていただくわけにはいきませんか？」

「元よりそのつもりです。ですが、照星たる薔薇の宮には手は抜きませんよ？」

「はい。わかっています」

「ならば、いいです。当面は水泳の授業でしょうか」

今日は自分に女装がバレたことで異様に血の気の引いていた関係が見学していたのは知っている。しかし、そうほいほいと授業を休めるものかと刹那は考える。

「水泳の方はその、生理…ということにしようかと」

「ああ。なるほど。確かにその手がありますか。私は軽すぎてそのようなこと思いませんが、重い人には休む理由になりそうですね」

自分にはわからないものでも生理が大変なのは身内にいる。いい口実とは言えないが、それを口実にするための理由付けは偶然にも初回の水泳で体調不良と間違えられた密にはもってこいの話だ。

「でしたら、同じ寮住まい。話を合わせることで対応しましょう」

「よろしくお願いします」

## 第17話 セラール新報

そんな日から一週間。水泳の授業を密は『生理』を理由に欠席・見学。

気にした他の生徒には刹那が体調を考えてやるように説得することと対応。

このまま何事もなく夏休みへと移行していくものだと思っていた。

——セラール新報が『その記事』を掲載するまでは…

水泳の授業も残すところあと四回。少し憂鬱そうな雰囲気を出す密を刹那、鏡子、織女、あとはなぜか千歳の四人が様子を見守るように学院へと向かう坂道を上っている。

「あの、過剰すぎませんか？」

「そうでしょうか」

「友人と学院に通うことに過剰も何もないでしょう」

「というか、千歳さん。貴女はなぜ居るのですか？」

「密お姉さまの周りではいろいろと起きるので密着取材をと思いましたが」

門をくぐり、正面のエントランスまで来たところで周囲の生徒の様子が変わる。誰もが遠目にこの中の誰かを見ている。

「密お姉さまに視線が集まっているようですね」

「密さんに、ですか？」

「理由はわかりませんが、おそらくは」

「決める理由は」

「私の頭の上を通りすぎる視線がいくつつか。必然的に左右に立っている刹那お姉さまと鏡子お姉さまは除外でき、織女お姉さまは元々から有名人ですからこのように遠巻きに視線が集まっているのは不自然です」

「さすがは、新聞部の副部長といったところなのですが…。なぜ、密さんに視線が集まっているのかはわかりませんか？」

「何かあったと、見るべきでしょうか」

その場の全員が歩き出す。周囲の生徒の様子を見ていた千歳がい

ち早くそれに気づく。

「——っ、今は…」

「何かわかりましたか？」

「新聞…。新報を出した…？部長からは何も——！」

「あつ、千歳さん？」

「追いましよう」

速歩で動く千歳の早いこと。提示板の前で立ち止まる千歳を四人が追いついたところで、千歳の見上げていたものを四人も見ただ。

『薔薇の宮、結城密が水泳に参加しないのは『泳げないから』か?!』…千歳さん、この——っ?!」

鏡子が視線を向けた先には肩を怒らせて震えている千歳がいた。

「なん、で…っ。臆測で記事は作るなっであれほど——!!」

「あつ…」

千歳が一目散に走り出し、その姿はあつという間に見えなくなる。

鏡子はなんとなく伸ばした手を引っ込める。

「なるほど。朝からの視線はこれが原因だったようですね」

「真紗絵さんめ…。最近、大人しいかと思えば…！」

「密さん、織女さん。とりあえずこの場を離れましょう。刹那さんも」

「いえ。私は少々寄り道いたします。先に教室へ向かってください」

「わかりました」

鏡子に背を押される形で密と織女は歩いていく。それを見届けた刹那はゆっくりと反対側へと歩き出した。



—千歳side—

新聞部の部室へとたどり着いた千歳はノックもせず勢いよく扉を開いた。中には部長である真紗絵部長と何かの資料を纏めている若葉の二人がいた。

「部長！あの新報はどういうつもりですか!？」

「おつ。もう確認してくれたわけか。生徒の反応はいかがかな？」

「はぐらかさないでくださいっ！裏が取れるまでは記事にするなど言ったはずです！若葉も、なんで止めなかったっ?!」

ビクツと怯えたように資料整理の手を止めた若葉は――

「部長はもう、ほとんど確定だと…。水泳の授業を生理とはいえ三回も連続で休むのはおかしい。今までの薔薇の宮は生理で体育を休んでいる様子はなかった、と」

「そもそも、生理なら普段の体育だって休んでいてもおかしくはないはず。でも、薔薇の宮はほぼ全ての授業を欠席していない。なのに水泳だけは休んでいる。これはもう、確定でしょ」

密お姉さまが水泳に出ないのは『泳げない』からで『生理』ではない。もう、そう決められるだけの状況証拠はそろつていと言いたげだ。

「普段は軽い生理も環境如何では重くなることもあります。そもそも、泳げないのであれば初回の水泳で着替えてきたことにどう説明をつけるつもりなんですか?!」

『泳げない』ことを隠すなら初回の水泳には泳ぎに出てきて体調不良を理由に見学。後の水泳授業は生理で見学している。そもそも、最初の時はあんたが直々に見てきたのでしょ?」

「それは――」

初回の水泳授業の時は確かに自分が見てきた。授業を抜け出して、見学している密お姉さまともお話した。

「ですが、あの新報には推測や臆測を交えてはいても真実となるものは一つも見受けられなかった。これでは虚報と言わざるをえない!」  
「それを生徒は楽しんでる。それでいいじゃない。新聞なんてそんなものよ」

「これでは新聞ではなくゴシップ誌です!」

千歳の声を鬱陶しそうにする真紗絵部長に、千歳は大きいため息をつく。

「とにかく、新報の訂正を――」

そこへ、控えめなノックが響く。若葉が扉を開けるとそこには――  
「せ、刹那お姉さま…」

「・・・」

わかる人にはわかる。千歳はわかった。若葉も感じている。真紗絵部長は気にしていない。

「真紗絵さん。今朝の新報、あれは事実かしら？」

「私は事実だと思っっているよ？」

「『思っっているよ？』ということは推測や臆測の類い、ですか」

「まあ、薔薇の宮である密さんに直接聞いたわけではないからね。ただ、そう推測するには十分な状況証拠はそろっていると思う」

「なるほど。——前にも言いましたが、推測や臆測の類いで学内の風紀を乱すようなら私は容赦しないと申しましたが？」

「噂は広がっているけど、さりとて本当に虚報かは密さん自身にしかわからない問題でしょ？」

「つまり、密さんがこの新報を虚報にした時は——わかっていますね？」

「はいはい。そうなればいいね」

「——以上です。お邪魔いたしました」

刹那が扉を閉めて歩き去る。若葉は青い顔で真紗絵部長と千歳を見た。

「し、死ぬかと…思いました」

「部長。今からでも遅くはないと思いますが。誤報ということにすれば刹那お姉さまも手荒な手段には出ないと思いますよ」

「何が？あれは口だけよ。今までだって本気で何かしてきたことはなかったじゃない」

真紗絵部長の言う通り、今までも誤報に近い新報は何度も出ている。その度に刹那お姉さまは苦言を申し入れにはきていた。

真紗絵部長は今回もそうだと結論付けている。でも、千歳にはそう思えなかった。

☆

昼休み。千歳は憂鬱な気持ちをどうにもできないままに中庭で昼

食を取っていた。しかし、食べる速度は遅く、ため息も多い。

「隣、いいですか？」

「…どうぞ」

千歳の隣に座ったのは鏡子お姉さまだった。

「難しい顔をしていますね。朝の新報のことでしょうか」

「…はい。あれには、核となる真実が一つも入っていません。推測に臆測を重ねて、それらしく見せた虚飾の新聞です」

『そんなものよ』と真紗絵部長は言っていた。だけど、千歳はそうであつてほしくはないと思つている。

「千歳さんは関わっているんですか」

「裏付けするために動いてはいました。結果は芳しくなかったので、最終日前ぐらいに小さめの記事で『泳げない疑い』程度のものにしかできそうにないかと、思つていた矢先のアレでしたから…」

「なるほど。だからあんなに怒つていたのですね」

「怒つていた——そうですね。裏付けのない記事は時に本人以外の人を傷つけることもありますから」

「本人以外、ですか？」

鏡子お姉さまにはあまりピンとこない話か、と。

「今回の記事でいえば、密お姉さま——薔薇の宮様を敬う生徒と薔薇の宮を疎ましく思う生徒の間でケンカが起きる可能性は無いとは言いません。照星<sup>エルダー</sup>関連の新報が出た際はよくあることですから」

「なるほど。言われてみれば」

「昨年もそういつたことは起きたのだ。小さなこぜり合いみたいなものではあつたが。」

「また、密お姉さまの交友関係者に対して今回の質問が他クラスから殺到する可能性もあります。本人達としては真実を知りたいだけなのでしようが、この場合において明確な答えを返せるのは実は密お姉さましかいない、ということなのです」

「——っ」

いくら友人関係とはいえ、休んでいる理由に『生理』を使っている以上はどちらかなのか明らかにできるのは密しかない。



(ですが、それを密さんから話すことはできない…)

「それに、状況として密お姉さまが口頭での説明は新報によつて無意味です」

「無意味…っ!」

「鏡子お姉さまでもわかりますよね?」

新報が出た時点で密には『カナヅチ疑惑』ができてしまった。これを本人が口頭での説明をしたところで『だったら泳いでみせろ』と言われるだけだ。

——『生理』とはいえ、まったく泳げないわけではないのだから。  
「千歳さんは、どうするのですか」

「今は噂の加速が起きないように手を打ちます。ウチの部長の暴走で照星の方々に迷惑などかけられません」

お弁当を掻き込むと千歳は立ち上がる。

「鏡子お姉さま、ありがとうございます。お話をさせていただきましたとでやるべきことに順位付けも終わりました」

「頑張るのですよ」

鏡子は何とはなしに手を伸ばして前に立つ千歳の頭を撫でた。すると、みるみる内に千歳の顔が真っ赤になる。

「し、失礼、します!」

「あっ…」

駆け出した千歳の背中を見送って——  
「頑張るのですよ」

鏡子は小さなエールをもう一度、口にした。

## 第18話 密の認識、周りの認識

— 鏡子 side —

放課後。定例の照星の集まりに全員がそろったタイミングですみれがあやめとともに目安箱を運んできた。

箱を開くとテーブルに小山ができるほどに手紙が流れ出て、その光景を織女さんと美玲衣さんは呆れた様子で見っていた。

「休み時間の度に多くの生徒から質問は受けましたが…」

「それだけに飽きたらず、これだけの投書が入るといいうのもどうなのでしょうね」

「まだ整理が終わっていませんので我々の方で整理いたします」

奉仕会の役員が集まって手紙の仕分けを行う。結果として、いつも通りの匿名投書が一割。残り九割は密さんの新報への説明要望だった。

「なんといいいますか、密お姉さまの場合、何か裏がありそうに見えてしまいますね」

「裏、ですか?」

そういえば、と鏡子は室内を見渡す。刹那さんの姿が見えません。

「刹那お姉さまが様々なクラスを回って今回の新報についてどのくらい広がっているのか調べて下さっています…。五時間目終了の時点で『疑惑』についてはほぼ全校生徒に広がっているとの報告をもらっています…」

「なるほど。広がる速度が異常なのですな」

「裏で動く…。新聞部の副部長は確か：『忍者』と呼ばれていたわね」  
噂を広めている主犯格に千歳の名前が出たことで今まで成り行きを見守っていた鏡子も参戦することにした。

昼休みにあれだけ照星に迷惑をかけたくないと言っていた思いは代弁しておくべきだろう。

「鈴蘭の宮の言うことも可能性としてはありますが、限りなく白だと思うのです」

「あら。鏡子さんには何か根拠が?」

「そうですね——」

鏡子は昼休みにあったことを話す。

「なるほど。鏡子さんの言う通りなら千歳さんがわざわざ広めているという可能性は低い」

「一番早く乗ってきたのは密さん。」

「確かに。朝の新報を見た時もういふんと怒っていたようですし」

「それに同調するように織女さんも続く。この二人は朝の様子も見ているから比較的理解はある。」

「それがブラフでない理由はなんででしょうか？」

「そうですね。彼女はあらゆる意味でフェア精神が念頭にあるから、でしょうか」

「それだけでは、薄いですね。新聞部の一員である以上、そちらへ手を貸していないことは証明できますか？」

「当然ながらその程度で疑いを晴らせるのなら鈴蘭の宮はここにはいない。この程度で退いては鈴蘭の宮ではない。」

だが、美玲衣さんへの反論は意外なところから来た。

「なかなか鋭い舌鋒ですが、まだ粗い。美玲衣、昼間に私がすみれに渡した情報は千歳からもたらされたものです」

「刹那さん……」

入口から刹那が入ってきた。そのまま美玲衣の疑惑を両断して。

「千歳はあらゆる情報に裏付けが取れないかぎりには新報に載せようとはしません。今回のような虚飾に満ちた情報を彼女が載せようとは考えないはずですよ」

「刹那さんも、ずいぶんとわかったように話しますね」

「なんだかんだと千歳との付き合いは長いですからね。彼女の人のなりはそれなりにわかっているつもりですが」

「なるほど。であれば、これ以上御二人につつかかるのはケチをつけているだけになりますから下がりましたよ」

「さすがは鈴蘭の宮といったところでしょうか。引き際を心得ていた様子。」

「しかし、どういたしますか。この記事には密さんのお話などはまっ

たく入っていないのですよね？」

「裏付けが取れていないのは向こうも承知で使っているのでしょう。にしても、これを信じる生徒も少なからずいるということですよ」

宮様二人は噂が良くないことになることを危惧している様子。それにしても密さんは妙に落ち着いていますね？

「まあまあ。確かに私は水泳を休んでしまっています。周りがアレコレと風聞するのは仕方ないでしょうから」

なるほど。水泳を休むしかなく以上、このような噂などは出てきても仕方ないと割り切っているわけですか。

確かに密さんらしくはあります——ありますが…。

「密さんはそれでいいのですか」

「この新聞のおかげで密さんの株は乱高下しています。マイナスなイメージが付きかねませんよ」

やはりというか、織女さんと美玲衣さんは納得していませんね。かくいう私も納得はできません。

一方的に立場を貶めかねないこの新聞にはさすがの私でも反吐がでます。

この新聞の嫌なところは『くく』のようで『くく』と生徒も考えている様子が窺え…』などと断定的な文は徹底的に排除することで、あくまでも新聞部の見解を述べているようにしているところだ。

これがどこかしらに断定するような文があれば間違いの訂正を新聞部に是正させることもできようというのに…。

「実際に私が水泳に参加できていないのは事実ですし、そこへいろいろな臆測が飛び交ってしまうことも仕方ありません。皆さんの気持ちは嬉しいですが、訂正はできませんし、ね」

密さんの言葉に全員が黙ってしまいます。これ以上ここで議論しても無駄だとわかってしまいますからね。

しかし、本当にどうにかできないものでしょうか…。



いつも通りの遅い時間。浴場で身体を洗う密は背を向けたまま、近くで何故かストレッチをしている刹那に声をかけた。

「刹那さん。私は、どうすればいいと思いますか？」

「何が、でしょうか…」

時折、息をつめるような反応が返ってくるがストレッチしているのだし仕方ないと密は割り切る。

「今日は織女さんや美玲衣さん、鏡子さんも心配している様子でした。水泳の授業にはどうあつても参加できない以上、噂をどうこうできないのはわかっているはずなのに…」

参加できれば解決できるのもわかる。しかし、それでは問題がある。

「そう、ですね…。——少し話が変わりますが、密さんは言われなき噂で織女さんや美玲衣さんが傷ついているかもしれない、と知ったらどうしますか？」

「——噂の出所を調べて、場合によっては撤回させます」

「そうですね。今回の新報はそれと同様の話なんですよ」

刹那が隣に座って身体を洗い始める。

「密さんは『生理』が原因で水泳に参加できない。これはクラスの皆さんも信じて話が出ているから織女さんと美玲衣さんは信じてくれている。しかし、新報はその辺りの話が実は『薔薇の宮は泳げないことを隠すための嘘に生理を使っている』のではないかと疑惑を持ったことで今回の新報をぶち上げた。」

実際には密さんは男性だから『生理は無い』ので『嘘をついている』部分は間違っていない。だから、密さんは皆さんがああも必死になる理由にピンとこないのだと思います」

「ですが、実際にそうなので…」

「違いますよ、密さん。貴女にとって間違っていないのだとしても周りからは『密さんは嘘をついていない。初日だって体調を推して参加しようとしていた』ということがあるのですよ」

そこまで刹那が説明してようやく密にも理解できた。

自分と周りの人の間には大きな認識のズレがあるのだと。

「えっと、私自身に矛盾はないけど周りからは私が酷いことを言われているように見えている、ということですか」

「そういう認識でけっこうですね。そして、織女さんからすれば自分の友人たる密さんを悪く言われ、美玲衣さんからすれば同じ照星エルダーを貶められそうになっている。

寮のみんなやクラスメイト達が怒っているのもそこに起因します。みんなが『密さんは何もしていないのになんで…』という気持ちが強いんですよ。噂のおかげで陰に日向に密さんの、薔薇の宮としての適性を疑うような声まで出てくる始末です。周りが怒るのも無理らしからぬことです」

刹那の説明に密は俯く。お互いに無言になり、泡を流して湯船にかかる。

「それで、皆さんの気持ちを知ったことで密さんはどうお考えに？」「…わかりません。授業に出れば、皆さんの憂いをどうにかできるところとはわかりました。ですが、だからといって安易に授業に出るわけにも…」

「まあ、護衛任務とすればよろしくありませんね。しかし密さん。貴女は織女さんの護衛役ではありますが学院の生徒でもある、ということとは忘れないでください。私も貴女を不当に扱われることに憤っていますから」

「刹那さんも、ですか…」

「ええ。貴女は間違いなく泳げるでしょうし、他の競技でも私と並ぶのですよ。対決できればどれほど高揚した水泳を楽しめるのか——考えただけでワクワクします」

「最近わかってきましたけど、刹那さんってけっこうスリルジャンキーなところありますよね…」

勝つか負けるかのギリギリの勝負に持ち込むと刹那は好戦的な笑みを浮かべるが、密には恍惚としているように時々見えてしまう。

「失敬な。感情表現が豊かなだけですよ」

「そういうことにはおきます」

「なかなか生意気言いますね、密さん」

ヘッドロックをかます刹那に密は湯を叩いて抗議する。

「溺れますから…!」

「あの程度で溺れては本当にカナヅチですよ」

膨れる密の頬を楽しそうに刹那はつついてくる。

嫌がって離れた密に楽しそうに笑い声をあげる刹那。

「まあ、水泳の対処に関しては密さんに任せます。泳ぐにせよこのままにするにせよ、貴女が決めることですからね」

「そう、ですか…」

浴場から帰る時、刹那の背中を眺めながら密は思う。何も言われなかったが刹那自身はどう思っているのだろうか…。

## 第19話 決断

五回目の水泳授業も休み——

噂は尾ヒレがついて留まるところを知らない。

どこにいても誰かに見られているような感覚。照星となった時でさえここまでではなかったはずだ、と密は感覚的に理解はしている。

元より閉鎖的な側面を持つ学院内であれだけ有名な刹那に見出だされるように照星へと入ってしまったのもいたので、元の知名度に下世話な勘繰りもできてしまう新聞ともなれば女子達の話題を浚ってしまいうのも仕方のないことなのだろう。

密自身はあまり気にしないでいた。しかし、日増しに膨れる噂を周囲の人間は気にしてしまう。

この状況の一番の解決策は何か——密は考えずにはいられなかった。



—鏡子side—

昼休み。購買で適当にサンドイッチなどを買い込んで中庭へと足を運ぶ。

密さんの隣にいと今は嫌でも目立ってしまう。それに毎時あれほどの興味津々な目を向けられては落ち着くことすらできやしない。

(当の本人は割り切っているのかいつも通りなので、余計にそばにいるのが面倒なんですよね…)

中庭は場所によってはあまり人のいない空間がある。レリーフのような小さなベンチのところまで来て、先客がいるのに気づく。

(おや?)

先客はベンチにうつ伏せに寝転んで眉間に深いシワを寄せた顔で小さな寝息をたてている。この夏も近づいた屋外の固いベンチを寝床にすれば、ほとんどの人間はそうなるだろうが…。

「千歳さん。そのようなところで寝ていると熱中症になりますよ」



わずかに開かれた目はこちらを一瞬みると顔を反対に向けてしま  
う。

「千歳さん。そのようなところで寝ていると熱中症になりますよ」

同じ言葉でしかし今度はその頬を上から潰すように指で押す。少  
しの間、されるがままだったのが諦めたのか千歳は起き上がった。

「…なんですか」

「そこで寝転んでいると私の食事場所が無くなるので起こそうとし  
ただけです」

いたずら心が皆無だったかと聞かれると鏡子としては困るが。空  
いた空間に座り、サンドイッチを食べ始めたが――

（――今日はいやに元気がありませんね）

よくよく見ると千歳の髪はあちこちがはねているし化粧でごまか  
しているが目元にうっすらと隈が出来ている。

「千歳さん。貴女、よく眠れていないのでは？」

「…なんでそんなことを聞くのですか」  
「興味本位です。ですが、明らかに疲れた様子の貴女が気になりまし  
たので」

「…別に。大したことではないですよ」

千歳が話したのは今回の噂を出来るだけ鎮静化しようと駆けずり  
回っていたというもの。

しかし、千歳は新聞部の所属。何をしても裏目に出がちで、噂の加  
速を留めることは出来なかったようだ。

「…二三日はまともに寝れなくて…。悪いのは部長なんですけど、噂  
を聞く度に胸が痛くて…」

――どうやら密さんの楽観視に一番堪えているのはこの子なので  
はないだろうか。駆けずり回り、なんとか噂を鎮静化しようと東奔西  
走してきて、今は力不足にただただうちひしがれて…。

あげくには不眠症に近い症状を発症している有様。このまま放つ  
ておけば最初に倒れるのは千歳だろう。

（まったく…）

なんて不器用なのだろうか。千歳がそこまで密さんのことを気

にする必要はないというのに…。

「千歳さん。ちよつと、失礼」

「うむっ？」

千歳の頭を掴んで強引に横にさせる。その頭を、自分の膝にのせて

「あの、鏡子お姉さま…？」

「なんででしょうか」

「これは、なぜ急に…？」

「そうですね。ただ、なんとなくでしょうか」

本当にただそうしかつただけだ。別に他意はなく、疲れているこ  
の子を少しでも休ませてあげたいと思ったからで…

「嫌なら頭を上げたらいいのです」

「嫌、ではないのですが…」

「ですが？」

「——いえ。ありがとうございます。鏡子お姉さま」

小さなあくびをして、千歳は目を閉じる。ほどなくして小さな寝息  
が聞こえ始めた。

「まったく…。密さんよりも疲れる相手なのです」

寝息をたてるその頭を優しい手つきで撫でている。思わず鏡子は  
小さな笑みを浮かべていたが、ふと視線をあげると——目があった。

「お優しいですね、鏡子さん？」

「——そこで何をしていますのですか、刹那さん？」

木の陰からこちらを見ていたのは刹那。青筋を浮かべる鏡子にさ  
すがの刹那も少し慌てた様子でこちらへと近づいてきた。

「誤解ですよ、鏡子さん。私は千歳を探していたらたまたまベンチで  
一緒に座る鏡子さんを見つけて」

「見つけて。何をしていたのでしょうか？」

「…どうなるのか気になって木陰から様子を窺っていました」

素直に白状した刹那に鏡子は隣に座るようベンチを叩く。刹那も  
逃げ出すことはなく、諦めた様子で鏡子の隣に座った。

「それで。刹那さんが千歳さんを探していた理由はなんですか」

「いえ。最近、姿を見せなくなっていたので何をしているのかと。この子がいきなり消えるのは今回が初めてではありませんが、さすがに気になってしまつて」

「なるほど。そして偶然にも私と出会っているところを見つけたと？」

「そうですね。まさかいきなり膝枕をして、千歳も素直に寝始めるとは思いませんでした」

眠っている千歳の頬を刹那がつつく。それを嫌がつて千歳がその場で寝返りをうつた。

「——ムッ。なかなかけしからん絵面に」

「女の子同士ですから気にしませんよ。というか、これは本人としてはどうなんでしょう。息苦しくないのでしょうか」

千歳は鏡子のお腹の方に顔を向けてしまつている。

「まあ、寝苦しいようならまた寝返りをするでしょう」

「——それで。刹那さんは私に用があるのでは？」

「わかりますか」

「ええ。千歳さんを探していたのは嘘ではなさそうですが、私も同様に探していた、といったところでしょう」

「鋭いようで助かります。私が聞きたいのは、鏡子さんとしては現状の密さんの状態をどう思っているのか、です」

ふむ、と鏡子は考える。現状としては任務そのものには大きな支障は出ていない。噂は所詮噂であり、密さん自身が気にしていないことから不利益になつているものはない。

しいて言うなら、静かな学院生活とやらからはどんどんと遠ざかつていくことぐらいか。

「私としては何も言えませんね。織女さんなどは機嫌が悪そうですが」

「まあ、水泳してないだけでこれほど叩かれるのも今までの照星から考えても珍しい兆候ではあります。なんだかんだと話題性が高いと生徒達は思っているのでしょうか」

結果として本人以外のところへ波及してクラスメイトは他ク

ラスの生徒との小競り合いのような衝突も起きているし、下級生に多い照星ごとのファンの間でも小さな問題が発生していると聞いています。

「なんとかなりませんか、刹那さん」

「私では無理ですね。これは、密さんだけが解決できる問題です」

結局、千歳は昼休みが終わるまで眠っていた。



—密side—

——夜。密の部屋では密が花に勉強を教えていた。

「——密お姉さま」

「どうかしましたか、花ちゃん」

「お姉さまのことをいろいろと聞かれています…。花の思った通りに答えているんですけど…」

「けど…?」

花の話す内容としてはあちこちに話が飛ぶうちに誤解を生んだりしているらしく、今日も花のクラスに怒鳴り込む生徒がいたらしい。

「お姉さまは何も悪いことはしてないのに…。ただ、体調が優れなくて水泳をお休みしているだけなのに…」

「花ちゃん…」

密は少々自分が楽観的だったことに気づかされた。クラスの方でも自分を擁護してくれる話は聞いていたし、織女や美玲衣が噂に対して答えていることも知っていた。

それでも所詮は一過性のものだと思っていた。だが、これほどまで周囲の人間に影響が出ているとは密自身は想定していなかった。

「花ちゃん。今日のところはこれで終わっておきましょう」

「お姉さま?」

「少しやることができちゃって。すみません」

花を部屋に送り届け、その足で鏡子を呼びに行く。部屋に戻ってくると二人は向かい合ってイスに座った。

「どうしたのですか急に」

「鏡子さん。私は刹那さんに言われました。今回の噂を鎮静化できるのは『私だけ』だと。方法としてもわかりませんが安易に選ぶわけにもいきません。何か知恵を借りることはできませんか？」

「密さん…」

——密は決めた。

今回のことが周囲の人間にこれほどまでの影響が出ているとなら、それはもはや密一人の問題ではない。

なら、この問題に対処する必要がある。自分を信じてくれている皆のためにも——。

「——わかりました。密さんが覚悟を決めているのなら、私も手を貸しましょう。誤魔化す手段がないわけでもありませんし、それに——」

鏡子は明日の授業時間のことを思い出す。

「幸いにも明日の一時間目が水泳ですから、ちょうどいいですね」

「それと、鏡子さん。私はせっかくですから彼女にも手伝ってもらおうと思っっています。実は——」

密の話に鏡子は驚いた。だが、同時に納得もしていた。

「今まで黙っていたことにはいろいろと言いたいことはありますが、今は好都合です。一回、吹っ掛けてみるのも面白そうですね」

密は決断した。もう、妹にあんな悲しい顔をさせるわけにはいかない、と。

## 第20話 水泳対決

―刹那 side―

次の日。

プールサイドで黙々と柔軟体操を行う刹那は最近の噂を考えていた。

（昨日、鏡子と話した通り。今回の噂は妙に広がり早い。誰かが裏で糸を引いている人間がいるかもしれないと調べてはいるが、網に引っかかる様子もない）

なら、今回は偶然にも拡散しているだけだろうか。それなら、この問題が解消されればいいのだが解決できるのはやはり当事者しか不可能だ。

（かといって、密さんを無理に引っ張り出すわけにもいきませんし…）

正直、手詰まりだ。

そんな時、周囲の生徒がざわついたことで刹那も入口の方へと視線を向けた。そこには、肩からバスタオルを羽織って歩いてくる密がいた。

「密さん…！」

近づくとき少し青い顔はしているがそれは仕方ないことだと思える。一歩間違えば変態のレッテルを貼られかねない場所だ、密にとって

は。  
教師が密に話を聞いているが、体調そのものは過去五回よりはよく、また噂が広がりつつあることを勘案してもここで一度でも自分が授業に参加することができれば落ち着くと考えていると。

教師達も噂のことは耳にしているだろう。ただ、これは教師には解決できることではないことは理解していただろうし、それをどうにかするために授業になんとか参加しようとしてきたというのだ。教師がダメとは言えないだろう。

そして、バスタオルを外した密は刹那の方へと歩いてきた。

「刹那さん」

「密さん。さすがは、薔薇の宮と誉めるべきでしょうか」

刹那は素直に密に感心していた。確かに解決策はこれしかないとは本人に伝えてはいたがまさか選ぶとは思っていなかったのが本音だ。

「体調は良いのですが、それも最後までかという自信がなくて…。申し訳ありませんが一つ、ワガママを聞いてはくれませんか？」

「ワガママ…。なんでしょう。今なら大概のワガママには付き合いますしょう」

「でしたら刹那さん。私と水泳で勝負をしていただけませんか？」

周囲のざわめきと、刹那はわずかに眉が上がる。

———どういうつもりか。

それを問うように見つめた密は小さく笑って頷く。それだけでなんとなく察せた。

ならば、私が返すべき言葉は『刹那』としてではない。

「いいでしょう、薔薇の宮。貴女の挑戦、受けてたたせていただく。先生、構いませんね」

『女帝』として立ちほだかろう。貴女の挑戦、受けて立ちましよう。



— 茉理 side —

密さんが授業に出ているのには驚いたけど、それ以上に驚いたのは刹那さんに勝負を挑んだことだ。いつもなら刹那さんから挑んで密さんが対峙していたのに。

気になって仕方なかったから先生に許可をもらって近くで見させてもらうことにした。

どうやら二人は400mメドレーっていう種目をする様子。近くにいた鏡子さんから聞いたら『背泳ぎ・平泳ぎ・バタフライ・クロール』を各100m泳ぐようだ。

確かここって50mプールだから四往復かな。あつ、二人がプールに入った。

「本当なら自由形でいきたいところですがスタート台がありませんか

らね。メドレーなら関係ありません。密さん、いいでしょうか？」  
「ええ。400mともなれば体力配分も考えないといきませんからね」

「なるほど。勝算あり、といったところでしょいかね」

プールは広いから何人もの生徒がレース用に区切られた二コース以外に入ってる人もいる。いいなあ…。

「それでは…」

先生の合図で二人がプールサイドに掴まって背中を丸める。

「——スタート！」

先生の号令とともに二人が飛び出した。最初は背泳ぎ。

「あれって頭打ったりしないのかな」

「時折首を反らして壁までの距離を測っているから大丈夫でしょう」

鏡子さんの言う通り、二人共に時折首を反らしている。ああやって見てるんだ。

ターンした瞬間、刹那さんがわずかに前に出たように見える。

「密お姉さま、少し遅れていますわね…」

「密お姉さまは万全ではありませんし…」

「それでも、刹那お姉さまは手を抜くつもりはなさそうですわね…」

「それよりも誰ですの。密さんは泳げないかも、なんて広めていたのは…」

どうやら自分の見間違えという感じではないようで、気がつくまで泳ぎに変わったところで身体一つ分の差が開いている。…刹那さん、速いなあ…。

「うーん、想像以上に刹那さんが速いですね。密さん、勝てるのでしょいか」

隣の鏡子さんも頬を掻いている。早くもバタフライに泳ぎが変わって——あれ？

「刹那さん、明らかに遅くなった？」

「えっ…？！」

うん。ジワジワと密さんが刹那さんとの距離を詰めている。それは密さんが速くなったというよりは…。



「刹那お姉さま、遅れてきていませんこと…?」

「まさか、疲れてきています…?」

うーん、疲れてきているって感じじゃなさそうなんだよね。どちらかというところ——

「バタフライ、苦手なのかなあ」

「…ああ。確かに泳ぎが少しぎこちないですね」

なんて言えばいいんだろう。水の中を滑るように泳いでいるのが密さん。なんかカクカクしてるのが刹那さん。

「いよいよ、最終泳法ですね」

ターンがわずかに刹那さんの方が速かった。でも——

「す、すごい…」

「密お姉さま、速い…!」

密さん、今までセーブしてた? 異様に速いんだけど。

「そんな余裕、刹那さん相手に密さんが持てるわけありません。なのに、なぜ…」

「…あつ」

わかった。呼吸の回数だ。

刹那さんは四く五回に一回は息継ぎに横を向いてるのに、密さんは最低十回は空けて息継ぎしてる。

「うわあ…」

ジワジワと密さんの方が前に出て——ターンした瞬間に決定的な距離が開いた。——今、刹那さん…。

「刹那さん、壁を蹴り損ないましたね。明らかにターンした瞬間に距離が開きました」

「うん。あつ、でも猛烈に追い上げてきたよ!」

どうやら刹那さんも息継ぎの回数を減らしたんだ。でも、ターンの時に身体一つ分以上ついた差はさすがに埋まらなくて——

「勝者、結城密!」

先生の声に周囲の生徒が大声をあげた。うん、密さん、すごいよ。一秒以上遅れて刹那さんが壁を触る。

「…つあ、はあ…、はあ」

「く、っあ…。焦って、ターンを…失敗、するとは…」

刹那さんはまだ喋る余力あるんだ。密さん、明らかに顔真っ青なんだけど…。

「後半ほぼ無呼吸で泳いでいたみたいですから、酸欠なんでしょう。まったく、無茶をするものです」

周囲の生徒からは惜しめない拍手が響いている。うん、すごく見応えがあった。近くに見に来て良かった。

「さて、密さん。引き上げますよ？」

「…」

「返事する余力もありませんか」

刹那さんがプールサイドに上がったかと思えば密さんの両脇に腕を差し込んで、持ち上げた。

プールサイドに置かれた密さんの背中にバスタオルがかけられ、教師が様子を見ている。

「ここまでできれば貴女の評価は十分ですし、後は着替えて休んでいなさい。まさか、勝ってしまうなんてね…」

この結果には先生も驚いてるみたい。まあ、刹那さんっていろいろと規格外だからね。

でも、密さん本当に大丈夫かな。立ち上がれてないけど。

「先生、更衣室まで私が運んできます。鏡子さん、着替えは貴女が手伝ってあげてください」

「えっ？あつ、はい」

刹那さんが密さんをお姫様抱っこで抱えて更衣室へと歩いていく。それを鏡子さんが追いかけていった。

刹那さん、確かにすごいんだけど周囲の生徒がすごく盛り上がってるよ？



—刹那 side—

密を更衣室まで運んでイスに座らせる。片膝をついて密の顔をこ

ちらで支えながら――

「しかし、負けるとは思ってもみませんでした。密さんには私がバタフライ苦手な話してました?」

「いいえ。みんな自由に泳いでいる中で、刹那さん。バタフライだけは泳いでいた記憶がなくて。もしかしたららって…」

「ふむ。普段からの観察の賜物ですか。素直に負けを認めます」

呼吸が整って少し赤みの増した頬に優しく手を添えていて――

「端から見ているとすごく百合百合しい絵面なのですが、私はお邪魔ですかね」

二人で鏡子の顔を見てお互いに顔を見合わせて――サツと離れる。お互いに顔が赤い気がする。

「それで、密さんのワガママで対決していただきましたがどうでしたか?」

「純粹に完敗ですね。まあ、これだけ派手なパフォーマンスになれば新聞部も逆に追い込まれるでしょうし、千歳さんも紛れ込んでましたから、あつという間に広がりますよ」

「えっ、千歳さん居ました?」

「ええ。さつき密さんを運んでいた時に後ろ姿がチラツと」

カメラを懐に入れて入り口から出ていったところは見ていたのだが、どうやら気づいていたのは刹那だけのようだ。

「まあ、あとは私と千歳に任せなさい。噂は払拭してみせましょう」  
「よろしくお願いします」

まあ、私が密さんをお姫様抱っこしていたのも撮られていましたから違う意味で困ったことになるかもしれませんが…。

## 第21話 千歳の写真収集

—密side—

水泳の授業から数日後。緊急の照星会合が開かれるということので放課後に象牙の間に来たのだが…。

「大変申し訳ございませんでした…!」

象牙の間に入るなり新聞部部长である真紗絵さんに土下座されている。

「あの日から休み時間になる度に生徒達が津波のように集まっては抗議をして…」

真紗絵さんは明らかにやつれている。隣には千歳さんが若葉ちゃんに付き添っているようなのだが…。

「休み時間、昼休み、放課後関係なくひっきりなしに新聞部の部室やそれぞれの教室に人が集まるようで…。他の生徒もおののくほどの狂乱が起きているそうなんです」

すみれさんからの説明になるほど、そんな状態になってしまえば新聞部の活動どころか学院生活が送れない。

「それで、私に土下座しているのは構いませんが具体的にどうするのですか？」

真紗絵さんは頭を上げない。本当に今の状態は彼女にとって辛いのだろう。とはいえ、自分一人で決めていいのだろうか。

「まあ…、制裁そのものはすでに受けておられるようですし」

「今回の裁定に関しては薔薇の宮である密さんにお任せします。鮮やかな解決でしたから」

他の宮二人は今回のことは自分に全て任せる気であるようだ。しかし、鮮やかな解決と言われてもやったことは思いきり力業である。

「そうですね。すでにけっこうな制裁は受けているようですし、奉仕会の方と今回のことに関しての掲載に関する誤報に対する謝罪文を作りましょう」

「い、いいんです?」

「ええ。期末試験も目前に迫っていますし、これ以上の混乱は他の生

徒達にも大きな問題が発生する可能性があります」

「なるほど。では、真紗絵部長は隣の奉仕会室の方へ」

副会長の深夕に連れられる形で真紗絵部長が隣の奉仕会室の方へ入っていく。

「密さん。いいんですか」

「ええ。私は私自身で身の潔白は示せましたし、これ以上の混乱は学院の生徒の誰も喜ばません」

現在、学内は噂が嘘であったことで生徒達の怒りが全て新聞部へと向いている。この状態から照星と奉仕会が許すことで落ち着きを取り戻すだろう。

「…で、今日の緊急会合は終わりかしら？」

「いえ。実は刹那お姉さまの方からもう一つ議題にあげてほしいと願いされていることがあります」

「珍しいね。刹那さんが会合に口を出すなんて」

美海は刹那のことをこの中では知っている部類の人間である。刹那は基本的にこういう場で自分が中心に立つことは避ける傾向にあると感じていた。

「ちょうど新聞部の人を呼び出せるこのタイミングがよかったんです。千歳と若葉さんの二人を呼び出せるタイミングが」

「千歳さんはなんとなくわかりますが、なぜ若葉さんまで？」

「千歳と真紗絵の直弟子ですよ、彼女」

全員の視線が若葉に集まるが、若葉はただ全員の視線に合わないように視線を外している。

「まあ、若葉さんには釘を刺したいだけなのでこの場に呼んだともいえます。——さて、この場の皆さんに聞きたいのですが『百合の深窓』と呼ばれる秘密グループが存在しているのは知っていますか？」

「『百合の深窓』？」

「初めて聞く名前ですね」

織女と美玲衣の二人はわからないのか首を捻っている。しかし、美海は知っているようで苦笑していた。

「また意外なタイミングでその名前聞いたね」

「美海さんは知っているんですか？」

「まあ、去年も何かと世話になったからね。で、刹那さんはなんで『百合の深窓』を議題にあげたのさ？あれっっていわゆる写真屋じゃん」

「写真屋、ですか？」

周りの人はお互いに見合わせて首を傾げる。

「えっと、具体的には何をしているグループなのでしようか？」

すみれは知らなかったのだが『写真屋』ということは写真に関するグループなのはわかる。では、何が問題なのか。

「『百合の深窓』は昔から学内に存在しているグループらしいのですが、二年前、千歳さんがグループのリーダーを引き継いでいたそうで」「えっ？」

美海が千歳を見る。千歳はその視線を受けて意味深に笑う。

「おやおや。まさか刹那お姉さまにバレているとは思いませんでした、が：今年はまだ出品は一枚もしていませんよ」

「『出品？』」

照星三人の声が重なった。今、なぜか三人の背中に悪寒が走った。

「『百合の深窓』は学内で撮った写真を取引する場になっていて、もちろん、レアな写真であればなかなかお値段で取引されますし、なかには『盗撮では？』といわんばかりの写真が出品されたりします。問題は、いつ頃行われているのが不明なこと」

「去年は照星の一人が日程を突き止めて奉仕会数名で現場を押さえにいったんだけど、土壇場で日程を変えてきてさ。現場を押さえられなかったんだよね」

去年、美海と刹那は現場に向かったのだが、ギリギリ取り逃がしている。

「ですが、グループリーダーが千歳だとわかれば現場を取り逃がしてしまっただけにも理解ができます」

「あの話し合いの時に紛れ込んでたってことか」

「ええ。その通りですよ」

苦々しい表情で千歳を見る美海と刹那に、千歳は楽しそうに笑っている。

「で、私に何を聞くのですか？言っておきますが、日程・場所を私はしやべりませんよ。」

「今さら現場を押さえようとは思っていません、が。出品される写真を見てみたいと思っただけです。毎年、あそこで出品された写真はそれきり個人の懐に入ってしまうと見れなくなってしまうので」

「それは…構いませんが…」

千歳は周りを見渡していた。全員が『自分達も見たい』といわんばかりに目を輝かせている。なんだかんだといえど全員女性（一名除く）。気になって仕方ないのだろう。

「わかりました。では、とりあえず一枚」

千歳は懐から一枚の写真を取り出してテーブルの上に置いた。皆がのぞき込む中、一人、表情が青くなる。

「あやめさん、ですな」

「食べているのは…プリンでしょうか」

写っていたのは至福の表情でプリンを食べているあやめ。風景からして寮のリビングのようである。

しかし、写真の中には少々気になるものが写っていたことにすみれが気づいた。

「あやちゃん。後でゆっくりとお話しましょうか？」

「す、すみちゃん。言い訳を、言い訳を聞いてくださいな…」

静かに怒りだしたすみれの様子に周りが驚く。何が起きているのかと思うが、密はすみれが怒りだした理由に気がついた。

「あやめさんのプリンの容器に何か書いてありますね」

「どこですか？」

「ほら、手元の辺りに——」

見てみると手で一部が隠れているが『…みれ』と見える。それだけで全員が察した。

すみれに詰め寄られて頬をつねられているあやめを横目に、千歳は次の写真を取り出した。

「では、次はこれにしましょうか」

テーブルに置かれたのは——

「えっ!? ちょっと、見ないで〜…!」

「はいはい。大人しくしましようね、茉理」

次なる写真は茉理だった、が。ヴァイオリンに頬ずりしている茉理の写真。場所はおそらく音楽室。

「何をしているんですか、茉理は…」

「うう〜、こんな写真いつ撮ってたの〜」

呆れた目で見える美玲衣の横で茉理は涙目だ。

「放課後、何かネタはないかと歩いていたら若葉さんが偶然にも出くわした一枚だそうで——」

「すみません。つい——」

写真に写る茉理の顔は蕩けている。実際にこの場を見ればドン引きものの絵面だったことだろう。

「だって〜、良い音が出るヴァイオリンだったんだよ〜」

「だからといって頬ずりしているのはどうなんですか…」

「しかし、残りも似たようなものが続くのですか」

密の見る先——千歳は何枚も写真を取り出している。

たった二枚で室内では突っ伏して動かなくなった者が二人。恥ずかしいのだろう。

「まだ見ますか?」

「…皆さんはどうしますか」

刹那の問いかけに全員が頷く。その反応に千歳は三枚目をテーブルに置いて——

「——っ、見ないでください!」

「ブロックします」

写真を取ろうとした織女を刹那が止める。

「は、放してください! これが誰かの手に渡るなんて許容できるわけありませんっ!」

「あの時の、ですね」

「撮られていたとは思いませんでした。しかも、こんなローアングルで…」

写真に写るのは食堂で密に『あ〜ん』してもらっている織女。頬を



薄く赤く染めているのも綺麗に写っている。

「織女さん。これを奪っても千歳の下にネガがある以上、量産可能の  
はずですよ」

「ええ。百合の宮の『あくん』写真。さぞや良い争いが見られると確信  
しています」

千歳の発言は端から聞いていても外道でしかなかった。  
突っ伏して動かなくなった者が三人目。こちらは小刻みに震えて  
いるので羞恥に耐えようとしているのかもしれない。

「では、せっかくですから鈴蘭の宮の写真をば」

四枚目は確かに美玲衣の写真だった。ただし、うずくまり目尻に涙  
をためて上目遣いで誰かに手を伸ばした写真で――

「刹那お姉さま提供『怖がり美玲衣』だそうで――」

「なんでこの時の写真があるんですかあ!」

「適当な位置にスマホをつけてタイマーセットしてから手を差し伸べ  
ればいいだけ。良い写真でしょう?」

実はもう一人外道がいたというオチだ。美玲衣も突っ伏して動か  
なくなつた。

「じゃあ、最後の一枚を…」

テーブルに置かれたのはつい先日の写真。刹那が密をお姫様抱っ  
こしている写真。

「やはり撮っていましたか」

「当然です。あのような激写の瞬間を見逃すなんてできませんよ!」

「密さん、綺麗に撮れてますね」

「あの、これも売られるのですか?」

「いえ。これはさすがに保管です。刹那お姉さまに殺されかねません  
から」

「失敬な。そんなことしませんよ。嫌がらせはしますが」

「にしても、密お姉さまはあまり動揺していませんね」

「動揺するほどのものではないから、でしょうか。すでにクラスメイ  
トには見られていることですし」

「なるほど。確かにいわれてみれば」

「しかし、どうするんですかこの惨状は」

鏡子の示す先にはテーブルに突っ伏して動かなくなった四人の被害者。

「まあ、この写真を世に出したくないなら千歳さんを買収するしかないわけで」

「しかし、この四枚のうち宮様二人の写真はお値段わかりませんよ。たぶん、お互いのファンの方々には垂涎の一枚でしょうから」

テーブルからゆっくりと織女と美玲衣が立ち上がる。

「それでも——」

「そんな写真、出回らすわけにはいきません」

「えっ、あ、あの、お二人共……。何か目が怖いのですけど……」

「では、我々はお暇いたしますか。美玲衣さん。私の撮った分はその現像品一枚ですから安心してくださいね」

後日、ホクホク顔の千歳を鏡子は見かけることとなった。

## 第22話 一学期を終えて

新聞部の起こした騒動からすでに十日を過ぎ、学院内は期末試験の勉強に慌ただしくなっていた。

再び試験争いでもしているのか織女の気合いは高く、また密は密で中間の頃と同じように周りに教えながら勉強に励んでいた。

——そして、結果発表の日。

『一学期 期末学力考査』

『成績優秀者発表』

『第三学年』

- 首席 結城 密
- 二位 雨水 刹那
- 二位 風早 織女
- 四位 正樹 美玲衣
- 五位 畑中 美海
- 六位 高山 香澄
- 七位 茨 鏡子

「意外な結果、とみればいいのでしょうか」

結果を見に来ていた織女と密は少し変わった結果に驚いていた。

密の学力が高いのは前回でわかっているため驚きは少ない。しかし、なぜか刹那が織女と並んでしまっている。

「そういえば刹那さん。今回の期末ではすみれさんやあやめちゃんにも勉強を教えていましたね」

「そうなのですか？」

「ええ。リビングに集まって茉理さんも交えて四人でしていました」

「なるほど。あまり自分の勉強時間を取っていなかったのかもしれないですね。だとしても、です…」

それでも織女自身は今回もすごく勉強したのだ。それでこの結果なら、少なくとも刹那にはまだまだ及んでいないことになる。

「おや、密さんと織女さん。今回も争っていたのですか」

「やつほく。密さんと織女さん」

そこへ歩いてきたのは茉理と刹那。二人も成績の結果を見に来たようだ。

「むっ。今回は密さんに負けていますか」

「そうは言いますが、今回の刹那さんは本気を出していないでしょう。教える方に回っていたのを見ていましたから」

「お、おおお…」

「茉理？」

なぜか茉理が震えている。密達は成績表をもう一度見直す。そして、その名前は確かにそこにあつた。

『十八位 仲邑 茉理』

「やった〜！今までの最高順位〜…！」

「やりましたね、茉理」

「刹那さんのおかげだよ〜」

感極まっているのか刹那に抱きついて泣いている茉理は泣いている。そんな茉理を刹那は優しく頭を撫でている。

「二期期からは私も刹那さんに教えてもらおうかしら」

「美玲衣さん」

美玲衣とその取り巻きがいつの間にか結果を見に来ていた。結果を見る美玲衣は小さなため息をつく。

「茉理の成績の延び具合を見るとつい、そう思ってしまうわね」

「せっかくですし夏休みは一緒に勉強しますか？茉理はする気のようにですか」

「そうですね。日程が合えば参加しようかしら。では…」

美玲衣はすぐに離れていった。数人の取り巻きはこちらをしばらく見ていたが、美玲衣が見えなくなる前についていく。

「美玲衣も大変ですね。しかし、次回はもう少し勉強に時間を割り当ててほしいですか」



「これなら私達も何か用意すべきでしたでしょうか…?」

困ったように笑顔を浮かべる織女に刹那は首を横に振る。

「今日のお疲れ会は奉仕会からの慰労ですから照星達がそれほど気にすることではありません。私が役員を慰労するのは私の勝手ですから」

「それはそうでしょうけど…」

「織女さん。刹那さんに何を言っても言いくるめられて終わりますよ」

横からチョココレートの箱に手を伸ばした美玲衣は肩をすくめつつもチョココレートを口に運ぶ。

「織女さん自身、言いたいことはあるのでしょうか、刹那さんを相手に正論を並べたところで針を通すような穴を付かれて論破されます。こういう時に刹那さんを出し抜くなら事前に情報を持って機先を制するしかありません」

「美玲衣は私のことをわかってきたようですね」

「ええ。正論だけでは勝ち得ない。かといって奇策を用いるには私達では技量がたりない。であれば、まず必要なのは情報です。今回のような時に刹那さんに一矢報いるならそうするしかありません」

「よく学んでいます。しかし、こういう催しは照星達も好きにすればよいのです。そこへ、奉仕会役員を招けばいいのですから」  
「…そうですね」

ひとまず織女は納得したのか、チョココレートをつまんでいる。しばらくの間、お茶会の静かな雰囲気の中、密のピアノ演奏や茉理のヴァイオリンを聴くことでのんびりと過ごす。

茉理のヴァイオリンが終わり、茉理がひと息入れたところで、織女が切り出す。

「ところで、皆さんは夏休みはどう過ごしますの?」

各々にわずかに黙る。まず発言したのは刹那。

「そうですね。とりあえず両親の元へ顔出しした後は去年と同じように過ごすでしょうね。一人旅で日本をあちこち回ると思います」

「ちよっ!?去年、寮生が日々の飯に苦しんでた時に一人旅なんかして

たの?」

「そうですね、美海。夏休みまで寮生のご飯作りなんて真つ平ごめんでしたから。そもそも、食事の用意を誰も手伝おうとしないのにご相伴に与ろうとする人しかいないではありませんか」

「うう〜…」

自覚はあるのだろう。美海はそれ以上言葉を重ねることはない。

「しかし、今年はどうしましょうか。両親に顔を出しに行くのは決定ではありませんが、その後は寮に戻るべきでしょうか」

「あら、何かありますの?」

「今年は密さんもいますし茉理の相手もしたいですからね。後は、皆さんの都合が合えばどこかへ出かけるのも面白そうではあります」

「うーん、私はできるならヴァイオリンの練習とかはしたいんだけど〜」

「さすがに毎日それをさせていてはせっかくの順位も落ちるでしょう。そんな悲しい結果にさせる気はありませんよ」

「だよね〜…。はあ…」

茉理のため息に刹那は茉理の頬を引っ張っている。

「勉強については茉理から言ってきたことでしょうか?」

「ふえ〜。忘れてないから放して〜」

「美玲衣さんはどうですか?」

じゃれている二人は放っておいて織女は美玲衣に話を振る。

「私ですか?今のところは特に何も…。早めに課題を終わらせておこうとかその程度しか決まっていますよ」

「なるほど。密さんはどうですか?」

「私は刹那さんと同じような感じでしょうか。お世話になっている方に顔を出すくらいしか予定は決まっていますよ」

「夏休みって予定で埋まっているものかと思いましたが、そういうわけでもないんですね」

「小学生では無いのですから、毎日が遊びで埋まるわけでもありません。それに、ほとんどの方が受験を控えています。遊びばかりに目を向けているわけにもいかないのでしょう」

織女の嘆息に鏡子が補足する。確かに今年はここにいる半数以上が受験に勤しむ者だ。遊びにばかり行ってはいられない。

「まあ、せっかくですから何か計画できないか考えておきましょう。参加者はその都度募ればいいのでしようし」

「刹那さん、何か算段があたりで？」

「ええ。一つだけ。ただ、先方に確認等を取らないといけませんし、何名なら可能かも確認しないとイケませんから」

「楽しみだね」

ようやく頬を解放してもらった茉理が自分で頬を撫でながら同意を示す。

「まあ、なんにせよ。夏休みは楽しみましょうか」

皆でお茶を飲んだりしながらのんびりと。そんな夏休みも悪くないだろうと刹那は思う。



## 第23話 夏休みに入つて…

—刹那side—

夏休みに入つてすぐ、刹那は家へと帰つてきていた。

「ただいま、父上、母上」

「おかえりく、刹那。相も変わらず時間には正確だ。それ自体は美德ではあるが、お前を待つ我々のことをもう少し気にして早く帰つてきてほしかった」

「そうは言いますが父上。私も友人とのこともありますし、こちらへ帰ってくるのも時間がかかるのです」

「わかっているとも。それでも、できるなら早く会いたいと思うのが親というものでだね——」

「貴方。刹那も疲れているのだから玄関で呼び止めるのは止めてください。おかえり、刹那」

「ただいま、母上」

玄関から居間へと向かい、三人でテーブルを囲んで座る。従者がお茶を置き、一息ついたところで——

「——で、だ。刹那、学院の方はどうなんだ？」

「どう、とは？」

「友人関係など、だ。口出しする気はないが刹那の性格を考えると、馴染んでいるのか心配なんだ」

「あのですね。私、これでももう三年なんですよ？」

「そうだな。しかし、だ。去年も一昨年も友人関係の話はほとんどはぐらかされたこちらの身にもなってみてくれ。娘が学院に馴染んでいるのか気になるだろう」

言われてみれば去年も一昨年も照星の方々と喧々諤々やり合つたことは話していたが、友人関係の話題は出さなかつた気がする。

「今年はたくさんの話相手ができていますね。茉理とは音楽の話をしたり、密さんとは料理について話すでしょうか。あとは——」

いろいろと思ひ出せるだけ話していると、不意に母上が笑いだした。

「どうかしましたか、母上？」

「いえね。去年までは友達のことなんかほとんど口にしなかった刹那が、今はこうやってたくさんの友人のことを私達に話してくれる。それも、とても嬉しそうに。なんだか、ホツとしてしまっ、ね」

「母上…」

本当は今までも気にしていたのかと、刹那は少し申し訳なかった。確かに照星の方々とやり合うことは刹那には楽しかった。しかし、それが日課に近くなり、あまり友人を作ることなく、また学院内で『女帝』と呼ばれるまでの有名人にこそ自身では誇りに思うことはあれど、家族には多くの心配をかけていたのだろう。

———で、あれば。やはり安心してもらうべきだろう。ちょうど学院で話題になったのだ。今頼まずにいつ頼む。

「でしたら、父上。少し、頼みたいことがあるのですが…」

「おっ、なにかな？何でも頼んでくれていいぞ。私に叶えられる範囲で、だが」

「実は——」

その話を、両親が快諾してくれたこと。そしてなにより、とても喜んでくれたことは刹那にとって嬉しいことだった。



「———そういうわけで、行きたい方は後で声をかけてください。美玲衣や織女さんには連絡してますが『ぜひ参加します』との返事はありません。茉理にも聞きました参加の意向を聞きましたし、千歳に至ってはどこからききつけたのやら…」

両親の元から帰ってきた翌日。旅行のことを両親に伝えると二つ返事で了承がもらえた。

「茉理も変なテンションでしたがOKが返ってきていますから、あとは寮の皆さんがどうするか、ぐらいです」

「あの、刹那お姉さま。できれば私達も行きたいとは思いますが、お金は…」

「全額私の方で負担します。とはいっても、せいぜいが宿代と交通費ぐらいでしょうからたかがしれています」

「本当にいいの？私やつつきーとかも？」

「寮生は私で負担しましょう。宿の方は父の紹介ですから元より格安ですし」

月子と美海はハイタッチしている。すみれは恐縮そうに頭を下げているが――

「なかなか豪気な話ですね。密さん、行きますか？」

「ここまでお膳立てしていただいてお断りするのも失礼でしょうから。私達も参加いたします」

「そうですね。となると、私を含めて八名。美玲衣と織女さん、茉理と千歳を足した十二名が参加ですね。あとで父の方には連絡しておきます。日程はまた連絡いたしますが――宿は山間にありますから色々と遊べるらしいですから用意して行くことは先に伝えておきます」

「えつと、例えば？」

「川がありますから水着を用意していけば泳げますし、釣りに向いた場所もあるとのことですね。ハイキングコースもあるそうですから動きやすい格好にすれば一汗かける散歩ができる、と聞いています。あと、宿のお風呂は温泉を引いているそうですよ」

「なに。その至れり尽くせりの旅行」

「あとは…そうですね。美海さんや月子に喜んでいただけそうなのは昔ながらのゲームセンターも完備しているとか。客室にはWi-Fiも付いているそうですよ」

「ヤバい。そんな完璧な旅行に行けるとか今年はずごく良い年じゃん」

説明を聞くほどに美海と月子はヒートアップしている。

「ああ、そうだ。密さん。このあと、時間ありますか？」

「…？ありますよ」

「少しお話しておきたいことがあるので…。そうですね。私の部屋に来てください」

「わかりました」

食後はみんな旅行のことで話し合っている。そんな中で、刹那は密を連れて部屋に戻る。

「それで、私にお話というのは…？」

「えっと、旅館のお風呂についてです。基本的に24時間いつでも入れるのがウリの旅館らしいのですが、逆に言えば密さんの場合、他の方々に女装していることがバレるリスクが上がってしまいます」

「ああ…、確かにそれは困りますね」

「とはいえ、密さんだけが温泉風呂に入れないのも気の毒です。そこで、旅行中の入浴に関しては私と一緒にいることを提案したいと思います」

「なっ——」

密の顔に朱が差す。さすがに恥ずかしいのはわかるが提案しているこちらも恥ずかしいことは理解してほしい。

「私や鏡子であればある程度のフォローは可能でしょう。その辺りのことを勘案すれば選択肢は自ずと絞られてきます」

「いえ…。しかし、いいんですか？」

「まあ、普通に考えるならあまりよろしいことはありません。が、今回はさすがに仕方ないでしょう。一人だけお風呂に関してはのけ者なんて酷い話でしょう」

「私は別に部屋のお風呂でも構いませんけど」

「せっかく旅行に行くのですからそういったところも楽しんでほしいのです。そもそも二泊三日で行くというのに、一人だけ二日間部屋風呂とかどんな嫌がらせですか」

「そんな旅行、自分なら願い下げだ。」

「とにかく。その辺りはしっかりフォローしますから、密さんも楽しんでくださいね」

「…わかりました」

「ああ。あと」

「なんですか？」

「今度、旅行に行く前にみんなで水着、買いにいけますから密さんも来

なさい」

「…えっ?」

——最後の最後、刹那は悪い笑顔を浮かべていた。



—??side—

男性は携帯の通話を切る。軽く伸びをすると、近くのイスに彼女が座る。

「刹那から?」

「ああ。十一名ということらしいが余裕を持たせて十四名で予約は取っておいてあげる予定だ。しかし——」

テーブルに置いたお酒の入ったコップを軽く掲げる。

「あの刹那に多くの友人が出来ていることはとてもいいことだ。あの子は、普通の子とはいろいろと違うからね」

「そうね。貴方、いつまでお休みでした?」

「私かい?」

男性は手帳を取り出して中を確認する。

「二泊三日するのなら五日後が理想かな。三日休んで一日空けてから仕事復帰だ」

「でしたら、そこに刹那の旅行をおけないかしら?」

「難しいことはないだろうが、急にどうしたんだい?」

彼女がこういうことでお願してくるのも珍しいのだが…。

「せっかくですもの。私は刹那の友人達にお会いしたいわ」

「…ふむ」

言われてみればアリかもしれない。私達刹那の娘を受け入れてくれた子達はどういった子なのか。親としては確かに気になるところだ。

それに、彼女と休みが一緒になることも珍しいのだし、羽を伸ばしに温泉に入るのも悪くない。

「行こうか。せっかくの休みなのだし」

「そうね。娘のために旅館に連絡するのだもの。私達のお部屋も一緒

「に取っても問題ないわよね」

私はきつと悪い笑顔を浮かべているに違いない。だって、目の前の彼女も同じ笑顔を浮かべている。

「楽しみね、貴方」

「——ああ。確かに楽しそうだね、これは」

さて、娘のために旅館へと連絡を入れよう。ついでに、私達の予約も済まさせてもらうとしようか。

## 第24話 旅行く一日目く①

―刹那side―

父上から旅館の予約が取れたと連絡をもらってから五日。今、私達は旅館の前にいる。

「「いらつしやいませ!」」

出迎えるは両サイドに列を成して挨拶をする割烹着を着た女性と、ラフな着物を着ている男性の従業員。

ここの従業員は良い品物を使っているのが一目でわかる。この歓迎もとても気分がいい。

「行きましょうか」

「え、ええ。そうですね」

振り返った先では寮の皆さんが旅館を見上げている。どうやら茉莉や美玲衣、織女さんも同様のようだ。どうしたのだろうか？

「織女さん。この旅館、確かすごく有名な旅館では…?」

「はい。確か、数年後まで予約で埋まっていて、たとえば大富豪の間でも容易には予約など取れない、はず…です」

「刹那さんの家がすごいところだと確認させられる一面、でしょうか…」

「そう、ですね。風早グループでもここの予約を取るのは至難だと思います…」

なにやら後ろの二人は難しいことを話している。別に数年後まで予約があつても、この旅館は常時、突発的な利用者のために数名分の予約枠を確保してくれているらしい(父上談)。

「お久しぶりです、刹那お嬢様」

「ああ。お久しぶりです、館長」

一人だけ執事服を着た初老の男性がこちらに会釈している。この旅館の館長であり、父上の古い友人らしい。

「今回は急な予約に対応していただき、ありがとうございます」

「いえ。刹那お嬢様が数年ぶりにうちを利用してくださるとご連絡いただいた時は大層驚きました。ましてや、学院の学友の方々と旅行す

るためにも。そのためにうちを使っていただけるのであれば、私としてもこれほど嬉しいことはありません」

「久しぶりに会うというのに、おおげさが過ぎますよ。それに、このお出迎えもそうです」

「いえいえ。今日は刹那お嬢様以外にも大口の宿泊客がいらつしやいますので。一番最初に来られたのが、刹那お嬢様達だったというだけのことですよ」

「なら、いいのですが…。では、館長。お部屋へのご案内、お願いできますか？」

「かしこまりました」

館長が数名の従業員を呼びつけると、すぐに館内へと案内された。向かったのは館内三階の大部屋。

「こちらは基本的には団体客のお客様の宴会などに使われている大部屋になります。今回は皆様の食事を用意させていただく部屋になりますので、覚えておいてください。個別のお部屋に関しては一部屋が二人ずつのお部屋になっており、こちらの大部屋からの並びになります。」

この階で宿泊されるお客様は皆様だけになりますので、お部屋を間違えた場合でも問題のないようさせていただきました」

「ありがとうございます。部屋には私達で分かりますから、ここまででけっこうです」

「わかりました、刹那お嬢様。では、皆様。今日より三日、よろしくお願いたします。何かご用命の際は各お部屋備え付けの内線よりご連絡ください。我ら従業員がすぐに参ります」

恭しく頭を下げて、従業員達は去っていく。

「さて、部屋割りを決めましょうか？」



部屋につくと荷物を置く。部屋の間取りとしては和室が二部屋と窓際のくつろぎスペースが一部屋。冷蔵庫、テレビ完備。



「久しぶりに来たのですが、内装はほとんど変わっていないようですね」

「あの、刹那さん。どうしてこの部屋割になったのでしょうか？」

刹那の相方は密だ。というのも――

「本来であれば密さんには鏡子さんと同部屋の方がいいと思ったのですが、鏡子さんから『諸事情あって千歳さんと同部屋にしてください』と聞いていますから。そうなるかと密さんの秘密のことを考えると私しかないでしょう？もちろん、バレる覚悟で織女さんと同部屋というのもありだとは思いましたが」

「いえ、ありがとうございます。ところで鏡子さんのいう『諸事情』とは？」

「さあ。それこそ私にはわかりませんよ。密さんの方がわかると思っただけですが…」

「いえ…。私もわかりません」

そうなると千歳と鏡子の間で何らかの密約みたいなものでもあるのだろう。さすがに刹那とてそこまで首を突っ込むつもりはない。

「さて、荷物は置いたわけですが。密さんはこのあとどうしますか？うかうかしていると織女さん辺りに温泉に拉致されかねないと思います」

というより、間違いなく捕まるだろう。彼女のことだからこういったタイミングを逃すとは思えない。

「やはりそう思いますか…？」

密もそこは気になっているようだ。まあ、旅館に着いた最初の行動として温泉に向かうのは汗を流す意味でもありだろうし。

「どうでしょう？私は久しぶりのこの辺りを散策しようと思っているのですが…」

「お供いたします」

「では、織女さんが来る前に行きましかうか」

他の方々が訪ねてくる前に密さんを連れて旅館を出る。受付に散策に行く旨は伝えておく。

「――さて、周辺は変わっているのでしょうか」

刹那も前回来たのは五年以上も前の話だ。周辺がどうなっているのかはわからない。わからないからこそ、楽しみだ。



— 鏡子 side —

部屋割はごまかしこそしましたが千歳さんと一緒にさせていたいただきました。千歳さんの口が固いのはよくわかってはいますが、何か起きてからでは困ります。

密さんには悪いとは思いましたが、刹那さんがいることですし旅行中の密さんのフォローは丸投げしておきましょう。

「——で、千歳さんは何をしているのですか？」

部屋に着くなり本人が持つてきていた旅行鞆の内の長細い方を開けている。

「刹那お姉さまに聞いていたのですが、この近くには川があつてその上流の辺りにいけば釣りが出来るとのこと。こういう機会でないとなかなかできませんからね、釣りなんてものは」

鞆から取り出したのはバラバラのパーツに分けられた釣竿のようだ。しかも、少なくとも数本は用意しているように見えた。

「釣り、するんですか？」

「ええ。釣りは昔からの趣味でして。釣り糸垂らしてボートとしているの、けっこう好きなんですよ。鏡子さんも来ますか？釣竿だったら貸しますよ」

「そうですね…」

目の前の相手は今からでも出ていく気満々だ。元々、見張りのために部屋割に口出したのだし——

「わかりました。ご一緒しましょう。しかし、私は釣りなんてほとんど経験ありません」

「そこは私が教えましょう。釣り仲間が増えるかもしれないのですから」

鞆を閉じるとそれを肩に掛けて千歳が立ち上がる。二人並んで部

屋から出たところで、隣の部屋からすみれさんとあやめさんが出てきた。

「千歳さん、鏡子お姉さま、どこか行くのですか？」

「千歳さんに誘われてこれから川釣りに行くところですよ」

「まあ。面白そうですね。すみちゃん、行きませんか？」

「ええ、ええ。私達も一緒に行っても構いませんか？」

「ええ、ええ。釣り仲間が増えるのは大歓迎です。釣竿は私的に持ってきているのが複数本ありますから四人で行きましょう」

「ところで、千歳さん。釣りのできる場所までの道は知っているのですか？」

『受付で聞けばいい』と刹那お姉さまから聞いています。その辺りは大丈夫ですよ」

受付に向かうと地図を渡されて懇切丁寧に釣り場所までの道筋を教えてもらえた。それとどうやら刹那さんと密さんはすでに散策に出かけていると受付の従業員から話が聞けた。

どうやら出かける際は受付でどこへいったか伝えておけば、他のメンバーが聞きにきた時に伝えるシステムを取っているようだ。

「こちらの川では主にヤマメやニジマスなどが釣れますが、もし数が釣れたようでしたら戻ってきていただきました際に受付にお預けください。夕食時に塩焼きなどで提供させていただきます」

「わかりました。その時はよろしくお願いします」

「それでは、いつてらっしゃいませ」

受付から離れて旅館から出る。夏真っ盛りだというのにこの辺りはずいぶんと涼しい。

「ここから離れてはいますが、避暑地があるとのことですよ。そういった場所にあるのでしょうかね」

「さて、この四人でいくつ釣れるでしょうか」

「千歳さん。貴女と違って私達は素人なのでですから釣果があるとは思わないでください」

「わかっていきますとも。最低限の数が釣れなければリリースして帰るつもりですから、今日は楽しむことを優先しましょう」

ウキウキと楽しそうに歩き出した千歳の後ろを鏡子達について歩く。

「釣りはどんな感じなのか、楽しみですわね、すみちゃん」

「そうね。初めてだけど、釣れるといいわね、あやちちゃん」

（まあ、やったことのないことですし、純粹に楽しんでみることにしましょうか）

第25話 旅行く一日目く②

—織女 side—

部屋に着いて荷物をひとしきり片付けたところで密さんの部屋に向かったが、部屋にはすでに密さんと刹那さんは居なかった。

受付に確認に行くとどうやら二人で散策に向かつてしまったらしい。

諦めて部屋まで帰ってくると、部屋の前に美玲衣さんと茉理さんがいた。

「お二人とも、どうかしましたか？」

「ああ、織女さん。刹那さんを温泉に誘いに来たのですが部屋に居なくて。もしかしたらこちらにお邪魔しているのかと思って」

「なるほど。先ほど受付で聞いてきたのですが刹那さんと密さんは周辺の散策に出ているようですよ」

「え、刹那さん居ないの？」

「どうやらそのようですね。こういう時は動くのが早いのですから」

本当に。こういった時は密さんもアクティブといえますか…。

「あつ。じゃあじゃあ、織女さんは温泉行かない？」

「私、ですか？」

確かに密さんと出かけることは空振ってしまいましたし、温泉に向かうのもいいですね。ですが——

「少しお待ちいただけますか？花さんはどうか、誘ってみます」

部屋にほったらかしにしてしまった花さんを誘いましょう。旅先で一人、部屋にいるのもかわいそうですから。

花さんに声をかけると二つ返事で了解が返ってきた。部屋に備え付けの浴衣とタオルを持って出ると、待っていたいただいた美玲衣さんと茉理さんの二人と共に温泉へと向かう。

「それにしても、刹那お姉さま。私達の旅費、全部負担してくださいっているのって申し訳ないです…」

「刹那さんってお金使う時は毎回ドカツと使うよ。前に買いたいもの見つけた時も店から全部買い占めてたし」

「あの人は金銭感覚というものは大丈夫なのでしょうか…？」

「うーんとね。普段はあんまり使わないから、ここぞというときにたくさん使うようにしてるって前に言ってたよ」

「なるほど。使う時は一括で大量に使うということですか…」

「その使い方もどうなんでしょう…」

使わないよりは使った方がいいのはわからなくはないが、いくらなんでも極端過ぎると織女は思う。

「その辺りは刹那さん、あんまり気にしないからね」

「茉理さんは刹那さんと長いようですけど…」

「あつ、お風呂見つけ！」

茉理の一言でとりあえず会話が途切れる。全員服を脱いで温泉につかる。

「いい湯だねえ」

「本当に…。これなら、何度でも入りたくなるわね」

「そうですね。しかし、刹那さんと茉理さんは仲良くなった経緯というのはどのような…？」

「ああ、それはね」

茉理の話す内容は織女にとっては意外に感じた。衆目を集めてしまふことは織女自身あることでもあるが、刹那もそんな感じだと織女は思っていた。

「よく勘違いされてることなんだけど、刹那さんって別に『注目されたい』とか『目立ちたい』って気持ちは持ってないんだよ。振る舞いから目立ってて、照星の人達にも向かっていくから『それはおかしい』みたいに言われるんだけど、刹那さんって他人へ求めるものが高過ぎるんだよ。だから、一芸を持ってる人にはむしろごく世話焼きな一面もあるよ」

「いわれてみれば…」

美玲衣もそうだし茉理もそうだ。自分もそうだと自惚れる気はないが、確かに刹那の周りには一芸に秀でた人が多い気はする。

「刹那さんって『自分ができるから他人もできる』って考えるみたいなんだよね。だから、自分の持ってないものを持つてる人にはとても優

「しいし、世話焼きなんだよ」

「なるほど。だから茉理には妙に優しいんですね」

「えへへ。私はあんまり釣り合うようなものは持ってないって最初に伝えたらさ。『楽器の演奏をできる貴女がそんな卑下などするべきではない。私は貴女を尊敬する』って言われちゃって。」

「気になったから刹那さんにいろんな楽器を弾いてもらったりもしたんだけど…」

「あの人ならなんでもマスターしてそうですね」

「それがねえ」

美玲衣の相づちに茉理はクスクス笑っている。

「どんな楽器を渡してもまともに鳴らないの。私、太鼓で音が出なかった人、あの時初めて見たよ」

「ブフツ！」

堪えたつもりだったが噴き出してしまった。太鼓が鳴らないとはどんな楽器オンチなのか。

少し離れて話を聞いていた花さんも肩を震わせている。ツボに入ったようだ。

「ふふっ…。刹那さんにも苦手なことがあるんですか」

「本人には私が言ったこと内緒にしてね？」

茉理が口許に人差し指を立てるのを私達は真似する。面白い秘密を知ってしまいました。しかし、あの完璧超人に見える刹那さんでも苦手なものがあると知れて少し肩の力が抜けたのも事実。

二人について温泉に来たのは織女にとってとはとても有意義な時間になった。

温泉から上がった四人の内、花さんは美海さんと月子さんの様子を見てくると行ってしまった。確かにあの二人、旅館に着いてからも部屋から出てきていない気がしますね。

茉理さんは美玲衣さんを連れて早くも土産物屋へ行ってしまった。

「私は、どうしましょうか…」

よく考えればこうして一人になることは家以外では珍しい気がする。せつかなのだし旅館周辺を散策してみるのも面白いかもしれ

ない。



——なんて意気込んで出てきてみれば…

「ねえ、君一人かな？」

「よかったら俺達と遊ばないか？川まで行けばいろんなアウトドアで  
きるしよ」

旅館を出て五分と経たない内にこのありさまだ。いわゆるナンパ  
というやつなのはわかるが、なぜ旅先でまでこのようなことをするの  
か…、いや、旅先だからしているのでしょうか？

「申し訳ありませんが友人と来ていますので」

「えー。その友人さんは周りにはいないじゃん」

「一緒にいない友人なんかほつといて俺達と遊ぼうよ」

「いえ、けっこうです。失礼いたします」

小さく会釈してすぐに離れようとしたが遅かった。男の一人がこ  
ちらの手首を掴んでいる。

「…っ、離してください」

「ちよつとぐらい付き合ってくれたっていいじゃん。なめてんの？」

「離して、ください！」

『君達。女性の扱いというものは気をつけるべきだ。そのような強引  
さでは相手に失礼だよ』

男達が振り向いた先には一人の男性が立っていた。とてもラフな  
格好なのに何故か立ち振舞いに気品が感じられる。

「なんすか、おっさん」

「邪魔しないでもらえますか？俺達、この子と楽しく遊びたいだけなん  
だよね」

「そうかい？しかし私には君達が彼女を強引に連れていこうとしてい  
るようにはしか見えなくてね。まずは彼女の手を放しなさい。話は—  
—」

「うるせえってのー！」



こちらを掴む男とは別の男が男性に殴りかかる。だが――  
「――ふむ。手加減はいらない、と見ていいようだね」

一瞬、男性の姿が消えたように見えた。男の腹に二発、顎に一発、襟首を掴むと引き寄せる勢いに乗せて鼻っ柱に一発。

鼻血を出してふらつく男の腕を掴んですばやく背中側に回ると――

「私の勉強代は高いよ」

ゴキン、ともボキン、とも嫌な音が聞こえた。男の肩が外れていて、前腕も半ばでありえない角度に曲がっている。男は悲鳴をあげることもなく、その場で泡を噴き、血塗れの顔のまま倒れ伏した。

「――さて。あらためて君に言おう。彼女の手を放しなさい。話はそれからだ」

「な、なんなんだよ、いったいさく!?!」

こちらを男性に向けて振り抜くと男は走り去っていった。私はよろけはしたが、男性に受け止められていた。

「まったく…。女性の扱い方を知らぬ不埒な男がいたものだ。しかも、一緒にいた相手をこの場に置いていくなど…。ひどい裏切りをするものだね、彼は」

『天形殿!』

声が聞こえるとすぐに屈強な男が一人現れる。

「あくあくあく。すでにやり合った後じゃないですか。天形さん、手を出すのは止めた方がいいって言ってるじゃないですか」

「私から手を上げてはいないさ。殴りかかってきたから相手も見ずに挑む無鉄砲な若者にお灸を据えてやったただだよ」

「結果としてここまでされりやあ過剰防衛ってやつになります」

「全治3ヶ月程度に収めたつもりだがね。重傷なのはせいぜい腕の骨折で後は鼻血ぐらいのものだよ?」

「はあ…。とりあえず、この場合は俺が旅館の方となんとかしときますんで、天形さんはそのお嬢さんの付き添い頼みます」

「そうだね。そうしよう。ところで、私を探していたのではないのかい?」

「ああ、そうでした。奥方様が『また見失いました。申し訳ないのだけど探してきてもらえますか?』と言いましたから」

「失敬な。私は消えたつもりはないぞ。このお嬢さんの声が聞こえたから離れただけだ」

「わかっちゃいますが、とつと戻ってください。あれで怒らせたら怖いことぐらい、天形さんも理解はしてるでしょう」

「…うむ。それはそうだ」

話は終わったのか、男性はこちらに手を差し出す。

「それでは、お嬢さん。旅館までの間ではありますが私のエスコートを受けてはいただけますか?」

「…はい。お願いします」

手を握ると男性は朗らかに笑う。数分後、織女を連れていたことで奥方様と呼ばれた女性に笑顔で迫られてこちらに『説明をお願いできないだろうか』と涙目で訴えてきたのも、きつと良い思い出になりそうだと、織女は思う。

第26話 旅行く一日目く③

—密side—

刹那さんとの散策を終えて旅館へと帰ってきたタイミングで、釣竿片手にバケツを持った千歳さん達に出会いました。

「そちらは釣りですか？」

「ええ。もの見事にボウズですが」

笑いながら空のバケツを見せてきた千歳の後ろで、ブツブツとنايةら怒り気味の鏡子の姿。

「どうかしたんですか、鏡子さん」

「いえ。アタリはあつたんです。なのに、皆さん一匹も釣ることができませんでした」

「そのわりには周りにいた釣り人の方々はひよいひよい釣っていました。何かコツでもあつたんでしょうか？」

釣り側はその後ろもあだこうだ言いながらついてくる。食事処の二階へと到着すると織女さんが見慣れない男女と楽しそうにしている。こちらの気がついたのか織女さんが手を振っている。そばにいた男女もこちらへと振り向く。

——と、刹那さんが足早に男女へと近づいていく。

「なぜ、居るのですか？」

「なぜとは失礼だな。久しぶりの休暇なんだから母さんと一緒にここへ予約を取ったんじゃないか」

「確信犯ですよね」

「あらあら。刹那さんは怒っているかしら？」

「あの、刹那さん。こちらの方々は知り合いなんですか？」

妙に親しげに話し始めた刹那に織女は気になって話しかける。刹那は小さくため息をつくと——

「私の父と母です」

「天形宗玄あまがたそうげんという。刹那の友人方、娘が世話になつている！」

「天形神楽あまがたかくらと申します。刹那さんの友人の方々、はじめまして」

全員が固まるなか、刹那はただただ深いため息をついていた。



部屋の方から花ちゃん先導の下、美玲衣さん達が食事処へやってくる。と改めて二人は自己紹介を行う。

しばらくすると料理が次々と運び込まれ、天形夫妻の周りには数名の屈強な男が座っていた。

「貴方達もグルですか」

「グルたーひでー言い方っすよ、姐さん。俺達はたまたま天形殿に護衛頼まれたからついてきただけでさ」

「そもそもこの旅行。いつ計画されていたんですか」

「刹那が帰ってくる半月ぐらい前だよ。行き先は刹那がこの旅館に決めた時点で切り替えたんだがね！」

「確信犯じゃないですか」

父親である宗玄と喧々諤々やり合う刹那を密達は料理に舌鼓をうちながら見守っている。そこへ母親である神楽が近づいてきた。

「改めまして。刹那の母親である天形神楽と申します」

「これはご丁寧に。風早織女といえます」

「結城密です」

「あら？貴女が密さん…？」

「えっ、はい…」

神楽さんはしばらくこちらを眺めていたが――

「そうですか。貴女が…」

「あの、何かありますか」

「いいえ。刹那さんのお話にはよく『密』というお名前があげられますので。どのような方なのか、気になっていたもので」

「はあ、なるほど…」

ふと気がつく。織女さん以外は少し離れて料理を食べている。『天形一家の対応は任せた』という言外の判断だろうか。

しかし、二人――茉理と美玲衣は近づいてきた。

「私達も参加していいかな、密さん？」

「ええ。大丈夫ですよ」

「はじめまして。正樹美玲衣といます」

「はじめまして。中邑茉理っていいます」

「美玲衣さんと茉理さん、ね。はじめまして」

「ねえ、神楽さん。どうして刹那さんの名字は二人と違うの？」

誰もあえてしなかった質問を、茉理は迷わずにまず質問する。それに対して、返ってきたのは優しい笑い声だった。

「貴女方が知っているのかは存じませんが、『天形』という名前は一部の方々にとってはあまり聞きたくない不吉な名前とされています。そのため、刹那さんは学院に通うにあたっては私の旧名——『雨水』<sup>あまみ</sup>の名を使うようにしているのです」

「あの、やはり天形というのはあの、天形SPの……」

織女の質問に神楽は頷く。

「はい。我が家は『天形SP』。『天形—security poli  
ce—』の天形ですとも」

「やはり、そうなんですか……」

「織女さん。やはり、というの……？」

美玲衣は聞き慣れない名前前で聞き返す。しかし、密と織女は知っている。

「天形SPは民間で運営されている『SP』の中でも全世界トップクラスの警備会社。過去の要人警護ではアメリカの大統領やローマ法王の護衛についていたこともある、知る人は言葉の通り『向かい合っ  
てはいけない』人達です」

「風早グループではあまりお願いしたことはありません。そもそも天形ともなれば日本国内においては完全な過剰戦力です」

「そうですね。私達は日本国内での運用は想定には入れてはおりません。要人警護程度であれば問題なく行えるとは自負しておりますが」  
話を区切り、お茶で一度口を潤す。

「もし、皆様の周りで我々の力が必要であると感じるようなことがあれば、刹那さんの方から話を通していただければ格安でお受けいたし

ましよう」

「あ、あはは…」

織女はただ笑うに留めた。リップサービスだとしても天形の力を借りられる可能性はあまりにも魅力的過ぎるのは大グループの次期トップゆえだからか。

結局、夕食は和やかな雰囲気のままに終わっていった。



―刹那 side―

皆で温泉にも入り、後は寝るだけという時間になった頃。刹那は密を連れて夕食の広間へと出てきていた。

「さて、密さん。もう少しだけお待ちください」

「えっと、何か始まるんですか？」

「ええ。貴女にとっては大切なお話になります」

少しすると千歳を伴って鏡子が現れる。

「遅くなりました」

「いいえ、鏡子。まだ相手方は来ていませんから遅くありませんよ。

…千歳も来たのですか」

「寝ようと思ったのに鏡子お姉さまに無理矢理…」

欠伸を噛み殺すふりをしながら顔は笑っている。それを鏡子は憮然とした表情でぶった切る。

「連れていけないなら織女さんの部屋に突撃してくると脅した相手とは思えない言い分ですね？」

「あはは…。ですが、鏡子お姉さま自身、私を一人で部屋に置いていくことはしたくなかった。私の脅しは渡りに舟でしたでしょうか？」

「…ノーコメント、です」

千歳は部屋に置いていくのは怖い。自分の荷物を漁られる可能性はゼロではないのだ。あの、好奇心の塊の前に慢心は厳禁だ。

「ところで、私と密さんが呼び出された理由はなんででしょうか？」

「少し待っていただけますか。呼び出した本人がまだ来ておりません

ので…」

少しして、呼び出した本人——宗玄が神樂をお供に入ってきた。

「お待たせして申し訳ありません」

「ちゃんと連れてきてくれたね、刹那」

「父上に真面目な顔して言われれば連れてこないわけにもいきませんから」

夕食中、私と話す際に垣間見えた顔。あれは前線で指揮を取る者の顔だった。つまり、父上はここに慰安旅行兼仕事で来ていることになる。

「まあ、まずは皆座りなさい。神樂、すまないが旅館長にいつて何か飲み物を用意させてくれ。アルコール以外で頼む」

「かしこまりました」

母上は頷くと襖を静かに開けて去っていく。私達は車座になって座る。

「さて、神樂が頼みにいつてくれている間にも軽く説明はしておこう。まずは我々、天形SPは慰安旅行としてこちらに来てはいるが、実は仕事も受けてきている。仕事の内容としては本来であれば守秘義務からも君達に話すべき内容ではないのだが、現場に二つの戦力が用意されている以上、認識のすり合わせはしておくべきだと判断した」

「認識の、すり合わせですか…?」

なるほど。つまり、父上達は——

「風早幸敬社長から仕事の依頼を受けてここへ来ているということですか」

「——つ!」

鏡子と密さんが一度こちらを見てから父上に視線を戻した。父上はこちらを見て笑っている。

「鋭いね、刹那」

「食事前、父上は慰安旅行の先を私の行き先へ合わせたと言いました。そして、先ほど『仕事も受けてきている』と言いました。つまり、当初のところ仕事を受ける予定は無かったといったところでしょう」

その言葉に父上は素直に拍手を返してきた。

「その通りだ、刹那。私達は当初は別の場所へ慰安旅行を考えていた。そのため、依頼も断るつもりをしていた。だが、刹那が友人達と旅行に行くといい、その中に『風早織女』がいて、旅行先を私達に打診してきたことで考えが変わった」

そこまで話して母上が一名の従業員とともにお盆を持って戻ってきた。それぞれの前に温かいお茶が並べられ、父上の隣に母上が座る。

「私達は刹那と久方ぶりに旅行がしたい。幸敬社長は織女さんの護衛を頼みたい。この二つの事柄を刹那さんが持つてきた旅行計画によって繋げることができました」

「まあ、そんなわけだね。当初は依頼を断るために幸敬にはデカイ額をふっかけていたんだが、私達には渡りに舟の話がきたから『ふっかけた額の半値で受けよう』と言ったら即決されたよ」

相当な額をふっかけていたのだろうな、と思う。が、いきなり『半値にする』なんて言われれば頼みもするだろう。

ようやく話が見えてきたのか、鏡子が発言する。

「つまり、この旅行中に限っては織女さんの護衛は貴殿方もいるということですか」

「むしろ私達がいるから君や密さんは旅行を満喫するといい、という大人からのささやかな支援だよ。普段から護衛もしていれば気苦労も絶えないだろう」

「それは、ありがたいとは思いますが…」

「上からのことが心配かい？あまり考えすぎないことだ。私達も仕事である以上は手を抜かない。それに、ここは普通の旅先と比べると格段に安全だからね。君達も、旅行を楽しみなさい」

お茶を飲みきると宗玄は立ち上がる。

「刹那もそういうことだから、明日・明後日はよろしくお願いするよ」  
「わかりました。せっかくなのでからしっかりと遊ばせていただくとしてましよう」

「刹那さん。私達とも遊んでくださいいね？」

「茶目っ気出さなくてもかまいませんよ、母上」



静かに去っていく二人を、刹那達は廊下へと出て見送った。

## 第27話 旅行く二日目く

一夜開けて、二日目。

朝食を終えたタイムミングで織女さんから『今日はみんなで川で遊びませんか?』との提案で、全員水着を持って近くの川縁へと来ていた。更衣室に入り、一番早くに外に出てきたのは千歳と刹那。

「相変わらず思いますが、あの早着替えどうやっているのです?」  
「企業秘密です」

頭から被るタイプのバスタオルをかぶったと思っただけの瞬間にはスク水に着替えた千歳が立っているという手品か何かと見間違えう手腕に、織女さん達は自身の着替えを一時中断していた。

——その陰でそそくさと着替えていた者もいたが。

「そういう刹那お姉さまもどうしてそんな色気もへったくれもないスポーツ水着なんですか」

「すみませんね。身体に合う水着となるとなかなか難しいんですよ。どうしても図体がデカイせいで」

普通のパレオだとかワンピースだとかの水着に憧れないわけでもないが、いかんせん上背があつて男性なみに図体がよい自分に合う水着となるとどうしてもスポーツテイーなものに限られてくる。

「まあ、これはこれで人目は引きますか」

「何を皮算用しているのかは知りませんが写真は許しませんよ」

「わかつてますよおく……チツ」

「予想通りの反応しますね」

少し遅れて出てきたのは鏡子と密。密は腰に布を巻くパレオで鏡子は健康的な四肢を見せるかのような確か…セパレーツという種類だったでしょうか。

「やはり密さんはそういう水着なんですね」

「さすがに他のはちよつと…」

「似合うと思います…、よ?」

楽しそうにからかい口調で千歳が話すのを、おもむろに鏡子が引きずっていった。

「どうしたんでしょうか？」

「さあ…」

鏡子の暴挙に密も首を傾げている。最近あの二人、妙に仲が良いように見えますが…。

「お待ちせしました」

ようやく着替え終わった他のメンバーも出てくると織女はすぐさま川辺へと走っていく。

「さあ！遊びましょう！」

密が走っていくのを見送って、美玲衣と茉理を見る。

美玲衣はタンキニという水着。茉理はワンピースタイプ。

「よく似合っていますよ、二人共」

「えへへ。ありがとう。刹那さんも似合ってるよ」

「ありがとうございます」

はにかむように笑う美玲衣に刹那は手を差し出す。

「この辺りは危ないですからね。手を、繋いでおきましょう」

「え、ええ…」

「じゃあ、反対は私っ！」

手を取る茉理と美玲衣に優しく笑って、刹那は密達の方へと歩いていく。

先に走っていった組はすでに川へと入ってお互いに水をかけあっていて、涼しそうだ。

「私達も行くようよ！」

「はいはい。少しは落ち着きましょうね、茉理」

「ふふっ。行きましようか、刹那さん」

「美玲衣？——っ！」

二人に引つ張られて川へと入っていく。足を入れた瞬間は冷たさに驚きはしたが、すぐに慣れた身体でザブザブと入っていく。



着替えを終えた途端に鏡子お姉さまに引きずられつつも川辺を眺める。

「なかなか涼しげな場所のようで…」

「——この辺りでいいでしょう。千歳さん、少しお話があります」

「なんででしょうか？」

まあ、一人別で引きずられてきたのだから何かあるとは思っていませんけど。

「今回の旅行、貴女はどこまで知っていたんですか？」

「何をですか？」

白々しく聞こえていることだろうとは思っても聞き返す。本当は最初から知っていた。

——天形の人達が来ていることも。風早織女の命を狙っている相手がいることも。

「織女さんが狙われていたことにです」

「そうですね。実のところ、織女お姉さまの命を狙っているのはどうやら複数人いるということ。それぞれに思惑が違っていているらしいことも調べはついていますが、学院内では刹那お姉さまが目光らせていることもあつて手が出せていないようですが」

「刹那さんが…？」

「ええ。あの人はどうやら『有名人』のようですから」

有名人どころか『裏』に足を突っ込んでいる人からすれば『天形刹那』を知らないのはモグリだ。

伝説にもなっている彼女の『偉業』を知っていればこそ、彼女の周囲で不審な行動は取れない。

「そもそも、風早の次期当主に近づくのなら織女お姉さまの命を狙う理由に説明が付きません。息子がいるならそれを送り込んだ方が安全な策といえるはずでしょうし」

「なるほど。確かにそうですね」

しかし、身内から命を狙われている様子はないからそういう意味では風早グループの人間はまともな部類なのだろう。

「それで、織女さんは旅行中安全だと思いますか？」

「はい。正直、天形の人間がいる以上——並の戦力では相手にならないでしょうね」

「気になっていたので、天形SPの戦力ってどんなものなんでしょうか？」

「調べられたかぎりでは、一個小隊もいけば米国の軍隊一師団ぐらいなら足止めしますよ。あの人達は——『天形の人間は人間に在らず』と言われるほどの化け物軍団みたいですから」

まあ、表層的な情報しか集められないほどに天形の情報プロテクトは強固で、ここまでの情報を集めるのに自前のパソコンはカウンセラーで二台オシヤカにされた。

「まあ、鏡子お姉さまの心配もわかりますが旅行中は心配するだけ無駄かと。風早現社長が天形に護衛依頼をしている以上、手を出せば間違ひなく死ぬより大変な目に合うでしょうから」

「刹那さんの家は魑魅魍魎でも飼っているんでしょうか……」

おそらく化け物のトップは刹那お姉さまですよ、とは千歳は言い出せなかった。

皆さんのいる場所辺りに帰ってくると川辺に日除けのパラソルを差して、その下でシートを広げて寝っ転がっている美海お姉さまと月子さん。

川の方では、少し浅瀬の辺りで密お姉さまと織女お姉さま、花さんが何か探している。

「おや、刹那お姉さまや美玲衣お姉さま達の姿が見えませんか」

「刹那さん達なら少し離れた——ああ、あそこにありますよ」

織女さんの指差したのは他より明らかに深くなっている場所に浮かぶ浮き輪に茉理お姉さまが乗ってプカプカと浮いている。それを引くのは刹那お姉さまと後ろから美玲衣お姉さまが押している。

「なかなか楽しそうですね」

「千歳さんもいきますか？」

「いえ。さすがにあの中に混じろうとは思いません。ですが、そちらの探し物が気になるので参加させてください」

「えっと。とくに何かを決めて探してはいませんか？」

そうは言うが織女お姉さまや花さんの手には妙に綺麗な石や透明度の高い歪な半球体があるじゃないですか。

「上流から流れてきているみたいで、綺麗な石がいっぱいあるので水切りをするように集めているんです」

答える織女お姉さまに私は笑う。水切りなど幼い頃にやって以来だ。確かギネス記録とかもあるはず。

今の自分ならどのくらいできるのか楽しみになるのもわかる。

「お手伝いします。鏡子お姉さまもどうですか？」

「そうですね。他にやることもありませんし…」



— 刹那 side —

その後、天形家護衛組の準備によるバーベキューをしたり、集めた石での水切り大会。

各々が楽しんでいるうちに日も暮れて、旅館へと帰ると大浴場に向かうのだが…。

「密さーん…。ダメですね、起きません」

「ダメそうですか？」

「叩き起こしましょうか？」

「いえ。そこまでするのはさすがに…」

部屋のベッドで一息ついていたはずの密はいつの間にか小さな寝息をたてて眠りこけていた。一瞬、皆で行くわけにはいかないからと狸寝入りを決め込んだのかと思ったのだが、何をしても起きないので完全に寝入ってしまったようだ。

「仕方ありません。密さんも疲れているのですから置いていきましよう」

部屋へと呼びに来た織女もさすがに起こそうとは思わなかったのか、私だけついていく。

大浴場を通り抜けると、少し涼しい露天風呂へとたどり着く。そこには美玲衣と茉理、鏡子の三人が入っていた。

「あら。千歳さんは来ていないのですか」

「部屋へと戻ってからいつの間にかいなくなっていました。まあ、いちいち探すのも面倒なので気にしないことにしました」

他のメンバーから少し離れた位置に落ち着くと空を見上げながら一息つく。

「刹那さん」

「うん？」

「隣、いいかな？」

「ええ、構いませんよ」

すぐに茉理が近寄ってきて隣に座る。

「楽しかったね、旅行」

「まだ1日ありますよ」

「そうなんだけどさ。明日は帰りのこともあるからゆつくりは遊べないでしょう？」

「まあ、そうですが…」

「刹那さんは楽しくなかったの？」

「私は——」

久しぶりにゆつくりとした時間を過ごしたという意味でも有意義な旅行だった。こうして、茉理とも旅行に来たのは初めてで——

「——ああ」

「どうしたの？」

「いえ…」

入学してから間もなくして友人となった『仲邑茉理』。気がつけば隣にすることが当たり前になっていて、いつでも気軽に会える親友との初めての旅行。

「楽しかったですよ」

「そっか。良かった〜」

「ええ、本当に」

これからもそばで、そのほんわかした笑顔で隣にいてほしいと想えるほどに…。

「えっと、刹那さん。急に頭なんか撫でてきてどうしたの？」

「なんとなくですかね」

私は『仲邑茉理』という女性が大切な相手になっていたのだと、気づく切っ掛けになった。



## 第28話 刹那の心情 茉理の想い

旅行から帰ってきて早一週間。戻ってきてからは宿題をいち早く終わらせるべく、必要な外出以外では部屋から出ずにひたすらテーブルに向かう日々を送っていた。

「今日は、ここまでにしておきましょうか」

凝り固まった身体をほぐすように動かしながらベッド周りを歩く。座りっぱなしだったから少しでも動いた方がいいという判断だ。

「しかし——」

旅行の時に自分の中で感じた茉理への想い。親友としての分を弁えた感情かと自分に問うが——

「正直なところ、自信はありませんね……」

そばに居てくれるだけですごく安心してしまえる。まるで幼い子どもが親へ全幅の信頼を寄せているように……。

実は自分はまだ母上に甘える子どもではなかったし、幼い頃から身体を鍛えることが好きな部類でもあったから、母上に抱かれて眠るとか頭を撫でてもらうとか……。

普通の子どもならしてもらったことのあることともしてもらっていない可能性はある。それが寂しいとも思わなかったし、自分がそうしたくてそう過ごしてきたのだ。

「まあ、それも原因なのかもしれないですね……」

茉理はゆったりとしている。ヴァイオリンを弾けていた頃は違ったのかもしれないが、少なくとも今の茉理は隣にいとすごく安心している自分がいるのは事実だ。

心地いい——そう感じたことは生きてきた中でもそう多くはないものだ。

「私が男だったら……」

いや、そうしたら茉理に会えていないかと、埒もないことを考える程度には煮詰まっている。なんだかんだと一週間は部屋で缶詰め状態のせいで思考も固まってきているのかもしれない。

「明日はどこか出かけましょうか」

そんな折、スマホが電話を着信した。拾い上げて電話相手を確認する。

「美玲衣…?」

珍しい相手から電話があるものと、電話に出る。

『あの、こちら雨水刹那さんのお電話でしょうか』

「いえ、違います」

『ええっ!?!』

「冗談ですよ、美玲衣」

『……』

冗談に対して返ってきたのは無言。たぶん、抗議されている。

「すみません。美玲衣から電話なんて——というより、私…美玲衣に番号教えていましたか?」

『いえ。茉理に聞きました』

「ああ、なるほど。それで、用件はなんでしょうか」

『もう、いきなり冗談から始めたのはそっちなのに…』

「すみません。どうにも電話にはいい思い出がなくてですね…」

自分から連絡する相手はだいたい思い出がなくてですからかわれるのは自分の方がほとんどだ。

だから、せつかくだから自分もふざけてみたかったのだが、タイミングはあまりよろしくなかったようだ。

『実は、今日の茉理の練習に付き合った際にどこかへ出かけないか、という話になって。映画を観に行くことは決まったのですが…』

「映画、ですか」

前に観に行ったのはいつだったのだろうか。そんなことを思い出そうとしていると…。

『茉理の提案で刹那さんもお誘いしないか、という話になりました』  
「…ふむ。なるほど」

ならばなぜ、わざわざ美玲衣が電話してきているのか。茉理が電話してきてもいいはずだが…。

『茉理は何か』やる』ことがある』という電話する余裕はあまりなさそうだったので私から電話しています』

「そうですか。まあ、茉理の急な奇行は今に始まったことでもないです。だから気にしないことにしましょう。それで、その映画に行くのはいいつですか?」

『明後日を予定していますが、大丈夫なんですか?』

「大丈夫ですよ。一週間も引きこもりしていましたが、身体を少し動かしたい気分でもあります」

『引きこもりって…。何してたんですか?』

「宿題を終わらせるために。もう、粗方終わりましたが」

一週間引きこもったのは伊達ではない。ほぼ終わらせた。電話越しの美玲衣が急に黙ってしまった。

「どうしました?」

『刹那さん、お願いがあります』

「はい、なんででしょうか?」

『映画以降に日を取って勉強を教えてくださいませんか?』

「…?ええ、構いませんよ。しかし、そうですね——」

これならばせつかくです。茉理も誘ってあげた方がいいでしょうね。成績、落とすのは私が許しません。

「映画の時に茉理も誘いましょう。三人でやれば苦手分野は粗方無くなるでしょうし」

『ああ。茉理も誘うんですね』

「ええ。成績、落とさせるわけにはいきませんから」

電話越しに美玲衣が笑っている。

しかし、映画ですか。いつ以来でしょうね、観に行くの。

★

——二日後。

かねてからの映画を観に行く日になって、駅前での待ち合わせということなので早めに来たのだが。

「ねえねえ。君、誰かと待ち合わせ?良かったらさあ——」

早く来すぎたかもしれませぬ。これでかれこれ八人目。そろそ

る追いつくのも面倒になってきましたし、この人を生贄に残りを退けましようか。

「待ち合わせの邪魔をするのは止めていただけませんか？」

「またまた。もうかれこれ10分以上ここに居るのは見てるんだよ。だからさ、君みたいな女の子を待たせる相手なんて放っておいてさ——」

気安くこちらの肩に手がかけられ——迷わずその手を取り、後ろ手に捻りあげる。折れては…過剰防衛になりかねないのでそのまま肩を外させていただく。

「へっ…？あ、いきいつ?!」

「待ち合わせの邪魔をするなど、再三の警告にも耳を貸さず。あまつさえ他人の肩に気安く手を置いた罰です」

地面に倒れ、肩が外れた痛みに悶え苦しむ男を冷ややかに見下ろす。

「待ち合わせの邪魔です。大丈夫、関節が外れているだけですから病院に行けばすぐに嵌めてもらえますよ」

男は痛みで返事すらできないのか、ヨロヨロと立ち上がって人混みの中へと消えていった。あまりの光景に同じように待ち構えていた男達は瞬く間に散っていく。

「鬱陶しいものですね、ああいう輩は…」

今は自分だからいいが某理達にあんなことされている場面でも見ようものなら加減を間違えてしまいかね——？

「…重症かもしれませんね」

何も気にすることなく対象を某理達を置いていた。いや、親しい男性など仕事の現場の彼らぐらいしかいないから身近な人間に置き換えてしまった可能性も…。

「だとしても、これはまずい気がしますね…」

今日一日、二人と一緒にいて平常心で居られるでしょうか…？



— 茉理 side —

美玲衣さんと待ち合わせして刹那さんとの待ち合わせ場所へと向かっていると、遠くに見覚えのある姿が見えた。

美玲衣さんと二人で言っていたけど、刹那さんは予想通り先に来ていて顔を見合わせて笑ってしまった。

「刹那さ〜ん」

こっちの声に気がついたのか手を振っている。旅行以来だから、今日も楽しんでほしいな。

「お待たせしました、刹那さん」

「いえ、大して待ってませんよ。二人は別で待ち合わせしていたのですか?」

「うん。駅前まで行くのに途中で一緒になるから、って」

「万が一、はないと思っただんですが茉理が道に迷わない可能性も——」

「私、そこまで方向音痴じゃないよ!」

「まあまあ。落ち着きなさい、茉理。貴女の普段のおっとり具合を見ていると不安になるのですよ」

「学院まで行けるんだから迷わないよ」

「そうですね。まあ、とりあえず映画館へ向かいましょう。予定時間まではまだあるとはいえ、いい席を取るのであれば早めに行くに越したことはないでしょうし」

そうして、刹那さんと美玲衣さんと映画館へ向かう。ちなみに映画の内容に関しては——私的にはとても面白かったよ。

美玲衣さんは映像に酔ったのか終わってからにはふらふらしてたり、刹那さんは『たまには見に来るようになりますか』なんて言っていたから楽しんでもらえたと思うな。

それからはあちこちでウィンドウショッピングを楽しんだりしながらしていたのだけど…。

「うーん…」

「どうかしたの、茉理?」

「美玲衣さん。やっぱりおかしくないかな」

「何が?」

「刹那さん。なーんか緊張してるように見えるんだよ」

「そうですね…」

美玲衣さんと二人でアクセサリーを見ながら窓に写る刹那さんを眺める。こっちで楽しくしている時は笑っているのに、少し離れると鋭利な感じで周囲を見渡しているのを今日一日で何度も見ている。

「たぶんですけど、周囲を警戒しているように感じますね」

「警戒…？なんで？」

「先ほどから何人か、こちらを見ていた男性の方がいきましたから、それを気にしているのではないかと。いわゆる『ナンパ』というやつです」  
「なるほど。でも、それだけであんなに警戒する必要あるの？」

「おそらく、強引な人もいるからではないでしょうか。刹那さん自身は男性顔負けに強いのだとしても、端から見れば私達は女性三人。男性が話しかけたくなるのもわからなくはありません」

そうなんだ。でも、それって疲れないのかな。私は刹那さんにもゆっくりくつろいだり気分よく遊んだりしてほしい。

この前の旅行も、どこか気をつけていた感じで、それって毎日気を張ってるってことで、そんなの…

「——いや、だな…」

だって、刹那さんにはゆっくりと休んでほしい。私を休ませてくれた人だから…。

## 第29話 ひざ枕

三人で映画を見に行つて、街で買い物をした翌週。  
私達は昼間から刹那さんの部屋で勉強をしている。

「ねえ、刹那さん。これはどうしたらいいの？」

「茉理。詰まる度に聞くのはやめなさい。せめてまずは自分なりに答えにたどり着く努力をしないと普段から教えているでしょう」

「えええ。だって今日は宿題を少しでも終わらせようつて美玲衣さんが誘つてきたから」

「確かにそうだった理由で誘いましたが、楽をできるなんて思ったのは茉理の勘違いでしょう。刹那さんがそれほど甘い人ではないのは茉理の方がよくわかつているのでは」

「そうなんだけどね…」

「だとしても、少しは期待してたんだよ。普段よりは優しく教えてくれるかもつて。」

—— 変わらずスパルタ式だったけど…。

「はいはい。頑張ってください。頑張れば後で作っておいたケーキを食べさせてあげますから」

「本当に…？」

「いいんですか？」

「もちろん。勉強の休憩用にと私が朝から焼いた分ですから。寮の皆さんには手をつけたら『晩ごはんはお楽しみタイムに変わります』と伝えてありますから」

「何するんだろ？刹那さんのことだからロシアンルーレットぐらいならしそうな気がする。」

「さあ、もう少し頑張りましょう。茉理、教えないとは言っていないのですから自分で少しでも努力しなさい」

「はい」

勉強を頑張らないことにはケーキはお預けということだから頑張ろう。

—— ちなみに、ケーキを取りに行った刹那さんが少し膨れて小さ

くなくなったケーキを持って帰ってきたから、盗み食いした人がいるみたいだった。

時間はすっかり遅くなって夜。私や美玲衣さんの前にはいろいろな料理が並んでいる——寮生の人達とは別に。

「茉理と美玲衣の前にある分は私と一緒に食べてください。そちらにはロシアンルーレット要素はありませんから」

ということは寮生の皆さんの前に並ぶ大皿のいくつかにはロシアンルーレット要素が入っているとということだろうか。見た感じ、今日のご飯は中華メインみたいだから春巻とか焼売が怪しい。

「あの、なぜ私もロシアンルーレット側に…?」

どうやら密さん達と遊びから帰ってきた織女さんも食卓についている。ロシアンルーレット側に。

「貴女もケーキを食べたのでしょうか。皆さん、バレないと思っているのでしょうか、今日のケーキには少し癖の強い果物を使ってる関係で匂いがあるんです。それぞれがしゃべる度にその匂いをかぐわせている以上、皆さん同罪です」

睨みつける刹那さんから寮生の皆さん（織女さん含む）は視線を外した。みんな、心当たりがあるみたい。

「——父よ。貴方の慈しみに感謝して、この糧を頂きます。どうかこれを祝福し、我らの心と身体の支えとして下さい」

「アーメン」

刹那さんもこつちに座って、さつさと食事前の祝詞を唱えちやつたからみんな立てなくなった。

じゃあ、私は春巻と焼売が気になるから食べようかな。

「あの、刹那さん」

「なんですか、密さん」

「コレ、ハズレの中身はいったい…」

「ああ、気になりますか?」

「ええ。さすがにそれぐらいは教えてくれませんか」

「春巻はハバネロが細切りになって入っています。焼売にはしつかり



と削ったわさび…辛味が良く出ていますもに肉部分と入れ替わっています。あと、皆さん一つずつ選べる杏仁豆腐の器にはちよつとした果物に整形した『キャロライナリーパー』が入っています。極少量手に入った希少品ですから杏仁豆腐の当たりは一つだけです」

刹那さんの説明に全員の箸が宙をさま迷っている。何人かはとりあえず中華スープやかに玉などを食べて時間稼ぎをしている様子。

「あの、『キャロライナリーパー』というのは…?」

「あつ、確かに気になる。なんなの?」

「ハバネロの数倍辛い食材です。調理時には素手では触れない食材ですから扱いには細心の注意が必要になります」

杏仁豆腐を選び終わったようで、みんなは固まっている。あつ、全員が杏仁豆腐を後回しにした。

「ちなみにですが、余った分は明日の皆さんの朝ごはんにしますから今のうちに全部食べてしまうことをすすめておきます」

刹那さんの言葉に『鬼っ!』とか『悪魔っ!』といった罵倒が飛んでくるけど、刹那さんが睨むと全員視線が下に下がる。まあ、悪いことしたの、あつちだもんね。

あつ、食べ始めた。気になるから見ていたら――

「――っ?!――!?!」

「す、すみちゃんっ?!」

すみれちゃんが口を押さえて声にならない悲鳴をあげてキッチンの方へと消えた。ついで、水の流れる音――と更なる声にならない悲鳴。

「辛いからと水で口をゆすぐうものなら辛味成分以外が先に口から無くなるので、より鋭敏に辛味成分に口の中を蹂躪されるだけですよ」料理を黙々と食べていた刹那さんからの解説。寮生全員がしばらくキッチンを眺めていたがすみれが戻ってくる気配はない。

あやめはすみれが食べて半分になった春巻から赤い細いソレを引きずり出した。

「シヤレになりませんわね…」

「ぐっ?!」

焼売を頬張った美海さんの顔が青くなった。みるみるうちに涙が溢れてきている。

「み、美海お姉さま…?」

「つつきく…。あとは、がんばれ…」

なんとか焼売を飲み下した美海さんがその場で突っ伏してしまった。たぶん、わさび入りがヒット。

「で、ですが、これで安全になりましたね——っ!?!」

安心したように春巻をかじった織女さんが固まる。その目がすぐに涙目になる。

「お、織女さん。とりあえず口の中にある分を出してください」

「——っ…」

介抱するように小さな袋を持って密さんが織女さんの背中をさすっている。ただ、辛味に対しての有効な対策は持っていないのか、それ以上は何もできていない。

「密さん、辛味にはヨーグルトや牛乳がいいと聞いたことがあります」

「…っ!ありがとうございます、美玲衣さん」

美玲衣さんのアドバイスに、すぐにキッチンの方へと消えた密さんに対して——

「対策していないと思われるのは心外ですね。それらは全部、私の部屋の冷蔵庫に移してありますとも」

刹那さんは自分の部屋の鍵を手元で回した。キッチンからは肩を落とした密さんが帰ってきて、織女さんは口元を押さえたまま悲嘆に暮れている。

「ねえ、刹那さん。許してあげられないかな」

「絶対に食べるなどといったものをほいほいと食べた人達が悪い。今回ばかりは簡単に許す気はありませんから」

どうやら今日は刹那さんの逆鱗に触れてしまった様子。

結局、夕食はわさび入り焼売を復活した美海さんが二つ目を食べてノックアウト。杏仁豆腐は月子ちゃんが食べて卒倒していた。



—刹那 side—

寮生にとつては地獄の夕食は終わり、美玲衣と茉理の二人を送ろうと思っただけですが…。

「もうちよつと居たいなあ。ダメ？」

「ダメではありませんが…」

美玲衣は織女さんが帰るついでに送っていつてくれたので茉理を連れて部屋へと戻ってきていた。

ベッドに腰掛ける茉理の前にイスを置いて座る。

「…ねえ、刹那さん」

「なんですか？」

「ごつちに座つてよ」

茉理は自分の横の空間を叩いている。断る理由もないのでイスを戻し、並ぶようにベッドに座った。

「刹那さん」

「なんですか？」

「ふふふ。おりやあ〜！」

「——っ?!」

何を思っただのか茉理は私の頭と肩を掴んで自分の方へと引き寄せらる。いつもであればその程度ではびくともしない。

だが、茉理相手に気を抜いていたのもあり、されるがままに茉理の方へと倒れ——

「むふふ。刹那さん、油断してたね〜」

「あの、茉理…？どうしたのですか、急に…」

「なんとなくしてあげたくなったから〜」

茉理のひざに頭を乗せた格好でベッドに横になつていて自分がいた。頭の上には茉理のお腹があり、視線の先には茉理の胸…でしょうか。

「こうやって見ると茉理って大きいですね」

「もう〜。刹那さん、セクハラだよ〜」

「いきなり引き倒した人に言われたくありません」

『えへへ〜』と笑いながらこちらの頭を撫でてくる。そうすると自分ですごくリラックスできていことに気がついた。

適度に身体力が抜けてベッドにほどよく沈み込む。頭は最上に近い枕があるし、胸の向こうから時々こちらのをのぞいてくる茉理。

「刹那さん、すごく気持ちよさそうだねえ」

「…ええ。いつ以来でしょうか。こんなにもリラックスしているのは…」

本当に…、いつ以来なのでしょうかね。他人を信頼して完全に身を預けているのは――

「私はね、刹那さん」

「ん〜…」

「刹那さんが、いつも私達のためにすごく気をつけてくれたりするのは知ってたんだ。でも、それに私は何が返せるかな〜ってすごく迷ってたの」

「返せるかなんて…。私が勝手にしていたことですよ」

「うん。でもさ、刹那さんは三年近くもそばにいるけれど今みたいに私を頼ったりすることってなかったよね」

「頼ろうにも茉理のスペックが音楽——ことヴァイオリンに偏り過ぎていて頼りにくかったのもありますよ」

「そうじゃなくて…。今みたいに、警戒を解いて、ゆっくり過ごしてくれることもなかったよねえ、って思ったの」

言われてみればその通りだろうか。でも、自分は両親のやっていた仕事を手伝ったりしていた関係で、知り合いとはいえ簡単には心を許すことはできなかった。

——それに、きつと怖かったのだ。信頼していた相手が居なくなるのが…。

「私はね、茉理。怖かったんです。人はいつかお別れをしないとダメになる。だから、深く知り合えばそれだけ強い悲しみに見舞われると」

「うん。でもさ、私は三年も刹那さんの隣にいて楽しかったし嬉しかったし、今もすごく嬉しいし楽しいよ。それに、刹那さんの隣に、

ずっと居たいと思ってる」

「茉理…？」

のぞいてくる茉理の頬がハケで撫でたように薄く赤い。

「刹那さん。私は、刹那さんが——大好きだよ」

「——」

茉理の告白に、私の心は驚くほどに満たされていた。落ち着いているのと冷めているのとも違う。言い表せない、強い気持ちが心にある。

「茉理。念のために確認しますが、私と貴女は女性、ですよ」

「うん、知ってる」

「もしかしたら将来、お互いに好きな男性ができるかも…」

「それもいいね。刹那さんが大切にしたい人が増えたら私も嬉しいな」

「それでも、茉理、貴女は…」

「うん。確認してくれなくても何度でも言うよ。私は、刹那さんが大好きだよ」

ひざ枕のまま、刹那はとても心が満ち足りる気持ちになっていた。

——だから、刹那は動いた。

「えと、わわっ…!」

茉理の腰に抱きついてひっくり返す。仰向けに寝転ぶ茉理の上に被さるように見下ろす。

「止まりませんよ?」

「…うん、いいよ」

「大好きです、茉理」

「大好きだよ、刹那さん」

そのまま、ゆっくりと唇を重ねた——

### 第30話 通った気持ち、バレていた心

——その後。

茉理に寮に泊まる手続きをしてもらい、両親には勉強会をすることになったから寮に泊まる旨を電話で説明してもらって…。

お互いに抱きついて一晩を過ごした。つかず離れず、一晩中話をした。

「——んあ?」

目が覚めたらすでに日は高い。横を見るとこちらに抱きついて気持ちよさそうな寝息をたてている茉理がいる。

その頭を優しく撫でて、頬を突っついてイタズラする。しばらくすると目を覚ました茉理がこちらをのぞいてくるから…、口づけを一回…一瞬だけ。

「ふ、ふふふ…」

「あは、あはは…」

端から見れば少々イタイ子に見えてしまいましたが仕方ありません。お互いの気持ちが通って、決まった翌日なのでから。

「茉理」

「なあにい?」

「これで聞くのは最後にしますが、本当によかったのですか?今なら、まだ引き返すことは可能ですよ」

「うん。大丈夫。私はさ、『雨水利那っていう女性』が好きになったんじゃないかって『雨水利那っていう人』を好きになったの。だから、いいんだよ」

「——わかりました。もう、同じことは聞かないようにしますね。これからも、よろしく、茉理」

「うん、刹那さん」

お互いに着替えてからは部屋の中で本を読んだり、ベッドに寝転んだり、まったりと過ごす。

「まあ、気持ちが通ったからといって何か大きく変わるわけでもないのですが」

「うーん、刹那さん。端から見たらそうは見えないと思うよ?」

今は茉理にひざ枕をしてもらいながら、近くに置いたテーブルからピーナッツをつまみつつ、時折…茉理にも食べさせてあげている。

うむ。確かに端から見たら今の私は別人にしか見えない。

「いいんです。今日は茉理とのんびりまったりゆつくりと過ごすつて決めたんです」

「なんだろう。この刹那さん、すごくかわいい」

茉理に頭を抱え込まれて顔が茉理の胸に潰される。息苦しいけど、これはこれでいいかもしれない。女性の胸って柔らかいですね。私も女性ですが…。

「しかし、何したらこんなに大きくなるのでしょうか…?」

茉理の胸元で頭をぐりぐりと動かす。うむ、とても柔らかい。

「うーんと、大したことしてないよ?昔はヴァイオリン一辺倒だったし」

私の場合、遺伝子異常の関係で胸は大きくならなかった可能性もあるので、茉理の胸はすごく羨ましい。しかし、今日からなら触り放題ということでは…?」

「刹那さん、悪い顔してる」

「すみません。他の女性でも羨むような胸だったのでつい…」

いや、本当に何したらこんなに立派な胸になるのでしょうか?…思考が融けてますね。まあ、こうやってのんびり過ごすのもいいですが…。

茉理から少し離れて深呼吸を数回。よし、思考が戻りました。

「茉理。お昼ご飯を食べたら少し勉強しましょうか。一応『勉強会』という名目で寮に泊まったのですし」

「えー。昨日、すっかりやったよ…?」

「それでも、課題が全て終わったわけではないのでしょうか?8月の頭とはいえ、油断していると夏休みなどあつという間に終わってしまいます」

「わかったよ。でも、誰か他にも誘わない?」

「そうですね。何人か寮生を誘うとしましょう」

起き上がって着替え始めるも茉理は布団から出てこない。

「茉理…？」

「やっぱりもうちよつとだけ寝る〜」

「許すわけないでしょう」

茉理を引つ張り出して着替えさせる。切り替えはしつかりとしてもらわないと。



昼食は軽めのサンドイッチを大量に作り、リビングで勉強会を行いながら食べてもらうことにした。

そのせいか、数名部屋へと逃げ帰ってしまったが、まあ気にするだけ無駄というものでしょう。

「うう〜。美海お姉さま、こういう時は早いですから…」

「月子さん。姉への文句、言いたくなる気持ちはわからなくもないですが、今は勉強に集中しなさい。わからなければ質問するように」

「はい…」

「あの、刹那お姉さま。この問題なんですけど——」

「はい」

勉強に参加しているのは茉理、月子、すみれ、あやめの四名。花さんはすでに密さんと約束していたそうで、2人そろって朝から勉強しているそう。

それを知った織女さんが先ほど密さんの部屋に向かったので、おそらく3人で勉強会をするのでしょうか。

対して、逃げ出したのは美海さん。まあ、あの人はなんだかんだと宿題は終わらせるでしょう。去年もそうでしたし。

鏡子さんはいつの間にか紛れていた千歳と共に逃げるように出かけていきました。千歳はあれで要領はいいので問題ないでしょうね。鏡子さんもそういう人です。

「刹那さん、ここはさつきやった方法でいいの？」

「茉理。まずは解いてみてから聞きなさい。身に付きませんよっ…」



「はい」

ふと、すみれがこちらを見ていることに気がつく。何か観察しているようにも見える。

「すみれ、私をじっと見つめていますかどうかしめましたか？」

「——いえ。なんでもありません。すみません、お姉さま」

「いえ、少し気になっただけですから」

とはいえ、すみれにあんなにじっと見つめられたのも初めての経験ですね。私の顔に何かついていたのでしょうか。

その後も、質問してくる茉理や月子に説明をしながら、勉強会は夕方になるまで続いた。



—すみれ side—

今日は刹那お姉さまに勉強を見ていただけたおかげか、いつも以上にはかどりました。少なくとも夏休みの時間に大きな余力を持てる程度には…。

ただ、少し気になることがあります。聞かない方がいいのかもしれませんが、何かあってからでは困りますし…。

「——よし…」

刹那お姉さまの部屋の扉をノックする。しばらく待つと扉が開いた。

「おや、すみれ。どうかしましたか？」

「夜分遅くに申し訳ありません、お姉さま。実は少しお聞きしたいことがありまして…」

「そうですか。とりあえず、中にお入りなさい。今、お茶を用意しているから待っていてもらえますか？」

「はい、わかりました」

お姉さまの部屋に入るとイスに腰掛ける。待つこと数十分。お盆にお茶の一式を載せてお姉さまが戻ってきた。

「緑茶にしましたが、よかったですかしら？」

「はい、大丈夫です」

緑茶の入られたコップが近くのテーブルへと置かれる。お姉さまはベッド近くのミニテーブルにお茶を置き、自身はベッドに座る。「さて、すみれのお話を聞きましょうか」

「はい。…えっと——」

話す段になつてからふと思う。なんと切り出すのがいいのかと。自分の感じたことをそのまま言葉にするには自分の感覚をうまく言語化できる自信がない。

とはいえ話したいことがあると時間を取っていただいたのに、何も話さないのも——

「もしかして、話しにくいこと？」

「…はい」

「ふむ。では、私から質問しますから、答えられる範囲で答えてもらえる？」

「…、はい」

正直、自分から聞きにくいこと。なら、お姉さまから話してもらった方がいいのかもしれない。

「——では、まずはその話は、すみれ自身のこと？それとも、私のこと？」

「刹那お姉さまのことです」

「ふむ。では、今日の様子からでしょうか。それとも、もつと前からでしょうか」

「そう、ですね…」

気になつてきたのは…。

「この前の旅行の時からでしょうか」

「旅行、ですか…」

お姉さまが次に何を聞くべきか悩んでいる。思い当たることを考えてくれているのでしょうか。

「友人関係のこと、または家族関係のこと？」

「…友人関係です」

「むっ…。そうですか、では具体的な名前をいくつかあげます。関係

のある方の名前があれば首を縦に振ってもらえますか」  
「はい」

再び考えているお姉さまに私は少し気になった。そんなに秘密が多いのか、と。

「まずは、密さん、鏡子さん、千歳さん」

「いいえ」

「では、織女さん、美玲衣さん、密さん」

「いいえ」

「むむっ…？では…、美玲衣さん、茉理さん」

「はい」

首を縦に振ると、刹那お姉さまが青くなった。…青くなった？

「お姉さま？！」

「…すみれ、単刀直入に聞きます。茉理との関係、ですね？」

「えっと、はい。刹那お姉さま」

「むむっ、むう…！」

「えっと、お姉さま？」

立ちあがり、頭を抱えたまま壁に額をつけて何やらブツブツ呟いている。数分間、そうしていたお姉さまは小さな咳払いを一つしてベッドに座り直す。

「わかりました。何を、聞きたいのでしょうか」

「その…。今日は特に感じましたが、茉理さんのことを慈しむように見ていて…。もしかすると何かあったのかな、と…」

「…そんな表情していましたか？」

「はい。大切なものを見ているような…」

「そう、ですか…」

しばし黙考したお姉さまは、観念したように小さなため息をついた。

「それは、あやめや月子辺りも気づいていそうですか？」

「いえ、そのような感じはありませんでした」

「そうですね——わかりました。貴女も奉仕会のトップ。このことを隠し置いて問題になっては困ることがあるかもしれないから、素直

に白状いたします」

「白状…？」

何やら自分が考えていた以上の『何か』を知らされようとしているのでは…？そう思っていたら――

「本日付で私、雨水利那は、仲邑茉理とお付き合いを始めました」

予想の斜め上の事実を知ることになりました…。

### 第31話 不養生

—— 一夜明けて。

すみれは未だに昨日の告白を受け止め切れずにいた。

密お姉さまの作った朝食を食べながらも、昨日の話が頭の中で回っている。

☆

「本日付で私、雨水刹那は、仲邑茉理とお付き合いを始めました」

「……えっ、と。刹那お姉さまと茉理お姉さまが、お付き合い、ですか？」

「はい」

「お二人とも女性、ですよね？」

「そうですね。しかし、お互いに意思の確認はしましたし、キスならしてしまいましたから、付き合い始めたのは事実です。まあ、初日から他の方にバレるような事態は想定していませんでしたが……」

「なる、ほど……。刹那お姉さま、茉理お姉さまとは今後は、どのような……。いえ、すみません」

「すみれが謝るようなことでもないでしょう。今後、とは言いますが基本的には今までと大して変わらないと思いますよ。すみれにわかってしまったくらいですから、もう少し注意して接するようになるつもりですし」

「そ、そうですね……」

「ええ。すみれ、祝福しろなどとは言いません。ただ、見守るくらいでお願いします。私自身、このような気持ちを持つのも扱うのも初めての経験なので……」

☆

あの後、部屋に帰ってすぐにベッドに入って眠ることにした。自分

自身、処理しきれていなかったし、今後は見守ってほしいなどと頼まれるとは思っていなかった。

（今年は、いろんなことがありすぎる…）

奉仕会会長になって半年以上。しかし、学年が変わり、密お姉さまが転入されて、いろんなことが次々に起きています。

この上、自分のお姉さまと知り合いが付き合い始めたなど…、晴天の霹靂でしかなかった。

「はあ…」

朝からため息が止まらない。あやちゃんから心配されているが心労に近い今の状況を彼女に説明しても混乱が増すだけで何のメリットもない。

とはいっても、このまま一人で抱えるべき案件なのかと悩んでいるわけで――

「そういえば、刹那さん、今日は起きてくるの遅いな。いつもなら朝食の準備手伝ったりしてないの？」

「確かに今日はまだ見ていませんね。まあ、刹那さんもゆつくりと寝たい時ぐらいあるのではないのでしょうか？」

美海お姉さまと密お姉さまが刹那お姉さまのことで話している。確かに珍しいと思う。あの人が8時まで起きてこないことなんて、今まではなかったはずなのに…。

「――様子を見てきます」

「すみれさん？」

さすがに昨日、あんな話をしたあとだ。気にならないわけがない。

お姉さまの部屋の前に立つと、数呼吸おいて扉をノックする――しかし、返事が無い。

「刹那お姉さま、入りますよ？」

鍵はかかかっていなかった。もしかしたら朝早くからどこかへ出かけているのかも――そんな考えが浮かび…

「――えっ？」

目の前の光景が理解できなかった。

「お姉さまっ?!」

刹那は、倒れていた。床に横倒しになってすみれの声にも反応しない。慌てて抱き起こして――

「――っ、すごい熱…」

荒い呼吸を繰り返す刹那の身体はとても熱い。顔も紅潮していて、見るからに苦しそうだ。

「待っていてください。すぐに他の方をお呼びします！」

すみれ一人では刹那を持ち上げることはできない。すぐにでも、他の方の力を借りる必要があると判断してリビングへと駆けていった。

医者に連絡を取り、往診していただいた結果は『過労』による一時的な体力の低下による発熱だと診断された。安心できるものではないが、今すぐどうこうするようなものでもないと告げられ、解熱剤は処方された。

ベッドで眠る刹那を、すみれに頼まれて運んだ密とすみれが見守る。

「最近…というより、旅行の時からずっと高いモチベーションを維持していましたし、身体がついてきていかなかったんでしょね」

「そうかも、しれません…」

確かに今までの刹那お姉さまは自室ではけっこうだらしない格好で休んでいることもあった。

もしかするとあれはこうならなかったための自衛みたいなものだったのではないだろうか。

「よく眠っているようですし、私は皆の昼食でも作ってきますね」

「ありがとうございます、密お姉さま」

「また何かあったら声はかけてください」

密お姉さまが部屋から出ていく。静かになった部屋の中で、お姉さまの頬を撫でる。

「あまり、心配をかけないでください…」

規則正しい寝息。目を覚ます様子はない。

「…しばらくは、おとなしくしててくださいね」



—刹那 side—

ひどく寝苦しい。いつもより布団が重い気がする。身体は妙に重たいし、力があまり入らない。

「…う、む…？」

目を開けてみるとそこは自分の部屋の天井。窓から射し込む光はすでに明るく…。

「今は、何時でしょうか…」

身体を起こそうとしてまともに身体が動かないことに気づいた。力をいれようにもうまく入らない。

「起きましたか、お姉さま？」

「…むっ…」

首を動かしてみるとベッド脇にイスを置いてすみれが本を読んでいた。こちらが起きたことに気がついて本を閉じる。

「すみれ。なぜ、貴女が私の部屋に…？」

「朝のことは、覚えていませんか」

「朝のこと…？」

今朝は目を覚まして、顔を洗い、軽く身体を動かしながら——何しましたっけ？

「ベッドの近くで倒れていたんですよ」

「…誰が？」

「お姉さまが、です」

「…私が、倒れた…？」

頷くすみれを見ながら朝の自分のことを思い出す——が、わからない。確か、気合いを入れて着替えに手を伸ばしたところまでは記憶にある。

「なるほど…。で、今の私はどういう状態なんですか？」

倒れたと自覚してからやたらと喉の奥が痛く感じるし、身体は先ほどから妙に重い。

「お医者様の話では『過労』からくる発熱だろう、と。発見が遅れていたら『肺炎』の可能性もあったが幸いそこまでは酷くはないそうです」



「意外な病名を聞いた気がします」

『過労』：過労かあ。今までこれほどまで精力的に動いたのは『あの時』以来かもしれないとはいえ、まさか過労…。

「疲れを侮ってはいけなかった、ということでしょうね」

「そうです。もっと、刹那お姉さまは、ご自愛ください…」

ふと見たすみれは泣いていた。静かに、しかし涙は次から溢れるように頬を伝う。

——心配させてしまった。昨日、あんなことまで言ったばかりだというのに…。

「すみれ…」

身体が重いことなど今は気にするな。とにかく無理やりにも身体を起こす。

「お姉さま…！」

「すみれ…、おいで…」

ベッドレストに背中を預けて、近づいてきたすみれを抱き寄せる。力が入りにくくはあるが、抱きしめられないほど弱ってはいない。

なにより、私を心配して泣いてくれる妹をこのままになど出来ようはずもない。

「心配をおかけしました。貴女が私を見つけたから、貴女が今も私を見てくれているから、私はこうして貴女を抱きしめられる」

「刹那、お姉さま…」

「ありがとう、すみれ」

「——っ…。ふ、…う、くっ…、うえ…」

静かに泣くすみれを入れられるだけの力で抱きしめる。寂しくないように、不安がらせないように…。

ひとしきり泣いて気持ちも落ち着いたのか、イスに座り直して涙をふくすみれを見つつ、布団へと潜り直す。

「しかし、過労…。昔はもっと精力的に仕事に邁進していたというのに、この体たらく…。いや、仕事の時とは違った疲れがたまっていたとみるべきでしょうか…」

「お姉さま、せめて今日明日ぐらいはしっかりと寝て身体を休めてくだ

さいね。私が見張りに来ますから」

「見張りにつて…。私はそこまで心配されるほどにすみれに信頼されていないと…？」

「そうは言いません。言いませんけど、無理して入院とかになったらどうするつもりなんですか。今回は大丈夫でしたが次も大丈夫かはわからないのですよ？」

「ごもつとも…」

肺炎になつていてもおかしくなかったと言われていては反論することもできない。すみれが話を盛って脅している可能性もなくはないが、今の体調がすこぶるよろしくないのは自分の身体だからよくわかる。

そうこうしているうちにあくびが漏れる。身体はやはり休息を欲しているということだろう。このまま目を閉じれば寝れてしまいうだ。

「何か食べておきたかったです…。眠気に勝てそうに、ありませんね…」

「今はそのままお休みください。明日には、動けるようになっていたらご飯を用意します」

「…ふむ。すみれの手作り。楽しみに、寝ることにいたします…ふあ…」

「…えっ、お姉さま？」

眠いので寝ます。すみれが何か言っていますが気にせず寝ることにはしましょう。目を閉じた途端、引きずり込まれるように夢の中へと意識を手放した。

### 第32話 千歳の昔話

次の日。

多少の身体の怠きは残るものの昨日の起き上がれないほどの倦怠感はずでにない——ないのだが…。

「ふわあああ…」

身体としてはまだ寝たりないのかあくびが止まらない。布団に潜り直せばもう一眠り出来そうな眠気がある。

「とりあえず…」

尿意が限界なのでトイレに行くとしましよう。

トイレついでにキッチンで軽く水分補給してから帰ってくるとベッドに潜り直す。眠気が残っているのだし、疲れを完全に抜いた方がいいだろうと二度寝に入る。

「すみれに怒られたくありませんし…ふわあふ…」

寝ているかぎりは怒られることはないだろう。

少し遅れて見に来たすみれは——

「…寝ている」

先ほどトイレの方へと歩いているのは見ていたが、部屋までくるとベッドに潜り込んで寝ている。

「寝ているのでしたら、無理に食事を取っていただくこともないですかね…」

手元を見る。先ほどまで傷だらけになりながらも密お姉さまに習って作ったお粥がある。

「また、改めて持つてくることにしましょう」

キッチンへと下りて、お粥は冷蔵庫に入れるようにしましょう。



—千歳side—

駅前。人混みの中でもその二人は目立つことなく歩いている。

「しかし、鏡子お姉さまが私の買いたい物についてきたいなどと言うとは

「思いませんでした」

「そうですか？」

「ええ。監視する必要があるとかいいえますけど学院に居ない間に私がこの情報を外に漏らしたところで何の役に立つというのですか？」  
「どちらかというと普段の貴女が何をしているのかが気になるのです」

「おや。私のような人間を気にしてくれるようになったんですね」

ふと、鏡子お姉さまの目線がこちらからそらされる。そらした方へと見てみるも特に何かあるわけでもなさそう。

「気にする…。言われてみれば夏休み中までわざわざ一緒に行動する理由もあまり無いのですよね」

「それは、まあ…そうですね」

「しかし…」

今度はこちらを見つめてきた。しかし、鏡子お姉さまの目は無機質な感じで、興味があって見ていることはなさそう。なんとなく、目線を外してしまうのも癪にさわるのであえて見返していると…。

「何がどうとはいいませんが、なんとなく気になるので今日一日は付き合うことにしましょう。今後、探す際の目印も見つけておきたいです」

「私は野良犬か野良猫の類いですか…」

「面倒くささはその二つよりも遥かに上ですね」

酷い言われよう…。でも、仕方ない気もするので反論することなく歩き出す。鏡子お姉さまは少し遅れてついてきた。

「では、今日のところは私についてきてくださいね、鏡子お姉さま…」  
「なんとも摩訶不思議な日になりそうですね」

「酷い言われよう…」

苦笑しながらも、千歳はすごく楽しそうに笑った。

☆

— 鏡子 side —

千歳の行き先は基本的に宛もなく、なんとなく道を選び、なんとなく店に入り、なんとなく気になった商品を見て、気に入った物を買う、という：端から見ればとてもふわふわとした買い物をしている。

(駅前から裏通りに入って、いくつかの路地を歩いたのはわかりますが…)

今の自分が街のどの辺りにいて、どちらを向いているのか鏡子にはすでにわからなくなっている。こうなると千歳を見失うことはそのまま迷子になることを意味する。

(また難しいことを要求される休日ですね…)

千歳は気を抜くとすぐにいなくなる。普通に考えれば視界から外れた程度で見失うことはあり得ないはずなのだが、千歳相手だとさらに起きてしまうから困りものだ。

(まあ、この透明性に近い影の薄さが、平時における神出鬼没に繋がっているのでしょうか…)

——そう考えているそばから見失った。

(…いやいや、待ちましよう。つい今しがたまで視界の端でうろちよろする頭は見えていましたし、この辺りで開いている店は2カ所。どちらかにいるはずですよ)

そうして二つ目の店で何かよくわからないビーズのようなものを物色していた千歳を見つけた。

「千歳さん、お買い物は終わりましたか？」

「ええ、鏡子お姉さま。必要なものは全て買いそろえましたとも！」

目を輝かせてこちらに戦利品を見せてくれるが、何が何に使われるものなのか鏡子にはわからなかった。

千歳の買い物有一段落したことで鏡子の買い物のために駅前へと戻ってきていた。とはいっても暇を潰す用の文庫本だったり、学業のためのノートだったりと実用的なものばかりだが。

買い物を終えて、喫茶店で一息つく。

「千歳さん。どうしてそれほどまで影が薄いのですか？」

「…はい？」

「貴女を先ほどの買い物で見ているだけでも視界から外すと途端に見

失ってしまいました。意識して見ていないと貴女は気がつくといなくなってしまうように感じるのですが…」

実際に密の秘密を知られてからは千歳を探すことが増えた鏡子だが、予測が合ったのは三割にも満たず、その三割も曲がり角や階段だった場合は幻影でも見たかのように見失うことは一度や二度ではない。

「学院では『忍者』などと呼ばれているからかとも思いましたが、それにしては貴女は影が薄すぎる。まるで、蜃気楼かなにかのような…存在感が無いように感じてしまいます」

「そう、ですね。鏡子お姉さま、せっかく一服しているのですし、少し昔話にお付き合いくださいませんか？」

「昔話、ですか」

「ええ。一人の小さな子どもが体験した、悲惨な物語を——」

千歳がコーヒーを一口飲むと、ゆっくりと語り始めた。

「それは、数年前のある休日のこと。一つの家族は山道を車で走っていました。代わり映えのしない景色を眺めながらも、その家族は楽しそうに休日を過ごしていたんです——その時までには。

それは、不幸な話。居眠り運転をしたトラックが家族の乗った車に後ろから追突、挙げ句の果てには山道から外れて車ごとガードレールを乗り越えて崖下へとトラックもろともに落ちてしまった。

あわれ、車は崖下に落ちると同時にトラックと一緒に爆発・炎上。車に乗っていた家族は全員亡くなってしまいました」

「…なかなか悲惨な話ではありますが、それが…?」

「実は、この話にはまだ続きがあります。車に乗っていた家族の一人の子どもはシートベルトが大の苦手。その時も後部座席でシートベルトも締めずに車の中で飛んだり跳ねたりの大騒ぎ。

前に乗っていた両親に怒られようとも気にせずには暴れている始末。そんな時にトラックが追突した。崖下へと落ちてしまった車は追突された拍子に窓ガラスが割れていた。その子どもは偶然にもシートベルトを『していなかった』がために車から投げ出されて、車の落下した場所から少し離れた位置に叩きつけられることになった」

コーヒを一口。口を湿らせると千歳は再び語り出す。

「子どもは偶然にもシートベルトをしていなかったから車の爆発・炎上からは逃れ、命は助かった。しかし、窓から放り出され、木々や地面に叩きつけられた影響は身体中にあり、子どもは幾度もの手術の末に一命は取り留めた。」

しかし、代償がなかったわけではない。身体に刻まれた多くの手術痕。落下した際に頭を強打していたのか脳に一部、深刻なダメージを負っていて事故直後と一年ほど前よりも昔の記憶は子どもから失われていた。

悲嘆にくれながらも死んだ家族をどこか他人事に見つめる子どもはただただ考えた。『どうして自分だけが生きているのか?』——全てを失った子どもは親戚に引き取られ、自分が生きている理由を日々悩みながら今も生きています。

これは、そんなどこにでもありそうな小さな悲劇の物語……

千歳の語る物語を聴き終えて、鏡子は少し考えた。

ルールを守らなかつた子どもは辛くも助かったが、その分多くの代償も支払った。その子どもは、一度死にかけたともいえる。

「千歳、これは、貴女の物語……なのですか」

「はい。今の家族に教えられた、私の本当の家族の顛末です」

少し悲しそうに話す千歳。それに鏡子は少し気にかかった。

「こう言つてはなんですが、貴女は一度、臨死体験のようなものをしたことで影が薄くなったと考えているということですか?」

「今の家族——薄氷うすらいの家族にも姉がいるのですが、義姉曰く『千歳という子どもは、活発で、明るく、どこにでも溶け込めるような元気な子ども』だったそうで。記憶を失った私には理解し難くはありましたが……。きつと、私はあの時にあの世とやらに片足を突っ込んできたのでしょうか。だから、生きている実感が欲しかったのかもしれませんが」

残っていたコーヒを飲み干して——

「情報とは生き物ですから、それに触れていれば実感を得られるのではないか。そんな風に思ったんでしょね、当時の私は」

「だから、新聞部にいると……」

「ですが、鏡子お姉さま——」

顔を上げた千歳の表情には暗い様子はない。むしろ、清々しいようにも見えた。

「鏡子お姉さまとの日々は私には多くの刺激をいただいています。これからも——といつても今年一年だけですが…、よろしくお願いいたします！」

元気な声。昔語りをしていた同一人物とはとても思えない。しかし——

「学院にいる限りは逃がしません。肝に命じておくことです」

今はあえて乗ってみよう。密さんや織女さんのお守りだけでは疲れてしまいそうですから。

自分なりの楽しみを、学院生活で見つけておくことにしましょう。



### 第33話 夏休み最後のイベント

―刹那 side―

その日は朝から一部の寮生と茉理、美玲衣を集めてリビングにて最後の追い込み勉強会と銘打って宿題の残務処理をしていましたが…。

「花火、ですか?」

「はい。夏休みの終わりにある花火大会を皆さんで見ませんか?というお誘いに来ました」

織女さんは顔を出すなりそう言った。どうやら毎年やっている花火大会へのお誘いをしに来たというこらしいのだが…。

自習をしている美玲衣や宿題をやっつけている茉理を見るなり、何故か膨れてしまった。

「――ですが、刹那さん。どうして私には勉強会のお誘いがきてはいないのでしょうか?」

「…いえ、密さんから聞いてはいませんか。連絡先がわからなかったので密さんをお願いしたのですが…」

「密さん?」

「…私は昼食の準備をしてきますね」

笑って立ち上がるとそそくさとキッチンの方へと歩いていく。

「密さん!」

少し怒った様子の織女さんが追いかけていった。連絡ミスがあったのでしようね、密さんがし忘れた形で。

「密さんでもああいうミスはするのですね」

「まあ、夏休み中は私もそうですが密さんもそこに動き回ってる感じでしたから。茉理のヴァイオリンの練習監督に行ったりもしていたようですし」

「えへへ。おかげさまでまだ宿題終わってなかったんだよね」

「その話を早くに聞けてよかったですよ、茉理」

「なんとというか、茉理はぶれませんね」

「茉理がぶれたらそれはそれで怖くありませんか、美玲衣?」

「…まあ、そうですね」

和気藹々と勉強会が進む隣で、密と織女が花火大会についての詳細を詰めながら昼食の準備をしている。

「あちらもなんだかんだと仲良くなっていけますね」

「そうですね。ですが、照星が不仲よりはいいのではないのでしょうか」  
「美玲衣のいう通りですね。不仲よりは仲良くしている方がずっといい」

「刹那さんも、楽しそうですね」

「私ですか？——そうですね…」

楽しい。でなければ、全力を越えて動きすぎた結果に夏風邪など引かないだろう。

「ええ、楽しいですよ。ですが、ほどほどにするようにします。また倒れても面白くありませんから」

「ふふっ。そうですね」

ああ。楽しいですとも——



夏休みも残りわずか。織女の予定通りに花火大会は会場からは離れた、風早グループ保有の花火を見るには理想的とされたビルの屋上へと来ていた。

「ビルの上ですと、この姿でもけっこう涼しいものですね」

刹那が着ているのは闇色の着物。袖口は紐で絞って、目の前の鉄板で焼きそばを焼いている。

「こういうのもお祭り感が出ていいでしょう?」

「はい。ありがとうございます、刹那さん」

「いえいえ。当初予定の水着よりはこちらのほうが皆さんにはよいと私が考えただけですから」

刹那の近くでは桜色の着物を着てわたあめをかじっている織女と、茜色の着物を着て焼きとうもろこしをかじる密。2人に隠れるようにわたあめをかじっているのは薄緋色うすあけの着物を着ている花。

少し離れたところでレジャーシートを敷いて、藍色の着物を着た美

海と紺碧色こんぺきの着物を着た月子が焼きそばをほおばっている。

「なんていうか、夏祭りの焼きそばって感じですね、お姉さま」

「ああ。刹那さん、本当にこういう料理も得意だね」

「ええ。昔、少しやっていただけでもありますから」

紫紺しこんの着物を着るすみれとあやめはかき氷を機械で削り出していた。

「このような本格的なかき氷機はなかなかありませんわね」

「刹那お姉さま。これらはいったいどうやって用意なさったのですか？」

「食材等は織女さんに言って風早グループ関連から一括で卸していただきました。機材は、私のツテがありましたのでそちらの方から一日だけの約束で借りてきました」

黒紅色くろべにの着物を着る鏡子と雪白色せつぱくの着物を着る千歳はミニカステラをかじっている。

「好きなだけ焼いて好きなだけ食べられる。これは良いものですね！」

「いいからもう少し落ち着いて食べてはいかがです。喉詰めますよ……」

ハムスターよろしく、頬をパンパンに膨らまして食べる千歳の世話を鏡子がやっている様。

「しかし、刹那さん。これだけの珍しい配色の着物、よく集められましたね」

「美玲衣ちゃんのも綺麗だよね。刹那さんのやつも綺麗だけど」

「ありがとうございます。茉理も似合っていますよ」

団扇片手に佇むのは白緑びやくろくの着物に身を着る美玲衣と籐黄とうおうの着物を着て、割りばしを持っている茉理。今焼いている焼きそば待ちの様子。

「昔から仕事で物品要求すると私が女性あるからか質の良い布を送られることが多かったもので。売るには惜しい色ばかりなのでせっかいですし、天形御用達の者へ納品していたら大抵は着物へ変わって返ってきましたから。たまに小物類になって返ってきましたが」

「天形SPってそんなに手広く経営していらつしやるのですか?」

織女にとって天形SPは正しくボディガードの家なのだろう。それは正しくもあり、しかし少し間違いでもある。

「いいえ。基本的には護衛や警備業だけです。しかし、そうやっていろいろ異なる相手と知り合い、また懇意になることも多くあり。結果として多くの業種の方々と横の繋がりを持つようになっていただけですよ」

「なるほど。本来であれば知り合うことのない相手とも会話する機会は必然的に増えているのですね」

「そうですね。そうやっていると知らぬ間に意外な相手と知り合うこともあります。直近で言うなら父上が風早グループ総帥の風早幸敬氏と知り合いであった、ということでしょうか」

旅行後に確認したのだがどうやら外国であった護衛任務中に依頼者が『同じ日本人。縁を結んでおいて損はない相手だから』と引き合わせたらしい。

家を利用する依頼者はこういったお節介焼の方が多い。

「そういった縁があるのは良いことですわね」

「そうですね。…と、茉理。焼きそば出来上がりましたから好きなように取りなさい」

「わーい！さっきからすごく美味しそうな匂いがただよって待ち遠しかったんだ〜」

紙の皿に欲しいだけ焼きそばを盛った茉理が設置されているテーブルとイスへ向かって歩いていく。刹那も皿に焼きそばを盛って食べる。

「…ふむ。もう少し麺を焦がしても美味しかったかもしれませんね」

「研究に余念がありませんね、刹那さん」

織女は密の元へと帰っていて、入れ替わりで美玲衣が近くに來ていた。

「私がいただいても?」

「ええ、どうぞ。好きなだけ食べてください」

皿に焼きそばを盛ると刹那の隣で食べる。

「美味しいですよ」

「ええ。もつと美味しくできるかも、というだけですから」

「刹那さんは、毎日楽しそうですね」

「そうですね。楽しみ過ぎて夏風邪引いたくらいなので否定できません。ですが、実際に今年はとても楽しいですよ」

「去年まではそうでもなかったですか？」

「ふむ…」

「なんだかんだと楽しんではいただろう。では、今年は——？」

「一人よりも二人、二人よりも四人。一人でも楽しくはありましたが、やはり大勢で何かをする方が楽しいのですよ」

「…なるほど。確かに、そうですね」

「ここにいる人の大半は去年まではこうした友人達との遊びなどは無縁だったものが多い。夏休み中などは特にそうだ。」

「だが、今年は旅行に行ったり、寮で勉強会をしたり…、今までとは違った夏休みを過ごしている。そう思えば、今年はとても充実している。」

「二学期からも、いろいろと楽しくなりそうですね」

「…そうかも、…いえ、きっとなるんじゃないですか」

「あつ、始まったよ」

「夜空を照らし始めた花火を刹那は茉理と美玲衣の二人と並んで見上げていた。」

### 第34話 二学期

— 刹那 side —

二学期が始まってみても学院での生活そのものは大きくは変わらない。いつも通りに授業があり、違うところといえば夏休みに皆が行ってきた旅行先のお土産交換くらい。

時間は過ぎていき気がついてみれば放課後。本日は二学期初めの照星会合の日。

「では、皆様。二学期に入りましたがこれからもよろしくお願いいたします」

「まずは、二学期にある行事とそれに関係する事柄を簡単にではありますがご説明いたします」

奉仕会会長のすみれのあいさつから副会長の深夕の二学期にある各行事に関する説明。わかりやすくまとめられていて聴いている側からはとても良い説明といえます。

「ふむ。今年はどんな感じになるのでしょうかね」

「ところで、なぜ千歳さんまで居るのでしょうか?」

私は皆から少し離れた位置に座っていましたが、なぜか隣にはメモを取る千歳が座っている。

丁寧なことにちゃんと紅茶のカップも置かれている。

「いいではないですか、刹那お姉さま。二学期はいろいろな行事が目白押し。これを生徒達に伝えずして何が新聞部か!」

「紛れ込んでいることに言及しているのです」

そのまま襟首を挿んで部屋の外へと放り出す。扉の向こうから何か聞こえるが相手にはしない。

「しかし、いつの間に入り込んでいたのでしよう…」

「相変わらず千歳さんは神出鬼没ですわね」

「いい加減慣れました」

照星は三者三様の反応。美玲衣に至っては驚いてすらいない。

「とうかですね。千歳さんの扱いは鏡子さんの領分では」

「勝手に担当にしないでください」

勝手にもなにも、最近は何もしていないことが多いので…。

「まあ、彼女はいつも通りですので気にしない方向で行きましょう。二期の行事については説明の通りですが、大丈夫でしょうか？」

勝手にワイワイ騒いでいる間も深夕さんは説明を止めなかった。こちらも聞き流しはしていたが、聞き取れていないわけではないので照星共々全員が頷く。

「では、続けて投書箱の方の開封に移ります。あやめさん」

「はい。それでは」

蓋を開けると箱からかなりの量が出てくる。

「大半は照星へのファンレターですわね。議題に挙げられるものは…これですわね」

あやめが読んだのは『食堂とは別に自販機を学内に設置することはできないか?』というもの。

「これは…どういう意味でしょうか」

「夏休み中は食堂及び購買が閉鎖されていますから、その代替として…ということでは」

「今年も入っていましたか…」

「懲りない生徒がいるよねえ…」

照星達は珍しそうにしているが、私や美海はため息しか出ない。その様子に照星三人の目がこちらに向いた。

「いきなりぶった切りましたね。これは毎年のことなのですか？」

「少なくとも、私が照星とやり合った期間は毎年夏休み明けに入っていましたね」

「つまり、今年で三年連続ですか。執念ですね」

美玲衣は感心している様子だがこちらとしては呆れるしかない議題だ。

「そもそも夏休み中に購買や食堂が閉鎖されているのは全生徒が共有できている情報です。あと、部活動にきているというのになぜ飲み物が用意出来ないのか…」

「なるほど。確かに刹那さんの言う通りですね。学院内の買える場所が無いのはわかっているのに飲み物を持ってきていないのは確かに

おかしい」

「そうですね。それに、自販機を一度置いてしまえば撤去するのは難しくなります。食堂の利用率が下がらないとも限らないでしょうか」  
こちらの言わんとしていることがわかつているのか美玲衣が説明に補足してきた。

「で、あるなら。わざわざ自販機を置くというのは理に叶いませんわね。自らがしっかりと準備をすればどうにかなるようなことを行わないのはあまり利口ともいえません」

「では、照星としましては『自販機は設置しない』でよろしいでしょうか？」

三人が頷くのを見てすみれは頷く。それを確認したあやめは次の議題へ移るために新しい投書を手に取る。

「では、次ですわね。次は：聖歌部から『諸事情でオルガンを弾ける方を探しています。どなたか伝手はありませんでしょうか』ということですが…」

「オルガンなら、茉理さんでしょうか？」

織女が茉理に話を振るも、本人は腕を組んで唸る。

「うーん…。聖歌部ってことは、オルガンって『パイプオルガン』のことだよね？」

「はい。礼拝堂にあるパイプオルガンのことだと思われまます」

「となると、私には無理かなあ。普通のオルガンとはいろいろと勝手が違うんだよね、パイプオルガンの場合…」

「そうなのですか？同じように思っていましたか？」

「パイプオルガンって基本的にはパイプの中を通る空気の振動で音を出すから、弦で鳴るオルガンとかとは音色がまるで違うんだ。弾けなことはないけど、聖歌部の求める人材とは私は合致しないと思う…」

「なるほど。専門家の意見だとよくわかります」

「…刹那さんは弾けませんか？」

美玲衣がこちらを見て言う。しかし、私が返事をする前に茉理が美玲衣の肩を叩いていた。

「美玲衣ちゃん。誰にでも向き不向きはあるんだよ」



「「「えっ?」「」」」

象牙の間の中で茉理以外の全員が意外そうにこちらを見ている。

「前に刹那さんのヴァイオリンとかピアノとか聴いたことあるんだけど、初心者でももう少しいい感じに弾けるよね〜ってくらいに下手で——せふうなさ〜ん、いひゃい〜」

「人の不得手を扱き下ろす悪い口はこれでしょうかね〜?」

茉理の頬を思いきり潰したり引っ張ったり。涙目で抵抗する茉理を無視して罰を継続。

「意外なことを聞いた気がします…」

「織女さん。私とて万能超人ではありません。不得手なものも一つくらいあります」

楽器に関しては自分でも驚くほどに相性が悪い。両親にも肩を掴まれて『諦めなさい』と諭されたほどだ。

そんな中、密さんがおずおずと手を上げた。

「私は弾けますが…」

「——織女さん。超人とはこういった人のことを言うのです」

「いえ、私も超人とまでは…」

私クラスに勉強できて運動も追従できるほど。更には楽器も弾けるとききた。これを超人と言わずしてなんと言う。

「物を見てみないことには確かなことはいえませんがパイプオルガンならなんとかかなると思います」

「では、聖歌部のオルガンの代打は薔薇の宮、お任せしても?」

「ええ。承ります」

「あとは…これ、ですわね!」

最後の議題。要約すると『とある女性を好きになってしまったようだがこの気持ちはどうしたらいいのか?』というもの。

当然ながら室内の人間は固まっている——私と茉理、すみれを除いて…。

「こ、こういう案件も入るのですね…」

「ま、まあ、確かに投書の中味を限定はされていませんものね…」  
照れたように頬を赤らめた織女と美玲衣は視線が泳いでいる。

「この案件は、どうしたらいいのでしょうか。手紙の中を見るかぎりでは解決してほしいという感じでもなさそうですか…」

「ひ、密さんは落ち着いていらっしやいますのね…」

「そ、そう見えますか？」

私から見るかぎり、密さんは手紙の意味を深く理解はしていない。そも、女性が女性を好きになるということは理解しにくいし、されにくいのもよくわかる。

——だからすみれ。私の顔を凝視するのは止めなさい。『お姉さまなら答えられるでしょう』みたいに見ない。

「ところで、すみれさんはどうして刹那さんを凝視しているのですか？」

鏡子さんからごく当たり前の質問。私はどうするべきかと茉理に視線を送る。茉理は赤くなった頬——他の人とは違う理由——をさすりながらも小さく笑う。『任せた』という感じでしょうか。

「そうですね。夏休み中からですが、私は茉理と付き合っています」

「「「えっ?」」」

再び凍る空気。すみれと密は除く。

「まあ、付き合っていますと言っても『お互いに遠慮はしない』と約束しているような関係で、決して『〇〇しまくっている』だとか『〇〇〇〇してみたいよね』みたいな関係ではありませんよ」

念のために伏せておきましょう。意味があるかはわかりませんが、いち早く回復したのは織女。

「それは、親愛という感じででしょうか…」

「そうですね。それに近いものではないでしょうか。もちろん、私が茉理に甘えることもありますし、茉理が私に甘えることはありますよ」

「刹那さん、甘える時はこっちのお腹辺りに頭をぐりぐりこすりつけてくるよね〜?」

「茉理。そういうことはこういう場で暴露しないでください。さすがに恥ずかしいので…」

周りは未だに固まっているが、議題について意見を述べるのであれ

ば――

「この手紙の主が望む答えは返事ではなく、吐露したかっただけかも  
しれませんね。解決を望んでいる雰囲気の手紙ではなさそうですね」

「そう、ですね。とりあえずこちらに関しては保留しましょう。よろ  
しいですね、会長？」

「えっ、あ、はい。そうですね」

密からの確認にすみれは少々しどろもどろだ。まあ、私のこともあ  
りますから仕方ないでしょうね。

――それに、このあとキミリア館にはもう一つの行事が待っていま  
すからね。

### 第35話 入寮

照星会の会合を終えてキミリア館へと戻る道すがら。茉理がこちらの袖を引つ張る。

「どうしました、茉理？」

「刹那さん。甘えるの、やめないでね？」

先ほどのことを気にしているのでしょうか。私は茉理の額にキスをする。

「大丈夫ですよ。あれくらいのことです茉理を嫌がったりはしませんから」

「…うん」

小さく頷いて微笑みかけてくれる。これが、私にとってはとても嬉しい反応——ですが。

「いつまで見ているつもりでしょうか」

振り返った先。先にいる密や鏡子は少し頬を赤くして視線を外した。見られていることは構いませんがそういう反応は止めましょう。さすがに私でも恥ずかしくなります。

「いいいますか、織女さん。なぜ貴女は茹でダコになっているのでしょうか？」

「いえいえ。まさか往来の最中にそこまで熱い光景を見せられるとは思っていませんでしたので」

「熱い光景とはいいますが、ただか額にキスしただけですよ」

「先ほどまで会合でその手の話をして赤らめていた免疫のない人もいるのですから、その辺りは加減すべきかと…」

「別に唇を合わせたわけでもなし。外国では親愛を表すのに行うこともありますよ」

「この辺り、我々と刹那さんの間には溝が存在しているようですね」

茉理とは途中で別れ、キミリア館へと帰ってきた。

「ところで、織女さん。家に帰らなくていいんですか？」

「えっ？」

織女は当然のようにキミリア館の前までついてきていた。普段で

あれば茉理と別れた辺りで一緒に別れるはずなのだが。

「鏡子さんぐらいいは知っているものと思っていきましたが」

「どういう意味でしょうか、刹那さん。まるで織女さんがここに  
いる理由がわかってしている様子ですが」

「むしろ護衛役たる貴女が知らないことに私は驚きなのですが…」

「本日より、お世話になります」

織女が頭を下げるのを、呆然と見つめる密。天を仰いでいる鏡子。  
本当に知らなかったようですね。

☆

—密side—

密の部屋で密と鏡子はうなだれていた。織女の入寮について何も  
知らされていなかったばかりか、連絡事項はつい先ほど鏡子の携帯に  
届いていた。

「どうしてこうなってしまったのでしょうか…」

「わかりません。どうすればこの状況を回避することができたのか  
…」

ぐったりとうなだれていた鏡子は携帯を取り出して頭をかく。

「そもそもホウレンソウの必要な案件がどうして現場の私達が最後の  
最後に本人が入寮してから聞くことになるんですか!？」

「伝えてもどうにもならないなら、いつそ事後報告で…という感じな  
んじゃないでしょうか…」

身バレの可能性は上がったが護衛の観点からでは難度は下がった  
と諦めるべきだろうか。鏡子さんはいろいろと準備をしていた分が  
パーになったからご立腹だとは思いますが…。

「それにしても…」

「どうしましたか?」

「いえ、刹那さんはどうして知っていたのでしょうかね」

「こちらに対して『知らなかったのか?』と聞いてきた以上、どこか  
しらから情報は得ていたはず。」

「確か、旅行の時に天形SPに仕事の依頼をしていたぐらいですから、親元から情報が下りているのでは…」

「そうなんでしょうか…」

それならいいのだが…。いや、自分達としてはよろしくないが。

「どちらにせよ、身バレの可能性が上がったのは事実なので密さんは今まで以上に気をつけてください」

「…そうですね、本当に…」

なんでこんなに疲れるようなことが続くのか…。

あのあと、織女さんが部屋に来て入寮の理由を語ってはくれたが、護衛役としては閉口するしかない。文句は言えないし、食堂では皆さんからは好意的に受け入れられている以上、自分がとやかく言うのは間違いだ。

「はあ…」

とはいっても、ため息は止まらないが…。

「何をため息などついているのですか、密さん」

「——っ！」

『スパーンッ!』と景気よく風呂場の入口が開かれて刹那さんが現れる。相変わらずこちらが風呂に入っている時を狙ってきているとしか思えないほどの正確さだ。

「狙って来てませんか。刹那さん？」

「うん? ああ、密さんがだいたいこの時間に入っているのはある程度当たりをつけて来てはいるよ。とはいっても、自学自習でこの時間まで勉強している時くらいのもので、普段はもう少し早く入っている」

「…それで、何かお話があるのででしょうか」

「その通りです。織女さんのことです」

かけ湯をして密の隣へと身体を沈める。一息はくと、少し身体を揺らしながら刹那は話し始めた。

「実は花火の日以降に風早総帥たる幸敬様より父上経由で連絡をいただきました。どうも、学院内での護衛役に加わってはもらえないか、という打診です」

「…聞いていないのですけど」

「ええ、断りましたから。仕事の人間として織女さんを見る場合、照星としての彼女の意見などに文句をつけにくくなりそうだと思いますから」

「はあ…。それを、どうして今伝えよう?」

「そうですね。一つは幸敬社長としては学外よりも今は学院内の方がいろいろと危険ではないかと考えている様子。二つは密さんにお渡ししたいものがありましたので」

「私に、ですか」

刹那から手渡されたのは紐のついた小さなスイッチ。

「これは…?」

「一度だけ、私を——『レセプション』として呼び出せるスイッチです。紐を引っかいてスイッチを押し込むだけですよ」

「貴女に仕事をさせるためのスイッチ、ということですか?」

「ええ。護衛役には加われませんがまったく力を貸さないというのも気が引けて…。もし、私をご用命となればそれを使ってください。一度だけ、私の全力をもって御護りいたします」

「…ありがとうございます。使わないに越したことはないアイテムですが、せっかくの好意ですし受け取っておきますね」

「ええ、そうしてください。…さて、私は身体を洗ったらさっさとあがりますね」

「今日は早いですね」

「それを渡したかっただけですし、ここ最近…茉理と遅くまで電話していたりして少し寝不足なのです。今日は早めに休もうと思います」

「なるほど。では、おやすみなさい、刹那さん」

「ええ、おやすみなさい、密さん」

さっさと身体を洗うと上がっていった刹那を見送って、密は手元に残ったスイッチを見つめる。

「確かに、使わないに越したことはないのですけれど…」

いつか使わないといけない気がする。そんな風に密は感じていた。

—鏡子side—

部屋で休んでいた鏡子は、ふと気になったことを思い出して電話をかける。2〜3コールすると相手は出た。

『は〜い。こちら、薄氷千歳の携帯ですが、鏡子お姉さまがこんな夜遅くにお電話くださるとは意外ですね。何かいいネタ仕入れました?』  
「それはこちらのセリフなのです。貴女は最近、何か情報を仕入れていませんか?」

『私、ですか?...うーん、織女お姉さまから『寮に入ろうと思っているのですが、新報には載せないでいただけますか』と打診はされましたかね?』

「...織女さんに、ですか?」

意外なところから意外な情報をもらった。織女が入寮したことを新報に載せられると面倒事が増える、と感じたからこそ機先を制しようと思つて電話したのだが、どうやら本人がその辺りはわかつていたらしい。

『もちろん、私のところから洩らしてはけませんから新報に載ることはありませんよ。差し押さえるには相応の情報<sup>ネタ</sup>を頂かないと困ります、とは言いましたが』

「そちらを新報に載せるのですか」

『いいえ。個人的な趣味で集めている情報です。織女お姉さまや美玲衣お姉さまの情報は照星になられてからはなかなか集めにくくなりましたからね。美味しい情報が満載なので...』

鏡子の背中に悪寒が走る。そこに自分の情報もある、という確信。  
「その情報、表には出さないのですよね?」

『ネタ切れにならないかぎりは出しません。安易に他の生徒にばらまくようなネタでもありませんし』

「——何を抱えているのですか」

『おや? 鏡子お姉さまも気になるのですか?』

「ええ。気になるところです」



『簡単にいうなら個人プロフィールといったところです。好きなものや嫌いなもの、最近のマイブームなどでしょうか』

「それだけ、ですか…」

『黙秘します』

「なっ——」

『鏡子お姉さまと言えど、私は新聞部副部長。おいそれと自分の大切な情報は与えられませんよ?』

「くっ…」

『まあ、入寮に関してはお気になさらず。私から新報に載せるのはありえないと断言しておきますね』

通話が切れた。携帯をしばらく眺め、やがてベッドへと投げる。

「まあ、危険な情報を持っているとは限らないわけですし…」

そうは言うものの、先ほど感じた悪寒が忘れられない。

「なんとかして、集めている情報とやらにたどり着くべきでしょうかね」

### 第36話 トラブル続出

— 刹那 side —

次の日、いつもの通りの授業があり、放課後の会合も特に何かあるわけでもなく。茉理のヴァイオリン練習に少しだけ付き合い、刹那は礼拝堂へと向かっていた。

「よくよく考えてみれば、パイプオルガンを弾く密さんというのはなかなかレアな光景なのではないでしょうかね」

「確かにそうだよ。ピアノを弾くのはよく見てるんだけど、パイプオルガンってそもそもそんなに数がないから」

「しかしよかったですか、茉理。ヴァイオリンの練習なら美玲衣がついていると言っていたようですが」

「今日は密さんのオルガン優先。気になったからね」  
「そうですか」

まあ、他者の演奏に対して茉理は興味を持つことが多い。未だにヴァイオリン奏者としても『あの人の演奏は』みたいな話が出てくるぐらいだ。

礼拝堂に入るとちょうど一度目の演奏を終えたところか。密さんは聖歌部のメンバーに様子を確認しているようだ。

「うーん、少し遅かったと見るべきでしょうか」

「一回で終わるとは思わないけど…」

「——あつ、女帝、提琴ヴァイオラの君っ!?!」

聖歌部の一人がこちらに気づいたようで他の部員もこちらへと向いた。密も気づいたようで、驚いたようにこちらへと近づいてきた。

「刹那さん、茉理さん。何かあったのですか?」

「いえ。密さんのオルガン演奏を聴いてみたいと思ひまして。織女さんは用事があるとのこと帰られました」

「美玲衣ちゃんも帰るってことだから私達だけ見に来たの」

「そうですね。しかし、今日は初めての音合わせですから聖歌部の方々に合わせた演奏はできていません。明日にでも聖歌部の奏者の方に会いにいつレクチャーを受けようと思っていたのですけれど

…」

密の説明に茉理は首を横に振る。

「私達は、密さんの演奏を聴きに来たんだよ？」

「そうですね。聖歌部に合わせた演奏ではなく、今の密さんが弾ける演奏を聴きに来たのです。合わせた演奏も聴きたいですが、まずは先入観のない、素の演奏を聴きたいと思ひまして」

「なんといいいますか、刹那さんと茉理さんは変わっていますね」

「自覚はありますね」

「あはは。音楽には私、こんな感じだよ」

その後、数回の練習における密の演奏を二人は楽しんでた。帰り道、三人で並んで帰るなか…。

「どうでしたか、私の演奏は」

「良かったですよ。あれが聖歌部の歌にマッチングするようになるというのであれば、それも楽しみではありません」

「良かったよ。私だと、あはは弾けないから」

「ご満足いただけていたようでなによりです」

「しかし、そのオルガン奏者の方は大丈夫なのでしょうか」

「聞いた話ですけど、元々…持病があったとか。一応、検査入院の様子だそうなので、近日中に部長さんとお見舞いに行こうと思ひつています」

「大変な話ですね」

「辛いよね」

立場は違えど茉理も病持ちとはいえばその通りだ。茉理の場合、回復中だといえど仕方ないものだが。

「まあ、聖歌部に関しては密さんに任せておけば問題はなさそうですね」

「刹那さん、こういう時は女帝のように振る舞いませぬね？」

「立ち振舞いとしてはわからなくはないですが、私はあくまでも一生徒。今回のように照星の力が必要である以上、私がチャチャを入れることは間違いです。私は確かに反発する者ではありませんが間違いを理解せぬ愚者ではないつもりです」

「そうですか」

小さく息をついた密に刹那の目は細まる。

「信じていませんね？」

「いいえ。信じていますよ？」

お互いに笑みをたたえながらも、内心の気持ちは隠している。そんなやり取りだった。

☆

寮の晩御飯も終わり、あとはお風呂に入って寝るだけ。そんな時間、刹那はお風呂上がりに読書していた。

「——ふむ。今日はこのあたりで切り上げておきましょうか」

小さくあくびをもらしながら、小説に葉を挟んで閉じる。勉強机に小説を置いたところで扉が控えめに叩かれた。

「どなたですか？」

『お姉さま。紅茶をお持ちしました』

「すみれさん？」

扉を開けるとトレイに紅茶の用意一式を載せたすみれが立っていた。部屋へ入れると机に一式を置き、紅茶を入れ始める。

温かさを示すように湯気の上がる紅茶を受け取ると刹那とすみれは並んでベッドへと腰かける。

「ありがとうございます、すみれ」

「いえ、妹の嗜みですから」

一口、口をつけてから一息つく。読書をしていたためか思いのほかのどが渴いていたようだ。紅茶を半分ほど飲んだところで…。

「それで。すみれ、何か相談事があるのではないでしょうか？」

「…バレていましたか…」

恥ずかしそうに紅茶に口をつけているすみれを見て刹那は頬笑む。

「いつもの貴女であれば、私の予定を確認してから紅茶を用意してくれるわ。それは、今までの貴女がずっとそうしてきたこと。ですが、今日は頼んでいないはずの紅茶を率先して淹れてきた——ということこ

とは、何か相談事をするためのお伺い、といったところでしょう」

「…はい」  
ますます縮こまるすみれに、しかし刹那は紅茶を机に置くと優しく頭を撫でる。

わずかに首を竦めたすみれは、優しく頭を撫でられていることに気づいて刹那を見上げた。

「このようなことをせずとも素直に相談なさい。私は、貴女のお姉さまなのだから」

「——はい。ありがとうございます」  
しばし、頭を撫でる時間が過ぎる。

「さて。ゆっくりし過ぎては明日の体調にも影響してしまいますね。それで、相談事というのは？」

「はい。実は——」

すみれの説明を要約すると、紅鷲祭で予定されていたチャリティーコンサートの奏者が諸事情で参加できなくなってしまった。

代役を立てようにも『チャリティー』の予定である以上、ギャラ——出演料はかけられない。奏者側で代役が見つからず、学院側でも探してみてもほしい。といったことだそうだ。

「演奏者探し、ですか…」

「明日の会合で照星の方々にもお声かけしようとは思っていますが、刹那お姉さまの方で心当たりの方がいらっしゃればと思って」

「うーん…。すみれ、申し訳ありませんが、昼間も話しましたが私は楽器——というよりも音楽全般に才能はありません。聴くのは好きですが進んでそちら方面の方々とは交流は持ってきませんでした。ですから、今回は力にはなれそうにありませんね」

「そう、ですか…」  
できれば奉仕会で解決しておきたいのだろう。確かにこのような案件で照星を頼るのに気が引けるのもわからなくはない。

「そうですね…。私自身はあまり力にはなれそうにありませんが、某理にその辺りのツテがないか聞いてみますよ」

「某理さんに、ですか…」

「何か、問題が…?」

「い、いえ…。こんな、奉仕会の問題で頼ってしまっていていいものかと…」

確かにこの案件は奉仕会の問題である。しかし――

「すみれ。今回は紅鷺祭にも関係しているのでしょうか?であれば、頼れる者がいるのであれば、積極的に活用すべきですよ」

「そうすべきなのは、わかっているつもりなのですけど…」

すみれの気持ちもわからなくはない。頼れる者がいるので頼る。しかし、頼る以上は何かしらの報酬を用意すべきではないか?などのことを悩んでもいるのでしょう。

確かに一方的に頼ることは良いことではない。しかし、そんなことをいちいち気にしているは他人を頼ることなど出来やしない。

「すみれ。できることは確かにその人が処理すべきことです。しかし、今回のように他人に頼んだ方が解決しやすいことは積極的に頼ることを覚えなさい。私を頼るように、他の方々を頼ることに引け目を感じる必要はないのですよ」

「ですけど…」

「その代わり、その方が困っている時は積極的に助けてあげなさい。それでいいのですよ」

そもそも某理に関していえば象牙の間を借りている立場にある。こういった時に頼られれば、某理としても気兼ねが無くなるというものだ。

「明日、私の方から某理に聞いてみますよ。すみれは照星達に聞いてみてください。使える者はなんでも活用してこそですよ?」

「…はい。ありがとうございます、刹那お姉さま」

静かに頭を下げるすみれに刹那はその頭を撫でることで答える。

「さて。では、そろそろ部屋へ帰ってお休みなさい。紅茶の方は私が片付けておきますから」

「えっ、と…」

「すみれ」

「…はい。お願いいたします、お姉さま。その、おやすみなさい」

「はい。おやすみなさい、すみれ」

部屋から帰っていったすみれを見送って、刹那は紅茶の一式をトレーに載せると下のキッチンへと下りていった。

### 第37話 頼み事

——次の日。

茉理には朝に連絡しておき、昼休みに中庭で弁当箱を持って待つ。少しの時間をおいて、茉理がこちらへと歩いてきた。

「刹那さん、お待たせ」

「いえ。急にすみません茉理」

「いいよ、べつに。誰かとお昼ご飯、約束してたわけじゃないし」

「とりあえず、食べながらにしましょうか」

「はい」

二人並んで弁当を食べ始める。

「実は、昨日の夜にすみれの方から相談事を受けまして」

「そうなんだ。珍しいね?」

「ええ。どうも紅鷲祭くしやくさいでチャリティーコンサートを予定していた演奏者が諸事情によって来れなくなってしまったようで…」

「ありや…。それじゃあ、コンサートは中止…?」

「最悪、そういった事態も考えなくてはなりません。まだあらゆるツテを使って代役を探している状況なのだそうです」

「ふくん…」

「そこで、私にも白羽の矢が立ったのですが…」

「刹那さん、音楽方面は面識ある人少ないよね」

「そうですね、茉理相手だと話が早くて助かります。そこですみれ会長から貴女の人脈を使えないか聞いてみてほしいと言われました」  
「なるほど…」

モグモグと弁当を食べながら首を傾げている。

「うーん、私って師匠から破門されちゃってるから私個人での人脈ってあんまり無いんだよね。もちろん、頼んだら引き受けてくれる人は何人かいると思うけど…」

「何か問題が?」

「うん。チャリティーってことは、お金は出ないんだよねえ?」

「えっ、あ、ああ。そうですね」



チャリティーと名打っている以上、必要経費以外は出ないはず…。「だよねえ…。えつとね、すぐく身も蓋もない話なんだけど、音楽の演奏者の人って基本的にそれをしてお金を稼いでいる人達だから、チャリティーってそつちを専門的にやってたりする人じゃないと難しいんだよ」

「…なるほど。言われてみればその通りですね」

言われてみれば当たり前前である。演奏すること稼いでいるのだから演奏をお願いすればお金はかかる。

『チャリティーです』というのはあくまでもこちらの都合であつて、頼まれる演奏者には関係のない話だ。

「——となると、照屋側の人脈も当てにはできなさそうですかね…」

風早グループが力を貸せば簡単に見つかるかもしれないが、それはあくまでも『演奏者が見つかる』だけで『チャリティーができる演奏者が見つかる』わけではないはずだ。

「某理の方では難しいですか…？」

「うーん…」

お弁当を食べ進めながら頭を揺らして悩んでいる某理は、ふと、揺れを止めた。

「連絡してみないとわからないけど、一人、心当たりがあるかも…」

「ほう…？」

「諏訪ちさとさんって人なんだけど…。昔から何度かコンクールとかで演奏し合ったりして、連絡先の交換はしてるんだ。ただ、私が音楽から離れてからはめっきり連絡取ってないし、向こうは忘れてるかも…」

「そういうのは連絡すればわかります」

「そうだね。じゃあ、刹那さん。連絡するにあたって、いくつかお願いしたいことがあります」

「私にできることであれば」

「えへへ。その言葉、忘れないからね？」

さて、いったい何をさせられるのでしょうか。

寮に帰ってきてきて部屋に荷物をおいてくるとキッチンへと入り、冷蔵庫内の食材を確認する。

「あれ？今日は寮母さんの担当じゃなかったでしたっけ？」

「おや、月子さん。何か取りにきましたか？」

冷蔵庫を閉めたタイミングで姿を現したのは月子。

「コーヒーでも入れようかと。インスタントですけど」

「そうですか…。いえ、せっかくですし私がドリップで入れましょう。美海さんの分はどうします？」

「えへへ…。お願いしま〜す」

キッチンに備え付けのイスに座る月子を眺めて、刹那はコーヒーのセットをしてから夕食の準備に取りかかる。

「それで、今日は寮母さんじゃないんですか？」

「なんですか。月子は私の夕食よりも寮母さんの夕食をご所望というところですか」

「いいえっ！寮母さんのご飯も美味しいですが、刹那お姉さまの作る料理も美味しいのでそこはお気になさらずに！ただ、純粹にどうしてかな〜、と」

「某理に頼み事したら見返りにご飯を要求されたので寮母さんに断りを入れてこうして準備しているんですよ」

某理の頼み事の一つは『刹那さんのご飯が食べたい』というもの。もう一つは手紙を先方へと出すのだが代筆してほしいとのことだったので、昼休みが終わる前に寮母さんに話し、今日の夕食は刹那が担当しているというだけである。

寮で夕食をぐちそうし、そのままこちらの部屋で代筆してしまえば一日で全ての頼み事が片付くということだ。

「某理お姉さまも刹那お姉さまもすごく仲良しですね」

「そちらの海月姉妹には負けそうですよ」

「…刹那お姉さま。お願いが、あるんですが…」

「今日はいろいろな人から頼み事をされますね。まずは話してくれま

すか?」

炒め物をしながら、コーヒーを3つのカップに入れる。一つは自分の手元へ、残りの二つは月子の前へ置く。

「さて、夕食の準備をしながらにはなりますが、月子の頼み事とやらを聞きましようか」

「えっと、ですね…。実は、料理を、教えてほしくて、ですね…」

料理の手を止めて、刹那は月子に向き直る。

「すみません、月子。もう一度、言っていただけですか?」

「料理を、教えてほしくてですね!」

「ふむ。私の聞き間違いではなさそうですね」

手を拭くとコーヒーカップを持って月子の対面に座る。

「なぜその考えに至ったのか、聞かせていただけます?」

「はい…。えっと、実は今は寮母さんのご飯に刹那お姉さまや密お姉さまの料理が出てきているじゃないですか」

「そうですね」

寮母とは話し合って本年は密さんと私も料理をすることを伝えてあり、今日のようなことがあれば連絡を入れるようになっていた。

「ですけど、ふと気づいてしまったんです。来年度はこんな食生活あり得ませんよね、って」

「ああ…」

確かに自分や密さんが留年するとは考えにくい。まあ、車に轢かれるなりして入院すれば別かもしれないが、まあ普通に生活していればあり得ない話だ。

「そうになると、このまま来年を迎えてしまうと密お姉さまや刹那お姉さまが料理をしなかった頃に逆戻りすることになると。でも、その生活に戻るかならうって思ってしまうして…」

「なるほど。それで、料理を教えてください、と」

「はい…」

「質問なのですが、料理を教えてくださいとはいいますが密さんでもよかったのでは…?」

無論、今日たまたまこういう風に話す機会が訪れたから自分に頼ん

できている可能性はある。

「だって、密お姉さまってなにかと忙しそうにしていますし…。それに、刹那お姉さまってこういった頼み事、断らなさそうで…」

「まあ、よほど用事が溜まっていなければ無下に断ったりはしませんが…」

とはいえ、料理を習いたいということは姉役の美海には相談できない案件だ。あちらも料理の腕は壊滅的だからだ。

「まあ、いいでしょう。とはいっても、すぐに教えようにも今日のところは全力での料理ですし、手伝いを頼むわけにはいきませんね」

「そう、ですか…」

「ですので、週末は時間を空けておきなさい。教える以上はしっかりとしたものを教えてさしあげます」

「本当ですか!？」

「嘘は言いません。週末に、しっかりと教えましょう」

「やった〜！よろしくお願いします〜す！」

「では、今日のところはそのコーヒーを美海に届けてきなさい。冷めてしまいますから」

「了解であります！」

コーヒーカップ二つを持って元気に出ていく月子を見送って刹那は料理に戻る。

(まあ、料理を覚えておいて困ることはありませんし…)

料理を次々と並べていくところで月子が戻ってきた。

「刹那お姉さま、料理…の手伝いは難しいですけど、何かお手伝いをと…」

「ああ。でしたらそちらの料理を食卓の方へと持っていつてもらえますか？」

「了解であります！」

料理を運ぶ月子を、刹那は苦笑を浮かべながら料理を続ける。

ちなみに、夕食を食べる菜理はとてご満悦だった。

食事の後片付けを刹那と月子が並んで行っていた。

「すみません、月子」

「いえいえ。洗い物ぐらいなら私でもできますから」

刹那の洗った皿を月子が水洗いしていく。

「月子、料理はどのレベルで洗えばいいですか？」

「と、いいますと？」

「私や密さんクラスを一朝一夕で目指すのか、一般レベルを目指すのか。それによって週末の料理教室の難度はガラツと変わります」

「えっと、とにかくにも一般レベルで…お願いします」

「なるほど。それならそういう用意をしておきますね」

「よろしくお願いします」

「任せてください」

### 第38話 料理教室

——週末。

寮のキッチンには刹那、月子、すみれ、そして千歳の四人がいた。「あれっ？すみれお姉さまも参加ですか？」

「はい。少しはできるようになっておこうと思ひまして」

「それで。千歳はどうして参加側に？貴女、料理はできるでしょう」

「こんな休日の日に寮でタダでご飯が食べられると聞き馳せ参じました！」

「家で家族の料理を食べていなさい」

そもそも料理するのは月子とすみれの二人なのですから私の料理を狙って来たのだとすればお門違いですし。

「いえ、美味しいかはさておいて。タダで食べたいだけです」

「その意気込みは買いますが、今日の場合、失敗しにくいものしか選んでいませんからそうそう変な料理は出てきませんよ？」

「やだなあ。普段は料理をしない人の料理ってそういった予想を越えた何かを作る可能性はあるんです」

「そうですね。なら、そういったものができた場合の処理班に任命しましょう」

追い返そうとしてもあの手この手でこの場に残るのなら、見える範囲においておいた方がマシというものでしょう。

「——さて、少し無駄な時間を食ってしまいましたが始めるのでしょうか」

「よろしくお願いします」

「とはいっても、いきなり難しいことをしようとしたところでそこに控えている毒味役に出番を与えるだけになりますからね。まずは、米を炊くことから覚えてもらいましょう」

そう言つて傍らに置かれた炊飯器に手を置く。それに対して、月子は少々拍子抜けしているようで…。

「炊飯器の使い方ならさすがにわかりますよ」

「炊飯器の使い方はわかっていても事前の米の準備までは頭に入って

いないでしょう?」

その言葉に二人は目をそらす。

「予想通りの反応をありがとうございます。さて、米を炊く…と一言でいえば簡単ですが、事前準備をした方が当然美味しくなりますが…。まずは『どんな種類の米を買うか』というところでしょうか」

「えっと、コシヒカリとかあきたこまちとかいう…」

「別に銘柄にこだわられ、という話ではありません。普通の精米を買うか、無洗米を買うかです」

「確か…、無洗米というのは洗わなくてもいい種類、ですね」

「そうです。相対的に高めの値段設定をされてはいますが、しっかりと米と水を量り、炊飯器に任せれば確実に美味しいご飯が炊けるのはこつちです」

店によってかなり値段設定はまちまちですが、総じて普通の精米よりは高い。

「で、精米された米は基本的にスーパー等で手に入りますから炊き方の必要項目だけ。『米は水で数回洗う』『水の分量は量ること』：基本的にはこの二つを守るだけでご飯は炊けます」

「あのお。そんなに簡単なんですか?」

「そうですよ。もちろん、飯盒はんごうとかで炊いたら美味しいですが、わざわざ広い場所を探して釜を組み立てて炭をいこして――などという原始的手法を毎回繰り返せば、私でも料理はしなくなるでしょう」

ああいうのはたまにやるからいいのであって、毎回となると嫌になります。

「あの、『水で数回洗う』と言いましたけど、どんな感じで洗えばいいのでしょうか?」

「水に軽く浸かる程度で力をあまり加えずに数回回し洗う程度で構いません。強く洗うと米が割れますので。白い米ぬかというものが少し残るぐらいがいいとは言われていますが、出なくなるまで洗ってしまっても構いません。そこは好みになりますから」

「なるほど」

うんうんと頷く二人。

「まあ、本来であれば炊いてもらった方が分かりやすくはあるのですが、連絡を忘れてまして密さんが炊飯器はセットしてから出かけていますので『炊いてみたい』というのであれば、私が料理当番の日にキッチンまで来てください」

炊飯器を開けるとすでに水に浸った米がある。

「とうわけで、二人には味噌汁を作っていたかどうかにします」

鍋に水を張り、コンロに置いて火をつける。

「まあ、ご飯が炊ければ大抵の料理には応用できますし、味噌汁が作ればあとは店売りのお漬物を一品買うだけで最低限見映えのある食事は用意できます」

「あ、味噌汁の具材って何がいいとかありますか？」

「そうですね。総じて合わない具材は少ないのが味噌汁の利点ともいえませんが…塩辛いものは避けるべきですかね」

二人の怪しい手つきの包丁捌きを見ながら…。

「まあ、料理なんてものは数をこなさないことには上達なんてありません。ある程度作りなれば自ずと味付けなども調整できるようになります」

「今は、切るのだけで…難しいんです、が…」

豆腐を細切れにしながらかもなんとか鍋に放り込む月子。隣ではすみれが自分の鍋に玉ねぎを入れていた。

「あとは味噌を適量入れつつ味を整えていけば終了になります」

「ふむ。ゲテモノが出来上がる感じはありませんか」

「残念でしたね、千歳」

「いえ。それならそれでご相伴には与らせてほしいですね。美味しいものが食べられるに越したこともないんですから」

「ちやつかりしていますね。さて、では今日はお昼は皆さんに食べてもらって出来を確認していただきましょうか」

余談ではあるが、特段の文句は上がらなかったことはここで答えておきましょう。





お風呂につかりながら昼間の料理教室について考える。

「…まあ、ご飯を炊けたり、味噌汁が作れるようになればあとはレシピ本でも見ながら応用がきくようになるでしょう」

とはいえ、定期的に開催して寮生が料理をできるようになっていた方がいいのかもしれない、とは思う。

「難しいところではありますがねえ…」

料理は壊滅的な人間が必ずいるはずなのだ。二人は違ったようになによりだが。

——すりガラスの向こうに人影が映る。影はしばらく何かを確認するようにはうろうろしていたが、入口が開かれると…。

「刹那さん一人でしょうか…?」

「ええ。他の方は居ませんよ密さん」

前を隠して入ってきたのは密。掛け湯をして隣に身を沈ませた。

「——それで、私を探していたのですか」

「いえ、そういうわけではないのです。いつもより早い時間なので他の方が入っている可能性もあるのでは、と…」

「早いとはいいますが…」

いつもは日付が変わるぐらいだが今日はみんなが入り終わってすぐぐらい。時間的には確かに二時間近く早いがそれでも他の寮生からすれば遅すぎる時間なのだ。

「普段から私達の入浴時間が遅すぎるのだと思いますよ」

「そうなんです…。やはり、念のために…」

「用心に越したことはないのはわかりますがね」

「そういうえば、今日は寮で料理教室をしていたとか」

「ええ。といっても、作ったのは味噌汁ぐらいであとはご飯の炊き方ぐらいですよ」

「基本的なところだけ、ですか」

「いきなり難しいことを教えたところで大惨事になる未来しか見えませんからね」

この辺りは料理を作り慣れている者同士、わかっているラインがあ

る。

「では、私はそろそろあがります」

「あつ、はい。おやすみなさい、刹那さん」

出入口を開けて、刹那は立ち止まる。肩越しに密の方を振り返る。「聖歌部のこと。何かしら問題が起きているというのでしたら相談してくださいってもいいですよ」

密は驚いたようにこちらを見ていたが、不意に相好を崩すと。

「今はまだ大丈夫そうです。もし、手に余ると感じましたらお声掛けさせていただけますね」

「わかりました。頑張ってください、密」

脱衣所でパジャマを着ながら――

「やはり、聖歌部のことも何かしら起きていますよね。面倒事にならないよう、新聞部の方は私が目を光らせておくとしましようか」  
部屋へと帰る道すがら。刹那は携帯を取り出して電話をかけ始めた。

### 第39話 諏訪ちさと

茉理の説明の下、手紙を書き上げたソレを投函してから早一週間。返ってこない手紙の返事に茉理は日に日に焦燥感を募らせている様子で、ヴァイオリンの練習にもあまり身が入らないようだ。

今日も今日とて少し弾いたが手紙のことが気になるのか早々に帰ってしまった。

「あまり気に病まずともよいのですが…」

まあ、確かに頼られたから手紙を出す形になり、結果的に未だに返事が返ってこないというのは本人としてもそれなりにショックなことなのかもしれない。

手紙を書いていた際にも『彼女の演奏が好きだから』と推薦する理由を語ってくれたぐらいだ。望み薄だったのだとしても返事ぐらいはあると思っっているというのに、寝ても覚めても返事がなければあなるだろう。

「しかし、月子の話ですとそれなりに有名なヴァイオリニストという話でしたし…。もしかすると予定を調整してくれているのでしょうか？」

そうであれば手紙の返事に時間がかかっていることも仕方のないことだとは思えるのですが。

「なににせよ、手紙の返事は待つしかないでしょうしね…」

密は密で何やら悩んでいるようですが、こちらは他二名の照屋——特に織女——が動き回っているようですから私がわざわざ顔を出すこともないでしょう。

本来の同僚である鏡子もなにかと手を回しているのを確認していますし。

「さて、帰りますか」

鞆を持ったところで携帯が着信を鳴らす。相手は——

「すみれ、ですか」

☆

すみれからの電話で応接室へと入ると、見覚えのない女性一人がソファに座り、すみれ、深夕の二人が立っていた。

「刹那お姉さま、申し訳ありません。照星の方々は連絡が取れず…」

「いえ。それは構いません。それで、あちらの方は…」

女性は立ち上がるとこちらに向けて会釈する。

「はじめまして。私は諏訪ちさとという」

「諏訪ちさと…。ということは茉理が手紙を出していた」

「そうです。それで、貴女は…」

「ご挨拶が遅れました。私は雨水刹那。こちらの奉仕会のお手伝いですが、貴女の知り合いである仲邑茉理の友人になります」

「なるほど。茉理さんのご学友ということですか」

「まあ、立ち話もなんです。お座りください」

諏訪ちさとにソファを勧めて座ってもらうと、刹那も対面に座る。紅茶が四つテーブルに置かれると、刹那の隣にすみれと深夕が並んで座る。

「しかし、まさかこちらへ直接顔をお出しになるとは…。何かありましたでしょうか？」

「いや、何かあったという話でもなくてね。私自身としては懐かしい相手から手紙を貰えて、しかも内容は『演奏の依頼』ときている。連絡先こそ交換はしていたんだけど、ほどなくして彼女を業界から見なくなってしまうた」

「なるほど…」

「こちらから連絡するのなんだか気が引けてしまって…。そういうしているうちに数年も過ぎてしまった。もう、連絡は取ることもないだろうと思ったら、急に手紙が届いたものだからなんだか嬉しくなってしまうて…」

「手紙の返事を書くのもせずにこちらへ直接来た、と」

「ああ。我ながら落ち着きがないとは思ってはいますが…」

なるほど。相手側からすればヴァイオリンの界限から姿を消した相手からのいきなりの『仕事の依頼』だ。

連絡先を渡していたくらいなのだし、少しは気にしてはいた相手からの急な手紙ともなれば訪ねてみようともなるかもしれない。

「実は、茉理の方は手紙の返事が来ないのでずいぶんとやきもきしてしまして…」

「っ、そうだったのか…。それは仲邑さんに失礼なことをした…」

「いえいえ。あれでも凶太いですよ。しかし、話を聞くかぎりはお二人はどういう出会いを？」

「ああ、実は——」

諏訪ちさとが初デビュー戦だったコンクール。優勝候補だった本人も最高の演奏だったそう。

しかし、実際に優勝したのは同じく初出場だった仲邑茉理。しかもこの時点では完全に無名で師もついていなかったというのだから茉理の才能は天性のものだったのでしようね。

「優勝候補だなんて騒がれていたというのに仲邑さんには勝てなかった。だけど、だからこそ世界が広いことを私は思い知らされた」

「なるほど。それで、連絡先は渡していた、と」

「ああ。でも、仲邑さんは急にいなくなってしまった。風の噂で病気のせいで師から破門されたことだけは聞いていたが、逆に連絡しにくくもあつた。私が声をかけていいものか悩んでしまつて…」

「そういうしているうちにこうやって機会が巡ってきたわけですね」

「ああ！だから、この仕事、快く引き受けさせていただくよ」

「ああ、ありがとうございます！」

今まで黙って聞いていたすみれと深夕が頭を下げる。さて、せつかくですし——

携帯を取り出して電話をかける。かける相手はもちろん茉理。

『——もしもし。どうしたの、刹那さん』

「ああ、茉理。今、時間は大丈夫ですか？」

『うん。大丈夫だよ』

「そうですか。少し待ってください——ちさとさん」

「えっ、と…」

「どうぞ。相手は茉理ですから」

携帯を受け取るとちさとは話し始める。すぐに楽しそうに笑っていることから茉理も電話口で笑っているのだろう。

「刹那お姉さま、こういうことはマメですね」

「連絡を取っていなかったのなら今からまた交友を深めればいいんです。仲良くなるのに早いも遅いもありませんからね」

しばし話していたがとりあえずの区切りは着いたのだろう。電話を切ってからこちらへと携帯が差し出された。

「ありがとうございます。改めて連絡先の交換もできました」

「いえ。茉理も嬉しく思っているでしょうし、私としても友人の交友を復帰させられたのは嬉しいことですから」

「ああ、ありがとうございます」

「それで、諏訪様。演奏会の方なのですが…」

「ああ。こちらでもプログラムは考えるけど、そちらでもいくつか立案してほしい。意向のすり合わせ等の連絡はこちらに。演奏中でないかぎりはあるようにする」

「はい。それでは、本日よりよろしくお願いいたします」

「ああ。私の方こそよろしく頼む」

(とりあえず、一件落着ですかね)

小さく息をつく。ふと、ちさとは何かを考えるようにこちらを向いた。

「えっと、雨水さん。つかぬことをお聞きするがかまわないか？」

「はい。私で答えられることでしたら」

「貴女は二〜三年前の夏頃、北欧の方を旅行か何かしていたかどうか？」

「二〜三年前の夏頃、ですか…。二年前であればイギリスの辺りを夏休みに旅行していました、それがなにか？」

「そのとき、何か事件のようなものには巻き込まれなかった？」

「ええ。現地の知り合いに仕事の依頼はされて護衛はしていました。なんでも『日本の有名なヴァイオリニストが来る演奏会があるから一緒に行こう。ついでに護衛でもお願いできないか？』などと言われて行きましたよ。あの時の演奏会は今でもよく思い出します」

懐かしいですね。茉理と仲良くなり始めた頃でヴァイオリンの演奏についても知識をつけ始めた頃でしたからとても楽しく聴いていました。

「その時、暴漢を捕まえなかった？」

「えっ、ええ。演奏会のあとに当時の演奏者の楽器を狙った盗難がありました。偶然にも犯人は私の方に来ましたから叩きのめしましたが」

覚えていまずとも。友人と気分よく帰ろうとしたところで現地の人が『ひつたくりだ〜』みたいなことを言うのを聞こえたので振り返れば男が一人、手に楽器を入れた入れ物を持って走ってきましたから。

あの時は演奏会の余韻に水を刺されたことで思わず全力をもって制圧してしまつて、友人と逃げるようにその場から離れたものです。

「やっぱりか!」

「——っ!?!」

ちさとは急にこちらの手を握りしめた。

「ずっと、ずっとお礼が言いたかつたんだ!」

「え、ええと…。どういうことでしょうか?」

「あの時、盗難にあつた演奏者は私だつたんだ…」

「…えっ?」

「えっ?」

さすがにすみれと深夕も驚いていた。ええ、私もですが。

「あの時は楽器を返してもらうと相手はすぐに走り去つてしまつて…。お礼を言うために警備の方に調査を依頼してみたけど結局どこ誰かすらわからなかった。わかつたのは日本人ということぐらいで…」

「そう、ですか。あの時の…」

ちさとはしばらく目を閉じていたが、目を開くとその瞳に炎が灯つたように見える。

「——これは、思っていた以上の演奏会をする必要があるな。あの時のお礼の分まで、演奏会に力を入れさせてもらうとするよ!」

「…ええ。楽しみにさせていただきます、ちさとさん」

「ああ！楽しみにしててください！」

そのまますみれ達と打ち合わせを始めたちさとを見ながら…。

「これは、紅鷗祭の演奏会が今から楽しみでなりませんね…」

きつと、あの時の感動よりも更に上の感動をもたらしてくれる。紅鷗祭が待ち遠しくて仕方ない。



## 第40話 一時入寮

演奏会の打ち合わせに少し付き合つて。寮に帰つて夕食を食べ終えた頃に茉理から電話が入る。

『もう、急にびつくりしたよ』

『ですが、良かったでしょう?』

『…うん。ありがとうね、刹那さん』

「お礼を言われるようなことでもありませんよ。どうにも私にも縁のある方でしたから」

『どうということ?』

応接室であつた話を話すと電話口で茉理が笑っているのが聞こえる。

『刹那さんってなんだかんだといろんな人と仲良くなれることとしてるよね』

「そうなんでしょうかね?自分ではよくわかりませんが…」

『刹那さんらしいなあ』

茉理としばらく電話で話し、きりのいいところで電話を切ると入浴セットを持って風呂場へと向かう。

浴場の扉を開けると予想していた人物は湯船に浸かつていた。向こうはこちらを見るなり少し頬を赤く染めて顔をそらした。

「いい加減慣れてはどうですか、密さん」

「あのですね。無茶言わないでください」

「無理を言っているつもりはないのですがね」

身体をサツと洗うと密の隣へと浸かる。

「それで、そちらの聖歌部の問題は解決しましたか?」

「刹那さんも何か知っているのですか?」

「いいえ。そちらは織女さんや美玲衣さん、鏡子さんも動いていたよ。うなので気にしないことにしていました。私が口出しするような話なのかもわかりませんでしたし」

「…はい。ひとまず、解決いたしました」

「そうですか。でしたら、これ以上の詮索はしないようにしましょう」

「そうしていただけると助かります」  
お互いにゆつくりと身体を温めるとそれ以降は大した話もせずにあがることにした。



—美玲衣 side—

学院に出てきてからため息が止まらない。別に嫌なことがあったとか苦労話があったとかそういったことではないのだが、最近は特に疲れることもなかったはずなのですが…。

(無意識に何か疲れるようなことを感じている…?)

それならなおのことわからない。自分が何に疲れているのかわからないというのに、それを考えているのはどうすればいいのか…。

図書室で読書をしているのに内容がまったく入ってこない。今日はもう切り上げて教室に戻るか…。

「美玲衣さん」

「えっ? あつ、密さん」

本から視線を上げた先には密がいた。手には数冊の本を持っていてるので、何か借りに来たのでしょうか。

「どうかしましたか?」

「何がでしょうか」

「いえ。ひどく、苛立っているように見えたものですから」

苛立っている、か。間違いではない。今は少し虫の居所が悪いのは事実だ。

「少し、問題がありましたから…」

「問題、ですか」

「ええ。といつても、別に深刻な問題でもありません。ただ、少し憂鬱にはなる話だけです」

「何か、手を貸す必要などはありますか?」

「…いえ。密さんの手を貸していただいたりするような話ではないですね」

そう。人を頼るような話ではない。

「そうですか。もし、力になれるようでしたらいつでも声をかけてください」

「はい。ありがとうございます。そろそろ、行きましようか」

「ああ。今日は会合の日でしたね」

——そうして、いつも通りの象牙の間にやってきて、いつものように雑談に興じる。何も無ければこうして時間は過ぎていく。

しかし、今日は少し珍しいことを聞いた。

「寮生活、ですか。織女さんが…?」

「はい。二学期からですが」

「急にまたどうして…?」

「そうですね。密さんや利那さんのお話を聞いていると楽しそうだったから、でしようか」

『楽しそう』ということだけで寮生活をスタートさせるといのはどうなのでしょう。というよりこのような中途半端な時期からでも入寮とはできるものなのでしょうか?」

「まあ、姫の場合は一族の権力によるごり押し入寮だけどね」

「一時入寮でしたら、書類を用意すれば一般生徒でも可能な話ではありますが、このような時期の入寮は本来であればあり得ません」

やはり、風早の力による中途入寮ですか。しかし、一時入寮というシステムもあるのですね。

「しかし、織女さんのような方が寮生活というのはなかなか大変なことなのでは?」

「そうですね。多くの場面で未だに戸惑うこともあります、それも含めて寮生活は楽しんでおりますわ」

「まあ、寮生活だというのに、まともな自活をしているのは私や密さんぐらいですが」

「どういうことですか?」

周囲の他の人を見るがことごとく視線を外される。織女さんも追及されたくないのか、視線を外した。

「料理できる人が私と密さんぐらいなんですよ」

「ああ、なるほど。しかし、それでは学院の理念的にもどうなのでしょう。元は花嫁修業の側面のあった学院ですしね」

私の言葉に密さんと刹那さんは苦笑い。肩もすくめている。他の面々はそれぞれに視線をそらす。

しかし、織女さんだけは様子が違った。

「——しかし、そう言われるということは美玲衣さんも料理はできるといふことですよね？」

「え、ええ。他人に食べさせられるようなものはさすがに作れません  
が…」

自分だけで簡単に済ませてしまえる程度のものなら私でも作れる。

「料理ができる人はみんなそう言うのです」

「鏡子さん。私や美玲衣さんも最初から料理ができていたわけでは  
ないですよ」

「密さんはできる側だからそう言えるのです」

「でしたら、美玲衣さん。今度、私たちにご飯を作ってくださいませ  
んか？」

「…は？」

いえ、どうしてそんな話になるのかよくわからないのですが。

「刹那さんや密さんの料理の腕前は私達には到底どうにかなるような  
レベルでないのは日頃のご飯から把握しています。ですが、美玲衣さ  
んは先ほど『他人に食べさせられるほどのものはできない』と言っ  
ていましたから、それがどの程度のものなのか見せてはくれませんか  
」

「…そこまで密さんと刹那さんのご飯は美味しいということですか」  
こう言われてしまうと気になります。そういえば、菜理からも何  
度か刹那さんの料理についてお話を聞いていましたね。

そこで、織女さんが何か思いついたように手を叩いた。

「そうですわ。美玲衣さん、先ほど出ていた一時入寮。あれをなさ  
つてはいかがでしょう」

「えっ？」

「えっと…一時入寮、ですか。しかし、そんなに簡単にできてしまう  
ものなのですか？」

奉仕会会長であるすみれさんを見ると、隣にいたあやめさんが書類を持ってきていた。

「こちらの書類一式に必要な事項を記入の上、奉仕会に提出していただければ後はこちらで手続きいたしますわ」

「あやちゃん、いつの間に…」

「ふふん。こんなこともあるうかと、お話の最中に奉仕会室から用意してきておきましたの」

「こういう時は用意がいいですね。書類に目を通すが、特に面倒な手続きなどはなさそうですし…。」

「それでは、今週末からでもお願いできますか」

「はいはい。書類受け取り次第、準備しておきますわ」

「美玲衣さん、よろしくお願いしますね」

「刹那さん。はい、よろしくお願いします」

少し離れたところで密さんと鏡子さんが天井を仰いでいますがどうかしたのでしょうか？



—密side—

寮へと帰る道すがら。密は鏡子、刹那と密談していた。

「どうしましょうか？」

「美玲衣の一時入寮をですか？別に構わないでしょう。早々にバレるとも思えません」

「刹那さん。この密さんですよ」

「鏡子さん。どういう意味ですか」

「まあ、美玲衣にも何か理由があるのでしよう。でなければ、あんな風に即決するとも思えません」

「そうですね」

図書室で会った時も感じたが、美玲衣さんはなにやら機嫌が悪そうでした。それが、一時入寮を決めてからは少し落ち着いたようにも見えましたし…。

「なんにせよ、これ以上バレないようにお願いします」  
「それはわかっています」

## 第41話 引き継ぎ

週末に美玲衣さんの一時入寮を控えているなか。今日は定期の集合の日ではあるが、特に大きな問題などもなく、象牙の間に集まった面々はそれぞれに思い思いのことをしていた。

そこへ、奉仕会室へと繋がる扉が静かに開くと、あやめさんがこそそこと入ってきた。

「あやめさん。どうかなさいましたか？」

「すみません、宮様方。少しの間、匿ってほしいのですわ」

「匿う？」

「はい。失礼いたしますわ」

そのままピアノの向こう側へと姿を隠してしまった。少しすると今度は深夕さんが姿を現した。

「申し訳ありません、宮様方。こちらにあやめさんは来ておりますでしょう」

密は美玲衣、織女と視線を交わす。どうするべきか逡巡していたら

「バカなこととはせずにとつとと行きなさい」

「…うう。刹那お姉さま、こういう時は容赦ありませんわね…」

茉理のピアノを聴きながら読書していた刹那さんがあやめさんの首根っこを掴んでピアノの向こう側から運んできた。猫扱いでしようか。

「刹那お姉さま。お手数をお掛けいたします」

「いいえ。しかし、なぜあやめさんはこちらに逃げてきたのでしょうか」

「はい。今は二年の修学旅行の関係で奉仕会の仕事を一年側へと引き継ぎをしているのです」

「ああ、もうそのような時期でしたか」

「はい。では、あやめさんは引き取らせていただきます。宮様方、失礼いたしました」

「ちよつ、深夕さん？せめて引きずらないでほしいですわ…」

首根っこを掴まれた状態で渡されたあやめさんがそのまま首根っこを掴まれた状態で引きずられていった。

扉が閉まったところで、茉理がテーブルの方へと来た。

「そっか。もう修学旅行の時期なんだね」

「この時期は奉仕会は大変ですからね。なにせ、一年のみで回さねばなりません」

「それは、どのくらい大変なのでしょう」

「そうですね。少なくとも処理すべき案件は減らないというのに処理できる手が半分になるようなものですね。去年、私は千歳を脅——  
：お願いして手伝ってもらいましたが」

刹那さん。今『脅して』って言いかけましたよね。美玲衣さんや織女さんも聞こえていたようですが、スルーするみたいです。

「そうなるも、照星も忙しくなると思った方がいいのでしょうか」

「いいえ、美玲衣さん。照星がやるべきことは不測のトラブルの解決に尽力してください。基本的な仕事は今、深夕の言っていた通り引き継ぎをしています——が、毎年のことですがこの時期はトラブルが増えるらしいのです」

「トラブルが増える……？」

「なぜかはいまいちわかりませんがね」

肩を竦める刹那さんに、美玲衣さんや織女さんは少し驚いている様子だ。

「とりあえず、照星側でトラブルを作らないようにだけ気をつけていればいいですよ。トラブル作りな私が言っても説得力がないのはわかっています……」

「自覚あるんですね、刹那さん」

「ありますとも。しかし、織女さん。貴女には言われたくありません」  
密は苦笑いする。仕方ないとは思うものの、苦笑いが浮かぶのは仕方ないと思っしてほしい。ふと、隣を見ると美玲衣さんも苦笑いしていた。

「密さん。顔が笑っていますよ？」

「美玲衣さんこそ。他人のこと言えないぐらいにやけていますが……」



？」

二人で苦笑いしていると振り返った織女さんがこちらを向いてふくれている。

「どうして二人は笑っているのですか」

「どうしてと言われますと…」

「そう、ですねえ…」

結局のところ、ごまかすために苦笑いしているしかなかった。



— 鏡子 side —

本日は本来であれば象牙の間に顔を出すべきなのだが、千歳さんが何やら話があるとのことで中庭へと足を運んでいた。

座って待っていると千歳さんの姿が見えてきた。

「珍しいですね。貴女が普通に現れるとは」

「なんです。まるでいつもは不思議な現れ方をするような言い方をしますね」

「普段の行いを省みてから発言しなさい」

いつの間にか隣に座っていることなど当たり前。木の上から飛び降りてきたりする相手が普通に歩いてきたのですよ。珍しいと言って何が悪いのか。

「——それで。本来の方をキャンセルさせてまで私を個別に呼び出した理由はなんでしょうか？」

「そうですね。本題に入りましょう。実は週明けから私達二年生は修学旅行に行くわけですが」

「…ああ、もうそんな時期でしたか」

この時期はトラブルが絶えない。とはいえ、目の前のトラブルメーカーが減るので、今年は静かに過ぎるといいですね。

「なにやら小バカにされた気がするのですが…」

「気のせいですね」

「まあ、私のことは気にしないでいいです。修学旅行の方へと行って

しまえば学院に迷惑をかける方法はありませんから。ですが、問題はあります」

「ええ。そうですね」

なにせ、新聞部には三年の真紗絵さんがいる。

「しかし、それほどまで気にする必要はないと思うのですが」

「そう思いたいですが、今年の照星は例年よりも良きメンツがそろっていますし、それに比例して一年や二年におけるファンの数もしのごしを削るほど。これがトラブルの種になるかもしれません」

「ファンがトラブルの種になるのはわからなくはありませんが、そう簡単に起きるとは思えません」

そもそも宮ごことにファンクラブという名の派閥が出来ているのは知っている。しかし、この派閥はそれぞれにぶつからないように意外にも動いている。

まあ、不用意なトラブルは各宮に負担をかけることになるので派閥内で牽制のようなものが起きるのだろう。

「まあ、派閥が真つ向からぶつかるようなことはありえないでしょうが、問題は別のトラブルが起きた時に派閥がぶつかる可能性があるんです」

「別のトラブル、ですか」

「はい。というのも、毎年この時期だけはあらゆる中核を担う二年が抜けてしまう関係か、部活動間などでトラブルが発生すると『やれあのトラブルは〇〇派閥の差金で』、『あの言いがかりは彼女が〇〇派閥にいるからだ』などといった別口のトラブルに発展するんです」

「それは、なんといいいますか…」

おそらく、照星制度によって発生してしまう必然性の事案というやつなのでしょうか。確かに照星というのは一般生徒——特に一年生から見れば『雲の上の存在』になってしまふのかもしれないね。

「まあ、そういうわけで。この時期だけは照星に関するトラブルが発生しやすいんです。毎年、奉仕会の方でも何かと対策はしているようですが、いかんせん何が引き金になるのかわからない事案ですから」

「わかりました。こちらとしてはトラブルがないに越したことはありません」

「ませんし、その忠告、頭の隅にでも入れておきます」

「そうしてください」

「しかし、千歳さんも何かと世話焼きですね」

「えっ、そ、そうですか？」

「ええ。こういった情報は新聞部では使えないとはいえ、わざわざ私達に教えるに必要もないはずですが」

「ああ。まあ、普通に考えればそうですね」

「ということは、何かしらの見返りがあるということでしょうか。」

「鏡子お姉さま。なにやら考えているようですが、違いますからね。今年の宮様方はそれぞれに何かと重責を背負っている方ばかり。精神的負担は今までの照星方よりも多いことと思います。途中で潰れてしまうのは私の本意ではありませんので」

「彼女達も新聞部のネタ提供のために照星をしているわけではないのですがね」

「ええ、そうですね。しかし、週末から美玲衣お姉さまが一時的に寮に入るとも聞き及んでいます。また楽しそうなお話、鏡子お姉さまから聞けることを期待していますよ？」

やはり知っていたようです。それにしてもどこからこういった話はこの子に漏れているのでしょうか。



——千歳 side——

鏡子お姉さまとお別れしてから家路を歩く。今日も今日とてお姉さまと楽しく話せたことはいいものだった。

——私が『この気持ち』に気がついたのは密お姉さまの水泳授業の際に奔走していたときだ。

他人を陥れてしまうような記事はいつかきつと取り返しのきかない事態を誘発してしまう。それが、その人の人生を大きく狂わせてしまうことだつてある。

——私が家族を失った事故。

調べていくうちに、あの事故はどうやら同業者者に仕組まれた事故だということを知ってしまった。

とは言うものの、相手方も殺すつもりはなく『少し手荒い脅し』のもりだったらしいこと。事故を知って苦悩し、私が知り得た頃には自殺してしまっていたこと。

私にもその同業者の者にも『あの事故』は人生を大きく狂わせてしまうものになってしまった。

もちろん、学院内でここまで酷いことになるとは思わない。でも、きつと傷つく人が出てきてしまう。

——だから私は奔走した。悲劇など、どこに転がっているかなんてわからないから。

——だから、疲れ果てていた時に、鏡子お姉さまが膝枕をしてくれたことは嬉しかったし、その：私にはとても他人には言えない『気持ち』を持っていることを知る機会にもなってしまった。

だから、私はまた鏡子お姉さまに会いに行く。『この気持ち』に嘘偽りがないのはわかるから。

——私は、鏡子お姉さまに『——している』のだから。

## 第42話 忙しき奉仕会

—美玲衣 side—

週末。数日分の衣服を旅行鞆に詰めて私は学院の寮の前にいる。今日から少しの間ではあるが、ここでお世話になる。

「ようこそ、美玲衣さん」

「美玲衣お姉さま、ようこそいらつしやいました」

「すみれさんは寮長なのでわかりませんが、刹那さんはなぜ一緒に？」

「いえ。休日ですが茉理は忙しく会えないとのことなので暇潰しです」

暇潰しですか。相変わらず自由な人ですね。

「まあ、半分冗談ですよ。荷物、持ちますね」

「えっ、いえ、そんなにありませんし…」

「気にしないでください。部屋まで運びますよ」

「それでは、美玲衣お姉さま。中をご案内いたします」

こちらの手からさつさと旅行鞆を引つたくとすみれさんを先頭に寮の中へと入る。

「今日は皆様お出かけしてたりとほとんどの方が出払っていて、今の時間は私と刹那お姉さましかいらつしやいませんが…美玲衣お姉さまは皆のことはよくおわかりかと思えますので説明は大丈夫ですね」

「そうね。普段から顔を合わせる方々ばかりですし」

「では、寮内の案内の前に、お部屋にご案内いたします」

階段を上がり、とある一室を開ける。最低限の家具やテーブル、メイキングの終わっているベッド。

刹那さんはそのベッドの隣に鞆を置いた。

「綺麗なお部屋ですね」

「はい。昨日、刹那お姉さまがなぜか茉理お姉さまと掃除をなさいましたので」

…なぜ茉理と刹那さんが？刹那さんの方を向くと本人は少し首を傾げる。

「業理はあまり部屋の掃除などはしたことがないと言うので。最低限の知識を教えるついでにこのお部屋を掃除しましたよ。部屋の広さ的にはちょうどいいサイズでしたから」

「そうですか」

「まあ、私としても美玲衣さんには快適に過ごしていただきたいと思いましたが。とは言っても、こういうことぐらいしかできません」

「いえ、お気遣い感謝します」

「それでは、寮内のご案内をいたしますね」

「よろしく願います」

すみれの案内で寮内の説明を受けていく。いつの間にか刹那さんの姿がない。

食堂の方へと案内されると、そこで紅茶とお茶請けのクッキーをテーブルに並べている――

「ふむ。予想通りの時間で来ましたね」

「刹那さん。いつの間にこちらへ…?」

「おや、気がついていませんでしたか。部屋を出た時点で食堂へ来て時間を計りながら準備をしていたのですよ」

紅茶からは温かい湯気が立ち上っている。芳しい香りもしているから入れたてなのだろう。

「寮生と仲良くすることはたいして難しいことはありませんし、今は私達以外はいないのですし。今はゆっくりすることにしませんか」

「刹那お姉さまはゆっくりしすぎではありませんか」

「ほう? すみれもなかなか言うようになりましたね。週明けには貴女も修学旅行があるのですから、今くらいはゆっくり休んでは?」

「…美玲衣お姉さま、いかがなさいますか?」

「そうですね…」

少しだけ考えて、手近なイスに座る。

「今くらいは刹那さんの話に乗りましょう。美味しそうな紅茶も用意してくださっているようですし」

「ええ、味は保証いたしますよ」

「すみれさん。せっかくですから寮でのことをいろいろと聞かせてください」

「わかりました。そういうことでしたら…」

結局、その日はリビングで紅茶を飲みながらゆったりとした時間を過ごすことで終わってしまった。



— 香苗 side —

週が明けて。奉仕会は多忙を極めていた。

「ああ、いくらなんでも忙しすぎですわ…」

処理すれど減らぬ書類の山。奉仕会以外のところにも振り分けてもなお、自分達の目の前にある書類は山のようにうだ。

「単純に、処理できる人手が半分になっていきますから…」

「よくよく考えてみれば、紅鷺祭が近いのですから仕事量は普段よりも増えているんですわよね…」

あやめさんも私も書類の処理に追いつけていない。次から次へと奉仕会へと流れてくる日々の案件に紅鷺祭関連。

今ばかりは照星の方々の対応は免除されているような状況でも、奉仕会はすでにパンク気味である。

「香苗さん、私は職員室への書類提出と諸々の打ち合わせがあるので席を外しますわね」

「わかりました。お願いします、あやめさん」

「いつてまいますわ…」

フラフラと奉仕会室から出ていくあやめさんを見送って、私は手元にある書類を見てため息をつく。

「どうしよう…」

それは、来週の視聴覚室の使用申請に関する書類。問題は、それが二つあるということ。

一つは映画研究会。他校との交流会が近いとの記載がある。もう一つはESSS (english speaking society

y)。こちらには特に付随記載は無い。無いのだが…。

(確か、去年のこの時期は弁論大会があつたような…?)

とはいえ記憶は定かではないし、書類の記載欄にも特に記載はされていない。となると、自分の記憶違いの可能性もある。

本来であれば、それぞれの部活に書類を差し戻して話し合つてもらうのが一番なのだが、書類の提出期限は今日まで。しかも書類を発見したのは今朝。

「もつと早く見つけていたら——」

悔やんでいても仕方ない。担当の教師が帰つてしまう前に書類を提出しなければ二つの部活にも迷惑がかかる。

「ESSには特に付随記載は無いのだし、いいよね…?」

映画研究会に3日、ESSに2日を割り振ると書類を提出するため帰つてきた生徒の一人に声をかけて職員室へと向かった。

☆

——次の日。

昼休みの時間に書類の処理にあやめさんと追われていると一人の生徒が訪問してきた。

彼女はESSに所属しているらしく、今回の決定に不服があるとして申し入れに来たようだ。

「——だからさ、うちは毎年この時期には弁論大会があるから視聴覚室を使うことも毎年恒例なんだけど」

「そうはいいますが、英子さん。提出されていた書類には付随記載はありませんでしたよ」

「それは、そうだけどさ…。だから、今説明してるじゃん」

言いたいことはわからなくはない。しかし、そのような陳情があつたとしても——

「映画研究会は交流会のことを記載しており、ESSは特に記載していませんでした。こうして見比べると映画研究会の方が必要事項の記入もあることから優先順位が上に来るのは仕方ないと思いません



か？」

「それは…」

なおも言い募ろうとする英子さんにあやめさんが手を向けて止める。

「おつしやりたいことはわかりますわ。しかし、私達としてはあくまでも記入された書類を元に判断するしかないのですわ。毎年恒例だからと記入を怠ったのはESS側の落ち度。これ以上無理をおつしやられても我々はどうにもできません。」

それでもどうにかならないか、というお話であれば一度、映画研究会の方とご相談してみるのはいかがでしょう？」

「うーん、やっぱりそうなるよねえ…。わかりました。貴重なお時間を取って下さりありがとうございます」

奉仕会室から英子が出ていく。納得しきれてはいなかった様子ですが…。

「あやめさん、申し訳ありません。事前にご相談すべきでした」

「いえいえ。謝るようなことでもありませんわ。たとえご相談されていたとしても、私も香苗さんと同じ判断を下していたと思いますし—

—はい。まだまだ仕事は山積みですし、お仕事に戻りましょう！」

「—はい」

その後は両部活動ともに奉仕会へと姿を現すことはなかった。

## 第43話 取り巻く話題

——一方、その頃。

—美玲衣 side—

昼休み。昼食を取るために食堂へと足を運ぶと複数名の一年生から声をかけられ、一緒に食事を取ることになる。

「あら。鈴蘭の宮の選んだ和食も美味しそうですね」

「私もそちらを選べば良かったです…」

微笑みながら食事を終えて、図書室へと足を運ぶ。

書籍を選んでいるところへ、先ほどからこちらの様子をうかがっていた一年生達が近づいてくる。

「鈴蘭の宮、何かオススメの書籍などはありませんか」

「オススメ、と言われても…。貴女が普段はどのような本を読んでいるのかわからないと答えが返せないわね…」

「そうですね——」

いくつか挙げられた書籍を頭に浮かべながら本を選んで渡す。自分も借りる本を選んで図書室から出る。

「いやあ。鈴蘭の宮は人気者ですね」

「真紗絵さん」

一年生を見送ったところで真紗絵さんが現れる。

「そういえば鈴蘭の宮。今、一年生の間で薔薇の宮派と鈴蘭の宮派で過熱してるみたいですよ」

「興味ありませんね」

「興味でない？ けっこう面白いことになってるみたいですよ」

「面白いこと？」

「興味出た？」

ニヤニヤ笑いをしている真紗絵さんの反応に…。

「何か話題になってるんですか」

「うーん。まあ、各宮派の一年生が喧々諤々盛り上がりつつあるみたいだよ」

「喧々諤々って…」

何を話すことがあるというのか……。楽しそうに笑っている真紗絵さんを見ていると妙に不安になってくる。

「まあ、何かあったら新報を出すからよろしく！」

そうして歩いていく真紗絵を見送る。

「何もなければいいんですけど……」

ああいうことを言われるとやはり気になるものですが……。

☆

放課後。象牙の間へと行くと演奏している茉理、ティータイムをしている密さんと織女さんがいる。

「お疲れさまです」

「美玲衣さん。少し遅かったですね。もう少し早ければあやめさんが紅茶を出してくれたのですけど」

「あら。それは少し急いでくるべきでしたでしょうか」

なんとなく刹那さんを探して部屋を見渡す。が、今日は来ていないのか姿は見えない。

「刹那さんなら今日は忙しいようですぐに帰られましたよ。こちらへ寄る時間もなかったようです」

「あつ、そうなんですか」

「なにになに。美玲衣ちゃん、刹那さん探してたの？」

練習の手を止めて茉理がこちらへと来る。

「あれ。美玲衣ちゃん、ちよつと疲れてる？」

「…そう、見えますか」

「うん。はい、座って座って」

茉理がイスを勧めてくるので素直に座る。密さんも紅茶を用意してくれたのか、テーブルにはカップが置かれている。

「ありがとうございます」

「やはり少しお疲れのようですね。何かありましたか」

「そうですね——」

……最近続いていることを話す。聞いていた密さんや織女さんは

領いていて、お二人も同じような状況にあっているようだ。

「最近少し過剰な感じはしていましたが、美玲衣さんはああいったことの対応はあまり慣れていないのですね」

「そうですね。照星に選ばれてからはああいう機会も増えてはきていたのですけど…」

未だに慣れない、というのは弱音だろうか。

「やっぱり美玲衣ちゃんとかもそういうのあるんだねえ」

「えっと、茉理さん。誰と比べているんですか？」

「えっ？刹那さんにもああいう子達いるよ。少ないけど」

「「えっ?!」」

照星三人で驚いてしまった。いや、確かに刹那さんも何かとカリスマ性を持った人ですし、いやしかし…。

『女帝』と呼ばれている刹那さんに、取り巻きの下級生…ですか」

「想像が、つきません、わね…」

「あれ〜？じゃあ、あの子達ってあんまり知られていないんだね。前に刹那さんに聞いたことあるんだけど、なんでも二年生四人いるから『四聖』<sup>しせい</sup>って呼ばれてるらしいよ」

また素晴らしくかっこいい二つ名を戴いているようで…。しかし、あの刹那さんにそんな子達が…。

「二年生に四人だけ、なんですか？」

「らしいよ？一年生の中にも何人か刹那さん派の子がいるっていうのは聞いたことあるかな〜」

「隠れた派閥というものはあるものですね」

「まあ、刹那さんの場合。私達の子達のようにおおっぴらに動くような子を野放しにするとも思えませんし…」

「なるほど。確かにそうですね」

「しかし…『四聖』ですか。いつか見てみたいものですね」

織女さんの言葉に私と密さんは同意するように頷くだけだった。



二年生が修学旅行へと出発した頃から、クラス内では一つの話題が盛り上がっていた。

曰く、『照星の方の誰が推しか?』というもの。

花としては密お姉さまも織女お姉さまも美玲衣お姉さまも等しく優しく親しみやすいお姉さま方という印象が強いのですが、クラスの他の子達からみるとそうでもないということを知りました。

でも、話しかけるのにとってもない勇気がいると言われても花にはピンと来ない話なのですが…。

それでも、話の根底にあるのはお姉さま方を慕う気持ちなのでそこは花としても理解できることなのです。

——けど、それでも…。

「えっと、英子ちゃん。それは、花にどうしてほしいのでしょうか?」  
「だからさ。花さんって照星のお姉さま方ととても仲がいいじゃん。今回だけでいいからさ、さっきのことお話してみてもらってもいいかな?。」

「えっと、あの…。」

「よろしくね!。」

遠ざかっていく英子ちゃんの背中を見ながら、花はただ呆然と頼まれたお話を考えるしかありませんでした。

『話された内容』というのは、どうやら近く英子ちゃんの所属しているESSという部活と映画研究会という部活が視聴覚室を日割して使用するようなのですが、これに照星のお姉さま方からESSの方へ『便宜』を計ってもらえるようにできないか?という相談でした。

寮へと帰る間も考えてはみましたが花自身ではどういう答えを出していいのかわかりません。ですが、密お姉さまに話すわけにもいきません。

「なるほど。それで私に相談しに来た、という次第ですか」

バルコニーで相談相手の鏡子お姉さまはうんうんと頷いてくれてる。

「正直なところ、英子ちゃんの話もわからなくはないのです。けど、こ

んなお話を話してもいいのかと思ってしまっ…」

「なるほど。しかし、この件に関しては花さんは関わらない方がいいと思います」

「それでしょうか…？」

できるなら相談されたことを手伝いたい…とは思いますが。

そう思っていることを鏡子お姉さまは表情だけで理解したのか、人差し指を立てて。

「もし、今回の相談事を花さんが密さんに相談して、まあ、それが功を奏したとしましょう。そうしたら映画研究会の方が今度は花さんに同じように頼んできたとすれば、花さんは対応できますか？」

「それは——無理、です…」

「そういうことです。花さんがその友人のために頑張つてあげたい気持ちはわからなくはありません。しかし、今回の場合に言えば片方に肩入れをしてしまった場合、もう一方から頼まれた場合に断らざるをえず…——万が一、便宜を図ったことがバレていた場合は花さん自身が大変な目に合うことになります」

何も言えず、ただただ俯いてしまう。そんな私を鏡子お姉さまは優しく頭を撫でてくださいました。

「まあ、あくまでも今回のような場合には期待には応えない方がいいこともある、ということですよ。友人のために何かをしてあげようと考えることは良いことなのですから花さんが落ち込む必要はありません」

「…っ、はい。ありがとうございます。鏡子お姉さま」

少し涙が溢れてしまいましたが、鏡子お姉さまには笑顔で返事を返す。鏡子お姉さまは私が泣き止むまで、優しく撫でてくれました。

## 第44話 若葉の葛藤

—若葉side—

携帯を握りしめて、若葉は目を閉じて固まっていた。どのくらいそうしていたのか、目を開けると携帯でとある番号へと電話をかける。

数回コールが続き——相手が電話に出た。

「夜分遅くに申し訳ありません。今、お電話は大丈夫でしょうか、千歳お姉さま」

『構いませんよ。湯上がりに外で涼んでいましたし』

「あの、お姉さま。どこで涼んでいるのですか？」

電話口の向こうから聞こえるのは遠くはあるが滝のような音が聞こえる。

『気にはいけませんよ。それで、若葉。どうしましたか？』

「…実は——」

若葉は二年生が修学旅行へと出発した頃から何かと話題に上がるようになった照星の話題を話す。

『ふむ。まあ、去年も盛り上がりましたからね。毎年恒例な気はしますが、本題はそうではないのでしょうかね』

「はい。実は、私が得た情報なんです——」

要点だけをまとめると、映画研究会とESSの視聴覚室使用申請時期が被っており、当初は映画研究会の使用日数が多く、これに照星が関わっているのではないかというのを部長が新報にしようとしていることを伝える。

そして、今日の放課後に若葉は花がESSに所属している生徒に上記の話題に対して『照星である密お姉さまに便宜を図ってもらえるように口添えしてもらえないか』という頼み事をされている場面を偶然にも見かけてしまった。

『なるほど。偶然とはいえ、そういった場面を見ると最初の話にもあながち部長の穿った意見とも言いにくくなりますね』

「はい。こちらを部長に伝えたところ『記事にするわよ！』と意気込んでいたので、明日の朝には新報が発行される予定です」

『そうですか。しかし、わざわざそのことを伝えるためだけに私に電話を?』

「——いえ、その…」

『…話してごらんなさい、若葉』

「はい…」

話したのは『今回の新報の記事に対して裏取りしなくていいのか』ということ。確かに頼まれているところは見たが、実際に花さんが照星のお姉さま方へ報告しているのかは不明で、また映画研究会の方もあくまでも『疑惑』だ。

あやふやな情報で新報を出すことは許されるのか。若葉にはわからなかった。

『ふむ…』

若葉の独白に千歳はしばらく黙っていた。

『そうですね…。まず、若葉さんに知っておいてほしいことがあるのですが』

「はい」

『あやふやな情報で新報を出すことは許されるのか?』というものですが、そもそも許す許さないの二言論で話す話題ではありません。そのようなことを言ってしまうえば世の中に溢れる雑誌や新聞は全部発行できなくなってしまうからです』

「…あつ…」

『真紗絵部長は『面白いことは皆で共有しよう』というモットーを軸に新報を出していますし、私自身は『正確差をこそ焦点にすべき』というモットーを軸に置いています。このようなスタンスの違いから私と部長は新報に対して意見がぶつかることは多いですが、それは仕方がないことだと私自身は割り切っています』

「割り切っている、ですか」

『はい。だって、新報でやりたいことが違うのですから仕方ありません。だから、若葉は若葉のやりたいように新報をあげられるようになるればいいのです。部長のようになるもよし、私のようになるもよし。まったく違う第三の視点から新報を出すもよし。そこは、貴女の考え



方次第になります』

「私の視点…」

考えたことがなかったといえは嘘になる。でも、部長も副部長も新報に対してはすぐく学ぶことが多い人達だったから、私は情報収集に注力していた。

『若葉自身で今回のことに思うところがあるというのなら貴女なりに追ってみればいいのです。それを咎める新聞部部員は居ませんし、貴女の考え方が私や部長とは違っていて——いえ、違っているからこそいいのです。』

——だから、若葉。自分の思う通りにやってみなさい。間違っていないのです。責任は私は部長が取りましますから』

「千歳お姉さま…。ありがとうございます、ごさいます」

いろんなことを教えられた気がした。自分自身、深く悩みすぎていたこともあっただろう。

「ありがとうございます、お姉さま。自分なりに、やってみようと思います」

『ええ、頑張りなさい、若葉』

電話が切れると若葉はベッドに潜る。明日からは、忙しくなるだろうから。



—千歳side—

電話を切り、今度は自分がかける予定だった相手へと電話をかける。相手はわりとすんなりと出てくれた。

「夜分遅くにすみません、鏡子お姉さま」

『いえ。今日の仕事は先ほど終わりましたから。それで、修学旅行は楽しんでいますか』

「ええ、ぼちぼちと。実は、鏡子お姉さまに聞きたいことができてまして…」

『ほう。修学旅行へと出ているはずの貴方が、ですか。いいでしょう、』

答えられる範囲でお答えします」

「ありがとうございます、実はですね——」

千歳は先ほど若葉から聞いたばかりの話題を鏡子に振る。

『わりとタイムリーな話題ですね』

「おや?ということは花ちゃんは密お姉さまに話したということですか?」

そうであればおそらく寝てしまっただろう若葉を電話で起こさなければならなくなるのだが。

『いえ。先ほど花さんからそのことについて相談を受けていたので』

「ああ、なるほど。寮内では花ちゃんのお姉さまでしたね。失念していました」

——と、なれば。花ちゃんが照星のお姉さま方へは報告していないことになるのだが。

『花さんは明日にでも友人に謝りにいくそうですからこの話題は解決しています』

「ところがどっこい、なことになるしそうですね」

先ほどの新報のことを話すとあからさまなため息がきこえてきた。

『この状況をかき回す気満々じゃないですか…』

「まあ、部長ですからね。そこで、鏡子お姉さまにお願いがございませぬ」

『なんででしょうか』

「花ちゃんのフォローとこの事を私経由で聞いたことも含めて照星へと伝えてほしいのです」

『花さんのフォローはわかりますが、密さん達に話してもいいんですか?』

「今回のこと。つまりは照星の推しの違いによる派閥争いの様相を呈してきています。もちろん、小規模な小競合いで済むのであれば私もなんとも思いません。」

しかし、今回は違います。部活同士のぶつかり合いに発展しつつあり、そこに無関係な生徒が今まさに巻き込まれようとしている。こればかりは私が許容できません」

それに、この事態を放置した場合。刹那お姉さまが私が知っていたことを知ると何をされるか不安があります。

『わかりました。妹が気づかずに渦中へと踏み込もうとしている以上、早急に動こうと思います』

「お願いします。：ただ、まずは情報を集めてください。照星方も全てをしつかりと把握できてはいないでしょうから」

『なるほど。確かにそうですね』

後は、気になる人物——刹那お姉さまはどうしているのか。

「鏡子お姉さま。刹那お姉さまは今回の件には動いていないのですか？」

『えっ？ああ、そういえばあまり見かけませんね。こういった時はこぞとばかりに関わってきそうなものなのですが。明日あたり、密さんにも聞いてみます』

逆に言えば他の生徒も同じような認識である可能性が高い。刹那お姉さま、渦中に関わらない時はとことん関わらないのは昨年の行動からなんとなくは知っていますが、まさか照星絡みの話題に関わっていない？なんてことあり得るのでしょうか。

「さて、そろそろ夜もたけなわなので切りますね」

『はい。修学旅行、しつかりと楽しんで帰ってきてください』

「ふふふ。お土産は期待してくれていいですよ？」

『楽しみにさせていただきます』

通話が切れると、軽く伸びをする。

（現場にいないと他の方々の動きがまるで把握できないから困ります。：が、若葉自身の成長が期待できそうな一件にもなりそうですし、部長には悪いですが次期部長候補の引き立て役でも演じてもらいますかね）

それにしても…と、考えるのは——

（刹那お姉さまは今回は本当にどうしているのでしょうか。いえ、あの人もそれなりに忙しくしている人ではあるのですが…）

やはり学院にいないというのはいろいろと困ることが多い。今は学院の喧騒を忘れて、友人方と修学旅行を楽しんだ方がよさそうだ。

## 第45話 対立の煽り

—花 side—

—翌朝。

いつもよりなんとか早く起き、密お姉さま達よりも早く学院へと来ると、件の彼女は待つていてくれた。

「英子ちゃん。お待たせしました」

「ううん。さつき来たところだから。それで、話つてなにかな？」

少しだけ期待しているような表情。ですが、花は——

「ごめんなさい。やっぱり花は昨日のお話はお受けできません」

「えっ、ちよつと、頭あげてよ、花さん」

勢いよく下げた頭に英子ちゃんは狼狽えているようです。頭を上げる。

「ごめんなさい。花にはやっぱり、そういう便宜とかを話したりはできません」

「あはは…。うん、そうだよね。いやさ、朝早くから呼び出されたからほんの少しだけ期待しちやっただけ。うん。これでいいんだよ」

「英子ちゃん？」

「ごめんなさい、花さん。私が考えなしに頼んだことですごく悩ませちやっただけで…。今度、何かお詫びするからさ」

「い、いえ、そこまでしていただくわけには…」

「これは私のケジメみたいなものだから！友達にこんなこと頼むなんて間違ってるよね」

寂しそうな雰囲気の英子ちゃん。そんな顔をさせたいわけではありません。だから、花は英子ちゃんの手を取った。

「英子ちゃん。もし、お姉さま達にお話に行くようなら花にお声かけください。一緒にお話します」

「えっ？でも、それじゃ——」

花は小さく首を横に振る。

「一緒にお話に行くだけです。お願いしたりはしません。これなら、お姉さま達にも迷惑をかける心配はありませんよね」

「花さん…。ありがとうね」

ようやく笑ってくれました。胸のつかえも取れましたし、良かったです。

英子と別れた花は教室へと向かって歩いていった。

「伊澄花さん、ですね」

「えっ?」

声がかかった方へと振り向くと一人の生徒が立っていた。

「はい。なんででしょうか?」

「はじめまして。私は映画研究会所属の一ノ宮紗映といいます。少し、お話よろしいでしょうか」

「…はい」

映画研究会と聞いてなんとなくどのようなお話があるのかと察することができた。

「花さん。貴女はESSから便宜を図るように頼まれ、映画研究会のことについては新聞部の方へと何らかの情報をリークした。間違いはありませんね」

「えっ?新聞部、ですか?」

何やら雲行きの様子怪しい話が出てきた。新聞部ということは新報が発行されているということでしょうか。

「あくまでもしらを切りますか。ですが、貴方がESSの部員と密談をしていたというのは新報にも上がっていました」

「英子ちゃんとの、話がですか?」

「つい先ほど断って——いや、今さっき『便宜を図った』と言われていたような…。」

「ご、誤解です。お話は確かにしましたが便宜とかのお話は先ほどお断りしたばかりで…」

「ではなぜ新報で映画研究会が、鈴蘭の宮が貶されているのですか!?!」  
花にはもはや何がなんなのかわからない。

「なぜ反論しないのですか。やはり、新聞部に何か話したのですか!?!」  
『ちよつと待った!』

聞こえた声の方を見ると英子がこちらへと早足で近づいてくる。

花の前に立つと、紗映から守るように対峙する。

「ごめんなさい、花さん。別れてから何か言い争うような声が聞こえたからさ」

「英子さん。ちょうどいいところに来ました。新報のこと、貴女にも聞きたいことが——」

「ストップ！そうは言うけど、私と花さんは新報を見ていないから何のことだかまったくわからないし、そもそも聞こえた話だと私が花さんに頼んだ『便宜』の話だよ。それならついさつき花さんから断られたばかりだよ」

「やはり便宜は頼んだんですね。みっともないと思わないのですか？」

「うっ…。それはまあ…。でも、この話で花さんがこれ以上言いがかりをつけられるのを私は見逃せない」

「言いがかり、ですか」

英子の反論に紗映はため息をつく。

「言いがかりかどうかは貴女方の話次第でしょう」

「まだ疑ってるの!？」

「今の話を聞いた以上、貴女方以外にわざわざ新聞部に話を持っていくような生徒はいません。さあ、洗いざらい——」

『何をしているのでしょうか?』

再び聞こえた第三者の声。階段から降りて姿を見せたのは——

「刹那お姉さま…」

花が呟いた声に刹那は柔らかな笑みを花と英子に見せると、半身のまま紗映へと視線を移す。

「なにやら揉め事の様子でしたので差し出がましいとは思いましたが割り込ませていただきました。相手の話を聞かずに一方的な話をするのはさすがに見過ぐすわけにはいきません」

「わ、私はそのようなつもりはありません」

「で、あればこそ。新報を見ていないというお二人の話を無視して一方的な話を進めようとする理由はなんですか?」

「私は、そんなつもりじゃ…」

「ならば、今は引き下がらなさい。頭が冷えれば今よりはもう少し建設的な話し合いができるでしょう」

「…わかりました」

振り返って歩き去る紗映の背中を見てから刹那は二人へと振り返る。

「大丈夫でしたか？」

「は、はい。ありがとうございます」

「刹那お姉さま。ありがとうございます」

「いいえ。しかし、なにやらよくわからない揉め事が起きているようです。二人とも、新報とやらを見に行ってみましょうか。そうすれば、先ほどの生徒とも話しやすくなるでしょう」

「そうですね」

「はい。行きます、お姉さま」



—密side—

花ちゃんを起こしにいくと珍しく早起きをして学院へと行ったとのこと、今日は照星三人での登校だ。

——と、昇降口の辺りに人だかりができています。

「なんででしょうか？」

近づくにつれてこちらへと気がついた生徒がざわつき始める。

「どうやら私達関係の何かが表示されているようです」

「では、見に参りましょう」

「そうですね。ものを見ないことにはわからないですし」

生徒達が道を開けてくれる中を、三人めいめいに挨拶をしながら掲示板まで来た。

「セラー新報、ですか」

—— 『照星の派閥争い勃発か？映研に便宜の疑惑！』 ——

視聴覚室の利用に際して、映研とESSが一週間の使用申請を出したところ、なぜか映研に便宜が図られる結果となった。

ESSには再来週に弁論大会が控えており、その準備として視聴覚室を使用したいという正当な目的があるも、割り振られたのは週五日中のわずか二日に留まっている。ESSは後日、奉仕会へ実情を説明しに向かったものの要望は受け入れられなかったようだ。

なお、映研には鈴蘭の宮派が多く在籍し、奉仕会内の美玲衣派役員に嘆願し便宜を図ったのではないか、という疑惑が持たれている。

「ESSは薔薇の宮派が多く在籍しており、その影響もあるのではないかと。ですか。なるほど。事実を最小限に、印象論を元に持論を展開しているんですね」

「ずいぶんと品のない煽りですわね」

美玲衣の呟きに織女はため息をこぼす。

「なるほど。今であれば生徒達が食いつきそうな話ではありませんが…」

「美玲衣さん。映研の方々とは親しくされているのですか？」

「直接部活には関わったことはありませんが、幾度か試写会に伺ったことはありますね。ですが、その程度ですね」

「ということは、映研からの陳情——便宜を図ったという事実は何？」

「もちろんありません。根も葉もない噂に過ぎません」

「だ、そうですね、皆さん。噂というのは時に面白いものではありませんが、人を貶める話題というのは、あまり感心できませんね」

織女さんと美玲衣さんのやり取りを聞いていた生徒達は安堵したように散っていく。

「織女さん、ありがとうございます。本来なら、自ら身の潔白を証明しなければならぬところですが」

「私は水を向けただけです。実際に身の潔白を証明したのは美玲衣さん自身ですし、私自身、根も葉もない噂で友人が貶められることが我慢できなかった。ただそれだけです」

この記事には織女さんは登場していない。それが逆に説得力が増す要因になったのでしょうか。

「しかし、この疑惑…映研への印象については悪くなるでしょうね」



「それに、奉仕会の対応へも疑問を持たれそうですね。しかし、これに  
関しては私達の預かり知らぬところですからね」

「教室の許可申請に関しては香苗さんが担当していたはずですが、あ  
の子がこのような不正をするとは考えられません」

とりあえず、事実確認をしないことには話が進みそうになかった。

——三人が去った頃。刹那に伴われて英子と花が姿を現す。三人  
は新報を眺めて…。

「なるほど。映研としてはこれほど印象を悪くされては憤る理由もわ  
からなくはありませんね」

「これ、もしかしたら私が花さんに話していたのを新聞部の誰かに聞  
かれてたつてことかな…」

「その可能性は高いでしょうね」

ここへ来るまでの間、刹那は二人から事の経緯は聞いていた。

「なんにせよ、照星と奉仕会の両方に確認すべき話ではありますから、  
この話は私に預けてください。放課後にでも確認を取ってきます」

「よ、よろしくお願いします」

「ありがとうございます、刹那お姉さま」

「お礼は解決した後で。しかし——」

刹那は新報を見直す。印象操作としてはこれほど理想的な新報も  
あるまい。

「気を抜いていたらこういったことが起きているとは…。放課後、待  
てなくなりそうですね」

## 第46話 女帝の『姫』

— 刹那 side —

—— 放課後。奉仕会へと顔を出した刹那は、ちようど照星と香苗、あやめの五人が話し合っているところだった。

「ちようどお話をしていたようですね」

「刹那さん。どうしたのですか？」

「貴女方も新報は見たのでしょうか。私は事実確認のために来たのです」

刹那は今朝見かけた花が巻き込まれている話。日中調べたところ、鈴蘭の宮派と薔薇の宮派でこぜり合いのような対立が起きていること。

「まさか花ちゃんがそんなことに…」

「便宜に関わる話ですからね。密さんには相談できなかつたのでしよう」

「動くのは急いだ方がいいのかもしれませんが。花さんがこれ以上、不当な扱いを受ける前にも」

「照星では何か解決法を？」

刹那の問いに密と美玲衣が頷く。

「ここは素直に当事者の方々を呼集して説明するのが一番早いと思います」

「そこで、宮派にも苦言を入れます。確かに今回の件は奉仕会の対応が悪かった面もあるにはあるのでしょう。しかし、結果として宮ごとの派閥争いのような状態になっているのは見過ごせません。そもそも、私は貶められたなどとは思っていません」

「美玲衣さんは頑固ですね」

美玲衣の意見に織女が笑っている。どうやら三人の間ではすでに話し合いが終わっているのだろう。

「なるほど。…で、あれば、私は今回は何もせずに見守る——いえ、念のため奉仕会の方へと詰めておきましょうか。あのような記事とはいえ、真に受ける生徒がいなくてもかぎりません」

「刹那お姉さま、お手をわずらわせてしまい申し訳ありませんわ」  
頭を下げるあやめに刹那は首を振る。

「謝る必要はありません。私自身、今回の件にはあまり関わらないようにしていましたが、その結果としてこのような問題が起きることは昨年、一昨年のことからも考えられることでした。」

それをあえて放置してしまいましたし、あまり首を突っ込むのもどうかとは思いました、ね」

「では、どうして今からでも関わろうと思ったのですか？」

織女さんの質問ももつとも。あえて答えるなら…。

「花さんの現場を見てしまったから、というのが一番強いでしょうか。身内に問題が関わる以上、私がここでそっぽを向くのは違うでしょう」

自分や周りに火の粉が舞うならそれを振り払うのは普通でしょう。対岸の火事を野次馬する気はありませんが、自分達が関わりとなれば話は別です。

☆

——夜も深まる手前。寮の浴場でもはや本人達は気にしなくなった姿で入浴していた。

「それで、話は上手くいったのですか？」

「ええ、まあ。結局のところ、お互いにすれ違いが発生した結果でしたから」

刹那と密が話すのはあの後すぐに当事者達を呼び集めて行われた話し合いだった。

結論から言えば、やはりというか新聞部部長による早期のネタ提供によるものだと判明。しかし、元々から映画研究会とESSは長年のわだかまりを抱えていた上に今回は派閥争いまで上乘せされたために大事に発展してしまった。

花は完全に巻き込まれた形だ。

「花さんも大変難儀な話に巻き込まれたものですね」

「ええ。クラス内には私や鏡子さん、織女さんの妹をしていることが周知されていたことにも今回の騒動に一役買ってしまったようで…」  
「仕方のないこと、といえばそれまでですがね。宮様の妹分とはそういったこともあると学べたいいい機会だったでしょう」

学内の有名な生徒の妹分になるというのは名誉でもある。しかしその分、本来であれば気にする必要のない期待までかけられることになることにも繋がる。

「しかし、美玲衣さんはさすがでした」

「そうですね。『宮』とはアイドルのような存在にも見えるが自分達も一人の生徒である、ですか。真理ではありますが、ほとんどの生徒が忘れていた事実なのかもしれませんね」

「刹那さんには、そういった子達はいないのですか？」

「私名義の派閥を聞いたことはないのでしょうか？」

「ええ、そうですね」

「つまりはそういうことです」

まあ、まったくくないのかと言われるとそうではないのですが…。



—密side—

週が明けて。美玲衣さんは家の方が片付いたとのことで寮から退寮し、二年生達が帰ってくると派閥争いは自然と鎮静化した。

「しかし、紅鷲祭のすぐ後に期末試験というのは学生にはなかなかハードではありませんか？」

「まあ、日数を空けようにも二学期はイベントてんこ盛りのおかげでどうしても過密スケジュールにならざるをえない、というのが実状のようです」

「密さん。二学期は負けませんかー！」

「ああ、はい。受けてたちますよ、織女さん」

寮からの道すがら、校門前で美玲衣さん、茉理さんと合流して校舎へと向かって歩き出す。

そこへ、なにやら特徴的な四人が早足でそばを歩いていった。

「あつ、『四色姫』だ。四人そろって見かけることって珍しいね〜」

「…えっと、茉理。なんですか、その…『四色姫』、というのは」

「えっ？美玲衣ちゃん知らないの？密さんや織女さんは？」

茉理の質問に首を横に振る。織女さんも同様のようだ。

「こちらの様子に茉理は感心したように嘆息する。

「みんなって一般生徒なら知ってるような有名な人ってあんまり興味なさそうだよね〜」

「き、興味がないわけでもないのですが…」

「そ、そうですよ。それに二つ名持ちは比較的人数が少ないはずで…」

「ほら〜。織女さんがそう言うってことは『四色姫』が総称ってことすら知らないってことでしょう〜」

どや顔で話しかけてくる茉理に織女さんは頬を赤らめて顔を背けてしまった。

「ごほん。それで、茉理さん。その『四色姫』というのは？」

「『四色姫』っていうのは、それぞれが『色』に関係する名前で、二つ名もそれにちなんだものがあるんだって。あと、刹那さんのいわゆる…派閥？みたいな感じらしいよ」

「…刹那さんの、派閥ですか？」

週末の時は自分には派閥なんて存在しないなんて話していたはずですけど…。

「なんでも女帝に憧れた人達だから、二つ名も『色』に『姫』という一文字を付けた名前なんだって」

「『○○姫』みたいな感じでしようか」

「そうそう。確か——」

もはや豆粒サイズの四人を眺めながら——

「一番後ろを歩いている赤い髪の子は『真紅姫』って二つ名だったかな」

「しんごうき…？」

「しんごうき」

織女さん…。さすがにその間違いはベタ過ぎるのでは…。

呆れた表情になっていたのか、織女さんは再び頬を赤らめて視線を

そらす。

「あとは『蒼天姫』、『雪白姫』、『漆黑姫』だったかな。みんなそれぞれに同じ色の名前があるんだって」

「刹那さんの派閥、ねえ…」

「どうしたの、美玲衣ちゃん？」

「いえ。刹那さんのような人が派閥のような存在を許しているというのは…」

「ああ。なんとなくですが、わかります」

私達のイメージに合わないのだ。刹那さんは派閥争いを嫌っている節がありましたから余計に…。

「でも、派閥っていうよりは後継者って感じらしいけど」

「後継者？」

「うん。確か、今日の放課後の視聴覚室で『四色姫』主催の勉強会があるはずだし、密さん達も行って見たら？」

「勉強会ですか」

「うん。刹那さんが直接鍛えたスパルタ勉強法の直系の四人だから。私は、また紅鷲祭が終わる頃には刹那さんにガッツリとマンツーマン勉強あるし…」

『ははは…』と空気の抜けるような細かい笑顔の茉理さんを見ると可哀想になります。刹那さんですし、しかたないでしょう。

「それにしても、勉強会…ですか」

それなりには興味がある。なにせ、あの刹那さんの勉強法を実践して実力をつけているだろう生徒の勉強会だ。何かタメになるものが聞けるなら行く価値はあるのかもしれない。

## 第47話 勉強会

その日の放課後。織女さんと美玲衣さん、茉理さんの四人で視聴覚室へと足を運んだのだが――

「す、すごいですね…」

「ええ。一生徒の勉強会と考えていましたがこれは…」

視聴覚室には50人程度が着席できる席は用意されていたが、座席はすでに埋まっており、室内後方にもクリップボードを持参して立ち見で参加しようとしている生徒がいる。

「ざっと見て…6〜70人ぐらいでしょうか」

「けっこうな数ですね」

「うーん、半分以上は新規の参加者じゃないかな〜」

「茉理は利用者の判断がつくんですか？」

「うん。だって、新規の参加者の人はノートとか持参してるんだよ」

室内を見渡してわかるのはノートを開いて開始を待っているのはだいたい40人ほど。残りは確かに席にこそついていたり立ち見している中にも何かしらのノート類を持ってきているように見える。いい。

というよりも、筆記用具の類いを持参していないように見える。

「刹那さんの勉強法にノートを書いてる時間なんてないよ。聞いているだけで精一杯。書く余裕を持てる生徒はいないと思う」

「それほど早いのですか」

「うーん。まあ、受けてみたらわかるよ〜」

そうしているうちに前の扉が開かれて四人の少女が入ってくる。

一人は黒板近くの席に座るとノートパソコンを起動している。

一人は壁に立て掛けられていた大型の黒板消しを持って黒板近くの壁で消す練習をし始める。

残りの二人は手元のノートに視線を落として何かを確認しているようだ。

『えー、それでは――』

赤髪の少女がマイクを持ちながらこちらを向いて――目が合う。

固まる。

『…えつと。少し、落ち着きます。すみません』

少女は近くの三人に声をかけて目線でこちらを示す。三人もこちらを見て、すぐに視線を外すと四人が同時に深呼吸。

それぞれに肩を回したり、首を鳴らしたりと思い思いに緊張を解いているようにも見える。

「どうしたのでしょうか？」

「密さんと視線が合ったようにも見えましたが…」

「照星に見られているって意識してしまったのでは…」

マイクを持った少女が改めてこちらを向く。

『失礼しました。では、始めます。…が、これは『勉強会』ですが自分には合わない、または無理だ、などと感じたのならその場で退出していただいてけっこうです。俺——あー、私達はこのやり方に慣れたものですが初見の方には正直、無茶苦茶するなと思うかもしれないかもしれません——』

『美緒さん。そういうのはやれば大抵の人は納得するのですからいちいち説明しなくともいいです。時間、もったいないので』

『そうかあ？初回のやつらってこういう説明しとかねーと後がうるさかったりするんだがなあ』

『いいから、始めてください』

『わーったよ。じゃ、ちゃつちやつとやるか。ついてこれねーやつは無視すつからそのつもりでなー』

マイクを置くと少女は黒板へと向き直り黒板を二分するように真ん中へ線を書く。

「なんかいきなりフランクな感じになりましたね」

「いえ、たぶんあつちが彼女の素なのでは」

そうこうしているうちに、先ほどの少女と隣に立つ少女が線引きをした区画に猛然とチョークを走らせる。

説明を入れるためかいくつかの言葉の手前に『※』印を書き、それ以外はほとんど速度を落とすことなく書き上げていく。そして、赤髪の少女が先に書き終わるとレーザーポインタを取り出し——



『それでは、説明を始める。まずは――』

始まったのは怒涛の説明。『※』印のついた言葉にポイントを合わせながら前後の文章も含めて説明していく。

あまりの速さに一人の生徒が手をあげる。しかし、黒板消しを携えていた少女がマイクを持つ。

『個別での質問等は今回の勉強会における説明部分が終わり次第、受け付けます。今は説明に耳を傾けなさい』

傍らでは止まることなく説明が続けられていく。そして、もう一人が書き終わるタイミングと説明を終えたタイミングが合う。

二人がすれ違うように互いを避けると同時に、説明を終えた側の黒板を黒板消しを持った少女が一発で半面全てを消す。

『えっ!?!』とノートを書いていた生徒達は固まるが、書いていた少女が消したばかりの半面に更にペースをあげて書きあげていく。

説明は止まることなく続けられており、この時点でおそらくついていけなくなったのか、数名の生徒が立ち上がったって室内から出ていく。空いた席には立ち見をしていた生徒が座った。

説明し、終わると書いていた少女と入れ替わり、説明していた半面を黒板消しの少女が消して、説明が始まる頃には再び猛然と書いていく。

何度か繰り返し返したところでようやく書いていた少女は卓に置いていたタオルで汗を拭きながら黒板から離れ、黒板消しを持った少女は黒板消しを傍らの壁に立て掛ける。

そうして、説明を終えた少女がマイクを置くと、卓からタオルを持って額の汗を拭いた。

「――すごかったですね…」

「そう、ですね。しかし…」

美玲衣が室内を見渡す。ノートを書いていた生徒が残っているのはわずか五人ほど。

空いた席には立ち見していた生徒が座り、手持ちぶさたのはずの生徒達は小さく拍手している。

「減った、わね…」

「結局、ノートを取っていた生徒のほとんどはついていけずリタイアした形になりましたね」

「刹那さんの勉強法って基本的にはスパルタなんだよ。特に今回の勉強会は歴史の話だから暗記がベースになっちゃってるから余計にね」

気がつくと言問を受け付ける形へと勉強会は変わっており、挙手をする生徒を指名しながらの受け答えが始まっていた。

勉強会も滞りなく終わり、参加者が片付けをして帰っていく中で黒板前では彼女達が反省会のようなものを行っていた。

参加者から紙を受け取っていた彼女達のところから生徒が掃けたところで彼女達の下へと移動する。

「あつ、照星の皆様。お疲れ様です！」

「はい。貴女方もお疲れ様でした。なんといいですか、すごく濃密な時間を過ごさせていただきました」

「いえいえ。照星の皆様の成績は知っていますから。我々の拙い説明ではわかりにくかった場所も多かったのではないのでしょうか」

「そうですね。やはり少し駆け足気味に感じてしまいました」

実際には教室が貸し出されている時間もあるため、仕方ない部分でもあるのだろう。

黒板を消し終えた黒髪の少女は黒板消しを置くところらへと近づいてきた。

「美緒さん。そろそろ時間がまずいです」

「もうそんな時間？では、照星の方々、私達はこれで失礼いたします」  
教室の前で彼女達を見送る。何か盛り上がっているように見えるがさすがに何を話しているかまでは聞こえない。

「しかし、刹那さんの勉強法はスパルタですわね……」

「まあ、あれはあの子たちなりに解釈してやってるからまだマイルドだよ」

茉理の声に美玲衣さんと織女さんの顔が茉理に向いた。

「あれよりスパルタな勉強法ってあるの……？」

「今度、美玲衣ちゃんも一緒に教えてもらったらどうかな？スパルタ

方式をお願いしたらやつてくれるよ」

「いえ、遠慮しておきます」

「しかし、彼女達は出席者のクラス等を最後に集めていましたが、あれはいつたい……」

「今日の勉強会の概要資料を作ったら参加者に配るためじゃないかな。だから、ノート取ってた人達を置いてきぼりにしてたわけだし」  
「なるほど……」

その後。勉強会に最後まで参加していた者は近日中に行われた小テストにおいて高得点を取っていたことは別のお話。

## 第48話 紅鵜祭の演物（だしもの）

学院内が紅鵜祭に向けて動き始めた頃。象牙の間に集まった照星は奉仕会からの要請内容に目を通していた。

「奉仕会による演物、ですか」

「はい。今年は劇。演目は『十二夜』だそうです」

「なるほど。そして、これが前回『十二夜』を演じた際の台本ですか」

台本をパラパラとめくって、軽く内容を読む美玲衣。

「王道に行く『十二夜』ですね。しかし、これを今年やろうにも演者がたりませんし、なにより二時間以上の演目は飽きが来やすく今の風潮には合いませんね」

「はい。それはあくまでも『十二夜』の概要を理解してもらえらるようにと奉仕会から借りたものですから。さて、私達のやるべきことなんですが——」

密の説明に織女と美玲衣は頷く。

「なるほど。私達なりにアレンジした演目を行う、ということですね」

「となれば、台本もそうですが演者がいくら確保できるかにもよりますね。そもそも誰がアレンジするかにもよりますし」

「そうですね。でしたら、台本のアレンジは美玲衣さんをお願いしてもよろしいでしょうか?」

「えっ。私、ですか?」

「はい。美玲衣さんならいろいろな小説も読まれていますし、先ほどの口振りからしてアレンジの方向性もなんとなく決まっているのでは?」

「えっと…。確かに…私なら、というのは考えましたけど」

「でしたら、それをお願いできませんか? 私はこういった作品のアレンジなどは苦手ですし…」

「それなら密さんでも…」

「私も織女さんに同意です。美玲衣さん、お願いできますか?」

二人から推されて断る理由が無くなったのか。美玲衣さんは小さ

くため息をつき。

「わかりました。その代わりと言ってはなんですが、他のことはお二人に任せますよ」

「はい。任せてください」

「では、まずは何からはじめましょうか」

「そうですね。密さんは演者を集めてもらえますか。私は大道具などの全体管理を行いますから」

「なるほど。わかりました。しかし、演者ですか…」

どこから集めるべきかを考えるが…。

「無難に考えて寮の皆さんにお手伝い願うのが手っ取り早いでしょうか」

「そうですね。美海さんとかは流れも把握しているでしょうし」

「でしたら、本日は美玲衣さんも寮に来ていただいてお願いをしましょうか」

「私も、ですか？」

「今日来れば刹那さんの夕食が待っています」

「し、仕方ないですね。私もお願いにうかがいます」

刹那さんの料理はなんだかんだと食べる機会は少ないですからね。



夜。夕食会を兼ねて紅鷗祭の演し物について、寮の皆さんに説明する。

「まあ、妥当なところだね。うちの寮生って奉仕会関係者多いから勝手もわかってるだろうし」

「あの、男装役が必要ということですが、別に私じゃなくて刹那お姉さまでもいいのでは…」

「そういえば、刹那さんはどこに？」

気がつくのとテーブルの空き皿とともに刹那さんの姿が消えている。キッチンをのぞいてみるがすでに片付けすら終わっているありさまだ。

「い、いつの間に…」

美海だけは刹那の行動に予想をつけていたのか、リビングで大笑いしていた。

「刹那さんならさっさと逃げると思うよ。照星に噛みついてばかりだったから、去年、一昨年と照星達に捕まって強制的に手伝いさせられてたからね。去年も演劇だったけど、刹那さんの男装ってメツチャ映えるからさ」

なるけど。刹那さん、あれで目立つことは避ける傾向にあるのは知っていますし、さすがに私達がそろって顔を出したことでなんとなく予想していたのかもしれないね。対して美玲衣さんは泰然としている。

「気にしていませんよ。私は刹那さんには頼むつもりはありませんでしたし」

「そうなのですか？」

「はい。刹那さんの上背があれば男装が映えるのはわかっていますがそれでは奇抜——いえ、生徒達の予想を越えることはできないでしょう?」

「なるほど。言われてみれば確かに…」

美玲衣さんの言葉に織女さんも頷いている。

「——とはいえ、まったく関わらずにやり過ごされるのも癪ですね」

☆

—美玲衣 side—

2階のバルコニーへと足を運ぶとお目当ての人物は居ました。

「刹那さん」

「美玲衣、ですか。すみませんが、私は演劇は…」

「はい、大丈夫です。別に演者として出演することを説得しようとも思っていないません」

「…?では、どうして私を探していたのですか？」

「もちろん、お手伝いをお願いしたいからですよ」

「お手伝い、ですか」

刹那さんはいまいちわかつていらつしやらない様子。まあ、仕方ないとは思いますが。普通に考えれば刹那さんは男装役がハマる稀有な方でしょうから。

「はい、お手伝いです。大道具等はできる限り移動頻度を下げること  
で劇の簡略化を行いながらも少ない演者でより良い劇にしようとは  
考えています。…が、まったく同じ場面ばかりではやはり観客は飽き  
てしまいます」

「まあ、それはそうでしょうね。演劇などでは場面転回がなければひ  
どく平たいものに見えてしまいがちでしょうし」

「とはいえ、重いものをホイホイと運べる人というのはこの学院では  
貴重ですよね？」

「なるほど。私は裏方、しかも大道具や荷物の運搬を主に手伝いをし  
てほしい、と」

「はい。どうでしょうか？」

悩む素振りを見せる刹那に美玲衣はここに来る前に茉理から伝え  
られていたことを考える。しかし、刹那は軽く頷き――

「いいでしょう。まったく関わらないのも違うのですし、運搬係ぐら  
いなら引き受けましょう」

「言っておいてなんですが本当にいいんですか？」

「ええ、構いません。私自身、劇には出たくはありませんが裏方として  
関わるのはやぶさかでもありません。それに、そうですね…。演者は  
私の伝手で数人増やしましょう。あの子達なら嫌とは言わないで  
しょう」

「刹那さんの伝手ですか？」

「ええ。二年生に幾人か知り合いますから」

「もしかして、『四色姫』ですか」

その名前が出たことに刹那は少し驚いていた。

「おや。まさか美玲衣が彼女達を知っているとは意外でした。もし  
や、彼女達の勉強会にでも出ましたか？」

「はい。先日」

「なるほど。彼女達は私が直々に育てている子達。そこらの一般生徒とは比べ物にならないほどに努力しています。彼女達なら、照星とともに演劇ができると知れば喜ぶことでしょう」

「あの、刹那さん。彼女達は刹那さんの派閥のようなものだとも聞いています。ですが、刹那さんはそういうことはどちらかといえば嫌っていますよね？」

「ああ。彼女達は派閥とは少し違います。なんと云えばいいですか——」

言葉を選ぶように刹那は語る。

「彼女達は私の『やり方』が間違えていることを理解していながら私という存在の『あり様』を肯定している。普通に考えれば、そんなことはあり得ない。ですが、彼女達は私が『歪な人間』であることを肯定し、私の手段を『否定』しようとする——そんなまっすぐで実直な娘達です。だからこそ、私はあの子達に目をかけている。それが他から視れば『派閥』のようなあり様に見えるのでしょうか」

刹那の『やり方』——それはどこまでも相手の壁として立ちほだかり、相手を試し続けること。だが、それはひどく独善的である。

刹那の『あり様』——それはたとえ他者から離れることになろうとも己の軸を揺らすことはない。気高く、しかし孤独な現れ。

『四色姫』はそんな刹那の『やり方』は認めていない。だが、その『あり様』は理解している。間違いだとしても一方的に断ずるものではなく、理解しうるからこそそちらへと立ってみたい。だからこそ、彼女達は刹那の『派閥』のように見えてしまっている。

たった少しのやり取りで、美玲衣は刹那という『歪さ』を理解できた。だが——

「いいじゃないですか、歪でも」

「美玲衣？」

「それが刹那さんでしょう」

美玲衣の応えに、刹那は一瞬呆けて——

「——そうですね。ありがとうございます、美玲衣」

——嬉しそうに笑った。



## 第49話 疑念

平凡な日々というのはわりと早く過ぎていってしまうもの。ボランティアコンサートには諏訪ちさとの考えからピアニストにあやめが選ばれたり、『四色姫』達は嬉しそうに演劇の参加を決めたり…。

だがまあ、問題とは往々にして予想の範疇には収まらないものだ。

—刹那 side—

演劇の最中、密さんが急に近づいてきた。

「どうかしたんですか、密さん？」

「ええ…と、ですわね」

こちらの耳許に口を寄せる。そこから語られた言葉に刹那は小さくため息をつく。

「とりあえず、抜けるしかありませんね。織女さん、私と密さんで少し抜けます」

「何かありましたか？」

「実は象牙の間に少々忘れ物を。あと、私から密さんに渡すものがあつたのを忘れていましたので。寮でもいいんですが、もののついでですし」

「わかりました。こちらもし少し打ち合わせないといけませんから大丈夫ですよ」

「すみません。では、少しですが抜けますね」

そそくさと、象牙の間へと向かう。道中、他の生徒に見つかる心配もなく象牙の間にたどり着くと念のために鍵を閉める。

「——さて、どうしましょうか。何か手立てはありますか？」

問題は単純に密さんの偽乳が演劇の動きやその際にかいた汗のせいで外れてしまったというもの。

「はい。鞆の中に人肌で使用するための接着剤があるので。どうにも塗るのが少なかつたのかもしれない」

「なるほど。偽乳にはそういった弊害があるのですわね」

「まあ、パットとかでも大丈夫な気はするんですがその辺りはさすが風早グループといえますか…」

なるほど。手抜きはしない、と。

「まあ、早く済ませてください。誰か来ないとも限らな——」  
『すみません。密さんがこちらにいると聞きました。少しいい、ですか…?』

振り向いた先——象牙の間の扉を開けてこちらを覗き込んでいるのは美玲衣。こちらの様子としては半裸の密さんとその手に持っている偽乳。

「……」

三者三様に固まっていたが、美玲衣さんはその場にへたりこんで後ろへと倒れてしまった。

密さんの方を振り向くところからもこの世の終わりのような状態で項垂れていた。

——さて、事後処理をしなくてはなりませんね…。

——数分後。目を覚ました美玲衣と服を整えた密、紅茶をテーブルに並べた刹那がイスに座る。お互いに一口飲む。

「——さて、いつまでも固まっているわけにもいきません。三人そろって演劇の練習を抜け出して象牙の間で『お茶会をしていた』などと織女さんにバレれば彼女のことですからしばらく膨れてしまいますよ」

「そ、そう、ですね…。…それで、あの、密さんは、何をしていたのですか?」

「…えつと、…あの…」

まあ。単純に考えれば何と説明すればいいのやら、という話ですね。『胸が取れたので付け直していました』——うん、意味不明です。「密さん。私の方から説明させていただいても?」

「…よろしく願います」

密さんに代わって私の方から美玲衣さんに説明する。最初の方こそ疑わしくしていたようだが、説明を聞くにつれ納得したような、最終的には呆れた顔を密さんに向けていた。

「つまり、密さんは男性…」

「はい。今まで騙していて申し訳ありません…」

「刹那さんはいつから知っていたのですか」

「私は密さんのカナヅチ疑惑の頃に偶然。着替えのタイミングで突撃をかけてしまいましたね。アレ、見てしまいました」

どこを見てしまったのか指さすと美玲衣さんの頬に朱が入る。少し視線を泳がせていたが咳払いをして――

「事情はわかりました。まあ、密さんのことは私からこれ以上どうこう言うことはありません。だから、密さんも安心してください」

「…あの、いいんですか？」

「何がですか」

「先ほど刹那さんが説明した通り、私は男性です。訴えられても仕方がない立場の私を――」

「そうですね。確かに考えました。…でも、今日まで学院内で『変態』はいなかったわけですし、今さら密さん、いえ『薔薇の宮』が居なくなることは多くのデメリットがあります。なにより、今から密さんが抜けてしまうと刹那さんに演劇参加を打診しなければならなくなります」

「嫌ですよ？」

「わかっています。だから、密さん。私としては執行猶予とします」

「執行猶予、ですか」

「はい。このまま何事もなく卒業までお願いします。そうなれば、私からは不問にいたします」

美玲衣さんの言葉に密さんは頭を下げる。

「ありがとうございます」

「しかし、美玲衣さんも丸くなりましたね。最初の頃の貴女なら、容赦なく通報していたと思いますが」

「まあ、そうですね。ですが、織女さんほどではありませんが私も負けず嫌いなんです。だから、密さん」

「は、はい…」

「勝ち逃げはさせませんよ？」

テストに対して美玲衣さんは常に織女さんを意識し続けていた。

そこに、今年から密さんが食い込んできた。負けず嫌いというのは本当なのだろう。

「もちろん、刹那さんにも負けたくありませんから」

「ええ、いつまでも迎えうちますとも」

「あの、美玲衣さん。本当に——」

「密さん。お礼はいりません。今は、劇を無事に終わらせることを考えましょう」

「…はい。頑張りましょう」

結局、三人で戻ると織女さんから『私は除け者ですか…』と膨れられてしまい、機嫌を直してもらうのに時間を要したのは仕方ないのかもしれないと思うことにしました。



— 織女 side —

演劇の練習に演劇で必要なものの手配、全体での都度必要な折衝など、やるべきことは多岐に渡りますが充実した日々を送っています。

先日、衣装合わせをした際には密さんなどは似合っていて、思わず見惚れてしまいました。

「…でも——」

なぜなのだろう？どことなく既視感があった。

そんなことはないはずなのに、なぜか妙に胸騒ぎがしてしまった。これ以上を知ることが私のためにはならない——そう感じてしまった。

「ですが、やはり気になるんですよね…」

もしかしたら密さんは昔にも似たようなことをしていたのではないのだろうか。

(しかし、私の調べた範囲では何も出てこなかった…)

だとしたら、あの既視感は何なのだろうか？

調べるべき範囲を広げてみれどもかかるのは小さな少年の動画。

「これは…。確か、結城室長の息子さんのCM出演の時の動画でしょ

うか——結城…？」

感じた既視感は、これ…でしょうか？しかし、彼はどう見ても男子で——

「…可能性は0ではありませんけど、もう少し調べてからでも遅くはありませんね」

裏付けを取れてしまえば、後は本人に確認するだけになる。

「結城、密は——男性…？」

## 第50話 現実味のない真実

— 刹那 side —

紅鷗祭は例年以上の盛り上がりを見せて閉会し、打ち上げもそこそこに皆それぞれに部屋へと帰っていった。

風呂場には刹那、密、鏡子の三人が並んで湯につかっていた。

「演劇、すごい盛り上がりでしたね」

「ええ。配役が完璧だったと感服するしかありませんでしたね。密さんもわりとはまり役でしたし」

「そうですね。美玲衣さんの脚本は的確でした」

「それはそうと密さん。どんどんと秘密が漏れていますけどどうするんですか？ 織女さんが気づくのも時間の問題だと思っただけですが」

「——何の話でしょうか、密さん」

「鏡子、さん。落ち着いて聞いてくださいいね？」

密は美玲衣に男性であることが露見してしまい、しかし美玲衣の好意によって報告はしないという形でまとまったことを説明する。

呆れたため息を吐かれても仕方ないというものだろう。

「刹那さんにばれ、千歳さんに知られ、美玲衣さんには現場を見られた、わけですか。これでは早晩、織女さんにバレそうですね…」

「面目次第ありません…」

「まあ、バレてしまった時は後のことは上の判断に任せるしかありませんが…」

「鏡子さん。密さんが織女さんに身バレしたとして、上から『護衛の中止』となった場合どうなるのですか？」

「その場合であればそのまま密さんは急遽転校が決まったのでごまかすのだと思います。そうならないようお願いいたばかりですが…」

三者三様に身体を洗って、さあ風呂から上がろうと入口のガラス戸を開けた先には——

「…おや」

「刹那さん、密さん、鏡子さん。三人はもう上がられるのですか？」

織女が立っていた。ただし、服は着ている。

「ええ。これ以上入っただけは湯だつてしましますし」

「内緒話でも、していたのではありませんか？例えば——」『密さんの素性について』とか」

織女の一言に後ろの二人が息を飲んだ。その雰囲気には刹那は小さくため息をついた。

「——これ以上は私は大っぴらには関われない話になりそうなので先に行きますが……。とりあえず話をするのであれば誰かの部屋でしてください。バレる相手によつては風早グループの問題になりかねませんよ」

「ええ。忠告感謝いたしますわ、刹那さん」

刹那は着替えて部屋へと戻ってきた。すぐにとあるところへと連絡をすると相手はすんなりと出た。

『夜分にすみません。少し、出てこられますか？』

☆

テラス側へと出てきた刹那は約束の相手が現れるのを待つ。30分もしないうちに——

「はい。薄氷千歳、ただいま到着いたしました。しかし、刹那お姉さまに夜分に呼び出し食らうなんていつ以来でしょうか？」

「さて、いつ以来でしょうか。と、あまり長話をするわけにもいきませんね」

「いえいえ。私は構いませんよ。今日は両親不在で家にいてもたいそう暇な夜になりそうなので」

「貴女がよくても私が困ります。…密さんが織女さんにバレました」

メモ帳を繰っていた千歳の手が止まる。顔がこちらへと向き直る。

「私にできることはありますか？」

「察しがいいのは良いことです。おそろくですが、密さんは近日中には何らかの理由を作って休むはずですよ。これが長期化するような状況に陥れば密さんは学院を辞めることになるでしょう。それを阻止したく思います」

「なるほどなるほど。となればやれることは大つぴらにはできませんが…ふむふむ…」

千歳はいくつか対策案を考えているのだろう。メモ帳に勢いよくペンを走らせていて…。

それを唐突に終えてメモ帳を閉じると顔を上げる。

「わかりました。この薄氷千歳、学院の生徒のために手を貸しましょうー！」

「新聞部のためにも?」

「それは否定しません！」

楽しそうに笑っている千歳を見ているとなんとなくすんなり行ききそうな気がしてくるのだから不思議なものですね。

——さて、私が打てる手はせいぜいがこの程度。あとは流れ次第というところでしょうか。



—織女 side—

密さんの秘密を知ってから、私はすぐに父の下へと事のあらましを聞きにいった。結果としては、私の護衛でもあり父様のちよつとした考えによるもので密さん本人からの進言ではなかったとのこと。

それでも、私は簡単には許すことはできなかった。

寮生には鏡子さんの方から『病気の関係でしばらく療養のために実家へと帰省している』と伝えられている。それは密さんのクラスメイトにも同様に…。

しかし、私には少しばかり気になることがありました。密さんは男性だった。鏡子さんは同僚である以上、気にしていないのは当然。

——では、あの時一緒に風呂場にいた刹那さんは…?

時間を取ってもらって刹那さん、美玲衣さん、茉理さん、鏡子さんの四人には寮のテラスへと集まってもらいました。

「それで、織女さん。我々にお話というのは?」

「はい。鏡子さん、は同僚でしょうから知っているのはわかります。



しかし、刹那さん。貴女はどこで密さんの秘密——男性であることを知ったのですか？美玲衣さんも、ですが…」

「えっ？密さんって男の人なの？」

茉理さんに全員の視線が集まる。本人は驚いたように小首を傾げている。

「そういえば、茉理は知りませんでしたね」

「また一人、密さんの秘密を知るものが増えましたか。織女さん、密さんをどうしたいのですか？」

「えっ？」

どうしたいのか…とは、いったい…。

「おおかた、私や美玲衣がなぜ知っていて黙っていたのか聞きたかったとかそういう集まりではないのですか？」

「そうです。密さんは性別を偽ってこの学院にいました。そのことについて二人はどう思っていたのですか」

刹那さんと美玲衣さんはお互いに顔を見合わせてどちらから言うのか指さし確認している。

どうやら、最初に話すのは美玲衣さんの方。

「私が知ったのは紅鷲祭の演劇の相談に行った時です。あの時点で密さんに抜けられては演劇が立ち行かなくなっただでしょうし、そもそもそんなスキャンダル染みたことが起これば紅鷲祭自体が行えなかった可能性もあります」

「それは…」

「むろん、私の一存で決めるようなことでもありませんでしたが、密さんは少なくともあの時点まではさしたる問題は起こしていませんでしたので、報告云々については保留させていただくと密さんには伝えました」

「そうですか。刹那さんはいつ頃？」

お風呂も平然と入っていたくらいですし、かなり前から知っていた可能性もあります。

「私の場合、密さんのカナヅチ疑惑の最初期ですね。水着に着替えている密さんのところへ突撃してしまいました…」

それは偶然だったとしても密さんも災難だったでしょうね。

「そんな状況からなぜ一緒にお風呂に入るような仲へ？」

今さら考えてみれば刹那さんはなにかと密さんを手助けしている様子も見受けられました。男性だとわかってなおそうした理由があるのでしょうか？

「私は出自の関係で性への関心が人一倍薄いというのと、あの時点で私は密さんを照星へと押した張本人でしたから。無理難題を押しつけてともに頑張りますなどと言っておきながら、問題があったから切り捨てる。そのようなことは私としても非道かと思ひまして。それに——」

「それに？」

「密さんはそれなりに好感の持てる方でもありましたから。だからまあ、なにかと相談に乗るようになったのですよ」

なるほど。でも、どうして二人は落ち着いていられるのですか。

「織女さん。私が落ち着いているのはわりと身近な話でもあるからです。私は傭兵やSPとして働いていた頃に男装でお仕事をこなしていたことだってあります。密さんはそういう方向では親近感を持つる相手でもあったんです」

「もちろん、私も最初はどうしようか悩みました。しかし、紅鷲祭に至るまで密さんは学内でそれなりに話題の中心にこそいました。それは決して悪い方ではありませんでした。だから、私も密さんに関しては保留とすることにしたんです」

「…そう、ですか」

二人は二人なりに考えて密さんが学院にいることを了解していたようです。ですが、私は——

「織女さん。私から一言いいですか？」

「…どうぞ」

刹那さんが佇まいを正した。

「今回の問題は『貴女の護衛役』である密さんの今後についてです。が、私や美玲衣、菜理は密さんの友人でこそありますがあくまでも部外者。私達の意見としては学院に復帰してほしい旨ももちろんあり

ます。

しかし、最終的な判断は護衛対象たる貴女が決めること。それだけは、忘れないように——行きましょう、美玲衣、茉理」

三人が去っていくのを見届けて、私はテラスの手すりに背中を預ける。

（密さんの今後を決めるのは、わたし…）

——答えは、簡単には出せそうになかった…。

## 第51話 メール

—密side—

織女さんの護衛役から暫定的に外されて早一週間が過ぎようとしている。会社からは音沙汰もなく、日々の家事に精を出すことで気を紛らわせてはみるもの——

「意外に、忘れていないものですね…」

家事なんて慣れていけば昼前にはあらかた終わってしまおう。買い物も毎日行く必要もないのでここ数日は暇を持って余している。

「学院での生活は、ここまでのんびり過ごすような時間はなかったなあ…」

毎日が変化の日々。変わらない日々なんてあり得なかった。今は

「…?」

久しく鳴らなかつた固定電話が鳴り響く。

「はい、結城ですが?」

『よしよし、まずは第一関門突破。すみません、結城密さんはご在宅ですか?』

この声は——

「千歳さん、ですか?」

『おや、もしかしたら密お姉さまご本人ですか?』

「はい。…というか、千歳さんは私の正体を知っているでしょう」

鏡子さんから聞いています。千歳さんにはバレていて、その監視も兼ねて鏡子さんはできるかぎり千歳さんについていたこと。

『そうですか。でも、今私は学院から電話している関係で万が一を考えるとお姉さま呼びを止めるのは鏡子さんに怒られそうなので…』

「——といえますか、どうやってこちらの番号を?」

『風早グループといえど末端の、ましてや子会社などに保存されているようなデータまではさすがに事細かに把握はしていないでしょうし、管理も杜撰ということですよ。電話帳さえ手に入ればあとは数をこなすだけです』

「…孝敬さんにもう少し情報の扱いを徹底してもらった方がいいのかもしれないですね」

さすがに末端も末端の情報までは管理が行き届かないのは仕方ないでしょうか…？

『まあ、そんな管理体制を今話しても仕方ないでしょう。それで密お姉さま。本題なのですが、お姉さまが普段から連絡用に使っているだろう携帯。ちゃんと充電してますか？』

「えっ？いえ、あれは今回の護衛役の際に支給されたものですから、今は使っていませんが…」

『なるほど。それは怖い目に合いそうなお話ですね。実は刹那お姉さまが『密さんと連絡が取れない。メールも送ってはみたが返信される様子がないからなんとかしなさい』という脅——お願いを受けまして』

今『脅迫』と言いかけてましたね？どうやら相当に怒っているということなんででしょうか…。

「充電するのが怖いのですが…」

『あきらめてください。では、確かにお伝えしましたからね』

「あつ、千歳さん…」

電話を切ろうとする雰囲気を押されて思わず引き留めるように声をかける。

『はい、なんですか？』

「あの、千歳さんは私の正体を知っているながら口外しようとはしませんでした。もちろん、鏡子さん達が早くから口止めをしていたから、というのもあるのでしょうか…」

気になってはいた。どうして黙ってくれていたのか。それに、私を脅迫すれば千歳さんは風早グループにいろんな便宜を引き出そうともできたはず…。

「貴女はその情報の一切を秘匿し続けてくれている理由はなぜなんですか？…」

『私が、密お姉さまの『秘密』を秘匿していた理由、ですか。そうですねえ…。今ならばいろいろと理由がありますが——』

少し、沈黙が続いた。

『最初期から口外しないでいる理由をお教えすることはできません。少々、個人的な理由にありますので。鏡子お姉さまに口止めされてからは私にとってはとても都合のいいお話だったから、ですかね』

「都合のいいお話？」

『はい。私、実は鏡子お姉さまに密かに好意を抱いていました』

「——えっ？」

なにやら聞いてはいけないことが話されている気が——

『好意を抱いている方と一緒に学院生活を送れるのにとっても便利な理由をもらってしまいました。私が密お姉さまのこと口外して自分の『理想郷』を壊してしまうぐらいなら、黙って享受する方が私には利が多いでしょう？』

「あー…、はい。そうでしょうね」

『それだけです』

「…ありがとうございます、千歳さん」

『気にしないでくださいね、密お姉さま。私は私のやりたいように生活することにとっても彩りをつけられる情報を握ることで心地よい学院生活を送れるのです。それが偶然にも密お姉さまの『秘密』だっただけなのですから』

「はい。それでも、ありがとうございます」

『はい。では、ちゃんとスマホは確認してくださいね？』

「わかりました」

電話が切れるとスマホの電源を入れようとした。しかし、一週間も放置していて充電が切れていたようで電源が入らない。

仕方ないので充電器に差してから買い物にでかける。小一時間ほどで帰ってくると、スマホには着信やメールを知らせるランプが点滅していた。

「さて、どのような感じなのでしょう？」

怖々開いてみると【着信 138件】【メール受信 437件】という背筋が凍りそうな通知が表示されていた。

「…先に着信履歴を見ましようか」

メールは怖すぎて開く気になれない。とりあえず誰から電話が入っているのか確認することにした。

最初の方こそクラスメイトや鏡子さんからの電話が入っていたようだが、後半は刹那さんと千歳さんしか入っていない。千歳さんにいたっては時間別に行っているものでこのスマホが機能しているのか試している節が見えた。

「…情報を求める人材としては最高レベルの逸材みたいですね、千歳さんは…」

メールの方を開いてみるとまあ、刹那さんの名前がずらりと並ぶ。「今度、謝っておこう…」

今から返信するには刹那さんのメールの量はシャレにならない。届いているメールのうちの7割は刹那さんの名前だ。いくつか開いてみたが後半は同じ文章で『届いていますか？連絡乞う』という件名以外が入っていない。

スクロールしていくとようやくクラスメイトの名前が見えてきて逆に安心してしまった。

「けっこう来てるなあ…」

一番古いメールからいくつか目を通していく。最初の方こそ休んでいる自分のお見舞といった感じのメールだけだった。

しかし、新しい分に近づいていくにつれてクラスメイトのメールはこちらの安否を心配するものに変わり、帰ってくるのかを確認したいというようなメールまで入っていた。

(心配、させているんだ…)

そして、刹那さんの一番古いメールにたどり着く。開いてみるとクラスメイトの状況や学院の様子、寮の雰囲気など——皆が『結城密』を心配していることを伝えていた。

その末尾。そこには刹那さんの言いたいことが書かれていた。

『たとえ貴方が誰に否定されようと、私は貴女存在を肯定します。気持ちを決めて、帰ってきてくれることを期待しています』

——スマホの画面に一つ、二つと雫が落ちる。気がついたら涙が溢れていた。

自分にとって女性としての『結城密』は虚構だ。だが、クラスメイ  
トにとってはその『結城密』こそが真実だ。

それでも、刹那は男性の『結城密』も女性の『結城密』も肯定する  
と言っている。あの学院に帰ってくるのに必要なのは——【結城  
密】としての意思だけなのだ。

涙を拭って、スマホでメールを返そうとしたところに新しいメール  
が届く。送り主は——『風早織女』

メールはとても簡素だった。明日、学院に出てくること。そこで全  
てを決めるのだと。

「…っ。制服、綺麗にしないとね——」

クローゼットに閉まっていた制服を取り出す。

——行こう。あの場所へ。私の居るべき場所へ。



## 第52話 新しく始めるために。

次の日。大輔の朝食を用意して、一言メモだけを残して早めに学院に向けて家を出た。

自分の処遇を決めるのだけれども学院に呼び出される理由はよく考えてみてもよくわからなかった。とはいえ、出席しないわけにはいかないのだから向かうしかないのだけど…。

しかし、改めてメールを確認してみると指定されている時間は一限目の半ばだ。

「…少し早く出過ぎたかもしれませんね」

それなら仕方ない。電車に乗ることなく歩いていつて時間調整をすることにするしかない。

☆

ゆっくりと歩いてみればしつかりと時間調整はできた。門をくぐって歩いていくと学院が見えてきた。

久しぶりというほど時間は開いていないのにひどく懐かしく感じてしまっている。なんとなく校舎を見上げながら歩いていたらふと、目につく人が窓際に立っているのを見つけた。

(刹那さん…?)

あちらも気がついたようですぐに窓際から姿が見えなくなった。しかし、一瞬の間を開けてあちこちの窓から生徒達が身を乗り出して

「密お姉さまー、おかえりなさいませー!」

「おかえりをお待ちしておりました!」

どの生徒もこちらへ手を振りながら大声で話しかけてきている。生徒達の隙間から教師の姿が見えたが、苦笑いこそしているものの生徒達を止める気はないようだ。

「——はい。ただいま帰りました。それよりも皆さん、授業中のございましょう!授業にお戻りなさい!」

『はいー！』という返事とともに生徒達は各々のクラス内へと消えていく。頬を涙が滑り落ちるのを嬉しく感じながら――

理事長室へとたどり着くと室内には織女さんと刹那さん、高宮先生の三人が待つていた。

「おかえりなさい、密さん」

「…ただいま帰りました、刹那さん」

「おかえりなさいませ、密さん。それにしても、すごい盛り上がりでしたわね。ここにいっても皆さまの盛り上がりが聞こえましたよ」

「さて、密さん。ここには貴女の秘密を知る者しかいません。その上で、貴女に今後のことを通達するためにお呼びさせていただきます」

「はい」

織女さんがスツと近づいてきて右手を差し出してきた。

「密さん。これからも、私の護衛をお願いできますか」

「――いいんですか。私は…」

「はい。それに、貴女もお聞きになったでしょう。貴女の帰りを心待ちにしていた生徒達の声を。それに、貴女は私のライバルなのです。勝ち逃げは許しませんよ?」

「織女さん…」

「それに…今回のことで刹那さんからも一つの提案がされました」

「提案、ですか?」

「私も護衛に加わるようになりました。とはいえ、私はあくまでも学院内のみ。学外では変わらずに密さんと鏡子さんがメインになって頑張ってください」

天形の人間として力を貸してくれるらしい。

「刹那さんにはどんどんと貸しが増えていますね…」

「いずれ、大きな利子とともに返していただくのでおかまいなく」

楽しそうに笑う刹那さんにこちらは軽く会釈だけ返す。

「とりあえず、決着はそれでいいんだな?」

高宮先生の確認に三者三様に頷き合う。

「しかし、天形の嬢ちゃんもよく許せるな」

「密さんのことをですか？私にとつてはありふれた人間の一つのあり方と捉えていますから、別段不思議に思ったことはないのですよ。もちろん、人としてどうなのか、という話には賛否分かれるお話ですから私も必要以上の口出しはいたしません」

「そういうところは仕事人だな。まあ、密の方は先ほど生徒達が騒いでいたとおり、ほとんどの生徒がお前の帰りを心待ちにしていたんだ」

「ええ。先ほどのお声を聞けばよくわかります」

一人の生徒が帰ってきただけであれほどの盛り上がり。よほど切実に待たれていたことはあれだけでよくわかる。

「とにかく少しの間、護衛兼学院生活を楽しむといい。今後については社長と話し合つて決まり次第、お前達に連絡するから」

「はい。高宮先生」

三人が理事長室から出る。廊下には鏡子が立っており、こちらと目が合う。

「終わりましたか？」

「ええ。鏡子さん、今日からまたよろしくお願いします」

「…仕方ないのです。1人ではいろいろと忙しいのでよろしく願いします」

頬に朱が差して顔を逸らす鏡子に首を傾げる。そんなこちらの肩を刹那さんがつついてきた。

「密さんが居ない間、鏡子さんはずっとクラスメイトや寮生から様子を聞かれ続けていましたからね。密さんが帰ってきたことですし、それらも落ち着くでしょうからホッとしているのでしょうか」

「そうだったんですか…」

自分が居なくなつてもわりと苦勞していたらしい。

「まあ、あとは密さんがメールに反応しないせいでクラスメイトが日を追うごとに暗くなつていて教室に居心地悪いことこの上なかつたのでしょうか。かくいう私も仕事の関係で寮を空けていることも多かつたので、寮の食事情が元に戻りつつあつたのも困りものだった

のかもしれない。ねえ、織女さん?」

「…はい。実は密さんに帰ってきてほしい理由はそこもあります」

自分が帰ってくることに寮の食事情に何の関係が?

「寮の食事情は密さんと刹那さんの2人のおかげで大幅改善されていたのに密さんが抜けた途端に刹那さんが寮に留まらなくなり、結果として食事情戻ってしまいました」

「元に戻ったって言いますと?」

「休日二日間の食事はカップ麺かそうめんだったそうですよ」

さすがに悪化としかいいようのない食事情に織女さんも若干げんなりしていたらしい。その上、刹那さんも家の諸事情で寮に居なかつたことで休日は元通り、夜食は無し、おやつ等の買い置きなども皆さん気にしていなかつたとのこと。でたいそう悲惨な休日になつたらしい。

「ですので、密さんを戻すのはそういう側面もあります。もちろん、学院での支持率から考えても今さら抜けていただくわけにはいかなかつたのもあります」

「薔薇の宮が欠けていてはいろいろな仕事に支障が出ますから」

「そういつた諸々を考えて、密さんには復帰していただくことになりました」

「はい。今日からまた頑張つていきますね」

その後、寮にて皆さんに歓迎された後、次の日から事後処理のような日々が少しだけ続いた。

☆

十日ほど過ぎた頃。織女さんに屋上へと鏡子さんとともに呼び出された。

「急にどうしました?」

「お父様から密さんを風早グループの関係者に存在を明らかにすることにしたことの話を受けました」

「えっ?」

——存在を、明かす？

「密さん。あくまでも尊敬社長のお兄さんの遺児に『結城密』という人がいて、その子が男性であることから継承問題等の問題が出かねないという判断を無くすためにも存在をこちらから明らかにしておこうという話なのです。べつに今の生活をそのまま暴露するわけではありません」

「あつ、そういうことですか。…ん？しかし、織女さんはいいんですか、この話。織女さんから見たら『新しい後継候補』の登場ですよ？」

「はい。密さんのことをひた隠しにし続けることは風早としてもリスクが大きいと判断して、お父様と私、結城さんの三人で話し合っつて決めました」

「大輔さんも了承済みですか…」

「こういったところの根回しは早い。まあ、大企業でもあるのだ。そういうところのケアは早い方がいいのはわかる。」

「そういったわけで急ぎにはなりますが、今日の夜には風早グループの関係者が集まってパーティを行うので、密さんにも参加してほしいのです」

「それは、参加せざるをえないでしょう…」

「むしろ本人不在はまずすぎる。後でどこに影響が出るのか、風早の企業グループにもなれば予測がつかない。」

「わかりました。なんにせよ、私のやるべきことですからやるだけです。ええ。さすがに今回は頼むわけにはいきません。あくまでも風早の問題ですから」

「わかりました」

「数日開いて、授業が終わると織女さんと鏡子さん。チャーターしたリムジンへと乗り込んで会場へと向かって走り出す。」

「本日の会場って——」

「雅ヶ崎迎賓館ですね。あそこであれば警備も問題なく、不純物も入り込みにくいと父が…」

「さすがに親族内々の話とは言え、風早の後継候補の披露宴ですからね。器だけでも最大限の場所として選ばれたようなのです」

「風早においては雅ヶ崎迎賓館を会場とすることはそれだけ重要なことだとアピールできる場所でもあるのです」

今回の自分の後継候補の披露宴。実際には風早グループ内における『敵対勢力』の炙り出しにも利用されることは説明を受けている。当然ながら危険度は高いが今の内にやっておかなければ今後の後継候補としての状況にどれだけの不測の事態が紛れ込むかわからない。

刹那さんを学院内での護衛を依頼したのもこれに起因している。

ふと、外の風景に違和感を覚え——意識がすぐに切り替わる。鞆に手を入れてスマホを操作する——が、エラーが吐き出された。

「これは——やられましたか…」  
「えっ?」

「真垣さん。貴方はいつから相手方についていたのでしょうか」  
「驚きました。しかし、この状況ではどうしようもありませんでしょう」

車が路肩へと止まると運転席から振り返っている運転手の真垣の手には黒光りする物体。本物かどうかは今は関係ない。

「皆さん、鞆をこちらへ。そちらの警備の方は懐のものも取り出していただけますか、茨鏡子さん。GPS発信器、お持ちですよね?」

「——っ」

助手席へと全てを出している際に密の手に何かが触れた。出してからそれが何なのか思い出す。

『もし、私をご用命となればそれを使ってください。一度だけ、私の全力をもって御護りいたします』

それは、刹那さんから預かった謎のスイッチ。すばやく機器の横にある紐を引き抜きスイッチを押し込む——が、何も起こらない。

「…?」

「密様、それもお渡しいただけますか」

真垣に手渡し、真垣自身も数度スイッチを押す。しかし、スイッチ

本体は別に変化もなく、電波を感知する機器を真垣が近づけるも反応はない。

「オモチャですか。であれば、警戒の必要もありませんね」

外部への連絡手段を奪われた状態で車は再び走り出す。

「密さん。先ほどのスイッチはいつたい…?」

「刹那さんにもらったものだったんですが、壊れてしまっていたのか  
もしれません…」

「万事休す、といったところでしょうか…」

震える織女さんを落ち着かせるために手を握る。それだけしかでき  
ない現状に密は歯噛みするしかなかった…。

## 第53話 天形の切り札（ジョーカー）

—刹那side—

密達が今日は忙しい一日だと聞いていたので、刹那は足早に寮の自室へと帰ってきていた。

「私の出番がなければいいのですが…。まあ、今はやることもありませんし——」

勉強机に向かって勉強を始めること30分ほど。普段であれば鳴らない仕事用のスマホが鳴る。

「はい。どうしましたか?」

『あつ、姐さん。緊急時のボタン押しませんでしたか?』

「緊急時のボタン、ですか?」

実家から『何かあった時用』に預けられていたスイッチのことだろうか。あれなら確か密さんに預けたはず…。

「信号が受信されたのですか?」

『え、ええ。天形における緊急時即応アラートが鳴りましたので複数回押されたようで…。姐さんが持つてるんじゃないんですか?』

「ええ。友人に何かあった時に使いなさいと預けています。確認しますが、押されました?」

『はい。現在、スイッチの位置は衛星によって常に捕捉されていますが速度的に車ですかね』

「そうですか。…天形の私の権限で即応できる部隊数はいくつありますか」

『即応できるのは二個小隊。一時待てるのでしたら一個中隊使えます』

「時間はないでしょうね。二個小隊でかまわないのですぐに回してください。車の向かう先はわかりますか」

『追跡情報から見るに港あたりの倉庫街だとは思いますが…』

「では、現場に二個小隊を即応展開。私もすぐに向かいます」

『了解。連絡します』

通話を切るとクローゼットからフルフェイスヘルメットと武器を



一つ。耳にイヤホンを付けると察から出る。

近場のガレージのシャッターを開けてそこから長らく使っていないかった一台の大型バイクを取り出す。

「まさか、再び使う機会が来るとは思っていませんでしたが…」

バイクにまたがってから気づく。制服から着替え忘れていた。

「…まあ、いいでしょう。1分1秒を争う事態の可能性が高いのですし」

すぐにバイクが唸りをあげて発進する。走る中、イヤホンからノイズが漏れると通話が繋がる。

『姐さん。車は予測通り港の倉庫街に停車。三名の女学生が複数名の男に連れられて倉庫へと歩いていっています』

「到着まで5分とかかりません。小隊は…」

『現場入りまで数十秒』

「先に周辺のクリーニング。武器を持つ者は軒並み制圧させなさい。倉庫には手を出さぬように」

『了解。——命令を受理。『クリーニング』に入るとのこと』

「到着を優先させるので通話を閉じます。現場に到着を確認次第、対象の救出に入る」

『了解。御武運を——』

——フルスロットルのバイクが走る。

☆

倉庫街に到着すると一台の車を完全武装の男が一人、見張りとして立っていた。

「姐さん。お疲れ様です」

「状況は」

「周辺のクリーニングは終了。全て無力化しました。倉庫内には対象を含め20名前後。入ってから5分ほど経過していますが大きな変化は無し」

「わかりました。私が突入後、瞬時に内部を制圧します」

「援護は」

「必要ありません。今の私は『天形』の人間です」

ヘルメットを脱ぎ捨て、髪をひとまとめにして上げる。バイクに吊っていた武装——長刀を腰に下げて倉庫のシャツターへと歩いていく。

「——さて、仕事に入りましょう」

鯉口を切る。瞬間、刹那が動く——

★

——密side——

十数名の男達に囲まれながら入った倉庫内で拐われてきた理由が簡単に説明されているが、密はそれどころではなかった。それは隣にいる鏡子もだ。

「密さん、気づいていますか」

「ええ。何かいます」

倉庫の周囲に『何かいる』。その一つが正面にいる主犯の後ろ——数m離れたシャツターから気配がしている。

そして、事はすぐに起きた。何かが軋む音に男達がシャツターの方へと振り返る。シャツターはわずかに軋んで——崩れ落ちた。

「あれは——」

見えたのは一瞬。風が動いたと感じた時、織女さんを抱きしめて顔を胸元に押し付ける。

「ひ、密き——」

「苦しいですが我慢してください」

起きたのは一瞬の出来事。シャツターに近かった数人の男達が首、胸から血飛沫を飛ばして倒れていく。

一陣の風が流れて、自分達を囲む男達の腕が、足が斬り飛ばされ、首から、胸から、腹から血飛沫をあげて倒れていく。

主犯の男は腰を抜かしたのか座り込んでいた。その男が逃げようと身体を振った瞬間、その背中に刃が突き刺さり地面に縫い止められ

た。絶叫が上がるもその頭は踏み潰されて強制的に黙らされた。

「やかましいですよ」

「刹那、さん……。どうして……」

そこに立つのは刹那。制服や顔には男達の返り血がついていて凄惨な姿になっているが、本人は気にすることなくこちらへと振り向く。

「どうしてもなにも……。密さんがあのスイッチを押したのでしょうか？」

「えっ？ええ。確かに押ししましたけど……」

「あれは私の実家、天形の緊急時用の連絡手段の一つなんです。一回押すだけで衛星が対象を24時間体制で監視状態に移行。二回目を押された時点で緊急時として天形SPの小隊に連絡が入り、現場へと急行するようになっていきます。ちなみにですが、対ECM装備でもあるので電波遮断も役に立たないようになってる優れたものです」

「そんなものだったんですか……」  
遅れて壊れたシャッターから天形とわかる称号を付けた兵士達が倉庫内にあふれる。

「とりあえず、倉庫から出ましようか」

刹那さんに連れられて倉庫から出る。そこには天形のSPと高宮先生が待つていた。

「いやあ、さすがに驚いたぞ。GPSも役に立たないような状況のはずがまさか天形から連絡が入ると思っていなかったからな」

「少し前に密さんには『切り札』を渡していましたから。まあ、二回目以降はお金、請求しますよ？天形を動かすのは安くありませんので」  
「はい。それでも、ありがとうございます。刹那さん」

「……さて、こちらの後片付けは天形の方でやっておきますから、密さん達は会場へ急いでください。風早の社長をお待たせするわけにはいかないでしょう……」

時間を見ると確かに予定よりも遅れてきている。リムジンへと高宮先生を含む四人が乗り込むと、織女さんが窓を開けた。

「刹那さん。このお礼は——」

「いいから、今は行ってください。私がお手伝いできるのはここまでなのですから」

「…はい。ありがとうございます。刹那さん」

「御武運を。織女さん」

車が走り出す。後ろを振り向くと刹那さんが手を振っているのだけが見えていた。

車が走る中、織女さんはこちらへとくっついてくる。

「あの、織女さん。もう大丈夫ですから」

「はい…。でも、すみません。もう少しだけ…」

「はい」

落ち着かせるように背中を撫でていると小さく息をついた織女さんが身体を起こす。

「密さん。私、少し考えていたことがあるのです」

「考えていたこと、ですか？」

「はい。今回の件で、私はそれが確信に変わった気がいたします。だから、密さんを驚かせることになると思いますけど、覚悟はしておいてください」

織女さんの目にはなにやらやる気に満ちている。こうもやる気に満ちているとなると少し不安になってくる。でも、わざわざ水を差すことでもない気もするので…。

「はい。頑張ってください、織女さん」

そんな密と織女を鏡子と高宮は少し離れて座って見守っていた。

「…茨はよくこんな空間に落ち着いて乗っついていられるな。私はすでにこの空間にいるのが苦痛だ」

「残念ですが、学院でも似たような感じですからすでに慣れました。ええ、最近ようやく織女さんもそういった気持ちを自覚してきたようですね。密さんが学院に帰ってきてからはあんな調子ですよ」

「そうか…。いや、元気そうだなによりだがな。とりあえず、このままあの二人がくっついてくれれば今後の風早は後継者のことも解決するから万事が円満なんだが…」

「どうでしょうか。密さんはわかりませんが織女さんがそこに気がつ

いていないとも思えませんし……。まあ、なにかとサプライズ好きですからね。何かやらかしてくれんことを期待することにしましょう」

「そうだな。お嬢ちゃんは案外胆が据わってることだし……」

据わり直しながら高宮は外を眺める。ふと思い出したように鏡子へと向き直る。

「そういえば、密はなんであんなに天形のお嬢さんに気に入られてるんだ？」

「学院内で天水刹那と唯一対等に渡り合える人として密さんは有名になりつつありますから。あと、密さんの性別を知ってなお気にしない稀有な人材でもあるからでしょうか」

「なるほどな。まあ、そのおかげで今回の件では大助かりだ。あの『天形』が動いて解決しない事態は世に存在しないからな」

「本当に……。気に入られすぎです、密さんは……」

警備担当の鏡子としてはため息をつきたくなる状況だった。

## 第54話 雅ヶ崎迎賓館

—千歳side—

雅ヶ崎迎賓館。国賓を招いたりすることにも使われたりする格式高い建物に今、風早の系列の者が集まっている。

千歳はそんな場違いとも呼べる中で一人、柱の一つに背中を預けてカメラをいじっていた。

（ふっふっふっのふ。いやあ、意外とザルな警備でしたね、風早グループ。しかし、雅ヶ崎迎賓館を使ってまでグループ内に報告する話とはなんでしょう？考えられるのは、やはり…織女お姉さまの婚約発表とかそのあたりですかね…？）

千歳がこの会について知ったのは偶然が重なった結果だ。最近になって刹那が織女の護衛をし始め、護衛役の密が学院に帰ってきてからは鏡子を含む四人はほとんど常に一緒にいることが見かけられていた。

今までなら、密と刹那が傍にいれば鏡子は自分を探したりと別行動を取っていることが多かったのにも関わらず、だ。

当然ながらいつもとは違うことは千歳の目にも明らかで…であれば、何があるのかを確認したくなるのは千歳の性だ。

（結果として、今日、風早が現社長から下ろされた話でここ雅ヶ崎迎賓館で何らかの発表を行うことまでは突き止めることができました。後は、発表の中身を知って、話次第では学院新聞に載せることも考えます）

これでも新聞部の副部長。最近では暴走気味の部長の動きを止める側に回ることも多かったが、千歳もやはりこういうゴシップ記事になりそうなネタは大好きだ。

時間になっても始まらず、気を揉み始めた頃。風早社長が現れた。どうやら織女達の到着が少し遅れていたようだ。

「それでは紹介させていただきます。私の兄の遺児であり、風早後継候補になる——結城密です」

「——えっ…？」

カメラを構えていた千歳は固まるしかなかった。中央の階段から降りてきたのは結城密と風早織女の二人。ただし、結城密は『男性』として姿を現した。

条件反射でカメラのシャッターを切りながらも千歳は少し混乱気味だ。まさかここで『結城密の出自』が語られるとは思っていなかった。

『あれが晴臣君の小倅か』

『織女さんと同じ年くらいでしょうか。どこことなく面影がありますね』

『いやいや。あれは相手の血が色濃いでしよう』

周囲の反応はあまり芳しいものとは思えない。明らかにゴシップ記事を見たような反応だ。

(確かに、密お姉さまのことはいつまでも隠し通せることではないとはいえ、なぜこのタイミング…。いや、密さんの存在が織女お姉さまに気づかれたから隠し通す必然性が無くなったとみるべきか…)

密さんが性別を偽って護衛していた以上、本来であれば明らかにすべきではない。でも、護衛される人間が知っていてかつ風早にとつてもつかれたら困る弱点になりかねないものをそのまま抱えるくらいであれば明らかにする方が対処は簡単になる。

(それにしても、これはさすがに新聞には載せられないなあ…)

密と織女のツーショット写真を撮りながら千歳はため息をつく。

(仕方ないか…。二人に売れるような写真を撮って売りつける方向で考えようつと)

『いつそのこと、あの二人で結ばれてしまえばお似合いでしょうに』

周囲は嫌な雰囲気だ。だが、そんな中でも織女はまるで面白いことでも聞いたように笑う。そのまま隣に立つ密の顔を前に——告白した。『好き』だと。

(…おやおやおあ?)

周囲が呆気にとられ、密さんは驚いていながらも嬉しそうに笑っている。前の方で騒いでいるのは風早現社長だろうか。

(いやはや…。いつから織女お姉さまはこんな大それたことを考えて

いたのやら…。しかし——)

改めてファインダーを覗くとちょうど、密さんが織女お姉さまの手を取り、そこへキスをするところだ。写真を撮ると、千歳はカメラをしまう。

(後日、寮まで出向いて写真を届けることにしましょうか。なんだかんだととても良いものが見れましたから、今日はこれ以上の出歯亀は控えることにしますか)

帰り支度を済ませて人々の合間をすり抜けて出入口の方へと歩いていく。あと少し——そんな時、近くにいた男がおもむろに懐から黒い物体を取り出すのが見えた。

(なっ…。あの男、いったい何を——)

男はそれを構える。構えた先にいるのは——密と織女の二人。

…だが、千歳は気にしないふりをして男の前を素通りした。

(まあ、なんだかんだと鏡子お姉さま含み警備の方々がいる中でただか一人だけ銃口向けたところで当たるわけないし…。気にしたところ——)

誰に言い訳するでもなく、心の中であれこれ並べ立てながら男から離れていく。

——本当に、それで後悔しない？

誰かに、声をかけられた気がした。自分の目に映るのは——あの日の姉の姿。

(後悔もなにも…。自分にできることなんてない…)

——本当に？そうやって、起こってほしくないことから目を背けたまま、後悔しない？

(密さんも織女お姉さまもあれで運は良い。警備の方々がいるんだから、そんな簡単には死んだりしない…)

——人は簡単に死ぬ。それを貴方は一番よくわかつているはず。昨日まで笑いあえていた人が、一瞬後には二度と話せなくなる可能性を知っている。

(それは…。でも、こんな人混みの中から二人を確実に殺せる状況なんてあり得ない)



——貴方は、本当に守りたいのは二人？それで、本当に後悔はない…？

幻影から告げられているのはきつと自分が考えることを止めてい  
ることへの自分自身への疑念。『後悔しない？』——か。なるほど。

(ここで見過ごして、明日、悲しいニュースを見た時に『ああしておけ  
ば…』なんて後悔しないか、か…。そんなもの——)

後ろで金属の擦れる音が聞こえた。

「後悔しない——わけ、ないよなあ！」

銃声が響き、何かが割れる音が響いた——

☆

— 鏡子 side —

銃声が響き、天井から吊るされているシャンデリアの一部が砕け散  
る音が会場に響いた。

客が慌てふためく中、鏡子は密と織女の位置を確認する。二人は階  
段の陰に隠れて伏せている。

(あれなら撃たれても当たるのは密さんくらいでしょうか。しかし、  
初弾を天井に撃ったのはいったい…?)

男の方へと視線を向けて気がついた。男の肘と手首を掴んで銃口  
を天井へと向けさせた人物がいることに。

(千歳さん!?なぜここに彼女が——)

そこまで考えて思い直す。そもそも敵をあぶり出すために情報を  
意図的に漏らしていたのだ。密の秘密へと自力でたどり着ける情報  
収集能力のある千歳が、今日の風早グループの情報を拾わないわけが  
ない。

男が千歳を振りほどき、千歳と対峙している。わずかに睨みあつて  
いたが、男はこちらへと視線を向けた。

その一瞬だけで千歳はすでに男の意識から外れたのか、男は密へと  
銃口を向けている。

(ああいう状況でも見失うことはありえるんですか…!?)

千歳はすでに男の意識下から外れているようで男は気にしていない。再びこちらへと銃口を構える。

対して千歳は身体を沈めて腰だめに拳を構えている。

(あつ——)

何が起きるかなど火を見るよりも明らかだ。千歳の身長が男の腹部より少し上、そこで腰だめに拳を構えて狙える急所は『そこ』にしかない。

「せい、やあー！」

「——っ?!」

聞こえたのは千歳の雄叫びのような掛け声とともに何かが潰れるような鈍い音、男が声にならない悶絶したように漏れた吐息。それから一拍遅れて的外れな方向へと放たれた銃声。

前のめりに崩れる男の顎がちょうど千歳の頭の辺りへと下りているのが見えて——

「——っ！」

千歳がその場で跳躍する。男は舌を噛んだのか口から血が溢れて仰け反ると、そのままゆっくりと崩れ落ちた。

千歳は帽子の位置を直すように頭を撫でながら振り返って——こちらと目があった。

(ようやく気がつきましたか)

あちらこちらへと視線を逃がしたところで私は視線を外さない。釣られて外すと見失いかねないからだ。

こちらの視線が自分から外れていないことに気づいたのだろう。ため息をついてこちらへと歩きながら苦笑いしている。

(さて、何と聞くべきでしょうか…)

聞くことが山ほどあるな。とため息をついたところで、千歳がバランスを崩したのが見えた。二歩三歩とたたたらを踏んだところで気づく。千歳の左腹部に広がる赤い染み。

「——っ、千歳さんー！」

千歳の少し後ろに先ほどとは違う男が銃を構えている。銃口から煙が上がっているから撃たれたのは明白だ。

(油断した…。敵が1人であると勝手に決めつけた私の――)

崩れ落ちる千歳が、しかし力強く踏みしめて身体を回す――男の方へと。

「は、はは、ははは」

「えっ?」

「あはは。あははははははは!!」

狂ったように笑う千歳が先ほどまでとはうって変わって殺意を漲らせて男へ向かって走り出す。

男は千歳の動きに驚いたのか再び銃口を向ける。が――

「くっ、はは…!!」

千歳の姿が消える。男の驚く顔が見えたが私は視線を上げるとそこには身体を捻りながら跳躍する千歳の姿。男の後方へと着地する。着地音に男が振り向こうとして、千歳はすでに男の両足へと諸手刈りを決める。

「ひい、あは?」

男が体勢を立て直そうと身体を起こそうとして、千歳はその身体からは考えられない膂力を持って男をそのまま後ろに持ち上げて男を背中から床へと叩きつける。

男がくぐもった悲鳴を上げるも千歳はすでに跳躍している。狙っているのは――男の頭。

「――死ね」

「――ひっ」

男が悲鳴を上げる間もなく千歳の全体重をかけた顔面スタンプイングが炸裂した。男が痙攣したのを最後に崩れ落ちた。幽鬼のように立ち上がるのは千歳。

「千歳、さん…」

「……っ?」

「――っ、千歳さん!」

こちらへと歩いてこようとした千歳の身体が崩れ落ちる。倒れる前に抱き止めた。

「千歳さん!」

「……は、ま……た、かな」

「千歳さん？」

わずかにしゃべった千歳のまぶたが閉じられる。それと同時に気づく自分の足下に広がる血だまり。

「……っ、密さん！救急車を至急手配してください！千歳さんが——」

## 第55話 薄氷千歳

目を開けた風景はいつもと違っていた。

白い天井、近くに見えるのは白いカーテン。それと右腕あたりに繋がっているだろう点滴台。

「……病院……？」

千歳は上体を起こす。見えるのは病院の一室。

周りを見渡してみても気づいたのは左手を握りしめてベッドにうつ伏せて眠っている――

「鏡子、お姉さま……？」

記憶を手繰って――思い出した。

「そうか。撃たれたんだっけ……」

病院服をまくり上げると腹部に巻かれた包帯。

「にしても、どうして鏡子お姉さまが手を握っているんでしょうか」

そもそも何故自分の左手を握りしめているのかわからない。髪の毛を触ったりしても起きないようなので、相当に深い眠りについてるようだ。

「……今さらですけど、日が傾き始めているんですね」

ベッドを囲うカーテンの隙間から見える窓は夕日とまではいかなもののうっすらと茜がかった色をしている。少なくとも丸一日以上は寝ていた計算になる。

「ずっと……。そばに居てくれたのでしょうか……？」

しかし、あの時に撃たれてから一日以上経過しているのなら家族はどうしたのだろうか。メモのようなものも残っていないところを見るに知らされていない可能性も――

「う……、……ん……」

「あつ……」

そうこうしている内に目を覚ました様子。大きく伸びをして、こちらと視線があった。

「おはようございます、鏡子お姉さま」

「……本当に……。寝過ぎですよ、千歳さん」

優しいな笑みを見せてこちらの頭を撫でてくる鏡子お姉さまの仕草に顔が赤らむのがわかる。だけど、なぜだろう。振り払おうとは思えない。

「あの…。私、どれくらい眠っていたのでしようか」

「迎賓館の時からほぼ二日、でしょう。日が暮れてしまえばちょうど二日なのです」

「どうやら丸一日寝ていたようだ。」

「本当に…。一時は搬送中に心肺停止して生死の境を彷徨うわ、手術が無事に終わっても丸一日目覚めないわでこちらはけつこう大変だったのですから」

「そう、なんですか」

「自分の思っていた以上にまずい状況にあつたらしい。」

「少しは反省していただけるとありがたいのですが…」

「そうですね。次からはもう少し考えて行動を起こすようにします」

いくら幻影の姉に背中を押されたとはいえ、戦闘の素人である自分がでしゃばるべきではなかった。初手の銃撃を防いだ時点でさつさと隠れてしまうのが正しかったのだと今なら考えつく。

「とはいえ、おかげさまといたしますか密さんと織女さんの2人は無事でした。ありがとうございます、千歳さん」

「…いえ。お礼なんてけつこうですよ」

「——それで、千歳さんは迎賓館で得た情報はどう扱うつもりなのでしょう？」

——そう。自分は迎賓館でわりとまずい情報をいろいろと知ってしまった。密お姉さまの出自や織女お姉さまとの今後。

風早グループ内にある不和など知り得てしまつては困るものが目白押しだ。

「…千歳さんの出方次第では、私は…切るべきものを切らなくてはいけなくなります」

「うん。まあ、ここに鏡子お姉さまがいる時からなんとなく予想はついています。が、1つだけ。鏡子お姉さま、私の家族に今回のことは…」

「ええ。昨日、様子を見に来られていますから知っています。風早のアレコレを知ってしまったこと。そして、千歳さん。私も知っていました。貴方が——『男性』であること」

そう。わかっていた。病院に同行した人が家族でないのなら、私の『最大級の秘密』を知られてしまっていることくらい。

「鏡子お姉さま的にどうでした。私の性別を知った時は？」

「どうして密さんの性別を知っても落ち着いていたのかが私の中で氷解しました。それと、刹那さんも似たようなことをほのめかすことを言っていたようですし…。刹那さんは知っているんですね？」

「はい。刹那お姉さまは私の性別についてはわりと早い時期から知っています。まあ、だからこそ密さんの性別を知ってもすぐにどうこうしなかったのだと思います。だって——」

「学院内にもう一人『男性』が混じっていることを知っていたから、ですか…」

「そういうことですね。だからこそ、密さんがバレた時に刹那お姉さまはあまり何も言わなかったのでしょうか、私自身言いふらす気がなかったのも自分がそういう存在だったから、です」

「なんといいですか、自分の情報収集能力を疑いたくなってきました」  
いや、そう簡単にはわからないようにしないと私が困りますからこの秘密。

まあ、そのあたりは密さんのことがありますからわかってくれてはいるでしょうが。

「そうですね。まず、安心してほしいことは今回のことに関しては一切の口外はいたしません。信用できないと言われるのであれば一筆書いても構いません」

「…何が目的ですか」

「いえ。さすがにアレをどうこう言うのは私の手に余るといいますか…。そもそも、今バラされては困るものを持たれているのはこちらもあるわけですし…」

とはいっても、私の場合は密さんとは違うので——

「どちらにせよ安心してください。退院次第、私は学院を中退します。」

漏らすべき場所が無ければ、鏡子お姉さまも安心でしょう?」

鏡子お姉さまは呆然とした様子で固まっている。だが、すぐに驚いたようにこちらへと身を乗り出してきた。

「ど、どうして千歳さんが学院を辞めるという話になるのですか!」

「えっと、私は密さんや高宮先生のように何か理由があつて学院に通っているわけではありません。そもそも、私が学院に通っている理由はひどく独善的なことです。ですから秘密としてバレるわけにはいかなかった、という理由もあります」

「独善的なこと、ですか」

「はい。…でも、一つだけ、鏡子お姉さまにはお話したいことがあります」

「私にですか?」

姿勢を正す鏡子お姉さまに、こちらも背筋を伸ばす。大きく深呼吸を数回繰り返して――

「私、薄氷千歳は――茨鏡子様が好きです」

☆

―鏡子side―

言われた言葉に自分の頭が真っ白になった。…誰が誰が好き?千歳さんが、私を、好き…?

「今日を逃したら二度と伝えられない気がしましたから。あつ、鏡子お姉さまは答えを出さなくてもいいですよ。私が伝えたかっただけですから」

「えっ、いや…二度と伝えられないとはどういう…」

「先ほども言いましたが私は学院を中退しようと思えますから」

「…千歳さん。少し、お話いいですか?」

呼吸を整える。思考を一度リセットし、状況を改めて認識し直す。「千歳さん。私は千歳さんには学院を辞めてほしいとは思っていません。ご家族ともお話ししましたが、こちらのとそちらの秘密をお互いに口外しないことを約束してもらおうと思っっているんです」



「それは…、いいんですか…？」

「その代わりにと…ってのはなんですが、千歳さんには情報収集の点をいろいろと手伝ってほしいと思っていました」

一度視線を外す。深呼吸を入れて気合いを入れ直す。

「もちろん、千歳さんにも何かメリットを…と考えていたのですが…」  
「…だったら、親に了解を得てからになりますけど。私、寮に入りたいです。鏡子お姉さまと残りの学院生活、少しでも長くいたいです」

「…千歳さん。念押しするようで悪いですが、本気なんですか」

「はい」

「私、こう見えてだいぶ年上ですよ」

「年齢は気にしてません」

「いろいろとややこしい立場にいます」

「今更ですね。私自身、ややこしい人間ですし」

思いつく限りの事柄を千歳さんに伝えるが退く気配はなかった。だが、不意に千歳さんの視線が下がる。

「…私みたいな人間とお付き合ひするのは嫌ですよね…。ごめんなさい、無理を言ったようで…」

明らかに落ち込んでしまった。そういうことではない。でも、今の私には口で伝えられるほどの余裕はない。

「千歳さん」

「はい…」

「この答えでは、不足ですか——」

千歳さんの頬に手を添えて唇を合わせる。数秒間、触れあっていた唇をはなすと、驚いたように目を見開いている千歳さん。

——きつと、自分の顔は真っ赤になっていると思えますが…。

「千歳さん。私は嫌なんかじゃありません。でも、後悔はしてほしくないのです」

「…後悔なんて、しません。私は、鏡子お姉さまが大好きなんです」  
近づいてきた千歳さんの顔に、唇に、再びそっと口づけた。

## 第56話　そういう話

——病室の外。扉の窓越しに中を覗いていた密と織女は目の前で交わされているキスからそっと視線を外し、扉の影から離れる。

「…今日はこのまま帰った方がよさそうですね」

「そう、ですわね。でも、鏡子さん。嬉しそうですね」

二人は千歳のお見舞いに來たのだが、鏡子の話の内容から中に入りかねていた。そんなところで急に告白が始まり、挙げ句には二人はキスを始めてしまった。

「…千歳さん、鏡子さんと幸せになれそうですね」

「ええ。鏡子さんのお給料、少しは上げられないかお父様に相談してみますわ」

今後ともお世話になることは決まっているのだ。少しでもご機嫌取りができるようにしておいた方がいい。

(見ていたのがバレた時に怖いですし…)

寮へと帰った二人は遅れて帰ってきた鏡子を労いながらも食事を終えた。

時間もそこそこに過ぎた頃。密の部屋で二人が寛いでいるところに鏡子がやってきた。

「入りますよ」

「言いながらすでに入りましたね」

「さて、密さん、織女さん。私に言わなければならないことがありますんか?」

イスに座りながら無然とした態度の鏡子。

「私が、ですか?」

「なんででしょう?」

こちらの反応にスマホを取り出した鏡子さん。織女さんにはわからない行動でも私にはわかる。

何が言いたいのか理解できてしまい、私は観念して頭を下げた。その様子に織女さんは首を傾げ、鏡子さんは軽く頷く。

「わかっているようですね」

「はい…。すっかり失念していました。申し訳ありませんでした」  
「えっと、密さん。いったいどういうことなのでしょうか」

「私と鏡子さんのスマホは一定距離に近づくとアラームで知らせる機能があるんです。マナーモードであればバイブでお知らせします」

「それって——」

「ええ。病室前で何をしていたのか、ぜひとも私にも聞かせていただけますか」

素晴らしい笑顔で話しかけられています。目が笑っていないし、明らかに怒気がただよう鏡子さんに2人ですぐさま頭を下げる。

「その、すみませんでした。覗き見をするつもりはなかったんですが…」

「お見舞いに行ったらちようどそのタイミングだったので入るに入れてなくて…」

「——」

「二本当にごめんなさい」

「…まあ、いいです。病室であんなことをしていた私達にも非はあるでしょうから」

頬がうつすらと赤くなっている鏡子さんを見ると顔がにやけてしまいそうではあるのだが…。

「それで、鏡子さん。千歳さんのお話はどのようにまとまりましたの？」

「千歳さんがこちらの秘密を厳守し、かつ卒業までは監視下に置かせていただく代わりに千歳の秘密は他言無用。という形でまとめました。それがそれで2人は大丈夫ですか？」

「はい。私の方は大丈夫です」

「私も問題ありません」

「そうですか。…あつ、あと、2人には千歳さんから頼まれたこちらを渡しておきます。なかなか一品ですよ」

鏡子さんから手渡されたのは一枚の写真。そこには織女さんの手に自分がキスをしている決定的な瞬間の写真だった。

頬が赤くなるのを感じながらも、鏡子さんに視線を戻す。

「これは、いったい…?」

「迎賓館で撮った珠玉の一枚だそうですよ。というよりはデータ内にはその一枚しかありませんでしたから、2人に渡すため用だったのでしょうか」

確かにあの場で一番映える画と言われてしまうとそうとしか見えない。密自身、自分の気持ちを伝えるのにわかりやすい方法を選んだのは事実だし、それを写真に収められるということにまでは頭を回していなかった。

「あとの報告としては、千歳さんは退院後に入寮してもらう予定になっていきます。向こうの親御さんとも話はついていきますから、この後にも寮長に伝えてきます」

「入寮までしてもらおう必要ってあるんですか?」

今までも口約束とはいえ守られてきたのだ。今更監視が必要な相手でもなさそうな気はするのだが…。

「まあ、千歳さんとしても口約束だけでは不安なのではないでしょうか」

「…鏡子さんとできるだけ傍に居たい、と言われたのでは?」

織女さんのツツコミに鏡子さんが目を逸らせた。おそらく似たようなことは言われたのだろう。

ニヤニヤと冷やかすように笑ってしまうこちらを尻目に、鏡子さんは咳払いとともに話を元に戻す。

「ともあれ、千歳さんのことはそうになりました。二人に不服などはありませんか?」

「はい。大丈夫です」

「私も大丈夫ですよ」

「でしたら、退院後から入寮してもらえるよう動くのです。…しかし…」

鏡子さんはふと天井を見上げたかと思うと固まる。しばらくそうしていたのだが…。

「千歳さんは誰の妹に据えるべきでしょうかね」

「えっ?」

「なんですか。二人そろって『本気で言っているのかこいつは』みたいな目で私を見て——」

数日後。無事に退院した千歳さんは入寮した。そして——

☆

—刹那 side—

『二学期 期末学力考査』

『成績優秀者発表』

『第三学年』

首席 結城 密  
二位 正木 美玲衣  
二位 風早 織女  
四位 御剣 刹那  
五位 畑中 美海  
六位 高山 香澄  
七位 茨 鏡子

貼り出された学力考査の順位を見ながら刹那自身はうんうんと頷いている。周りの生徒はひそひそと何か話しているようだが……

「刹那さん、段々と順位を落としてますけどどうしたんですか」

「何がですか、密さん？」

少し遅れて現れたのは照星の三人。順位を見ながら——

「刹那さんは手を抜いていますの？」

「心外ですね、織女さんは。私がそこまで優しい人だとも？」

「いいえ、そうは思いませんわ——となると、純粹に落ちてきているということなんでしょうけれど……」

「織女さんとしてはどうして落ちていくのかが気になるのですね」

「美玲衣さん。そうなのです。刹那さんは『手を抜いていない』とおつ

しやいますけれど、だとしたら段々と成績が落ちていくのはどういことなのでしよう」

「どうと言われても…。茉理の勉強時間に私のアレコレ、他に割かなければならない時間が一学期の頃と比べれば多くなっていますから純粹に勉強不足ですよ」

いや本当にやることが増えましたよね。茉理に勉強を教えたり茉理と遊んだり…ああ、仕事のこともありましたね。

「最近、急な呼び出しもありましたし事後処理もそれなりに大変でした。まあ、私がやり過ぎたというのもありますけど」

両親からは久しぶりに怒られてしまった。確かに久しぶりのお仕事でしかも依頼人は友人。現場は薄暗い倉庫の中で今まさに三人をどうするかタイミング。

瞬間的に加減することを失敗しても仕方ない状況だったと思います。ええ、病院送りにした男共全員が結果的に社会復帰絶望的とか言われても私はそこまで責任持てません。

まあ？その代償として次の日から二日はベッドから起き上がれないほどに疲弊しましたから、私に加減できていなかったのは事実ですが。

「えっと、その節は——」

「はい、密さん。こういつた場で話すような内容でもなし、後片付けは任せろと請け負ったのも私です。あの後にもいろいろと問題は起きているようですが、一応の解決は見たのでしやう？」

「ええ、まあ」

「でしたら、今はいいですよ。まあ？お二人の結婚騒動については気になるところですか？」

密と織女が固まるのを美玲衣は眉を寄せて見ている。知らない人から見ればこうもなるか。

「美玲衣さん。詳しいお話はまたあとで聞けるでしやうから、今は教室へと向かいましょうか」

「えっ、ええ、でも…」

「そのこの固まっている二人は放っておきましょう。周りがいなくなれ

ば自然と動きだしますよ」

「はあ」

納得のいかないとばかりに息をつく美玲衣を連れて教室へと向かう。二人はしばらく固まっていたが。

## 第57話 鏡子と千歳

— 刹那 side —

二学期も終わり、寮内は年末年始に向けた和やかなムードの中で皆がのんびりしていた。

刹那と密は話の邪魔が入らないように密の部屋で話している。

「さて、今年も残すところあとわずか…」

「刹那さんはどのように過ごされる予定ですか？」

「私ですか。私は初詣に美玲衣さんと茉理の二人と行って、そのあとは買い物とかをしようと話してはいますけど…。それ以上は特に決めていませんよ。そういう密さんはどのような年末年始を？」

「私は織女さんといろいろとありますので…」

「ああ。今後のことをお話する必要がありますものね」

「そうですね。婚約などの話というよりは卒業後の進路をどうするかなどの話し合いだとは思いますが…」

「おや？密さんが風早を継ぐんですよね？」

「今のところはそうですね。とはいえ、私自身は社長になるための勉強はしていませんし、いきなり『明日から社長』なんて言われたところで何ができるわけでもありません。大学は出ておくようには言われるでしょうからどの辺りの大学を選ぶべきかの話になるのではないのでしょうか」

「そちらは大変そうですね」

紅茶のカップに口をつけて一息。

「…そういうえば、鏡子さんから不穏な話題を提供されたのですけど」「不穏な話題？」

「はい。なんでも美玲衣さんのお父様の事業が右肩下がりになりつつあるとか」

「…たしか、投資家、でしたか」

「ええ。こけてしまえば美玲衣さんにも少なからず影響が出てくると思います」

「…年始の時にそれとなく話を聞いてみることにします。情報、あり



がとうございます」

「いえ。刹那さんにはいろいろと骨を折ってもらってもいますから」  
密の微笑みに刹那の目が細くなる。お互いに紅茶を一口含んで飲みつつも視線を外そうとはしなかった。

「何か、頼みごとでしょうか？」

「…もし、刹那さん本人が事を起こすようなら事前にご連絡が欲しい——と、鏡子さんから」

「まるで私が動いたら大事になると言わんばかりの言い分ですね？」

「ええ。私も鏡子さんに同感です。刹那さんが『本気』で美玲衣さんに力を貸せば風早グループが総力を持って動くのと変わりません」

「…人を天災かなにかのようによいいますね？」

「その行動力に救われたからこそ、貴女の行動力は私達の考える範囲に収まるとはどうにも思えないのです」

ややふてくされた態度で刹那は紅茶を飲み干す。密の言いたいことがわからないわけではない。

自分が行える総力と他者の行える総力とやらには圧倒的なまでに開きがあることに…。

「わかりました。認めるのは癪ですが何か起こす時は必ずそちらへの連絡はしましょう。…さて、そろそろいい時間ですし私は部屋へ帰りますね」

「はい。おやすみなさい、刹那さん」

紅茶の一式は密が片付けるといって下へと持って行ってしまった。

刹那は部屋へ戻り、そのままテラスへと出る。

「…さすがに冷えてきてますね」

「いやあ、刹那お姉さまはどうしてテラスに居ますのか？」

いつの間にかテラスの柵に千歳が座っている。

「白々しいですね。貴女はずっとここにいたでしょう」

「ふふっ。刹那お姉さまにはかないませんね」

「どうですか。寮での生活は？」

「毎日がお祭り騒ぎのようで楽しいですよ。ここは学院内でありながら半ば治外法権に近い場所で、学院の中枢メンバーのほとんどがそ

ろっている稀有な場所ですから」

言われてみれば奉仕会メンバーに照星が二人。自分に千歳と学院の有名人が勢揃いしている。

「後は美玲衣お姉さまが入寮すれば完璧ですよ」

「いよいよ寮内がカオスになりそうですね」

「いいじゃないですか。楽しそうですね」

「…そういう貴方は鏡子さんとの生活を謳歌しているようですね？」

「はいっ！そこについては入寮してよかったと本当に思います！」

入寮してからというもの、千歳は基本的に鏡子の近くに必ず居るようになった。象牙の間にも一緒に入ってこようとするのでその度に私か美玲衣が摘まみ出していますが、摘まみ出すと鏡子さんがチラチラと扉の方を気にするようになり。

人間、変わる人はわりと簡単に変わることがわかって面白かった。

「それで、私とお話するためにテラスへと出てこられたのですか？」

「そうですね。すみませんが美玲衣の父親、正木孝太郎について調査してほしいのです」

「おやおや？最近、事業が狂い気味の男のことを調べろとは…。まあ、確かにあの男に何かあれば美玲衣お姉さまにも問題ですしね。——わかりました、承りましょう」

「すみません」

「いえいえ。お話はそれくらいでしょうか？」

「ええ。願いますね、千歳」

「わかりました。任せてください」

刹那はテラスから部屋へと帰り、振り返ったときには千歳の姿はすでにない。



—千歳side—

部屋へと帰ってきた千歳は備え付けのテーブルへと向かい、現状自分が掴んでいる情報の精査を始める。

(刹那お姉さまが気にする程度には美玲衣お姉さまの家がヤバイということなんでしょね)

ノートパソコンを取り出して軽快にキーボードを叩いていく。

(…業績は確かに下がっていますが今すぐどうこうという感じは見受けられないですけど…。もう少し精査すべきでしょうか?)

パソコンの画面を見て首を傾げている千歳の後ろから――

「千歳さん?」

抱きつこうとした鏡子の腕が空振る。鏡子が周囲を見渡すとベッドに腰かけた千歳が笑っていた。

「鏡子さん。さすがに気配を隠して後ろから抱きつこうとするのはやめてください」

「何を言うのです。千歳さんが毎回していることを仕返ししようとしたまです」

「いえ、私はこんなですけど『男』なんで後ろから抱きつかれるのはちよつと…つて鏡子さん?」

こちらへと近づいてきた鏡子はこちらを持ち上げると自分の懐へと抱えるように座る。

「…あの…」

「いいじゃないですか。千歳は嫌ですか?」

「嫌じゃ、ないですよ?ただ、この体勢は自分にはいろいろと毒が多いといえますか…」

千歳は身長の関係で抱えられたままベッドなどに座ると後頭部がちよつと鏡子の胸の辺りに来てしまう。

「当てているのです」

「…我慢できなくなるからできたら解放してほしいです…」

「では、膝枕にしますか」

体勢を変えられて膝枕の体勢に。頭を撫でられながら――  
「なにやら毎日のように鏡子さんに甘やかされて自分がダメになっていくような気がします…」

「そう思うのでしたら寝ている時くらいもう少し安らかに眠れませんか?毎夜のようにあれだけ隣でうなされていたらさすがに気になり

ます」

「…すみません」

実は千歳は事故の後遺症で記憶が飛んでいる関係か悪夢を見る回数  
数が尋常じゃないほどに多い。

医者曰く『事故のことを千歳がちゃんと整理できていないため』だ  
そうだが、そもそもその事故の前後の記憶も曖昧なのだ。

「といたしますかですね。なぜ鏡子さんは寝る時は必ず私の部屋に来る  
のですか？」

「——嫌、ですか…？」

鏡子の声音が明らかに弱った。千歳は膝枕の体勢のままに焦った  
ように——

「い、嫌だったら早い段階で鏡子さんを部屋から追い出していると思  
いませんか？私は別に嫌じゃないんだけど鏡子さんが休まらないん  
じゃないかと思ひましてですね」

「千歳は抱き心地がいいのでよく眠れるのです」

自分は抱き枕かなにかなのだろうか？ああ、だから毎日朝起きると  
顔が鏡子さんの胸に埋まっているのか、と今更ながら納得できること  
が多い千歳だった。

「それに、千歳さん。私が抱きしめると安心して眠っていますよね」

「…はい。そうですね」

確かに落ち着いて眠れる。夢見はいいし、起きた時はわりと至福の  
時間でもある。

「わかりました。鏡子さんの好きにしてください」

「はい。好きにしますね」

頭を撫でる手つきが優しくなったのを感じながらも千歳は姿勢を  
起こす。テーブルからノートパソコンを取ると鏡子と並んで座る。

「そういうええ何を調べていたのですか？」

「正木孝太郎についてです。刹那お姉さまから依頼されましたので」

「そういうえば最近になって急激に業績を悪化させていますね」

「…そうなんですよね。これは、やるべきでしょうか」

「潜入ですか」

「そうですね。……— 鏡子さん、ついてくる気ですか？」

「いえ、さすがにそこまで無謀なことをする気はありません。ありませんが、私なりにも調べてみましょう」

「わかりました。鏡子さんには——」

千歳の説明を聞く鏡子の表情は真剣そのものだ。説明を聞き終わると——

「では、寝ましょうか」

「……あの、鏡子さん」

「おやすみなさい、千歳」

「——はい。おやすみなさい、鏡子さん」

—— 今日も抱き枕になることは決定のようだ。

## 第58話 動く事態

—刹那side—

年が明けて数日。正月も終わり冬休みも残すところあと数日といったところ。そのニュースがテレビから流れてきた。

『次のニュースです。一部上場の投資ファンド運営会社『エムエスホールディングス』が東京地裁に会社更生法の適用の申請を申し立て、倒産しました——』

ニュースの内容としてはなんてことはない。一会社の倒産だ。だが、寮内の空気はニュースが流れた途端に緊張が走った。

口火を切ったのは美海だった。

「今の会社って美玲衣さんの父親の会社じゃなかったか？」

「そうですよ。いよいよと言いますか、とうとうと言いますか…」

返事をしたのは千歳。千歳自身はいつこうなってもおかしくないことは知っていたから大した驚きはない。それは密達も一緒だった。

「美玲衣さんは大丈夫でしょうか…」

「こうなってくると学院に出てこられるのかってところだね。ただまあ、そこはあんまり気にしないでいいと思うよ、姫」

「どうしてですか、美海さん」

「美玲衣さんに一番仲の良い『女帝』が一瞬たりとも心乱すことなく食事を続けているからかな」

織女の視線を受けてなお、刹那はぶれることなく食事を取っている。時折、花や月子の要望に答えておかずや漬け物を渡している。

「…平常ですね」

「まあ、刹那さんがこういうことで先手を打たないということはないのです。ぶれることなく食事を取っている以上、美玲衣さんは何らかの方法で学院に顔を出すでしょう」

その後は流れるニュースをBGMに何事もなく食事は終わった。

自室へと戻ると刹那はテーブルに置いていたスマホを手に取り電話をかける。数コールおいて相手方が出た。

『はい。美玲衣です』

「夜分遅くにすみません。刹那です」

『こんばんは。どうかしましたか?』

「ニュースは知っていますか?」

『ええ。つい先ほどテレビで確認しました。とうとう、と言ったところでしょう』

「それで——」

『はい。ありがとうございます、刹那さん』

「いえ。ということは、無事に移動できたのですね」

刹那が何も手を打たないわけがない。その通りだ。

美玲衣の今後に関わる一大事かもしれないことに何も対策しないわけがなかった。

☆

——時間は数日さかのぼり、正月。

刹那は美玲衣、茉理の二人と初詣、映画観賞を終えてカフェにて一息ついていた。

「前回ほどぶっ飛んだ映画ではありませんでしたね」

「ええ。茉理が『同じ監督の映画がある』とか言い出した時は身構えてしまいました、意外と純愛ものでしたし」

「でも、良かったでしょう?」

「ええ。そこは私も美玲衣も同意します」

刹那はコーヒーに口をつける。茉理がパフエを美味しそうにほおばりながら——

「ところで刹那さん。美玲衣ちゃんに何かお話があるんじゃないかなかったの?」

「そうですね。ただ、今すぐするような話かと言われると…」

「なんでしょう。何か企み事ですか?」

チョコケーキを食べる美玲衣の眉が寄る。刹那は軽く手を振る。

「いえ、何か悪いことを考えているわけではないんです。ただ、茉理に聞かせていいような話か判断がつかず…」

「ええ〜…。私が聞けないような話なの？」

「刹那さん。何を話す気なのかはわかりませんが私が許可しますから  
茉理にも聞かせてあげてください。まったくの無関係…ということ  
でもないのですよね」

「それはそうなのですが…。いかんせん、プライバシーにも関わる話  
ですから」

「この3人でお互いに隠さねばならないプライバシーと言われてはだ  
いたい察しがつきますが…。構いませんよ。どうせ、父の事業のこと  
でしょう」

「美玲衣ちゃんのお父さんのお仕事の話…？」

モグモグと咀嚼している茉理の口元についたクリームを隣に座る  
美玲衣が拭き取る。

「…わかりました。美玲衣本人の許可も出たことですし——」

刹那は持ってきていた鞆からファイルを取り出す。

「自分で調べた資料もあるんですが、千歳と実家に頼んだ資料も合わ  
せて持つてきました。実家分と千歳の分は重複箇所もあるので  
…」

「むしろ千歳さんにも頼んでいたことに驚きなんです…」

「まあ、彼女に頼んだら楽しそうに調べてくれましたよ」

「千歳ちゃんってこういうの好きだよね」

ファイルから資料を取り出すとテーブルに並べる。

「とりあえず…最悪のお話になりますが、今すぐにもテレビの  
ニュースに『倒産しました』と流れてもおかしくない程度には大赤字  
状態です」

「え〜…」

「改めて他人から聞かされるといろいろとききますね…」

取り出した資料を眺めながら口がへ字になる美玲衣。茉理もい  
くつかの資料を眺めているけど首を傾げている。

「…ねえ、これでまだ倒産はしてないんだよね？」

「そうですね、今のところは倒産していません。今のところは…」

「こうして見るとなぜ倒産していないのかわからないありさまです



ね」

全員で資料は眺めているが全員の意見としては『むしろなぜ倒産していないのか?』という答えにたどり着いている。

「…倒産したら美玲衣ちゃんってどうなるの?」

「おそらくですが学院は中退することになるのではないかと…」

「美玲衣ちゃん、いなくなっちゃうの…?」

「そうですね。しかし、こうやって調べてきているということは刹那さんは何か考えてきてくれているということでしょう?」

「はい。美玲衣の言う通り、いくつか手段は考えてきます」

別のファイルを取り出す。

「私が提案できるのはいくつかありますが、一部は私以外を頼るので取れるかはわかりません」

「——と言いますと?」

「例えば——」

◆ 尽星グループへの売り込み

「…難しくありませんか」

「そうですね。ですが、手段の一つだとは思いますが」

「それなら織女さんか密さんあたりに風早グループの方への就職を斡旋してもらおう方がリスクも少ないと思えますが…」

「やっぱり美玲衣としてはそう思います?」

◆ セーフティハウスへの避難

「こちらは?」

「早い話、今の家にいれば借金取りに囲まれては何もできなくなりません。先手を打って私か実家名義で避難先の家を用意してそこへ一時避難。間を置いて学院の寮へ移住していただくのはどうかと」

「なるほど…。一番現実的ではありませんね」

「まあ、密さんの秘密を知る人がまた一人寮生になるという…気がついたら知っている人の方が多くなるという逆転現象が起きるのですか…」

「密さんとしてはむしろ気を張る必要がなくなつて楽になるのではないのでしょうか」

いくつかの案に対して刹那が提示し、美玲衣は返事を返す。茉理はやり取りを見守りながらパフェを食べている。

「やはり、寮へと避難するのが安全なのかもしれませんね」

「わかりました。セーフティハウスについては実家に連絡して用意させます。どうせ数日しか使わないでしょうから適当な物件を押さえてもらいます。入寮に関してはセーフティハウスへの避難が確認できた時点で私からすみれとあやめに話して進めておきます」

「お願いします、刹那さん」

「いえ、任せなさい」

「難しい話は終わった？」

「茉理はなぜか静かにしていましたね？」

「うーん。私は良いアイデアが浮かばなかったから変に何か言うのはおかしいかなって」

「では、茉理に頼めることを頼みましょうか」

「えっ、なにになに？」

先ほどまでは話に参加できなかったからか少し落ち込み気味だった茉理も、参加できることがあるとわかると途端に明るくなった。

「新学期が始まるとおそらく破産の話は学院内で盛り上がる可能性が高いでしょう。茉理には悪いですができるだけ美玲衣のそばにいてほしいのです」

「それはいいけど、どうして？」

「今後、倒産すれば美玲衣の周囲は否応なしに変化します。私もできるかぎりはそのばにつくつもりではありますが、寮の部屋の手配などもありますからずつとついておけるかはわからないので」

「うん。私にもできることだもの」

「茉理も……ごめんなさい」

「いいよ。美玲衣ちゃんにはいろいろとお世話になってるんだから、こういう時くらいは頼ってよ」

「…ありがとう、二人とも」

電話を切ると刹那はすぐにすみれの部屋を訪ねた。

「刹那お姉さまから来られるということはなにか急ぎの仕事でしょうか」

「察しがよくて助かります。実は正木美玲衣の入寮申請を進めてほしいのです」

「鈴蘭の宮様の入寮申請ですか？」

首を傾げているすみれに刹那は年末から続いている事の顛末を説明する。

「なるほど。つまり、あとは手続きさえ終えてしまえばいつでもこちらへ来られる準備は整っている、という状態ですか」

「お願いできますか？」

「——わかりました。あやちゃんに話せばすぐに書類一式をすぐさま準備してくれると思います」

「大変かと思いますが、よろしくお願いしますね」

「はい。お姉さまの頼み、ですから」

頼られたことが嬉しいように微笑むすみれ。刹那は目を細めてその頭を優しく撫でた。

## 第59話 波乱の予感

新学期が始まる前日。

寮の前には少ないながらの段ボール箱がいくつかと家具が数種類。そして、天形の護衛二人に護られた美玲衣が立っていた。

寮からの出迎えには刹那、すみれ、あやめの三人。

「よくいらっしやいました、正木美玲衣様」

「…急なお話でありながら対応していただきありがとうございます」

「いいえ！必要な手続きのほとんどは刹那お姉さまが済ませてくださっていましたもの。私達がやるべきことは書類の最終確認と美玲衣お姉さまの署名をいただくくらいのものですわ」

ニコニコ笑顔であやめは小脇に抱えた鞆から書類を取り出す。美玲衣が署名するべきところを説明し、署名をもらおうと書類は鞆の中へとしまう。

「では、私はこのままこちらの書類を学院へと提出してきます。すみちゃんは美玲衣お姉さまの寮内のご案内を任せますわ」

「あやちゃんがしなくていいの?」

「書類を迅速に出してきたいですから」

小さく礼をするとあやめはササツと学院へ向かって歩き出してしまった。

「…ええと、では。美玲衣お姉さまのお使いになるお部屋にご案内致します」

「よろしく願います」

「刹那お姉さまは——」

「私はこれらを運びますから」

男性ですら数人は要りそうな段ボールの数を一回で寮内へと持ち上げて歩いていく。後を追うようにすみれと美玲衣は寮内へと入る。「基本的には前回にご利用いただいた際と大きな違いはありません」「なるほど。皆さんは?」

「織姫お姉さまと密お姉さまのお二人は風早の会合があるというお話で出かけております。他の方々は部屋に居ると思います」

「そうですか。…とりあえず部屋に行きましようか」

「はい。ご案内します」

階段を上がり、扉が開いている部屋へと入ると刹那が段ボールを並べていた。

「美玲衣さん、荷物がずいぶんと少なく見えますが…」

「ええ。必要最低限の分以外は家に置いてきました。移動に際しては身軽な方が楽ですから」

「なるほど」

「まあ、いろいろと買い足す必要もあるかもしれませんが、その辺りは生活を始めてから追々…といったところでしょうか」

「すみれ、すみませんがお茶を淹れてきてはもらえませんか」

「はい、刹那お姉さま。では美玲衣お姉さま、失礼いたします」

「ありがとうございます、すみれさん」

すみれは小さく一礼して去っていった。部屋に二人きりになると、美玲衣は刹那に頭を下げる。

「刹那さんもありがとうございます。私の家のことでこんなに手間をかけてもらって…」

「いいえ。美玲衣の気にすることではありませんよ。それより、今後このことを考えましよう」

「ええ」

部屋に備え付けられたベッドに二人並びで腰かける。

「美玲衣のお母様はどうされている様子なんですか？」

「あつちはあつちで頼れる方がいたようで…。そちらへ避難していると聞いています」

「なるほど。父親——正木孝太郎の行方は？」

刹那の質問に美玲衣はおどけたように肩をすくめる。

「さあ？倒産が秒読みになった頃から家には帰ってきていませんでしたから」

「ということは、年末頃から帰ってきていなかった？」

「ええ、そうですね。金策に奔走しているのか、それとも何か策があるのか…」

「難しいとは思いますが…、追いつめられた人間はどのような行動を取るか判断しかねますから」

「そうですね。でも、学院内では刹那さん達がいいますから安心です」

「…最善は尽くすつもりですが、学院内もすでに倒産の話で持ちきりになっていくはずですよ。美玲衣は、心折れぬように…」

「…大丈夫ですよ」

そう言う美玲衣の肩は震えている。不安を押し隠しているのは明らかだが、だからといって刹那自身、慰めの言葉を並べたところで気休めにもならないくらいはわかる。

「まあ、基本的には茉理が近くにいるとくれると思うのでそこまで悲観的にならなくてもいいとは思いますが…」

「はい…」

それでも、美玲衣の不安は取り除けまい。何かしら、手を打つ必要がありそうか。

☆

—美玲衣 side—

寮での夕食も済み、あてがわれた部屋へと戻るとスマホを手にとある電話番号に電話をかける。しばらくの間のコール音の後に機械音声が出られない旨を告げてきた。

（おそらく、借金取りから逃げるためにスマホをどこかしらに放置しているのでしょうね。母も文句を垂れながらも落ち着ける場所は見つけているようですし、今のところは均衡状態…といったところでしょうか）

とはいえこの状態が長く続くわけがない。少なくとも父である正木孝太郎にとっては時間の経過は自身の首を絞めこそすれ、好転する材料にはならないはずだ。

（私自身も刹那さんや茉理に頼るばかりでなく何か方策を考える必要がある）

そう考えるが、現状で取れる策となると限られている。

(ですが、せつかく近くに窓口があるのですから打診するだけタダ、ですよね?)

美玲衣は部屋を出ると目的の部屋へと向かう。扉を叩くと入室を許可されたので入ることにした。

「こんばんは、美玲衣さん」

密さんの部屋を訪ねたのだが、そこには鏡子さんと織姫さんの二人もいた。

「お二人もいらつしやつたのでしたら、私は後日にしましょうか…?」「いえいえ。私は織姫さんの警備内容を密さんと詰めるために来ていただけですし、織姫さんは最近密さんにべったりですから別のタイミングを探す方が難しいと思います」

「鏡子さん、私はべったりなんてしていません」

「ここ数日四六時中密さんと甘々な空間で生活しているから感覚が麻痺しておられるだけなのでは…」

よく見たら紅茶を飲む密さんと織姫さんに対して、鏡子さんはかなり濃い目の緑茶を飲んでいる。甘い空間に耐えるための処世術、ということでしょうか。

「そういう鏡子さんだってお部屋では千歳さんと楽しくしているようですよ?」

「いえいえ、織姫さんほどでは」

「そんなことありませんよ」

ウフフアハハと笑顔なのが明らかに笑っていない顔で牽制しあう二人を尻目に密さんは紅茶を入れてこちらへと差し出してきた。ありがたく受け取ると近くに置かれたイスに腰掛ける。

「とりあえず鏡子さんと織姫さんは放っておきましょう。美玲衣さん、何かお話があるのですよね?」

「はい。最初にお断りしておきますが大変不躰なお話になります」

「まずは聞かせていただけますか?判断させていただくのはそれからです」

「はい。では、単刀直入にお話しますが——密さん、私を買いませんか?」

私の申し出に密さんはただ目を細める。気がつけば騒いでいた二人も静かになっていった。

「それは、どういった意味で捉えるべきでしょうか」

「そうですね。今のところ…いえ、数日中は今の安全は確保されていると思っっています。でも、父がこのまま終わるとは到底思えません」

「まあ、そうですね」

「そう考えた時、あの人が使える資産相当のものというのは極めて少なく…しかし、簡単に使えるものがあります」

「それが美玲衣さん、貴女だということですか」

「はい。私自身を手土産にどこかしらの資産家あたりに融資を切り出せば幾ばくかのお金は引き出せるでしょう。それを元手にすれば父は再び返り咲けると考えても不思議はありません」

幾ばくかのお金、とはいったが実際は借金を含めた数千万〜億単位のお金を融資してくれる相手を探している可能性が高い。そうなった時、自分の価値をそれよりも高めておければ父のいいなりになる必要は無くなる。

「なるほど。しかし、どうでしょうか…。美玲衣さんにこう言ってしまうと薄情な話になってしまいますが、私から美玲衣さんを『買う』と言ってしまうといういろいろと問題が出てきてしまいます」

「次期社長が確定とはいえ密さん、織姫さんと婚約内定しているので安易な買付けは批判の種になるので止めていただきたいです」

当然の答えだろう。次期社長が夫人以外に女性を『買った』となればスキャンダルものだ。警備担当の鏡子さんからしてもそんな不穏当な案件はゴメンだろう。

「織姫さんとしては、私は『買う』に値しますか？」

「…買って損はない、とは思っています。ただ、美玲衣さんのお話から考えるに『買う』となれば億単位の価値を示していただくことになります。今ここで、貴女は私達に『正木美玲衣は億単位のお金を出すにふさわしい人材』であることを示せますか？」

不可能———なのは織姫さんもわかった上で聞いてきている。今の自分が億単位のお金を動かせる人材であるかどうかなど、分かり



きつた話をすることはできない。

「無理ですね。将来性をアピールしたとして、それは今のそちらの婚約話を越えられるようなものではありません。それだけの価値を示せるとは口が裂けても言えません」

「でしたら、このお話は決裂することになりますか？」

「仕方ありません。また何か方策を考えるだけです」

紅茶を飲みきると立ち上がる。扉に手をかけたところで――

「美玲衣さん、何か、アテはあるのでしょうか？」

密さんの声に応えられる答えはない。震えそうになる声を引き締め――

「今のところは思いつきませんね。ですが、私も諦めるつもりはありませんから」

部屋へと戻るとベッドに倒れこむ。無理筋なのはわかっていた交渉とはいえ、話し合った価値はあった。

「少なくとも、私自身の価値を他人に示すことができれば父からの干渉を拒むことはできる……」

それが、どれだけ果てのない話だとしても。皆さんと学院を卒業するためには道を見つけるしかない。